

令和 6 年度
名古屋市立大学大学院薬学研究科
自己点検・評価報告書

2024

第1部：目次

1 教育研究上の目的と三つの方針	1
[現状]・・・・・・・・・・・・・・・・	1 [教育研究上の目的と三つの方針
に対する点検・評価]・・・・・・	12
[改善計画]・・・・・・・・・・・・	13
2 内部質保証	14
[現状]・・・・・・・・・・・・・・・・	14
[内部質保証に対する点検・評価]・・・・・・・・	17
[改善計画]・・・・・・・・・・・・	17
3 薬学教育カリキュラム	19
3-1 教育課程の編成	19
[現状]・・・・・・・・・・・・・・・・	19
[教育課程の編成に対する点検・評価]・・・・・・・・	25
[改善計画]・・・・・・・・・・・・	26
3-2 教育課程の実施	27
[現状]・・・・・・・・・・・・・・・・	27
[教育課程の実施に対する点検・評価]・・・・・・・・	43
[改善計画]・・・・・・・・・・・・	43
3-3 学修成果の評価	45
[現状]・・・・・・・・・・・・・・・・	45
[学修成果の評価に対する点検・評価]・・・・・・・・	46 [改善計
画]・・・・・・・・・・・・	47
4 学生の受入れ	49
[現状]・・・・・・・・・・・・・・・・	49
[学生の受入れに対する点検・評価]・・・・・・・・	56
[改善計画]・・・・・・・・・・・・	57
5 教員組織・職員組織	58
[現状]・・・・・・・・・・・・・・・・	58
[教員組織・職員組織に対する点検・評価]・・・・・・・・	65
[改善計画]・・・・・・・・・・・・	66
6 学生の支援	68
[現状]・・・・・・・・・・・・・・・・	68
[学生の支援に対する点検・評価]・・・・・・・・	72
[改善計画]・・・・・・・・・・・・	73

7 施設・設備	74
[現状]	74
[施設・設備に対する点検・評価]	76
[改善計画]	77
8 社会連携・社会貢献	78
[現状]	78
[社会連携・社会貢献に対する点検・評価]	80
[改善計画]	81

1 教育研究上の目的と三つの方針

【基準 1-1】

薬学教育プログラムにおける教育研究上の目的が、大学又は学部の理念及び薬剤師養成教育として果たすべき使命を踏まえて設定され、公表されていること。

注釈：「薬学教育プログラム」とは、6年制におけるプログラムを指す。複数学科を持つ場合は、教育研究上の目的を学科ごとに定めること。

【観点 1-1-1】教育研究上の目的が、医療を取り巻く環境、薬剤師に対する社会のニーズを反映したものとなっていること。

【観点 1-1-2】教育研究上の目的が、学則等で規定され、教職員及び学生に周知が図られるとともに、ホームページ等で公表されていること。

【現状】

薬学は、様々な基礎科学を薬に関して総合し、医療への応用を目指す学問である。医療に不可欠な学問である薬学を志す人は、薬を通じて人類の健康と福祉の発展に貢献することが求められる。愛知県内の国立大学には薬学部は設置されておらず、名古屋市立大学薬学部は県内唯一の公立大学薬学部として、薬学科（6年制）と生命薬科学科（4年制）を設置している。これら各学科の教育研究上の目的及び人材の養成に関する目的は、本大学学則「名古屋市立大学人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的に関する規程」（資料9）に定められている（表 1-1-2-1）。この規定は、名古屋市立大学教育研究審議会（理事長、学長、理事、学長補佐、研究科長、事務局長等が一堂に会する、名古屋市立大学の教育と研究に関する最終決定会議）において議論のうえ決定され、2020（令和2）年4月1日から施行された。

薬学部薬学科の教育研究上の目的及び人材の養成に関する目的は、地域社会及び医療における薬剤師及び薬物の専門家に対するニーズを反映したものになっている。具体的には、医療薬学及び関連分野の教育研究を通じ、適正な医療・保健衛生等の推進に貢献できる人材を養成し、かつ我々自身が情報発信することを教育研究上の目的としている。さらには、医薬品と薬物療法に関わる医療科学を総合的に修得し、薬剤師として、また様々な分野における薬の専門家（創薬研究者、薬事行政・衛生行政を主導的に担える者、大学教員等を含む）として貢献できる人材の育成も目指している。【観点 1-1-1】

本学部の教育研究上の目的及び人材の養成に関する目的は、本学全学のホームページ「教育情報の公表」（資料10）、及び本学部ホームページ「人材養成の目標」のページ（資料11）に掲載することで、教職員と学生に周知されるとともに、社会にも公表されている。【観点 1-1-2】

表1-1-2-1 教育研究上の目的

<p>1 教育研究上の目的</p> <p>(1) 薬学科においては、医療薬学及び関連分野の教育研究を通じ、適正な医療・保健衛生等の推進に貢献できる人材を養成すること及び情報発信を行うこと。</p> <p>(2) 生命薬科学科においては、創薬生命科学及び関連分野の教育研究を通じ、医薬品・医療関連技術の開発等の効率的な推進に貢献できる人材を養成すること及び情報発信を行うこと。</p> <p>2 人材の養成に関する目的</p> <p>(1) 薬学科においては、医薬品と薬物療法に関わる医療科学を総合的に修得し、薬剤師をはじめ、医療に関わる様々な分野で薬の専門家として貢献できる人材を養成すること。</p> <p>(2) 生命薬科学科においては、創薬に必要な、物質と生命についての幅広い知識と技術を修得し、それを基盤にした医薬品の開発研究者をはじめ、生命科学と医療の発展に貢献できる人材を養成すること。</p>		
関連事項		根拠資料
規定している学則等	名古屋市立大学人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的に関する規程	資料9
教職員・学生への周知方法	本学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」のページに掲載している。	資料10 資料11
社会への公表状況	本学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」のページに掲載している。	資料10 資料11

【基準 1-2】

教育研究上の目的に基づき、三つの方針が一貫性・整合性のあるものとして策定され、公表されていること。

注釈：「三つの方針」とは、学校教育法施行規則第165条の2に規定されている「卒業の認定に関する方針」、「教育課程の編成及び実施に関する方針」及び「入学者の受入れに関する方針」を指す。なお、それぞれこれらの策定及び運用に関するガイドラインに記載されている「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）と同じ意味内容を指すものである。

【観点 1-2-1】卒業の認定に関する方針では、卒業までに学生が身につけるべき資質・能力が具体的に設定されていること。

注釈：「卒業までに学生が身につけるべき資質・能力」は、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性を持って多様な人々と協働する態度等を指す。

【観点 1-2-2】教育課程の編成及び実施に関する方針では、卒業の認定に関する方針を踏まえた教育課程編成、当該教育課程における教育内容・方法、学修成果の評価の在り方等が具体的に設定されていること。

【観点 1-2-3】教育課程の編成及び実施に関する方針は、学習の質を重視し、学習・教授方法及び成績評価のための課題が意図する成果のために想定された学習活動に整合するように設定されていることが望ましい。

【観点 1-2-4】入学者の受入れに関する方針では、卒業の認定に関する方針並びに教育課程の編成及び実施に関する方針を踏まえ、どのような学生を求め、多様な学生をどのように評価・選抜するか等が具体的に設定されていること。

【観点 1-2-5】三つの方針が、教職員及び学生に周知が図られるとともに、ホームページ等で公表されていること。

【現状】

名古屋市を設置母体とする総合大学である名古屋市立大学は、市民によって支えられる市民のための大学であることを、全学部学士課程共通のディプロマ・ポリシー（DP）に明記している（資料 1 2）。ここには、地域社会や国際社会の発展に貢献し、社会全体の幸福の実現や持続可能な社会の構築に資する優れた人材を養成するという教育上の目的に鑑み、個性を認識し自らの立場を自覚したうえで人生の様々な局面において自ら活路を見出すための思考基盤となる教養を修得し、次世代をリードできる優れたバランス感覚と上質かつ豊かな感性で社会と向き合う力を身につけたものに学位を授与すると明示している（表 1-2-1-1、資料 1 2）。

これらに加え、本学薬学部薬学科の三つの方針（DP、カリキュラム・ポリシー（CP）、アドミッション・ポリシー（AP））は、それぞれ、表 1-2-1-1、表 1-2-2-1、表 1-2-4-1 のように策定

されている。なお、参考のため、生命薬科学科の DP、CP、AP をそれぞれ表 1-2-1-2、表 1-2-2-2、表 1-2-4-2 に示す。同じ薬学部に属する両学科の内容には共通する部分も多いが、それぞれの学科の特徴が明確に示されている。

薬学科の DP (表 1-2-1-1) には、基礎学力と問題解決能力、国際化する社会で活躍できる能力、薬剤師として必要な知識・技能と医療人としてふさわしい自覚・態度・倫理観をもち、人類の健康と福祉の発展に貢献できる人材に対して、学士(薬学)を授与すると明記している。さらに具体的に示すため、「1. 薬学についての基礎能力」「2. 社会人・国際人としての基礎能力」「3. 医療人としての基礎能力と態度」の三項目に分け、卒業までに身につけるべき能力、知識、言語力、表現力、使命感、倫理観、意欲、態度とはいかなるものかを、文章にて明確に示している。【観点 1-2-1】

薬学科の CP (表 1-2-2-1) においては、DP を達成するための教養教育の目的や早期体験科目及び学外施設見学の意義を含め、教育課程編成の方針を年次ごとに明示している。さらに、基礎薬学科目から卒業研究実習にいたるまでの考え方、薬学専門教育の内容と方法、学修成果の評価についても具体的に明示している。【観点 1-2-2】【観点 1-2-3】

名古屋市立大学では、全学士課程共通の AP 前文として、「教育に関する目標」を掲げ、ホームページで公表している(資料 1 3)。そこでは、教育は、学部・大学院を問わず、大学が社会や学生・大学院生に対して果たす最優先の責務であり、その強化に取り組むこと、あらゆる機会を通じて幅広い視野と教養、「共生」の精神、豊かな創造性を身につけた人材を育成することを明示している。また、高度な知識と技術を身につけ、目的意識と主体性を持って、地域社会及び国際社会に貢献することができる人材を育成することも明示している。さらに、名古屋市立大学全学士課程共通 AP を設定し、ホームページで公表している(資料 1 3)。そこでは、本学の各学部がその理念と目的に応じて、入学者選抜試験における教科・科目を設定しており、明確な目的意識と勉学への強い意欲を持ち、名古屋市立大学の教育に関する目的を理解し、次のような資質を有する多様な学生を求めると明示している。

- ・十分な基礎学力とそれに裏打ちされた知識・技能
- ・自ら課題を発見・解決し、それを伝える思考力・判断力・表現力
- ・主体性を持ち、幅広い視野で多様な人々と協働して学ぶ態度
- ・豊かな人間性と、地域や社会で活躍できる適性

薬学科の AP (表 1-2-4-1) は、薬学という学問の概要とそれを中心として扱う職業及び社会貢献について説明したうえで、DP を満たす人材になるために入学前に必要とされる能力について記載し、CP を十分意識して、受験生向けに平易な言葉で述べられている。選抜方法ごとに、どのような能力を、何をもって評価するのかが、明確に述べられている。【観点 1-2-4】

名古屋市立大学全体の「教育に関する目標」、及び、全学共通及び薬学部の AP は、各種学生募集要項(資料 8-2 p2-p3、資料 8-3 p2-p3、資料 8-4 p2, p4-p5、資料 8-5 p2-p3)に記載されている。薬学部の AP は高校生向けに特化した本学部パンフレット(資料 1 p1-p2)にも記載されている。CP と DP は、全教員と全学生に配布される履修要項(資料 3 p16-p17,

p22)に記載され、DPは学生に対して学年ガイダンスで周知されている(資料4-2 p1, p7, p14, p19, p24)。これは、第1期薬学教育評価報告書の助言13にあった、「学位授与の方針が学生と教職員に徹底できるよう、「履修要項」に記載し、履修ガイダンスやFDで繰り返し説明することが望ましい」にも対応したものである。さらに、本学薬学部ホームページ「3つのポリシー(AP・CP・DP)」にて、学内のみならず、一般にも向けても公表している(資料14)。

【観点 1-2-5】

(表 1-2-1-1) 薬学科三つのポリシー / ディプロマ・ポリシー

<p>【名古屋市立大学 学士課程共通 ディプロマ・ポリシー】 名古屋市立大学では、市民によって支えられる市民のための大学として、地域社会や国際社会の発展に貢献し、社会全体の幸福の実現や持続可能な社会の構築に資する優れた人材を育成するという教育上の目的に鑑み、個性を認識し自らの立場を自覚したうえで人生の様々な局面において自ら活路を見出すための思考基盤となる教養を修得し、次世代をリードできる優れたバランス感覚と上質かつ豊かな感性で社会と向き合う力を身につけ、所定の単位を修得し、所定の要件を満たした学生に対し、卒業を認定し、学位を授与します。</p>		
<p>【薬学部薬学科 ディプロマ・ポリシー】 薬学科では、医療や科学の高度化に対応できる基礎学力と問題解決能力、国際化する社会で活躍できる能力を有し、薬剤師として必要な知識・技能と医療人としてふさわしい自覚・態度・倫理観を身につけ、人類の健康と福祉の発展に貢献できる人材を育成するという教育上の目的に鑑み、以下の能力を有すると認められた者に対し、卒業を認定し、学士(薬学)の学位を授与します。</p>		
<p>1. 薬学についての基礎能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生体及び環境等に対する医薬品や化学物質の影響を理解するために必要な代表的な構造、反応、分離法等の科学的知識を有し、それらを臨床現場で活用できる基礎能力を有する。 ・薬物療法を主体的に計画・実施・評価して個々の患者に適したより効果的で安全な医薬品の使用を推進・指導できる基本的な知識・技能を有し、それを実践できる基礎能力を有する。 ・社会において薬剤師が果たすべき責任、義務などを正しく理解し、薬学ならびに医療に必要な法律、制度、経済等に関する基本的な知識を身につけている。 ・薬学・医療の進歩と改善に貢献する研究マインドを持ち、研究を遂行する基礎能力を有する。 		
<p>2. 社会人・国際人としての基礎能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適切に情報を収集し円滑な意思疎通を行うことができるコミュニケーション能力とともに、有益な情報を人々に提供できるプレゼンテーションの基礎能力を有する。 ・グローバルな視野、視点を有し、国際化する社会で活躍できる基礎的な言語力、表現力を有する。 		
<p>3. 医療人としての基礎能力と態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学の専門分野に限らず、人文科学、社会科学、自然科学等、広く各分野について総合的・積極的に学修し、自ら新たな課題に取り組む態度を身につけている。 ・医療の担い手として必要な義務および法令を遵守するとともに、医療に貢献する高い使命感、責任感および倫理観を身につけている。 ・チーム医療に貢献するための臨床における実践的能力と強い意志を身につけている。 ・卒業後も生涯に渡って自らの知識・技能について研鑽し続ける態度を身につけている。 ・自らが修得した専門的な知識を広く伝え教育することで、次世代を担う人材を育成する意欲を持つ。 		
		根拠資料
DPを(再)検討した直近の会議	令和3年度第4回教務FD委員会(9月14日) 令和3年度第8回薬学部教授会(10月11日) 令和3年度第12回名古屋市立大学教育研究審議会(2月28日)	訪問時16 訪問時17 訪問時18
DPの検証	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
三つのポリシーの一貫性・整合性	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
教職員・学生への周知方法	教職員・学生全員に配布する履修要項に記載している。全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー」のページに掲載している。新入生には新入生ガイダンスで、2年次以上には学年ガイダンスで説明している。	資料3、p22、 資料4-2 p1, p7, p14, p19, p24、資料10、 資料12、資料14
社会への公表状況	全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー(AP・CP・DP)」のページに掲載している。	資料10、資料14

(表 1-2-2-1) 薬学科三つのポリシー / カリキュラム・ポリシー

<p>【薬学部共通カリキュラム・ポリシー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな教養および人間性と国際性を育むため、幅広い教養教育を実施します。 ・学生が自らの将来を明確に意識して学ぶことができるよう、早期体験科目や学外施設見学の機会を提供します。 ・自然科学の基礎から薬学専門科目まで着実に身につけることができるよう、基礎薬学科目を段階的・系統的に配置します。 ・科学的思考に立脚した問題発見能力および問題解決能力を醸成させるために、卒業研究実習を実施します。 <p>【薬学部薬学科カリキュラム・ポリシー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課程編成 <p>1年次では、薬学人としての素養の修得を図り、薬学の概略や生物や物理などの基礎を身につけるための科目を提供します(薬学概論、基礎生物化学等)。また、地域医療、チーム医療を学ぶため、同じ医療系学部である医学部、看護学部の学生と一緒に学ぶ科目(医薬看連携地域参加型学修)を提供します。</p> <p>2年次から3年次では、薬学に関する基礎知識の底上げを図るとともに(薬学概論等)、より専門的な知識、薬剤師として必要とされる知識を修得するための科目(生薬学、薬剤学、製剤学等)を提供します。また、各講義科目と連携して、実験技能の修得のための実習科目を提供します(物理系、化学系、生物系、医療機能系の各実習)。</p> <p>4年次では、医療薬学(臨床)の実践的知識の修得のための講義科目(臨床薬学、公衆衛生学、薬局管理学等)、5年次の実務実習に向けた薬剤師実務の能力修得を図るための実習科目(実務実習事前学修)を提供します。また、実務実習を行うための知識や技能が備わっているかを問う試験であり、合格した者のみ実務実習に参加資格を与えられる共用試験(OSCE・CBT)を実施します。</p> <p>4年次から6年次の卒業までの期間、それぞれの研究室で個別の指導・教育を受けることで、研究能力・問題解決能力の修得を目指す機会を設けるため、卒業研究実習を提供します。</p> <p>5年次では、実際の薬剤師業務を体験し、臨床での実践的能力を修得するため、病院と薬局(各11週間)それぞれでの実務実習を提供します(臨床薬学実務実習)。</p> <p>6年次では、4年次から取り組んできた研究内容の取りまとめを行い、自身で見出した成果を卒業研究発表会にて発表する機会を設けます。</p> <p>4年次共用試験に合格し、5年次実務実習を修了したうえで、卒業に必要な所定の単位を修得して薬学科を卒業した者に薬剤師国家試験の受験資格を与えます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践 <p>専門科目を個々に単体で独立した科目として学ぶのではなく、実習科目も含めて、各領域(物理系、化学系、生物系、医療機能系等)の科目が連携するカリキュラムを編成し、総合的な学修を進める環境を提供します。</p> <p>学生の理解度を適切に把握してフィードバックすることで、理解度を深めるため、教員からの一方向の教授による講義形式だけでなく、双方向型授業(クリッカーシステム等)、小グループ討論による課題解決型授業(PBL)等を提供します。</p> <p>4年次から研究室に所属することで、各教員の直接的な指導のもと、学生が主体的に調査、分析、実験等の研究を行える能力、また自ら問題解決を図る能力を育む機会を提供します。</p> <p>医療系3学部を有する本学の特徴を活かし、医学部、看護学部、さらには附属病院とも連携しながら、地域医療、チーム医療を実践的に学ぶことのできる機会を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学修成果の評価方法 <p>基礎知識および実践知識の評価は、講義科目の成績(定期試験、またはこれに小テストやレポートを加味したもの)をもとに行います。実験技能の評価は、実習科目の成績(実習受講態度、レポート、確認試験)をもとに行います。臨床での実践能力の評価は、実務実習の成績(実習受講態度、日誌および週間レポート、ポートフォリオ、指導薬剤師の評価)をもとに行います。研究能力の評価は、卒業研究発表会および卒業論文をもとに行います。</p>		
関連事項		根拠資料
CPを(再)検討した直近の会議	令和3年度第4回教務FD委員会(9月14日) 令和3年度第8回薬学部教授会(10月11日) 令和3年度第12回名古屋市立大学教育研究審議会(2月28日)	訪問時16 訪問時17 訪問時18
CPの検証	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
三つのポリシーの一貫性・整合性	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
教職員・学生への周知方法	教職員・学生全員に配布する履修要項に記載している。全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー」のページに掲載している。	資料3、p16-p17、 資料10、資料14
社会への公表状況	全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー(AP・CP・DP)」のページに掲載している。	資料10、資料14

(表 1-2-4-1) 薬学科三つのポリシー / アドミッション・ポリシー

<p>【名古屋市立大学 学士課程共通 アドミッション・ポリシー】 名古屋市立大学では、各学部がその理念と目的に応じて、入学者選抜試験における教科・科目を設定しており、明確な目的意識と勉学への強い意欲を持ち、大学の教育に関する目的を理解し、次のような資質を有する多様な学生を求めます。 ・十分な基礎学力とそれに裏打ちされた知識・技能 ・自ら課題を発見・解決し、それを伝える思考力・判断力・表現力 ・主体性を持ち、幅広い視野で多様な人々と協働して学ぶ態度 ・豊かな人間性と、地域や社会で活躍できる適性</p> <p>【薬学部薬学科アドミッションポリシー】 理念・目的・教育目標 薬学は、様々な基礎科学を薬に関して総合し、医療への応用を目指す学問です。医療に不可欠な学問である薬学を志す人は、薬を通じて人類の健康と福祉の発展に貢献することが求められています。これを踏まえ、薬学部では生命薬科学科と薬学科を設置し、薬の創製・生産・臨床応用・適正管理・適正使用のための基礎知識と創造力・研究能力を有し、世界に羽ばたける多彩な薬のスペシャリストを社会に送り出すことを目指しています。本学部では次のような人を求め、入学を歓迎します。</p> <p>求める学生像 本学部では次のような人を求め、入学を歓迎します。 ー 学部共通 ー 薬学への強い意欲と探究心を持った人 科学としての薬学に強い学習意欲と探究心を有している人を求めます。 ・医療・薬学への使命感と倫理観を持った人 薬のスペシャリストとして医療現場での薬剤師活動、医薬品の研究開発、行政などを通じて、人類の健康と福祉の発展に貢献するという使命感と倫理観を有する人を求めます。 ・科学を中心とする幅広い学力を有する人 薬学は自然科学の応用分野で、理科学の学力を重視します。しかし、薬剤師や薬学分野の研究者・技術者には、社会科学や人文社会学をも含む幅広い学問知識と教養が必要です。そのため、文科系科目に関しても基礎的な知識を有する人を求めます。 ・国際的な視野とコミュニケーション能力を有する人 医薬品研究開発や医療人としての活動において、国際的なレベルでの連携が不可欠な時代となっています。将来、国際的な視野で考え、コミュニケーションを円滑に取り、行動できる能力の獲得を目指し、そのための努力を継続できる人を求めます。 ・大学院への進学意欲を持つ人 卒業後は大学院に進学して創薬・生命科学、臨床薬学の進歩に貢献しようとする強い意欲を持った人を求めます。 ー 薬学科のみ ー ・医療人としての自覚を有する人 将来、薬剤師として患者さんを思いやり、医療に携わる様々な職種の人々と協働して、患者さんのための医療に貢献しようという意欲のある人を求めます。</p> <p>修得しておくべき知識等の内容・水準(学部共通) 薬学部では、両学科とも広範で多様な学問分野を総合的に学習する。また、どのような分野で活躍するにしても、語学力(国語・英語)が必要とされる。したがって、薬学部での学修を果し多いものとするために、入学までに、化学、物理学、生物学、数学、語学の基礎学力をつけておくことが必要である。さらに、部活やボランティアなど、様々な活動に積極的に取り組むことで、表現力やコミュニケーション能力のほか、幅広い視野と高い倫理観、そして豊かな人間性を育むことが望ましい。</p> <p>【選抜方法】 志望する学科に必要な幅広い知識、思考力、学習意欲、探究心、倫理観を有する学生を、以下の方法により選抜する。 学校推薦型選抜A 高等学校卒業レベルの基礎学力を持ち、薬学を学ぶ上で重要な科目への高い理解力と応用力を有し、意欲的で協調性に富み行動力に溢れる学生を選抜する。 調査書、志願理由書および面接試験では、理解力や判断力とともに、人間性、倫理観、協調性、向学心を評価する。 小論文試験では、化学の基礎知識、文章やデータを読み解く力、論理的思考力、英語力を評価する。 学校推薦型選抜B 高等学校卒業レベルの基礎学力を持ち、薬学を学ぶ上で重要な科目への高い理解力と応用力を有し、意欲的で協調性に富み行動力に溢れる学生を選抜する。 大学入学共通テストでは、5教科7科目の試験を課し、基礎学力を評価する。 調査書、志願理由書および面接試験では、理解力や判断力とともに、人間性、倫理観、協調性、向学心を評価する。 一般選抜 高等学校卒業程度の基礎学力を身につけ、特に数学、化学、英語について高い水準の学力がある学生を選抜する。 大学入学共通テストでは、5教科7科目の幅広い基礎学力をはかる。 個別学力検査では、数学、化学、英語を課し、理解力や応用力などを評価する。 私費外国人留学生選抜 日本語で講義・実習を遂行できる程度の日本語能力を有し、数学、化学、英語について充分な水準の学力がある学生を選抜する。 日本留学試験では、日本語、数学、理科(化学を必須とする)の基礎学力をはかる。 TOEICによって、英語力をはかる。 個別学力検査(面接試験)では、理解力や判断力とともに、人間性、倫理観、協調性、向学心を評価する。</p>		
関連事項		根拠資料
APを(再)検討した直近の会議	令和3年度第4回教務FD委員会(9月14日) 令和3年度第8回薬学部教授会(10月11日) 令和3年度第9回入学試験委員会(全学)(3月7日) 令和4年度第2回名古屋市立大学教育研究審議会(4月18日)	訪問時16 訪問時17 訪問時19 訪問時20
APの検証	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
三つのポリシーの一貫性・整合性	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
教職員・学生への周知方法	高校生向けパンフレットおよび学生募集要項に記載している。全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー」のページに掲載している。	資料1 p1-p2 資料10、資料14
社会への公表状況	高校生向けパンフレットおよび学生募集要項に記載している。名古屋市立大学ホームページ「入試情報」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー」のページに掲載している。	資料1 p1-p2、資料8-2 p3、資料8-3 p2-p3、 資料8-4 p4-p5、資料8-5 p2-p3、 資料10、資料13、資料14

(表 1-2-1-2) 生命薬科学科三つのポリシー / ディプロマ・ポリシー

<p>【名古屋市立大学 学士課程共通 ディプロマ・ポリシー】 名古屋市立大学では、市民によって支えられる市民のための大学として、地域社会や国際社会の発展に貢献し、社会全体の幸福の実現や持続可能な社会の構築に資する優れた人材を育成するという教育上の目的に鑑み、個性を認識し自らの立場を自覚したうえで人生の様々な局面において自ら活路を見出すための思考基盤となる教養を修得し、次世代をリードできる優れたバランス感覚と上質かつ豊かな感性で社会と向き合う力を身につけ、所定の単位を修得し、所定の要件を満たした学生に対し、卒業を認定し、学位を授与します。</p>		
<p>【薬学部生命薬科学科 ディプロマ・ポリシー】 生命薬科学科では、医療や科学の高度化に対応できる基礎学力と問題解決能力、国際化する社会で活躍できる能力を有し、創薬科学および生命科学に関する総合的な知識と技術、生命や健康を扱う社会人としての自覚・態度・倫理観を身につけ、人類の健康と福祉の発展に貢献できる人材を育成するという教育上の目的に鑑み、以下の能力を有すると認められた者に対し、卒業を認定し、学士(薬科学)の学位を授与します。</p>		
<p>1. 薬学についての基礎能力 医薬品および化学物質の基本的な反応性を理解するため、代表的な構造、反応、分離法等の基本的な知識、技術を身につけ、それらを説明、実施できる基礎能力を有する。 創薬科学、生命科学の基礎から先端技術まで幅広く理解し、基礎薬学研究や医薬品創出を目指した研究・開発に取り組むために必要な創造的思考力と実験技術の基礎能力を有する。 生命現象を科学の目で捉え、理解し、分析する基礎能力を有する。</p>		
<p>2. 社会人・国際人としての基礎能力 適切に情報を収集し円滑な意思疎通を行うことができるコミュニケーション能力とともに、有益な情報を人々に提供できるプレゼンテーションの基礎能力を有する。 グローバルな視野、視点を有し、国際化する社会で活躍できる基礎的な言語力、表現力を有する。</p>		
<p>3. 薬学研究者としての基礎能力と態度 創薬科学、生命科学の専門分野に限らず、人文科学、社会科学、自然科学等、広く各分野について総合的・積極的に学修し、自ら新たな課題に取り組む態度を身につけている。 生命や健康を扱う研究者、社会人としての自覚・態度・高い倫理観を身につけている。 主体的に研究を遂行し、自ら設定した目標に対し、常に客観的に評価、検証する態度を身につけている。 卒業後も自らの知識・技能について研鑽し続ける態度を身につけている。 自らの修得した科学的な知識を広く伝え教育することで、次世代を担う人材を育成する意欲を持つ。</p>		
		根拠資料
DPを(再)検討した直近の会議	令和3年度第4回教務FD委員会(9月14日) 令和3年度第8回薬学部教授会(10月11日) 令和3年度第12回名古屋市立大学教育研究審議会(2月28日)	訪問時16 訪問時17 訪問時18
DPの検証	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
三つのポリシーの一貫性・整合性	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
教職員・学生への周知方法	教職員・学生全員に配布する履修要項に記載している。全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー」のページに掲載している。新入生には新入生ガイダンスで、2年次以上には学年ガイダンスで説明している。	資料3、p30、 資料4-2 p1, p7, p14, p19, p24、資料 10、 資料12、資料14
社会への公表状況	全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー(AP・CP・DP)」のページに掲載している。	資料10、資料14

(表 1-2-2-2) 生命薬科学科三つのポリシー / カリキュラム・ポリシー

<p>【薬学部共通カリキュラム・ポリシー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな教養および人間性と国際性を育むため、幅広い教養教育を実施します。 ・学生が自らの将来を明確に意識して学ぶことができるよう、早期体験科目や学外施設見学の機会を提供します。 ・自然科学の基礎から薬学専門科目まで着実に身につけることができるよう、基礎薬学科目を段階的・系統的に配置します。 ・科学的思考に立脚した問題発見能力および問題解決能力を醸成させるために、卒業研究実習を実施します。 <p>【薬学部生命薬科学科カリキュラム・ポリシー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課程編成 <p>1年次では、薬学人としての素養の修得を図り、薬学の概略や生物・物理・化学の基礎を身につけるための科目を提供します(薬学概論、基礎生物化学等)。また、生命薬科学研究への導入教育として医薬品およびその研究・開発等についての見聞を広め、少人数グループに分かれて論理的思考、ディスカッション、調査、プレゼンテーション等を体験し基礎能力を修得するための科目を提供します(生命薬科学研究入門)。</p> <p>2年次から3年次前期では、薬学に関する基礎知識の底上げを図るとともに(薬学概論等)、薬学専門科目の体系的な修得を進め、さらに各講義科目と連携して、実験技能の修得のための実習科目を提供します(物理系、化学系、生物系、医療機能系の各実習)。</p> <p>3年次後期では、2年次までに学んだ薬学の基礎的知識を土台として、より専門的な科目を学ぶとともに、各自の興味に応じて高度で専門的な科目を履修して、研究につながる知識・技能の幅を広げるため、多数の生命薬科学系専門科目(有機金属化学、コロイド・高分子化学等)を提供します。また、研究成果発表能力の醸成を目的とし、プレゼンテーション演習科目を提供します。</p> <p>3年次後期から4年次の卒業までの期間、それぞれの研究室で個別の指導・教育を受けることで、研究能力・問題解決能力の修得を目指す機会を設けるため、卒業研究実習を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 実践 <p>専門科目を個々に単体で独立した科目として学ぶのではなく、実習科目も含めて、各領域(物理系、化学系、生物系、医療機能系等)の科目が連携するカリキュラムを編成し、総合的な学修を進める環境を提供します。</p> <p>学生の理解度を適切に把握してフィードバックすることで、理解度を深めるため、教員からの一方向の教授による講義形式だけでなく、双方向型授業(クリックーステム等)、小グループ討論による課題解決型授業(PBL)等を提供します。</p> <p>3年次から研究室に所属することで、各教員の直接的な指導のもと、学生が主体的に調査、分析、実験等の研究を行える能力、また自ら問題解決を図る能力を育む機会を提供します。</p> <p>生命薬科学科の卒業生でもあり、研究者の先輩でもある大学院生が多く在籍する研究室環境で卒業研究実習を履修することで、研究の進め方や実験手技、プレゼンテーション力など教員以外からも学びながら成長できる環境を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 学修成果の評価方法 <p>基礎知識および実践知識の評価は、講義科目の成績(定期試験、またはこれに小テストやレポートを加味したもの)をもとに行います。実験技能の評価は、実習科目の成績(実習受講態度、レポート、確認試験)をもとに行います。問題解決能力の評価は、演習科目および卒業研究実習をもとに行います。研究能力の評価は、卒業研究実習(各研究室における発表会および卒業論文)をもとに行います。</p>		
関連事項		根拠資料
CPを(再)検討した直近の会議	令和3年度第4回教務FD委員会(9月14日) 令和3年度第8回薬学部教授会(10月11日) 令和3年度第12回名古屋市立大学教育研究審議会(2月28日)	訪問時16 訪問時17 訪問時18
CPの検証	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
三つのポリシーの一貫性・整合性	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
教職員・学生への周知方法	教職員・学生全員に配布する履修要項に記載している。全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー」のページに掲載している。	資料3、p16、 資料10、資料14
社会への公表状況	全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー(AP・CP・DP)」のページに掲載している。	資料10、資料14

(表 1-2-4-2) 生命薬科学科三つのポリシー / アドミッション・ポリシー

<p>【名古屋市立大学 学士課程共通 アドミッション・ポリシー】 名古屋市立大学では、各学部がその理念と目的に応じて、入学者選抜試験における教科・科目を設定しており、明確な目的意識と勉学への強い意欲を持ち、大学の教育に関する目的を理解し、次のような資質を有する多様な学生を求めます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十分な基礎学力とそれに裏打ちされた知識・技能 ・自ら課題を発見・解決し、それを伝える思考力・判断力・表現力 ・主体性を持ち、幅広い視野で多様な人々と協働して学ぶ態度 ・豊かな人間性と、地域や社会で活躍できる適性 		
<p>【薬学部生命薬科学科アドミッションポリシー】 理念・目的・教育目標 薬学は、様々な基礎科学を薬に関して総合し、医療への応用を目指す学問です。医療に不可欠な学問である薬学を志す人は、薬を通じて人類の健康と福祉の発展に貢献することが求められています。これを踏まえ、薬学部では生命薬科学科と薬学科を設置し、薬の創製・生産・臨床応用・適正管理・適正使用のための基礎知識と創造力・研究能力を有し、世界に羽ばたける多彩な薬のスペシャリストを社会に送り出すことを目指しています。本学部では次のような人を求め、入学を歓迎します。</p>		
<p>求める学生像 本学部では次のような人を求め、入学を歓迎します。</p> <p>— 学部共通 —</p> <p>薬学への強い意欲と探究心を持った人 科学としての薬学に強い学習意欲と探究心を有している人を求めます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療・薬学への使命感と倫理観を持った人 薬のスペシャリストとして医療現場での薬剤師活動、医薬品の研究開発、行政などを通じて、人類の健康と福祉の発展に貢献するという使命感と倫理観を持てる人を求めます。 ・科学を中心とする幅広い学力を有する人 薬学は自然科学の応用分野で、理系系の学力を重視します。しかし、薬剤師や薬学分野の研究者・技術者には、社会科学や人文社会学をも含む幅広い学問知識と教養が必要です。そのため、文科系科目についても基礎的な知識を有する人を求めます。 ・国際的な視野とコミュニケーション能力を持てる人 医薬品研究開発や医療人としての活動において、国際的なレベルでの連携が不可欠な時代となっています。将来、国際的な視野で考え、コミュニケーションを円滑に取り、行動できる能力の獲得を目指し、そのための努力を継続できる人を求めます。 ・大学院への進学意欲を持つ人 卒業後は大学院に進学して創薬・生命科学、臨床薬学の進歩に貢献しようとする強い意欲を持った人を求めます。 <p>— 生命薬科学科のみ —</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学としての薬学への向学心を有する人 将来、基礎薬学研究や医薬品開発等を通じて、科学者として人類の健康と福祉の発展に貢献しようという情熱を有する人を求めます。 		
<p>修得しておくべき知識等の内容・水準(学部共通) 薬学部では、両学科とも広範で多様な学問分野を総合的に学習する。また、どのような分野で活躍するにしても、語学力(国語、英語)が必要とされる。したがって、薬学部での学修をより多岐にわたるために、入学までに、化学、物理学、生物学、数学、語学の基礎学力をつけておく必要がある。さらに、部活やボランティアなど、様々な活動に積極的に取り組むことで、表現力やコミュニケーション能力のほか、幅広い視野と高い倫理観、そして豊かな人間性を育むことが望ましい。</p>		
<p>【選抜方法】 志望する学科に必要な幅広い知識、思考力、学習意欲、探究心、倫理観を有する学生を、以下の方法により選抜する。</p> <p>学校推薦型選抜A 高等学校卒業レベルの基礎学力を持ち、薬学を学ぶ上で重要な科目への高い理解力と応用力を有し、意欲的で協調性に富み行動力に溢れる学生を選抜する。 調査書、志願理由書および面接試験では、理解力や判断力とともに、人間性、倫理観、協調性、向学心を評価する。 小論文試験では、化学の基礎知識、文章やデータを読み解く力、論理的思考力、英語力を評価する。</p> <p>学校推薦型選抜B 高等学校卒業レベルの基礎学力を持ち、薬学を学ぶ上で重要な科目への高い理解力と応用力を有し、意欲的で協調性に富み行動力に溢れる学生を選抜する。 大学入学共通テストでは、5教科7科目の試験を課し、基礎学力を評価する。 調査書、志願理由書および面接試験では、理解力や判断力とともに、人間性、倫理観、協調性、向学心を評価する。</p> <p>一般選抜 高等学校卒業程度の基礎学力を身につけ、特に数学、化学、英語について高い水準の学力がある学生を選抜する。 大学入学共通テストでは、5教科7科目の幅広い基礎学力をはかる。 個別学力検査では、数学、化学、英語を課し、理解力や応用力などを評価する。</p> <p>私費外国人留学生選抜 日本語で講義・実習を遂行できる程度の日本語能力を有し、数学、化学、英語について十分な水準の学力がある学生を選抜する。 日本留学試験では、日本語、数学、理科(化学を必須とする)の基礎学力をはかる。 TOEICによって、英語力をはかる。 個別学力検査(面接試験)では、理解力や判断力とともに、人間性、倫理観、協調性、向学心を評価する。</p>		
関連事項		根拠資料
APを(再)検討した直近の会議	令和3年度第4回教務FD委員会(9月14日) 令和3年度第8回薬学部教授会(10月11日) 令和3年度第9回入学試験委員会(全学)(3月7日) 令和4年度第2回名古屋市立大学教育研究審議会(4月18日)	訪問時16 訪問時17 訪問時19 訪問時20
APの検証	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
三つのポリシーの一貫性・整合性	年度末の教務FD委員会および薬学部教授会で検証している。令和4年度は第6回教務FD委員会(2月7日)、第7回教務FD委員会(2月20日)と第16回薬学部教授会(2月24日)で検討したが、変更事項はなかった。	訪問時1-1 訪問時1-2 訪問時1-3
教職員・学生への周知方法	高校生向けパンフレットおよび学生募集要項に記載している。全学ホームページ「教育情報の公表」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー」のページに掲載している。	資料1 p1-p2 資料10、資料14
社会への公表状況	高校生向けパンフレットおよび学生募集要項に記載している。名古屋市立大学ホームページ「入試情報」、および、薬学部ホームページ「人材養成の目標」の概要の「三つのポリシー」のページに掲載している。	資料1 p1-p2、資料8-2 p3、資料8-3 p2-p3、 資料8-4 p4-p5、資料8-5 p2-p3、 資料10、資料13、資料14

【基準 1-3】

教育研究上の目的及び三つの方針が定期的に検証されていること。

注釈：「検証」は、医療を取り巻く環境や薬剤師に対する社会のニーズの変化を調査した結果等を踏まえて行うこと。

〔現状〕

本学では、三つの方針の改定には全学の教育研究審議会における議論と承認が必要である。現在の本学薬学科の三つの方針のうち、DPとCPは、2021（令和3）年9月14日の令和3年度第4回薬学部教務FD委員会（訪問時16）、2021（令和3）年10月11日の令和3年度第8回薬学部教授会（訪問時17）で審議・承認され、その後、2022（令和4）年2月28日の令和3年度第12回教育研究審議会で決定された（訪問時18）。これは、DPについては変更せず、CPにあった従来の「成績評価」に代えて、「学修成果の評価方法」を記載することにしたものである。APについては、直近では、令和3年度第4回薬学部教務FD委員会（訪問時16）、2021（令和3）年10月11日の令和3年度第8回薬学部教授会（訪問時17）、2022（令和4）年3月7日の令和3年度第9回入学試験委員会（訪問時19）にて議論され、2022（令和4）年4月18日令和4年度第2回教育研究審議会にて承認された（訪問時20）。これは、AP前文として「理念・目的・教育」目標を追加することと、各選抜方法における評価方法と選抜方法を記載することに関するものである。

三つの方針の検証と見直しについては、全学教育機構または全学入試委員会からの要請またはアドバイス、全国的な制度の改革や変更、入試結果や近隣高校における調査結果などに応じて、本学部教務FD委員会及び薬学部教授会で議論されている。改定などの必要性が認められた場合は、薬学部教授会及び全学入試委員会（主にAP）における議を経て改定案が作成され、最終的には教育研究審議会において承認される。2022（令和4）年度は、第6回教務FD委員会（2月7日）（訪問時1-1）、第7回教務FD委員会（2月20日）（訪問時1-2）、第16回薬学部教授会（2月24日）（訪問時1-3）で検討したが、変更事項はなかった。

今後、2023（令和5）年2月28日に発表された新しいモデル・コア・カリキュラムに基づき、2023（令和5）年度には、三つの方針の検討と見直しを行い、必要な改定を行っていく予定である。

〔教育研究上の目的と三つの方針に対する点検・評価〕

本学薬学科の教育研究上の目的と人材の養成の目的は、大学と学部の理念及び薬剤師養成教育の使命を踏まえたものとなっている。三つの方針に関しては、高校教育と大学入試制度の変化、薬剤師及びチーム医療に対する社会のニーズ、設置母体である名古屋市の要請等を適確に反映したものとなるように定期的に検証し、改訂してきている。これらの情報は、ホームページ、大学パンフレット、履修要項、新入生ガイダンスを通じて、広く社会及び在学生に周知している。以上より、【基準 1-1】に十分に適合している。

三つの方針は、教育研究上の目的と人材の養成の目的に基づき、一貫性・整合性のあるものとして策定されている。医療・福祉・行政を取り巻く環境、及び、薬剤師に対する社会（地方公共団体を含む）のニーズに対応して三つの方針を検証し、見直すための組織が構築され、定期的に検討されている。三つの方針は、大学及び学部のホームページ、パンフレット、学生募集要項などを通じて広く社会及び在学生に対して周知している。新任教員には、新任教員研修会において周知している。以上より、【基準 1-2】に十分に適合している。

本学部教務 FD 委員会と自己点検・評価委員会、及び全学の教育研究審議会において、教育研究上の目的と三つの方針は定期的に検証されており、修正が必要な場合は本学部教務 FD 委員会での素案作成及び本学部教授会での審議を経て改訂している。三つの方針うち AP については、さらに全学の入試委員会での議を経ている。いずれも最終的には全学教育研究審議会での承認を得ている。以上より、【基準 1-3】に十分に適合している。

<優れた点>

特になし。

<改善を要する点>

1. 学則で定められた薬学部の「教育研究上の目的」が、履修要項に記載されていないので、記載されるべきである。

[改善計画]

1. 「教育研究上の目的」教育研究上の目的は、令和 5 年度発行の履修要項に記載する。

<基準 1 についての評価>

改善計画に基づき、令和 5 年度の履修要項から、「教育研究上の目的」記載を追加した。

2 内部質保証

【基準 2-1】

教育研究上の目的及び三つの方針に基づく教育研究活動について、自己点検・評価が適切に行われていること。

【観点 2-1-1】自己点検・評価が組織的かつ計画的に行われていること。

注釈：必要に応じて外部委員又は当該学部での6年制課程の卒業生を含むこと。また、本機構の評価を受審する時だけでなく、計画的に実施されていること。

【観点 2-1-2】自己点検・評価は、教育研究活動に対する質的・量的な解析に基づいていること。

注釈：「質的・量的な解析」の例示。

- ・ 学習ポートフォリオ等を活用した学習達成度
- ・ 卒業の認定に関する方針に掲げた学修成果の達成度
- ・ 在籍（留年・休学・退学等）及び卒業状況（入学者に対する標準修業年限内の卒業者の割合等）の入学年次別分析等

【観点 2-1-3】自己点検・評価の結果がホームページ等で公表されていること。

【現状】

薬学部・薬学研究科（以下、本学部、と呼ぶ）に自己点検・評価委員会を組織し、教育研究活動について毎年計画的に「教員業績評価」を実施し、同じ職位の教員間で結果を共有することで、各教員の自己点検と評価を行っている（資料15、訪問時21 2021年度実績報告書ひな型）。また、1年間の教育研究活動に基づいて「自己点検・評価報告書」を作成し、各年度の教育研究活動の概要を公表している（資料16）。【観点 2-1-1】

教員業績評価においては、前年度の研究教育活動について各教員が教育実施の状況や研究活動の実績、研究費の獲得状況、社会貢献活動の状況、運營業務への貢献等について定型の実績報告書（訪問時21）を作成し、自己点検・評価委員会において数値化・評価している。評価結果は職位ごとに共有し、各自の活動結果と評価を確認し次年度の活動の参考としている。これと並行して、研究と社会貢献活動に関する実績を取りまとめ「自己点検・評価報告書」として毎年公開している。自己点検・評価の過程では、外部委員や6年制課程薬学科卒業生は関与していないが、卒業生から教育体制に対する意見を卒業時アンケートとして聴取し、内容を学部内で共有している（資料17）。【観点 2-1-1】【観点 2-1-3】

教育研究活動の目標達成度評価に関して、1年次から5年次まで学習活動に関して、学生は学習ポートフォリオを作成しており、毎年学生自身の学習目標を設定することにより学生ごとの学習達成度を自己点検できる仕組みを取り入れている（資料18）。なお、本学における「学習ポートフォリオ（または単にポートフォリオと記載）」とは、学生が学習目標を設定し、その学習目標に向かって学習の成果を継続的に記録するものであり、本学では年度毎の目標設

定と記録を1冊のバインダーファイルとして学生自身が作成・記録・管理しているものである。入学時から、学習目標を各自設定し、その成果を記録することで、各自の学習状況を振り返り、さらに有効な学習を考察して成長につなげることを目指しており、また学習ポートフォリオの記録を教員が定期的に確認する中で学生への形成的評価を行い、学習の到達度も確認する目的も兼ねている。本学では、実務実習で作成する学習ポートフォリオまで引き続いて作成しており、学生は学習記録を継続的に振り返ることで自己評価を行い、教員には学生の総合的な能力や人間性を含めた成長を評価する指標となる。

このポートフォリオは、チューター教員(入学時に指名され、研究室配属されるまでの期間、一貫して指導や相談を担当する(資料4-1 p25、資料19)がチェックし、学生に対して適宜コメントを伝えている。卒業研究に関する目標達成度はルーブリック型の評価表(資料20)を活用し4年次～6年次に毎年行っており、学生及び教員が研究における達成度を確認する基礎となっている。さらに各学期に授業アンケートを実施している(資料21、訪問時13 学生による授業アンケート結果)。ここでは、学生自身の学習振り返りの設問と授業内容に関する設問の両方が設定され、学生は個別科目の自身の学習について自己分析(質的解析)を行う機会を得るとともに、教員に対して改善点の指摘(質的フィードバック)を行っている(訪問時14 学生アンケートを踏まえた授業自己点検報告書)。教員同士による相互評価(質的評価)に関して、研究授業と称して他教員の講義に出席し教育について研修するとともに、講義担当教員へのフィードバックを作成し、年度ごとに相互点検・評価している(資料22)。その実施状況は全学教育機構へ報告している(資料23)。これらの教育評価活動について、進級率・卒業率の観点から量的な分析を行うと、入学者の多くは設定されたカリキュラム通りに進級・卒業していることから、適正な範囲で教育を実施できていると考えられる(基礎資料3-2)。

【観点 2-1-2】

一方で、教員の教育研究活動にかかる自己点検・評価について、教育及び研究に関する活動詳細の点検・評価は実施しているものの(資料15、資料16)、評価部分に関する公表資料への記載は十分とは言い難い。また、自己点検・評価の客観的解析手段としての外部委員や卒業生の参画には改善の余地がある。学習ポートフォリオの達成目標の設定がディプロマ・ポリシーで求める学修目標を完全には包含できていない。学生の卒業率においてはストレート卒業率の低下傾向が見られるため、推移を注視し、状況に応じて対策が必要である(基礎資料3-3)。

以上のように、一部に不完全な体制があるものの、教育研究上の目的及び三つの方針に基づく教育研究活動について、自己点検・評価が概ね適切に実施されている。

【基準 2-2】

教育研究活動の改善が、自己点検・評価結果等に基づいて適切に行われていること。

注釈：「自己点検・評価結果等」の「等」とは、行政機関、認証評価機関からの指摘事項を含む。

また、自己点検・評価の結果等を教育研究活動に反映する体制が整備されていること。

【現状】

自己点検・評価の一環として「教員業績評価」を実施し、同じ職位の教員間で結果を共有することで、各教員が教育研究活動を質的・量的に解析し、自主的に改善を行うモチベーションとしている（資料15）。さらに本学部独自の教員表彰制度を設け、「教員業績評価」に基づいて研究教育活動の活性化に寄与した教員を表彰することで、全ての教員の教育研究活動の改善を促している（資料24）。また、本学部の全教員の教員業績評価結果に基づいて、自己点検・評価に関する基準や運用の見直しを自己点検・評価委員会で年度ごとに議論している（訪問時1-4 自己点検・評価委員会議事録）。

学生が回答する授業アンケートにより、学生から授業担当教員へのフィードバックが行われており、その内容をもとに自己点検・評価を行って教員コメントを作成・共有することで教育研究活動の改善を図っている（訪問時14 学生アンケートを踏まえた授業自己点検報告書）。

本学部内での自己点検・評価の解析に基づいた改善に加え、日本高等教育評価機構による認証評価受審にともなう三つの方針及び教育内容の見直し・改善も、自己点検・評価委員会を中心に実施している（指摘に応じて対応）。直近では2022（令和4）年度に大学認証評価が実施され、その正式結果は本自己点検・評価書提出時点では通知されていないが、速報版においては薬学部の学部教育についての指摘事項はなかったもので、大きな問題はないと認識している（資料25）。

第1期薬学教育評価において、改善すべき点（6）として「自己点検・評価の意義を全教員が再認識し、その結果を教育研究活動の改善に反映できる体制作りが必要である」との指摘があった（資料26, p10）。この点について、薬学教育評価委員会を設置し、教育研究評価に関係する委員会と連携・調整することで、上述の「教員業績評価」など学部全体で自己点検・評価結果を薬学教育研究改善に活かす体制を整備し運用している（資料26, p10、表2-2-1、訪問時22 薬学部・薬学研究科 各種委員リスト）。薬学教育評価委員会は各委員会における教育体制・内容・評価を集約することで俯瞰的に内部質保証の確認を行う役割を担っている。2022（令和4）年度については、「薬学教育評価受審準備会議」として会議を行い、内部質保証と薬学教育の評価全般について見直した（訪問時1-5 自己点検・評価委員会議事録）。

以上のように、教育研究活動の改善が自己点検・評価結果等に基づいて適切に行われている。

【内部質保証に対する点検・評価】

自己点検・評価委員会を組織し、毎年計画的に「教員業績評価」を実施し、同じ職位の教員間で結果を共有することで、自己点検と評価を行っている。また、1年間の教育研究活動に基づいて「自己点検・評価報告書」を作成し、その概要を公表している。学生の学習への取り組

みについては、1年次から5年次までの学習活動について学習ポートフォリオを作成し、毎年、学生自身の目標を設定することにより、学生ごとの学修達成度を自己点検できる仕組みを取り入れている。このポートフォリオは、チューター教員がチェックし、適宜コメントを学生に伝えている。卒業研究については、ルーブリック型の評価表を活用して、4年次～6年次に毎年評価を行っており、学生及び教員の研究に関する達成度確認の基礎となっている。さらに各学期に授業アンケート（学生自身の学習振り返りと授業への評価）を実施しており、学生自身の学修について自己分析（質的解析）を行うとともに、教員に対して改善点の指摘（質的フィードバック）を行っている。教員同士による質的評価に関して、研究授業と称して他教員の講義に出席し教育について研修するとともに講義担当教員へのフィードバックを作成し、年度ごとに相互点検・評価している。以上より、【基準 2-1】及び【基準 2-2】におおむね適合しているが、教育研究活動の評価結果に関する記載を充実させることと、外部委員や卒業生の参画については改善すべきである。

<優れた点>

1. 学習ポートフォリオを用いて、学修達成度と成長を絶えずチェックするシステムがある。
2. 卒業研究について、ルーブリック型の評価表を用いて、複数教員で定量的な評価を実践している。

<改善を要する点>

1. 自己点検・評価報告書において、教育研究活動の評価結果に関する記載が十分とは言い難い。
2. 自己点検・評価の客観的解析手段としての外部委員や卒業生の参画が十分とは言い難い。
3. 学習ポートフォリオの達成目標の設定が、ディプロマ・ポリシーで求める学修目標を完全には包含できていない。

[改善計画]

1. 自己点検・評価報告書に教育研究活動の評価結果総括を記載する。
2. 自己点検・評価における外部委員に対し、評価結果概要について定期的に総評を求める。
3. 学習ポートフォリオの達成目標の設定時に、ディプロマ・ポリシーの学修目標との関連を記載させる。

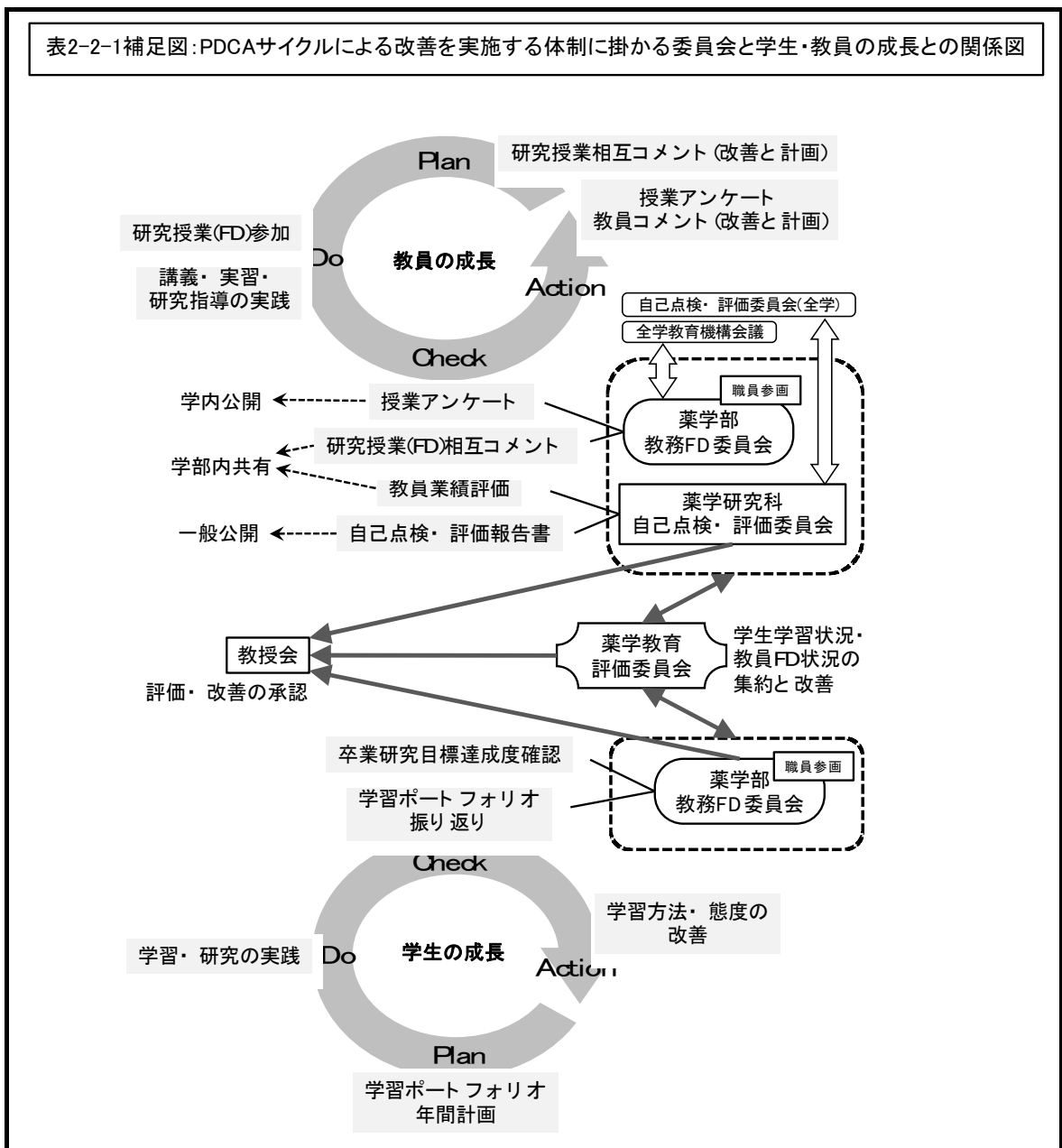
<基準 2 についての評価>

1. 従来、業績一覧などの年報形式だった自己点検・評価書を、薬学教育評価時に提出した評価書と同様の書式を第1部として、業績一覧を第2部とする形式に2024年度の報告書より改変した。
2. 2025年度報告書より、外部委員の総評を求め、その点を含めることとした。
3. ポートフォリオの学修目標設定時に、学生に対して、ディプロマ・ポリシーを提示するようになった。

(表 2-2-1) PDCAサイクルによる改善を実施する体制

委員会等の名称	構成員	根拠資料
薬学教育評価委員会	副研究科長(教育担当)、薬学部長、学生生活委員(1名)、実務家教員(1名)、教授(1名)、外部評価委員(3名)、オブザーバー(自己点検・評価委員2名)	訪問時1-3
薬学部自己点検・評価委員会	副研究科長(評価担当)、薬学部長、副研究科長(2名)、学生生活委員(1名)、教授(1名)	訪問時1-5
教務FD委員会	教務委員長、各研究室委員	訪問時23

表2-2-1補足図:PDCAサイクルによる改善を実施する体制に掛かる委員会と学生・教員の成長との関係図



3 薬学教育カリキュラム

(3-1) 教育課程の編成

【基準 3-1-1】

薬学教育カリキュラムが、教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいて構築されていること。

【観点 3-1-1-1】教育課程の編成及び実施に関する方針に基づき、薬学教育カリキュラムが以下の内容を含み体系的に整理され、効果的に編成されていること。

- 教養教育
- 語学教育
- 人の行動と心理に関する教育
- 薬学教育モデル・コアカリキュラム平成 25 年度改訂版の各項目（基本事項・薬学と社会・薬学基礎・衛生薬学・医療薬学・薬学臨床・薬学研究）
- 大学独自の教育
- 問題発見・問題解決能力の醸成のための教育

注釈：薬学教育カリキュラムの体系的及び科目の順次性が、カリキュラム・ツリー等を用いて明示されていること。

注釈：語学教育には、医療の進歩・変革に対応し、医療現場で活用できる語学力を身につける教育を含む。

【観点 3-1-1-2】薬学教育カリキュラムが、薬学共用試験や薬剤師国家試験の合格率の向上のみを目指した編成になっていないこと。

【観点 3-1-1-3】教育課程及びその内容、方法の適切性について検証され、その結果に基づき必要に応じて改善・向上が図られていること。

【現状】

本学薬学科の教育課程は、教養教育と薬学専門教育からなる。卒業のための最低修得単位数は教養教育科目が 39 単位（資料 3 p52）、薬学専門教育科目が 149 単位（資料 3 p55）の、合計 188 単位である。これは大学設置基準が定める 6 年制課程の卒業要件である 186 単位を上回っている。入学者がディプロマ・ポリシー（DP）（資料 3 p22）に明示されている能力を修得できるように、カリキュラム・ポリシー（CP）（資料 3 p16-17）に基づいて、薬学教育カリキュラムを体系的かつ効果的に編成している（基礎資料 1、資料 1 p14-20、資料 3 p20-21）。以下に、教養教育、語学教育、人の行動と心理に関する教育、薬学教育モデル・コアカリキュラム平成 25 年度改訂版の各項目（基本事項・薬学と社会・薬学基礎・衛生薬学・医療薬学・薬学臨床・薬学研究）、大学独自の教育、問題発見・問題解決能力の醸成のための教育について、本学

の実施状況を記載する。【観点 3-1-1-1】

(1) 教養教育

名古屋市立大学は7学部（薬、医、看護、経済、人文社会、芸術工、総合生命理。なお2023（令和5）年度からデータサイエンス学部が加わる。）からなる総合大学であり、教養教育の運営は全学組織である高等教育院が担っている（資料27）。教養教育の講義・実習・演習は全学体制で行われており、高等教育院の下部組織である教養教育運営委員会が実務を担当し、本学部からも委員が参加している（資料28）。本学の教養教育の教育目標は表3-1-1-1のように明示されている（資料29 p1）。

表 3-1-1-1 教養教育の教育目標

- | |
|---|
| <p>1 教養教育では、学生が社会の一員としての自己のあり方を認識し、自らよりよく生きる生き方を探求し、あわせて社会全体の幸福の実現にむけて貢献できるような人間形成をはかるとともに、専門教育への確かな土台を築くことを目標とする。</p> <p>2 大学が目標に掲げる〈持続可能な共生社会〉〈健康と福祉の向上〉〈次世代育成支援〉〈地球環境の保全と社会環境の整備発展〉の実現に寄与する科目を修得させることによって、地域社会および国際社会に貢献することができる人材を育成する。</p> |
|---|

教養教育については、CPで明示している「豊かな教養および人間性と国際性を育むため、幅広い教養教育を実施します」に沿い、またDPで明示している「医療人としての基礎能力と態度」を身につけるために、以下に述べるような、総合大学の強みを生かした幅広い学びのためのプログラムを提供している。また、専門教育に円滑に移行できるように、基礎科目を配置している。【観点 3-1-1-1】

1年次前期に、薬学人（医療人）としての人間形成を意図し、学生が自らの将来を明確に意識して学ぶことができる早期体験科目「医薬看連携地域参加型学習」（資料30-1、資料30-2）を教養教育科目として設定している。また、1年次前期から専門科目として、薬学導入科目「薬学概論Ⅰ」（資料5 pS1）と、高校における履修レベルが比較的均一な化学分野の科目である「薬学有機化学Ⅰ」（資料5 pS10, S12）を配置している。高校における履修レベル差が大きい物理・生物系科目については、1年次前期に配置した教養科目「物理学」「生物学」において、大学入学共通テストでの物理または生物の受験者と非受験者を区別した科目を設定して（資料3 p52）、履修レベル差の解消を図り、主に1年次後期から始まる物理・生物系専門科目の修得に配慮している。薬学専門科目の理解に特に必要な内容については、教養科目の基礎科目「物理学」「数学」「化学」「生物学」「自然科学実験」と連携し、段階的かつ系統的なカリキュラム編成を実施している。【観点 3-1-1-1】

(2) 語学教育

英語教育に関しては、DP で明示している「社会人・国際人としての基礎能力」を身につけるため、教養教育としての基礎的・一般的英語から、薬学専門教育としての医療系及び薬学学術英語へと展開し、さらに海外での実践的英語を活用した臨床薬学研修を提供することによって、順次的かつ系統的に英語能力の向上を図っている。これにより、CP で明示されている「国際性を育むことができる」を満たすカリキュラム編成になっている。【観点 3-1-1-1】

教養教育の語学教育は全学のランゲージセンター（資料 3 1）が運営を担当している。国際的な標準語である英語の科目として「A : Issues in Society（英語ディスカッション、ネイティブ教員）」「B : Action in English（少数教英語ゼミ、ネイティブ教員）」「C : Core Skills in English（コミュニケーション英語、ネイティブ教員及び語学教員）」「D : English Through Media（応用英語、ネイティブ教員及び語学教員）」（資料 2 9 p22）を設定し、英語での情報収集能力、情報発信能力、意見交換能力、合意形成能力などの実践的なコミュニケーション力を修得できる語学プログラムを提供している。「C : Core Skills in English（コミュニケーション英語）」では、効率的な学習のため、入学時に本学で実施する英語力調査（TOEIC L&R IP テスト）の結果に基づき、熟度別クラス編成を実施している。英語以外の言語については、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、スペイン語、日本手話、ポルトガル語、ロシア語、イタリア語、アラビア語、日本語（留学生のみ）（資料 2 9 p23）など多様な中から選択することができる。これらの言語の基礎を学ぶことによって、グローバル化が進む現代社会での他文化への豊かな視点を獲得し、国際的に多様なニーズに対応できる人材育成につながると考えられる。【観点 3-1-1-1】

薬学専門教育では、医療系英語に重点を置く「薬学英語Ⅰ」「薬学英語Ⅱ」（2 年次、非常勤講師）（資料 5 pS52, S54）を提供し、医療の進歩及び変革に対応し、医療現場で活用できる語学力を修得できる科目を設定している。加えて、薬学学術英語に重点を置く「薬学英語Ⅲ」「薬学英語Ⅳ」（3 年次、専門科目教員）（資料 5 pS56, S57）を提供し、研究成果などを世界に発信する力、及び国際的に活躍できる語学力の基礎を修得できる科目を設定している。また、海外大学（南カリフォルニア大学薬学部などの国際交流協定校）での臨床薬学研修を通じて実践的な英語力や国際適応能力を高めるプログラム「薬学特別演習」（6 年次）（資料 5 pS79、資料 3 2-1）も提供している。ただし COVID-19 の影響により、海外大学での臨床薬学研修は 2020（令和 2）～2022（令和 4）年度は実施できなかった。【観点 3-1-1-1】

(3) 人の行動と心理に関する教育

DP で明示している「社会人・国際人としての基礎能力」や「医療人としての基礎能力と態度」を身につけるため、「医薬看連携地域参加型学習」（1 年次）（資料 3 0-1）、「薬学概論Ⅰ」（1 年次）（資料 5 pS1）、「薬学概論Ⅱ」（2 年次）（資料 5 pS2）でヒューマニズム・医療倫理・コミュニケーション能力・自己表現能力の基礎を講義形式（一部ディスカッション形式を含む）で学ぶ。これは、第 1 期薬学教育評価報告書の助言 4 にあった「ヒューマニズム教育・医療倫理教育とコミュニケーションの基本的能力を身につけるための基礎的な教育の充実を図るこ

とが望ましい。」に対応したものである。次いで、「基礎薬学演習」(3年次)(資料5 pS76)と「臨床薬学実務実習Ⅰ」(4年次)(資料5 pS95)で、上記の力を演習形式で醸成することを目指す。最後に、臨床現場での「臨床薬学実務実習Ⅱ」(4~5年次)(資料5 pS96)と「臨床薬学実務実習Ⅲ」(4~5年次)(資料5 pS97)において、それまでに修得した上記能力を実践できるようにしており、体系的かつ効果的なカリキュラム編成となっている。以上の科目は全て必修で総単位数は30単位(ただし、「医薬看連携地域参加型学習」は教養2単位)である(資料3 p2-3, 52)。また、「コミュニティ・ヘルスケア基礎」(2年次)(資料5 pS103)、「コミュニティ・ヘルスケア応用」(3年次)(資料5 pS104)、「コミュニティ・ヘルスケア発展」(4年次)(資料5 pS105)、「コミュニティ・ヘルスケア実践」(5年次)(資料5 pS106)では、薬学人教育プログラム及び関連イベントや医療職研修への参加により、患者や医療提供者の行動・心理・立場を理解し、相互の信頼関係を構築できる能力を醸成する段階的かつ体系的なカリキュラムである。【観点3-1-1-1】

(4) 薬学教育モデル・コアカリキュラム平成25年度改訂版の各項目(基本事項・薬学と社会・薬学基礎・衛生薬学・医療薬学・薬学臨床・薬学研究)

DPに明示している「1 薬学についての基礎能力」「2 社会人・国際人としての基礎能力」「3 医療人としての基礎能力と態度」(資料3 p22)を身につけるため、薬学教育モデル・コアカリキュラムのSBOを網羅した段階的及び系統的なカリキュラム編成を実施している。すなわち、専門教育カリキュラムマップ(基礎資料1、資料3 p20-21)に明示したように、専門科目を個々に単体で独立した科目として学ぶのではなく、各領域(物理系、化学系、生物系、医療機能系等)の科目が、実習・演習科目も含めて連携するカリキュラムを編成し、総合的な学習を進める環境を提供している。シラバスには、各科目の「学修到達目標」に薬学教育モデル・コアカリキュラムのGIO番号、「授業計画」にSBO番号を記載している(資料5)。薬学教育モデル・コアカリキュラムと専門科目の対応表は、本学部ホームページに掲載して周知している(基礎資料2、資料3 2-2)。【観点3-1-1-1】

なお、第1期薬学教育評価報告書の助言3「ディプロマポリシーが求める学習成果と履修科目との関連を学生が理解できるように、カリキュラム・マップを履修要項に記載することが望ましい。」に従い、カリキュラムマップを履修要項に記載した(資料3 p20-21)。

(5) 大学独自の教育

薬学教育モデル・コアカリキュラム準拠の教育の進行に合わせて、大学独自の薬学専門教育の内容を含む以下の科目を各年次で設定している(資料3 3-1)。「医薬看連携地域参加型学習」(1年次)(資料3 0-1)、「薬学概論Ⅱ」(2年次)(資料5 pS2)、「薬学有機化学Ⅱ」(1年次)(資料5 pS13)、「医薬品化学」(3年次)(資料5 pS58)、「物理系実習Ⅱ」(2年次)(資料5 pS82)、「物理系実習Ⅲ」(2年次)(資料5 pS83)、「化学系実習Ⅰ」(2年次)(資料5 pS84)、「生物系実習Ⅲ」(3年次)(資料5 pS90)、「医療機能系実習Ⅲ」(3年次)(資料5 pS94)、「臨

床薬学実務実習Ⅰ」(4年次)(資料5 pS95)は、全て必修科目としている。一方、発展的な内容の「基礎薬学科目群(7科目)」(2~3年次)(資料5 pS3, S9, S21, S48-51)、「生命薬科学科目群(8科目)」(3年次)(資料5 pS60-66)、「演習科目群(4科目)」(3・6年次)(資料5 pS73-75, S79)、「英語科目群(4科目)」(2~3年次)(資料5 pS52, S54, S56, S57)、「コミュニティ・ヘルスケア卒前教育科目群(4科目)」(2~5年次)(資料5 pS103-106)は選択科目とし、学生が興味及びニーズに応じて履修できるように配慮している。薬学教育モデル・コアカリキュラム外の専門科目の総単位数は42.25単位相当(ただし、「医薬看連携地域参加型学習」は教養2単位)で、専門科目の修得必要単位数(149単位)の28.4%となっており、独自科目比率の基準(指針)30%に近い水準を確保している。薬学教育モデル・コアカリキュラム外の専門科目の対応表を学部ホームページに掲載して周知している(資料3 3-1)。**【観点3-1-1-1】**

大学独自の教育に関する代表的な科目の概要を説明する。「医薬看連携地域参加型学習」(1年次)では、本学の医学部と看護学部の同学年生とグループを組み(典型的には薬学部3人、医学部4人、看護学部3人の10人)、地域の病院や離島、福祉施設などに直接出向いて課題を探索し、それを解決する医療系学部連携の医療人教育を実施している(資料3 0-1)。医学部と看護学部を有し、しかも3学部で様々な協力関係を築いてきた本学の最も特色のある科目の一つである。2014(平成26)年度からは医療系学部が連携し、さらに名古屋学院大学や名古屋工業大学とも連携し発展した科目「コミュニティ・ヘルスケア基礎」(2年次)、「コミュニティ・ヘルスケア応用」(3年次)、「コミュニティ・ヘルスケア発展」(4年次)、「コミュニティ・ヘルスケア実践」(5年次)を開講している。これらの科目は、医学部・薬学部・看護学部・名古屋市立大学病院で連携して申請し採択された文部科学省・未来医療研究人材研究養成拠点事業(地域と育む未来医療人「なごやかモデル」)に基づくものであり、薬学教育モデル・コアカリキュラム外科目ではあるが、本格的な地域医療に貢献する薬剤師医療人教育として重要な科目に位置づけている。「薬学概論Ⅱ」(2年次)では、研究及び研究者に必要な倫理等を概説する講義・演習や、医療に携わる者として必要な倫理やコミュニケーションの基礎を身につける演習等を行っている。「実習科目群(5科目)」(2~3年次)は、薬学科の学生にも基礎的な実験技術や思考力を幅広く身に付けさせることを主眼に置いたものであり、多様な独自内容を含む構成となっている。一方で、各科目において薬学教育モデル・コアカリキュラム内容を一部含んでおり、薬学教育にも十分に対応した構成となっている。「生命薬科学科目群(8科目)」(3年次)は、生命薬科学領域の発展的内容への理解も深められるような内容であり、選択(生命薬科学)科目であるが、他学部との単位互換による選択科目の単位と合わせて合計4単位までを選択単位の修得必要単位数に組み入れることができる(資料3 p3)。**【観点3-1-1-1】**

(6) 問題発見・解決能力の醸成のための教育

1年次から6年次までにわたって問題発見・解決能力の醸成に向けた演習及び実習科目群をバランスよく配置し、多面的な能力を段階的に習得できるようなカリキュラムを編成している。「医薬看連携地域参加型学習」(1年次)(資料3 0-1)、「有機化学演習」(3年次)(資料5

pS73)、「薬学情報処理演習」(3年次)(資料5 pS74)、「プレゼンテーション演習」(3年次)(資料5 pS75)、「基礎薬学演習」(3年次)(資料5 pS76)、「薬学特別演習」(6年次)(資料5 pS79)、「コミュニティ・ヘルスケア発展」(4年次)(資料5 pS105)、「コミュニティ・ヘルスケア実践」(5年次)(資料5 pS106)では、参加型学習やグループワーク、あるいは自己学習の要素を十分に盛り込むことにより能動的な問題解決の取り組みを促すような講義内容である。「基礎薬学演習」では、本学独自のシナリオを用い、学生自身の問題解決能力を養う Problem-based learning (PBL) を実施している。各科目で設定された技能及び態度等に関わる学修到達目標に沿って、参加態度と成果報告(報告書あるいは発表)に基づいて評価している(資料3 3-2)。加えて、CPに明示している「科学的思考に立脚した問題発見能力及び問題解決能力を醸成させるために、卒業研究実習を実施します」に沿って、またDPに明示している「薬学についての基礎能力」を身につけるために、「卒業研究実習」(4~6年次)(資料5 pS98-100)を実施している。4年次から研究室に所属することで、各教員の直接的な指導のもと、学生が主体的に調査・分析・実験等の研究を行う能力、また自ら問題解決を図る能力を育む機会を提供する。以上の科目の単位数総計は25単位で、基準要件(大学設置基準における卒業要件単位数186単位の1/10以上である18単位以上)を充足している。【観点3-1-1-1】

以上のように、本学の薬学教育カリキュラムは、薬学教育モデル・コアカリキュラムに準拠し、CPに基づいた教養教育及び薬学専門教育に大学独自の教育なども加え、DPに明示されている能力を修得できるようなカリキュラム編成を実施しており、薬学共用試験や薬剤師国家試験の合格率の向上のみを目指したものではない。例えば、薬学共用試験が実施される4年次後期の開講科目は「臨床薬学実務実習Ⅰ」(資料5 pS95)を主とし、CBT対策の「薬学演習Ⅰ」(資料5 pS77)だけである。「薬学演習Ⅰ」は9月末~10月末の7日間(合計16コマ+期末試験)の集中講義(演習及び解説講義)で実施し、薬学専門科目の修得必要単位数149単位のうちの2単位(1.3%)である。また、本科目の過去5年間の履修者(2022(令和4)年度22人、2021(令和3)年度49人、2020(令和2)年度38人、2019(令和元)年度55人、2018(平成30)年度61人:2022(令和4)年度までは選択科目)の中で不合格者数は0人である。5年次は、「臨床薬学実務実習Ⅱ」(資料5 pS96)と「臨床薬学実務実習Ⅲ」(資料5 pS97)以外に開講科目はない。6年次の開講科目も薬剤師国家試験対策の「薬学演習Ⅱ」(資料5 pS78)と海外研修の「薬学特別演習」(資料5 pS79)だけである。「薬学演習Ⅱ」は8月末~11月末の4日間(合計15コマ+期末試験)の集中講義(演習及び解説講義)で実施し、薬学専門科目の修得必要単位数149単位のうちの2単位(1.3%)である。また、本科目の過去5年間の履修者(2022(令和4)年度55人、2021(令和3)年度61人、2020(令和2)年度61人、2019(令和元)年度25人、2018(平成30)年度58人:2019(令和元)年度までは選択科目)の中で不合格者数は0人である。そのため、過度な試験対策等の範疇には入らない。一方、卒業研究のための研究室配属「卒業研究実習」(資料5 pS98-100)は4年次から始まり、6年次の11月中旬の卒業研究発表会まで継続的に実施するため、卒業研究の時間は十分確保されている。

【観点 3-1-1-2】

薬学教育カリキュラムの編成や必要に応じた変更等は、教務 FD 委員会が担当している。必要に応じてカリキュラムの改変（2020（令和 2）年度、2018（平成 30）年度、2015（平成 27）年度）や時間割の変更（随時）を実施してきた（資料 3 p2-7）。最近実施したカリキュラム改変（2020（令和 2）年度入学生から適用）では、薬学・医学の進歩や学生のニーズ、発展的内容やより臨床に近い内容の導入を目的として、薬理系及び医療薬学科目を中心に講義内容や開講時期の見直しを実施し、「臨床薬理学Ⅰ」（資料 5 pS31）と「臨床薬理学Ⅱ」（資料 5 pS32）を新設し、「薬理学（4 科目）」（資料 5 pS27-30）と「医療薬学（4 科目）」（ただし、医療薬学Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは 2023（令和 5）年度より開講）（資料 5 pS68）を再編した。また、研究活動を積極的に実施するため、2023（令和 5）年度から研究室配属を 4 年次前期から 3 年次後期に前倒しする。現在、新しい薬学教育モデル・コアカリキュラムに合わせた薬学教育カリキュラム改変のための準備を開始している。【観点 3-1-1-3】

【教育課程の編成に対する点検・評価】

本学部の教育カリキュラムは教養教育と薬学専門教育からなり、DP に掲げる資質を修得するため、CP に基づいて体系的に編成している。薬学専門教育カリキュラムは、現行の薬学教育モデル・コアカリキュラムを基盤として、CP に基づいて構築されている。特に、医学部、薬学部、看護学部、病院を有する本学に特徴的な「医薬看護連携地域参加型学習」や「コミュニティ・ヘルスケア卒前教育プログラム」を学部教育に取り込み、特色ある教育を行っている。薬学共用試験対策及び薬剤師国家試験対策に位置づけられる科目は、それぞれ 1 科目 2 単位ずつのみであり、薬学共用試験や薬剤師国家試験の合格率の向上のみを目指した編成にはなっていない。また、教務 FD 委員会を中心に、教育課程及びその内容、方法の適切性を検証し、その結果に基づき必要に応じて改善・向上を実施している。以上より、基準【基準 3-1-1】に十分に適合している。

<優れた点>

1. 薬学教育モデル・コアカリキュラムに沿った薬学教育プログラムを編成したうえで、大学独自の科目が約 30%導入されている。
2. 医学部、薬学部、看護学部、病院を有する本学に特徴的な科目を取り込んで特色ある教育を行っている。
3. 卒業研究実習に十分な時間が費やされている。現在の 4 年次での研究室配属を前倒しし、2023（令和 5）年度から 3 年次後期からの配属が決定している。薬学科の学生も薬剤師教育と並行して研究活動を積極的に実施する方針である。

<改善を要する点>

1. 2024（令和 6）年度から適用される新しい薬学教育モデル・コア・カリキュラムに合わせ

て、薬学教育カリキュラムの速やかな検討と改編が必要である。

[改善計画]

1. 教務 FD 委員会が中心となり、新しい薬学教育モデル・コア・カリキュラムに合わせた薬学教育カリキュラム改編のための準備を開始している。

<基準3についての評価>

新モデル・コア・カリキュラムに対応するようにカリキュラム改編を行い、2024年度入学生から、改編された新カリキュラムに移行している（2029年度まで、旧カリキュラム生が残る）。

(3-2) 教育課程の実施

【基準 3-2-1】

教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいた教育が適切に行われていること。

【観点 3-2-1-1】学習目標の達成に適した学習方略が用いられていること。

注釈：例えば薬学研究では、必修単位化、十分な研究期間の設定、研究論文の作成、研究成果の医療や薬学における位置づけの考察、研究発表会が行われていること。

【観点 3-2-1-2】薬学臨床における実務実習が「薬学実務実習に関するガイドライン」を踏まえて適切に行われていること。

【観点 3-2-1-3】学生の資質・能力の向上に資する学習・教授・評価方法を開発していることが望ましい。

注釈：「資質・能力の向上に資する学習・教授・評価方法」には、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）やパフォーマンス評価を含む。

【現状】

各教員がシラバスを作成する際に、各科目における授業の目的・目標と学習到達目標を設定し、学習到達目標について箇条書きで「知識、技能、態度」に関する目標をG10に沿って設定している（資料5）。DPに明示されている能力（資料3 p22）を修得するために、講義科目104単位（必修75単位、選択21単位、選択（生命薬科学）8単位）に加えて、実習科目58単位（必修50単位、選択8単位）、演習科目11単位（必修6単位、選択5単位）を設定し、薬学教育モデル・コアカリキュラムで示された知識を修得する項目を講義科目で、態度及び技能を修得する項目を実習科目で、問題解決能力や論理的思考の育成を演習科目として、段階的及び系統的に学習を積み上げていけるようにバランスよく配置している（資料3 p20-21）。学習方略に特徴を有する科目の概要を以下に紹介する。【観点 3-2-1-1】

「医薬看連携地域参加型学習」（1年次、資料3 0-1）では、学習効果を高め、理解度を深める方略としてKJ法、グループ討論、ワークショップ形式によるプロダクト作成や発表等を導入している。また、薬学人としての素養を図るため、サリドマイドなどの薬害被害者本人による講義を実施し、学生が「薬害」を肌で感じる学習を通じて、ヒューマニズムや医療倫理教育及び医療安全に関わる機会を提供している。さらに、医療現場や地域包括ケアの見学を医学部や看護学部の学生とともに早期に体験することによって、学生が自ら将来を明確に意識して学び、また他の医療系職種と緊密な連携を図れるようなコミュニケーション能力の育成に資する。【観点 3-2-1-3】

「基礎薬学演習」（3年次）（資料5 pS76）では、学生を少人数に分け、本学独自のシナリオを用いたグループディスカッションを行い、学生自身の問題解決能力を養うPBLを実施している。シナリオでは、「薬局開設」「医療倫理」「症例検討」「副作用モニタリング」等について議

論し、薬学生としてのモチベーションを高めるとともに、高学年時に行われる実務実習事前学習、病院・保険薬局実習に向けた準備を行っている。また、ヒューマニズムや医療倫理に関わるPBL課題も提供している。さらに、講義の一部として、本学東海薬剤師生涯学習センター講座と連携し、薬剤師と協働でPBLを実施する（学生4～6名と薬剤師1～3名で1グループ）ことで、学生だけのPBLでは導きだせなかった現実的な解決法や新しい観点による解決法などを学習することができ、また生涯研鑽についての学習機会も提供する。

「医療薬学4科目（医療薬学Ⅰ：臨床検査・フィジカルアセスメントなど、医療薬学Ⅱ：小児・産婦人科・腎臓尿路・骨代謝・皮膚・内分泌代謝・悪性疾患など、医療薬学Ⅲ：専門薬剤師・チーム医療など、医療薬学Ⅳ：個別化医療・治療薬物モニタリングなど）」（以前の「臨床薬学6科目」、「医療薬学Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は2023（令和5）年度より開講）（3～4年次）（資料5 pS68、資料3 3-3）では、それまでに修得した基礎薬学科目の学習を基盤として、さらに臨床へ応用するための講義科目であり、医師免許を持つ教授（病院での外来診療を現在も担当している）が監修のもとで、基礎薬学教員、実務家教員、医師教員、病院薬剤師が講義を実施する。

「臨床薬学Ⅴ」（2022（令和4）年度まで・以降「漢方薬物治療学」に変更）（資料5 pS24）でも開業医を非常勤講師として招聘している。基礎薬学科目と医療薬学科目の連携により、基礎と臨床の知見を相互に関連づけられるような一連の科目編成となっている。

「コミュニティ・ヘルスケア卒前教育科目群（4科目）」（2～5年次）（資料5 pS103-106）では、名古屋市立大学病院や調剤薬局などの医療現場で直接医療関係者とのコミュニケーションを体験することでチーム医療の重要性を学ぶ。医師・薬剤師・看護師・理学療法士・栄養士・ソーシャルワーカーなど地域医療・介護で実際に活躍する講師による講義の受講や、地域の病院や介護施設、在宅支援の医療現場などで直接実習することを通じて、薬学での学びが地域医療でどのように役に立つか具体的に知ることができる。

卒業研究実習（4～6年次）（資料5 pS98-100）では、3年次1～2月に分野（研究室）配属ガイダンス（資料3 4）を行い、研究室見学後、配属を希望する分野（研究室）を選択させて、4年次4月から卒業研究を開始する。本学部の21分野（研究室）には、1学年あたり0～4人の定員が割り当てられ、定員を超える場合には3年次までの成績上位の学生を優先して配属させている。研究室では、各教員の直接的な指導のもとで研究テーマを設定し、学生が主体的に調査・分析・実験等の研究を行える能力、また科学的思考に立脚した問題発見能力及び問題解決能力を育む機会を提供している。期間は、4年次から6年次の11月末までの約24ヶ月（事前学習及び実務実習期間を除く）であり、3年次までに修得した知識・態度・技能を基盤としながら総合的に問題解決能力を向上させるうえで適切な時期と十分な期間を設定している。学部主催の卒業研究発表会は、4～6年次に取り組んだ卒業研究実習を取りまとめ、自身で見出した成果を発表する機会として位置づけており、口頭発表形式で毎年11月中旬に実施している（資料3 5）。卒業研究発表会の1ヶ月前に、研究内容の要旨（A4版1ページ）を提出させ、製本後、全教員及び研究室所属する全学生と研究員に配付し、発表会における討論に使用させている（訪問時6-1 令和4年度名古屋市立大学薬学部薬学科卒業研究発表要旨集）。発表会

では、パワーポイントスライド（事前に指導教員及び卒研評価教員に配布する）を使用し、1名あたり口頭発表6分、質疑応答6分、計12分間のプレゼンテーションを行っている。質疑応答では、予め指定された評価教員2名の質疑には必ず応答させ、その他の教員の質疑にも時間内に応答させる（資料35）。卒業研究論文は、A4版で15～30ページを目安としてまとめさせている。卒業研究論文は11月末までに事務室に提出とし、本学部で全員分をまとめて保存している。卒業研究論文の作成に当たっては、通常の学術論文と同様に、序論、理論の部、実験の部、引用文献、謝辞の順、または、序論、実験の材料及び方法、実験結果、考察、結論、引用文献、謝辞の順で構成され、日本語または英語で執筆させている。また、研究成果の医療現場への応用または薬学における位置づけについて明文化させ、適切な考察を行い、結論を導くことを求めている（資料35）。

第1期薬学教育評価において、改善すべき点（3）として、「研究成果報告書」等の総合評価が指導教員の裁量に任されており、「卒業研究実習」による問題解決能力の向上が適切に評価されていると結論づけることができない。また、「研究成果報告書」の評価に基準を設けて複数の教員で行い、卒業論文発表会における発表・質疑応答結果に評価基準を設けることなど、「卒業研究実習」による問題解決能力の向上を評価するための適切な指標や基準を設定することが必要である、との指摘を受けた（資料26 p5）。評価後、「卒業研究実習」における問題解決能力向上を適切に評価するため、「卒業研究発表」及び「卒業研究論文」について評価項目を設け、それぞれルーブリック形式の評価表に照らし合わせて定量化し、3人の教員（指導教員と、学生の所属分野以外の評価教員2名）による評価を行うこととした（資料20）。さらに、4～5年次の卒業研究実習にもそれぞれ修得必要単位を設定し、当該期間中の卒業研究の成果ならびに問題解決能力の向上について基準を設け、それぞれ指導教員により、定量的な評価を行っている（資料20）。4～5年次の卒業研究実習の評価は、シラバスに「卒業研究経過報告（各種の記録物等）100%」（資料5 pS98-99）と明記しており、指導教員が卒業研究取組状況と問題解決能力を評価する。6年次の卒業研究実習の評価は、シラバスに「卒業研究報告 内容全般54%、発表31%、論文15%」（資料5 pS100）と明記しており、指導教員が、卒業研究発表会における発表・質疑応答や卒業論文について、評価教員による評価を踏まえて、学生の問題解決能力の向上を評価して行っている。評価項目には、医療や薬学における研究成果の位置づけの考察が含まれている。

次に、薬学臨床における実務実習が「薬学実務実習に関するガイドライン」を踏まえて適切に実施されていることを以下に説明する。【観点3-2-1-2】

「臨床薬学実務実習Ⅰ（事前学習）」（4年次）（資料5 pS95）では、薬学教育モデル・コアカリキュラムの教育目標に準拠し、薬剤師職務に必要な基本的知識、技能、態度に関わる諸項目（講義、調剤・製剤の実践、グループディスカッション、ロールプレイ演習、模擬患者との面談等）の修得を目的・目標として設定している。薬学教育モデル・コアカリキュラム外の独

自カリキュラム内容として、フィジカルアセスメント演習、セルフメディケーション実践演習、注射実技演習、及び糖尿病予防等の生活指導演習を実施している。また、コミュニケーション演習の一環として、接遇研修を実施（1日）している。薬学教育モデル・コアカリキュラムに準拠した講義形態（講義、演習、実習）での所定の114コマに、24コマの独自カリキュラムを加えて全体で138コマのカリキュラムを実施している（資料36）。学習の内容や方法に応じて、講義室、模擬薬局、模擬病室、OSCE室（SGD等のための演習室）、CBT室（情報処理演習室）で実施している。実施体制は、臨床薬学教育研究センター所属の実務家教員（教授2名、准教授1名、講師2名の計5名）が主に担当し、名古屋市立大学病院薬剤部教員、他の専任教員（一般教員）の約9割（基本的には薬剤師免許保有教員、医師2名を含む）が指導に参画する。また、名古屋市立大学病院の薬剤師・看護師・臨床検査技師、及び、保険薬局の薬剤師が、非常勤教員または臨床教授・准教授として指導に参画している。さらに、市民ボランティアの模擬患者と、教育補助要員（TA）として実務実習修了学生（5～6年次、大学院生）も参画している（資料37）。

第1期薬学教育評価において、改善すべき点（2）として、実務実習事前学習の目標達成度評価のための適切な指標を設定し、それに基づいて評価する必要がある、との指摘を受けた（資料26 p3）。この指摘を受け、表3-2-1-1のような指標及び評価法を設定した。なお、以前は、定期試験35%、ポートフォリオ35%、週報・課題・成長報告20%、態度10%で評価していたが、COVID-19の感染拡大以降に直面での授業が減少し、態度評価が困難になったため、表3-2-1-1のように変更した。学生には授業開始時に通知済みであるが、2022（令和4）年度シラバスには古い情報が残っていた。2023（令和5）年度シラバスでは訂正する。

表3-2-1-1 実務実習事前学習の指標と評価法（資料38、資料39）

項目	割合	内容
①知識	40%	「調剤指針（日本薬剤師会編）」「スタンダード薬学シリーズ10実務実習事前学習（日本薬学会編）」の内容を中心とした客観試験を、クリッカーシステムを用いて毎週実施し、知識の到達度合いを評価する。
②ポートフォリオ	30%	演習等で作成するポートフォリオを採点する。実務家教員が週報と同時に毎週確認し、評価する。「臨床薬学実務実習Ⅰ（事前学習）」の開始時と、その後は3週間ごとに、「F臨床薬学概略評価表」を用いて成長度合いを評価し、各自の学習分析を記録する。
③週報・課題・成長報告	30%	実務実習事前学習目標シート・週報シート（目標・成長報告評価）を実務家教員が毎週確認し、未提出や不適切記載あった場合は減点する。定期的に提示する課題については、各自がレポートを提出し実務家教員が評価する。

④積極性と総合的な態度	総合評価に加味	「医薬看連携地域参加型学習」で実施している「チーム力評価」「ピア評価」「プレゼンテーション評価」を利用して、学生の成長とチームへの貢献度を形成的評価として行う。
-------------	---------	--

「臨床薬学実務実習Ⅱ（病院実習）」（4～5年次）と「臨床薬学実務実習Ⅲ（保険薬局実習）」（4～5年次）では、臨床薬学教育研究センターと臨床薬学教育委員会（委員長は臨床薬学教育センターの実務家教授に加え、実務家教員4名、教授3名（うち医師2名）、准教授1名、講師2名の合計11名）が連携して実施している。学生、指導薬剤師及び実習施設の施設管理者からの相談及び問題には、臨床薬学教育研究センター及び臨床薬学教育委員会が対応している（資料40）。実務実習に関する責任体制（危機管理を含む）として、各学生に指導教員を配置し、実務実習中の問題に対応している。東海地区の実施体制（危機管理を含む）として、東海地区調整機構にて実習施設の割り振り等の配属調整、トラブル事例の情報共有、学生の実習続行が困難な場合等の対応について協議している。4年次及び5年次学生には、当該年度の学生定期健康診断（5月実施）を義務づけており、麻疹などの各種抗体価が基準未満の学生への予防接種・ワクチン接種を指導（検査・接種の記録を実務実習前に確認）している（資料4-1 p108）。病院実習については、全学生を臨床薬学教育研究センターの全教員で分担指導している。薬局実務実習については、原則として卒業研究配属分野の教員が指導教員となり、実習前の諸注意、実習期間中に原則2回の薬局訪問、実習終了後の報告会参加などを行っている（資料41、資料42、資料43）。COVID-19対策として、ワクチン3回接種、県外移動の自粛、アルバイトの禁止などを原則義務づけていた。現在は、体温・体調などの健康観察表提示を実施している。

病院・薬局への学生の配属については、4年次学年ガイダンスにおいて配属決定の方法と基準を説明している（資料4-1 p107, p109, 資料44）。学生の希望及び交通の便（公共交通機関の利用で1時間以内に通えること）に配慮して、東海地区調整機構で8大学協議のもとで配属を決定している。病院実務実習については、名古屋市立大学病院群（総数48名）には、希望者の優先振り分け枠がある（約10名、実習期の希望は不可）。原則として東海4県内は出身県への配属とし、その他は名古屋市内の施設に配属している。ほとんどの学生（例年全体の9割程度）が愛知県内で実施している。また、薬局実務実習については、病院実習と同様に、原則として出身県（東海4県出身学生）あるいは名古屋市内（その他の学生）の施設に配属している。ほとんどの学生（例年全体の9割程度）が愛知県内で実施している。実習期に関しては、受け入れ施設の制約のため、希望に添えない例がやや目立つ状況である。

実習施設の設備・運営状況、指導薬剤師、薬学教育モデル・コアカリキュラム対応等の所定諸事項についての適正性を「実習施設の概要」（訪問時7 実務実習施設の概要）により確認（全ての施設で、日本薬剤師研修センター認定実務実習指導薬剤師による指導、日本薬剤師会・日本病院薬剤師会より提示の施設要件に準拠）している。名古屋市立大学病院では、実務実習実施体制・指導内容等の充実を図るため、薬剤師係長会議（臨床薬学教育研究センターの准教

授1名または講師1名が参加、毎週1回開催)で実習運営を協議している。その他の病院については、実務家教員3名(臨床薬学教育研究センター教授2名及び講師1名)で分担して対応している。また、愛知県内の保険薬局については、愛知県薬剤師会の薬学教育部会(臨床薬学教育研究センター教授1名が委員として参加、毎月1回程度開催)が指導薬剤師の育成、実務実習に関わる問題点を検討し、調整等を担当している(資料45)。指導教員は、薬局訪問時に指導薬剤師と面談して、実習内容等を確認している。東海地区調整機構において、実務実習(病院・薬局)の実施体制、指導内容等の充実を図る対応を行う予定である。

実務実習実施における大学と実習施設との連携については、実習開始前に説明会を開催(資料46、資料47)し、個人情報の意味と守秘義務の遵守について学生に説明・指導後、誓約書を取得し、実習施設に提出している(資料48)。病院実務実習では、東海地区調整機構が中心となって作成した「モデル・コアカリキュラムに沿った わかりやすい新病院実務実習テキスト(じほう)」と愛知県薬剤師会・愛知県病院薬剤師会で作成した「薬学生のための実務実習連携ノートブック」をテキストとして指定している(資料5 pS96)。また、薬局実務実習では、「今日の治療薬」と「薬学生のための実務実習 連携ノートブック」をテキストとして指定している(資料5 pS97)。指導教員及び指導薬剤師は、実務実習指導・管理システム(WEBシステム)の各種実習記録を随時確認し、学生の目標到達度を把握(進捗状況情報を共有)しながら連携して指導(指導教員は電子メール連絡、訪問面談等の対応)し、問題等があれば速やかに対応している。学生と指導教員からの意見収集は、問題が生じた場合には随時、その他は各期の実務実習終了後の報告会(臨床薬学教育研究センターの教員の他、指導教員も参加)で実施(必要に応じて口頭での追加指導)している。実務実習報告会では、実習に関わる情報共有を図り、学生への実習に関するアンケートも実施している(資料49、資料50)。実習を担当した指導薬剤師向けに、翌年度初め(4月下旬)に愛知県合同報告会(名古屋市立大学、名城大学、愛知学院大学、金城学院大学、鈴鹿医療科学大学、愛知県病院薬剤師会、愛知県薬剤師会、実習生を受け入れた施設の実務実習指導薬剤師が参加)を開催している(資料50)。

実務実習評価においては、実務実習評価基準(東海地区調整機構で作成、事前提示)に基づく到達度評価(指導薬剤師の評価と学生の自己評価)を到達目標毎に3段階で評価している。指導教員向けに、公平な評価への取り組みとして、より詳細な評価基準(採点指針)を設定している(資料51)。学生による日誌及び各種評価レポート(進捗レポート、サマリーレポート、詳細レポート)の記録・作成(以上、実務実習指導・管理システム(WEBシステム)を利用)と、実習記録としてのポートフォリオの作成を義務づけている。指導薬剤師による日誌コメント(フィードバック)及び各種評価レポートを形成的な評価に活用している。指導教員による学生の実務実習指導・管理システム(WEBシステム)記録(日誌、各種評価レポート)及びポートフォリオに基づく学習進捗状況の評価とフィードバックを実習期間中に適切に実施している。総合的な学習成果の評価(最終評価)は、指導薬剤師との適切な連携の下で、指導教員が公平・適正に実施し、実務実習修了報告書として提出している(資料52)。

第1期薬学教育評価において、改善すべき点（4）として、問題解決能力の醸成に向けた教育科目において、目標達成度を評価するための指標を設定し、それに基づいて適切に評価を行うことが必要である、との指摘を受けた（資料26 p7）。評価後、「基礎薬学演習」の評価基準を策定し、全学年を通しての形成的評価（薬学科卒業時までの継続した学生成長評価を2018（平成30）年度入学生より開始している（資料18）。また、「卒業研究発表」及び「卒業研究論文」について評価項目を設け、それぞれルーブリック形式の評価表に照らし合わせて定量化し、3人の教員（指導教員と、学生の所属分野以外の教員2名）による評価を行うこととした（資料20）。

第1期薬学教育評価において、改善すべき点（1）として、「ヒューマニズム教育・医療倫理教育」と「コミュニケーション能力と自己表現能力を身につけるための教育」において、それぞれの目標達成度を総合的に評価するための指標を設定し、それらに基づいた適切な評価を行うことが必要である、との指摘を受けた（資料26, p1）。評価後、1年次で作成し評価したポートフォリオの作成を卒業時まで継続して実施する新しい評価形式を、2018（平成30）年度にトライアルを実施し、2019（令和元）年度から導入した（資料18）。ポートフォリオはチューター会で各担当教員（資料4 p9）が確認し、学生自身の自己評価と合わせて、毎年の学生の成長状況を記録している（資料18）。4年次以降では、配属分野教員ならびに実務実習事前学習、実務実習担当教員が評価を継続して確認し、卒業時の評価にも加えている。教員ならびに学生自身が評価する観点についても作成した。ヒューマニズム教育・医療倫理教育とコミュニケーション能力と自己表現能力を身につけるための教育では、学生相互による「チーム力評価」及び「ピア評価」（コミュニティ・ヘルスケア卒前教育プログラム）、ポートフォリオに基づく形成的評価・採点（医薬看連携地域参加型学習）を実施している（資料30-1）。さらに、「基礎薬学演習」や「臨床薬学実務実習Ⅰ（事前学習）」のTAを実務実習終了後の5～6年次または大学院学生が担当している（資料37）。このような屋根瓦式教育を導入することによって、臨床薬学知識や技能の定着を図り、病院・薬局実務実習の振り返りを実施し、また教育指導の経験を積み重ねることができる。

(図3-2-1-1) 実務実習施設との連携状況



1) 東海地区調整機構を介した施設との連携

●施設割振:

東海地区調整機構の規定に従い、病院・薬局実習施設を決定。施設決定後、調整機構からの連絡と並行して、大学から契約書・個人調書・誓約書等を各施設に郵送し、必要書類の返送を依頼する。愛知県内の薬局施設とは、愛知県薬剤師会との3者契約で実施する。

●実習期間中のトラブル等の対応:

実習期間、または施設確定後実習開始時までには学生や施設等の事情で施設変更や実習休止等が発生した場合は、調整機構の規定に従い、薬剤師会・病院薬剤師会と連携を取って対処する。

2) 大学教員と施設との連携

●施設訪問と指導薬剤師との情報共有:

実務実習担当教員は、原則として実習開始時、実習4週目～8週目、最終の3回、実習施設への訪問(あるいは、それ相当の連絡)を行い、実習スケジュールや指導体制等を確認する。また、大学で聴取した学生の情報等を提供する。最終的に評価等が確実に行われたか等を確認する。

地区や施設での実務実習報告会が行われる際は、原則実務実習担当教員が出席する。

●WEBによる「実務実習指導・管理システム」による情報共有:

実務実習実施計画書、実習中の学生の日誌、一週間の振返り、評価等は、WEBシステムにて管理する。実務実習担当教員は、担当学生の日誌、出席状況等を常に確認するとともに、定期的に学生の状況をメール等で確認し、必要があれば指導薬剤師と連絡をとり対応する。

●実習期間中のトラブル等の対応、最終確認報告:

実習生や施設等との協議が必要な時は、実務実習担当教員と病院・薬局実務実習責任者がその協議にあたる。協議結果をうけ、変更や休止等が必要な場合は調整機構の規定に従い対応、報告する。

実習終了後は、実務実習担当教員が各学生の実習状況、評価等を実習施設に確認し、臨床薬学教育研究センターに報告書を提出する。

【基準 3-2-2】

各科目の成績評価が、公正かつ厳格に行われていること。

【観点 3-2-2-1】各科目において適切な成績評価の方法・基準が設定され、学生への周知が図られていること。

【観点 3-2-2-2】各科目の成績評価が、設定された方法・基準に従って公正かつ厳格に行われていること。

【観点 3-2-2-3】成績評価の結果が、必要な関連情報とともに当事者である学生に告知されるとともに、成績評価に対しての学生からの異議申立の仕組みが整備され、学生へ周知が図られていること。

【現状】

各科目において、学修到達目標の要素（知識・態度・技能）に適合する成績評価の方法（筆記試験、レポート等）を用い、基準を設定している。成績評価方法は、シラバスに明記して周知されている。成績評価に関しては、履修規程第19条に「学期末に試験を行うほか、実習、論文、レポート等をもって試験に代えることができる。」と定められている（資料3 p38）。全ての科目において、成績評価方法とその比重が成績判定基準（定量的な数値で表記）として明確に定められ、シラバスに明記されている（資料5）。【観点 3-2-2-1】

第1期薬学教育評価において、改善すべき点（5）として、『シラバスに「成績判定基準」が定量的な数値で示されていない科目が少なからず存在する。評価の厳正さを高めるため、全ての科目について、「成績判定基準」を定量的な数値で明示するよう、早急に改善する必要がある』、との指摘を受けた（資料2 6 p9）。2018（平成30）年度以降は、全専門科目について、「成績判定基準」を明確にし、評価項目の算定割合を定量的な数値で（合計100%として）シラバスに掲載している。シラバスは、履修要項の一部として冊子体で毎年4月の学年ガイダンスで配付されている。また、本学ポータルシステムを通じてWEB上で確認できる。加えて、科目ごとに最初の講義で学生に説明している。成績評価方法に出席点は含めていない。【観点 3-2-2-1】

成績評価に関しては、履修規程第22条に「前3条の試験の成績は、100点を満点とした点数により採点し、60点以上を合格、60点未満を不合格とし、次の各号により表示する。(1) 90点以上 秀、(2) 80点以上 優、(3) 70点以上 良、(4) 60点以上 可、(5) 60点未満 不可」と明記されており、評価点に応じて自動的に5段階評価（秀～不可）が決まるため、公正かつ厳格に実施できるシステムを構築している（資料3 p39）。また、公正かつ厳格な履修指導及び研究室配属のための指標として、成績評価基準にGPA（Grade Point Average）制度を導入している。各科目の成績それぞれに対して、4.0（秀）、3.0（優）、2.0（良）、1.0（可）、0（不可）のグレードポイント（GP）が与えられる（資料3 p70）。【観点 3-2-2-2】

各科目の成績は、学生に個別に通知され、またポータルシステム（ライブキャンパスシステ

ム、WEB) 上で常時確認することができる。また、研究室配属決定に用いられる成績の席次は、3年次3月(2022(令和4)年度は3月13日予定)に学生に個別に通知される。成績評価について疑義がある場合には、「成績発表後7日以内に「成績疑問票」を事務室に提出してください。」と履修要項に明記されており、その評価の内容を知ることができる制度が整っている(資料3 p62, 66)。なお、ほとんどの科目で答案コピーの返却あるいは試験の素点の開示を行っているため、成績判定基準に照らすことで学生が成績評価を知ることが比較的容易になっている。

【観点3-2-2-3】

以上のまとめを表3-2-2-1に示す。

(表3-2-2-1) 各科目の成績の評価と合格基準

項目	現状	対応する規程等の条項	根拠資料
① 科目の最終成績の評価(評語)	100点を満点とした点数により採点し、60点以上を合格とする。	薬学部履修規程第22条	資料3 p39
② 素点と最終成績評価(評語)の対応	各科目の最終成績に基づき、90点以上を「秀」、80点以上を「優」、70点以上を「良」、60点以上を「可」、60点未満を「不可」とする。	薬学部履修規程第22条	資料3 p39
③ 再試験制度の有無、その基準など	各科目の定期試験で、30点以上60点未満であった場合は「再試験」を実施し、再試験で合格した場合は評価を60点「可」とする。	薬学部履修規程第21条 薬学部履修規程第22条2項	資料3 p39
④ GPAの算出方法	各科目の最終成績評価に基づき、秀=4.0、優=3.0、良=2.0、可=1.0、不可=0とし、全科目を対象とした平均値をGPAとする。	薬学部履修規程「GPA(Grade Point Average)制度について」	資料3 p70
⑤ 科目の合格基準	標語「秀」、「優」、「良」、「可」を合格、「不可」を不合格とする。		資料3 p39
⑥ 成績評価結果の学生への周知法(同時に学生に告知される成績に関連する情報も記載のこと)	科目の成績の評価結果は、ポータルシステム(ライブキャンパスシステム、WEB)を通じて、学生に周知している。また、研究室配属前の学生については、成績下位者(各年度の前期または後期のGPAが1.5未満)については、チューター教員と面談し、個別学修指導を実施している。		資料4-2 p4, p10,
⑦ 成績評価結果に対する異議申し立て手段	成績評価について疑義がある場合には、「成績発表後7日以内に「成績疑問票」を事務室に提出してください。」と履修要項に明記している。		資料3 p62, p66

【基準 3-2-3】

進級が、公正かつ厳格に判定されていること。

【観点 3-2-3-1】進級判定基準、留年の場合の取扱い等が設定され、学生への周知が図られていること。

注釈：「留年の場合の取扱い」には、留年生に対する上位学年配当の授業科目の履修を制限する制度、再履修を要する科目の範囲等を含む。

【観点 3-2-3-2】各学年の進級判定が、設定された基準に従って公正かつ厳格に行われていること。

[現状]

進級判定基準及び留年の取扱いについては、履修規定に明記されており、また、毎年4月に開催する学部ガイダンスで詳細に説明している。【観点 3-2-3-1】

1年次から2年次への進級要件については、履修規程第25条に明記されている（資料3 p40, 52）。1年次終了時において、必要単位が不足している場合には、2年次に進級できない留年となる（2年目も1年次となる）。進級要件については、新入生には新入生ガイダンス（資料4-1 p31、資料4-2 p2-3）及び保護者説明会（資料4-3 p9）で説明し、2～4年次学生には学部ガイダンスで詳細に説明している（資料4-2, p8-p9, p15-p16, p20-21）。また、在学年数が入学後2年に至っても2年次に進級できない場合は、履修規程第26条に明記されている通り、除籍となる（資料3 p40）。除籍条件についても、新入生ガイダンスと保護者説明会で詳細に説明している（資料4-2 pp、資料4-3 p9）。

本学では2年次以降で学年毎の進級判定を実施していないため、履修規定上は2年次進級後5年間経って卒業に必要な単位を修得できていない時点で原級留置（留年）となる。すなわち、2～5年次のあいだで同じ学年に2度以上在籍することは（書類上）はなく、卒業まで6年次を繰り返すことになる。

4年次科目の履修要件については、履修規程第25条第2項（4）に明記されている（資料3 p40）。3年次後期終了時において、必要単位が不足している場合には、「卒業研究実習」を実施する研究室配属が行われなため、実質的な留年となる。

4年次後期科目の履修要件については、履修規程第25条第2項（1）に明記されている（資料3 p40）。4年次前期終了時において、必要単位が不足している場合には、「臨床薬学実務実習Ⅰ（事前学習）」を履修することができないため、実質的な留年となる。また、履修規程第25条第2項（2）に明記されているように薬学共用試験（OSCE、CBT）の受験に必要な単位が不足している場合も、実質的な留年となる（資料3 p40）。さらに、履修規程第25条第2項（3）に明記されているように薬学共用試験（OSCE、CBT）に不合格の場合は、「臨床薬学実務実習Ⅱ（病院実習）」「臨床薬学実務実習Ⅲ（保険薬局実習）」を履修することができないため、実質的な留年となる（資料3 p40）。これらの履修要件については、新入生ガイダンス及び学部ガイダン

ス（2年次～4年次）で説明している（資料4-2 p3, p9, p16, p21）。

実質的な留年生の上位学年配当科目の履修や再履修については、制限していない。現時点では専門科目に関し、履修科目数に制限を加えるCAP制は導入されていない。ただし、過度な履修（再履修）については、学期開始前に学生、教務FD委員長、チューター教員、事務室教務担当職員の4者面談により適切な指導を行っている。また、重複履修は、履修規程第18条に「授業時間の重なる授業科目（教養教育科目の授業科目を含む。）については、重複して履修することはできない。」と定められていることから、原則認めていない（資料3 p38）。再履修に関しては、履修しやすいカリキュラム（時間割）を作成して、一定の配慮をしている（資料6）。【観点3-2-3-1】

1年次から2年次への進級判定については、履修規程第25条に明記されている進級要件（資料3 p40, 52）を確認し、教務FD委員会で審議・承認し、さらに教授会でも審議・承認することになっており、公正かつ厳格に行われている。2022（令和4）年度は、2023（令和5）年2月28日の第8回教務FD委員会（訪問時1-6）及び2023（令和5）年3月3日の第17回薬学部教授会（訪問時1-7）で審議・承認された。4年次科目の履修要件（すなわち研究室配属）の可否については、履修規程第25条第2項（4）に明記されている要件（資料3 p40）を確認し、教務FD委員会で審議・承認し、さらに教授会でも審議・承認することになっており、公正かつ厳格に行われている。2023（令和5）年4月に研究室配属になる学生については、2023（令和5）年2月28日の第8回教務FD委員会（訪問時1-6）及び2023（令和5）年3月3日の第17回薬学部教授会（訪問時1-7）で審議・承認された。4年次後期科目の履修要件（薬学共用試験の受験資格）の確認については、履修規程第25条第2項（1）（2）に明記されている要件（資料3 p40）を確認し、教務FD委員会で審議・承認し、さらに教授会でも審議・承認しており、公正かつ厳格に行われている。2022（令和4）年度は、2022（令和4）年8月30日の第3回教務FD委員会（訪問時1-8）及び2022（令和4）年9月6日の第8回薬学部教授会（訪問時1-9）で審議・承認された。「臨床薬学実務実習Ⅱ（病院実習）」「臨床薬学実務実習Ⅲ（保険薬局実習）」の履修要件は、履修規程第25条第2項（3）に明記されているように、薬学共用試験に合格することである。以上の履修要件を満たさない場合には、実質的な留年となる。以上のように、各学年の進級判定は、設定された基準に従って、教務FD委員会及び教授会で審議・承認することにより公正かつ厳格に行われている。【観点3-2-3-2】

以上のまとめを表3-2-3-1に示す。

(表3-2-3-1) 進級に関わる制度と基準

項目	現状	対応する規程等の条項	根拠資料
① 進級に関わる制度	2年次への進級に要件を設けている。 研究室配属(実質的な4年次)に要件を設けている。	薬学部履修規程第25条	資料3 p40
② 進級判定基準	2年次への進級要件:1年次終了時において、教養科目のうち、実験及び健康・スポーツ科目並びに地域参加型学習を含む35単位以上を修得していること。また、1年次配当の専門科目のうち9単位を修得していること。 研究室配属(実質的な4年次)の要件:3年次後期終了時において、教養科目と必修専門科目の未修得単位数が14単位以下であること。	薬学部履修規程第25条	資料3 p40
③ 進級基準の学生への周知方法	入学時および各学年の開始時に配布する履修要項に記載している。 各学年開始時のガイダンスにおいて、進級基準について指導している。		資料3 p40 資料4-1 p31 資料4-2 p2-p3, p8-p9, p15-p16, p20-p21, p26

【基準 3-2-4】

卒業認定が、公正かつ厳格に行われていること。

【観点 3-2-4-1】 卒業認定の判定基準が卒業の認定に関する方針に基づいて適切に設定され、学生への周知が図られていること。

【観点 3-2-4-2】 卒業に必要な単位数の修得だけではなく、卒業の認定に関する方針に掲げた学生が身につけるべき資質・能力の評価を含むことが望ましい。

【観点 3-2-4-3】 卒業認定が判定基準に従って適切な時期に、公正かつ厳格に行われていること。

注釈：「適切な時期」とは、卒業見込者が当該年度の薬剤師国家試験を受験できる時期を指す。

【現状】

本学部のDPにある、①薬学についての基礎能力、②社会人・国際人としての基礎能力、③医療人としての基礎能力と態度、を有すると認められた者に対して、卒業要件を満たした場合には、卒業を認定し、学士（薬学）の学位を授与している。薬学部6年制の大学設置基準の卒業要件（186単位以上）に則り、卒業の認定要件が履修規定第27条に明記されている通り、教養教育科目39単位と専門教育科目149単位（講義・実習・演習）（所定の必修単位を含む合計188単位）を全て修得した学生に卒業認定を行っている（資料3 p36, 38, 41, 52, 55）。卒業要件については、毎年4月に開催する新入生ガイダンス及び学部ガイダンス（5年生を除く）で周知している（資料4-2 p3, p9, p16, p21, p26）。【観点 3-2-4-1】

学生がDPの基準を満たしていることを評価する方略として、1年次から卒業時までの継続的な成長記録であるポートフォリオを活用している。ポートフォリオを通して、学生と科目担当教員・チューター教員・指導教員等が双方向性に各年次の学生の成長を確認・評価することで卒業時に必要な資質・能力をはかることができる。ただし、ポートフォリオの評価を卒業研究実習の単位などに具体的・数値的にどの程度含めるのかの基準については、今後の検討課題である。【観点 3-2-4-2】

卒業認定に関しては、毎年2月初旬に教務FD委員会を開催し、卒業予定の全学生について、履修規定第27条に明記されている卒業の認定要件（資料3 p36, 38, 41, 52, 55）を満たしているか否かを確認・承認した後、2月初旬～中旬の教授会で卒業判定を実施している。2022（令和4）年度は、2023（令和5）年2月7日の第6回教務FD委員会（訪問時1-1）及び2023（令和5）年2月13日の第15回薬学部教授会（訪問時1-10）で審議・承認された。卒業見込者が当該年度の薬剤師国家試験を受験できる適切な時期において、公正かつ厳格に実施している。なお、本学では、卒業試験は設定しておらず、また、6年次には「薬学演習Ⅱ」（8月末～11月末、集中講義）と「卒業研究実習」以外の必修科目が設定されていないので、卒業研究発表会（11月中旬、2022（令和4）年度は11月13日）と卒業論文の提出（11月末、2022（令和4）年度は12月2日）をもって事実上、卒業はほぼ確定する。2006（平成18）年度の薬学新制度開始以降これまでに、6年次の中途または卒業直前に、図らずも卒業できなかったという事例はない。【観点 3-2-4-3】

(表3-2-4-1) 卒業認定と判定基準

項目	現状	対応する規程等の条項	根拠資料
① 卒業認定の判定基準	薬学部薬学科に6年以上在籍し、教養科目39単位を含めた188単位(所定の必修単位を含む)以上を修得すること。	履修規定第27条	資料3 p36,38,41,52,55
② 卒業判定の時期	卒業年度の2月上旬	履修規定第27条	
③ 卒業認定の手順	教務FD委員会が作成した「卒業判定資料」に基づき、教務FD委員会および薬学部教授会において、個々の学生の単位修得状況を確認し、卒業認定の判定基準に従って卒業認定を行う。	履修規定第27条	資料3 p41, p52, p55
④ 学生に対する卒業認定の判定基準の周知	入学時および各学年の開始時に配布する「履修要項」、各学年の開始時に開催する「学年ガイダンス」において、卒業認定の基準について指導している。		資料3 p41, p52, p55 資料4-2 p3, p9, p16, p21, p26

【基準 3-2-5】

履修指導が適切に行われていること。

注釈：「履修指導」には、日々の履修指導のほか、入学者に対する薬学教育の全体像を俯瞰できるような導入ガイダンス、入学までの学習歴等に応じた履修指導、「薬学実務実習に関するガイドライン」を踏まえた実務実習ガイダンス、留年生・卒業延期者に対する履修指導を含む。

〔現状〕

入学者に対しては、新入生ガイダンスにおいて、教養教育及び専門教育の内容について、教養教育及び薬学部の履修要項などを用いて説明し、薬学教育の全体像を俯瞰できるように配慮している（資料4-1 p1-p73、資料4-2 p1-p6）。高校での履修レベル差が大きい物理と生物については、1年次前期に配置した教養科目で履修レベルに応じたクラス編成（大学入学共通テストでの物理または生物の受験者と非受験者を区別している）や履修内容でレベル差の解消を図り、薬学専門科目への円滑な移行に配慮している（資料3 p52）。

自然科学の基礎から薬学専門科目まで着実に身につけることができるように、教養科目の履修とともに、1年次前期から専門科目として、薬学導入科目「薬学概論Ⅰ」（資料3 pS1）を設定し、薬学専門科目への動機づけを図っている。入学時にチューター教員（教授及び准教授、教員1名あたり学生6～10名）（資料4-1 p25、資料1 9）を割り振り、年2～3回のチューター会の開催や学生の履修相談などを実施する（3年次後期まで）。特に2020（令和2）年度以降、COVID-19の感染拡大により、休校やオンライン講義等が増え、学年内及び学生と教員間でのコミュニケーションが不足していた状況下では、チューター制度を活用して速やかな連絡手段の確保や情報共有を行ったことが、多くの面で非常に役立った。

2年次以降は、毎年4月に学年毎の学部ガイダンスを実施している（多くが実務実習中である5年次学生は除く）（資料4-1 p74-p130、資料4-2 p7-p28）。4年次学生に対しては、このガイダンスにおいて、「薬学部実務実習に関するガイドライン」を踏まえた実務実習ガイダンスを実施している（資料4-1 p107-110）。

留年生や卒業延期者に対しては、チューター教員が3年次後期まで、履修相談などを実施する。成績下位者（各年度の前期または後期のGPAが1.5未満）には、チューター教員と面談し、個別学修指導を受けることを義務づけている（資料4-2 p4, p10）。3年次後期終了時点で事実上の留年が確定していても、再履修を要する科目が15単位未満の場合には教育的な配慮から研究室へ配属させ、配属研究室の教員が個別に履修指導を行う体制を取っている。再履修を要する科目が15単位以上の場合には研究室に配属されないため、教務FD委員長がチューター教員となって指導を継続的に行う。研究室配属後の卒業延期者については、配属研究室の指導教員が引き続き学修指導を担当する。

〔教育課程の実施に対する点検・評価〕

教育課程の実施において、薬学教育モデル・コアカリキュラムで示された知識を修得する項目を講義科目で、態度及び技能を修得する項目を実習科目で、問題解決能力や論理的思考の育成を演習科目として、段階的及び系統的に学修を積み上げていけるように配置されている。薬学研究は「卒業研究実習」（必修、4～6年次）として実施し、その成果を卒業研究発表会や卒業研究論文でまとめ、研究成果の医療や薬学における位置づけの考察などを評価している。実務実習は「薬学実務実習に関するガイドライン」を踏まえて、学生・実習施設・教員が密に連携しながら適切に実施されている。入学から卒業までの継続的な学生成長評価を実施している。以上より、【基準 3-2-1】に十分に適合している。

各科目の成績評価においては、学修到達目標の要素（知識・態度・技能）に適合する評価方法や基準が設定され、その内容等はシラバスに明記して周知されている。その方法や基準に従って、公正かつ厳格に成績評価が実施されており、その結果はポータルシステムを通じて、学生に通知される。以上より、【基準 3-2-2】に十分に適合している。

進級については、進級判定基準がシラバスに明記され、ガイダンス等で繰り返し周知されている。進級判定は、設定された基準に従って公正かつ厳格に行われている。以上より、【基準 3-2-3】に十分に適合している。

卒業認定については、その判定基準がシラバスに明記して周知されている。卒業認定は DP を鑑み、判定基準に従って適切な時期に公正かつ厳格に実施している。以上より、【基準 3-2-4】に十分に適合している。

履修指導については、カリキュラム全体については学年ガイダンス等を通じて、個別相談についてはチューター教員を通じて、実施している。以上より、【基準 3-2-5】に十分に適合している。

<優れた点>

1. 入学時に割り振られたチューター教員が、3年次後期まで、年2～3回のチューター会の開催や学生の履修相談などを実施している。

<改善を要する点>

1. 2年次以降では学年ごとの進級判定を実施していない。履修規定上は2年次進級後5年間経って卒業に必要な単位を修得できていない時点で原級留置（留年）となるが、最長12年で卒業できない場合は除籍となる。この場合、進路変更などを検討するにも年齢が理由で困難になる可能性も否定できない。

[改善計画]

1. 2023（令和5）年度入学生より、4年次の進級要件を導入する。これまでの留年者のほとんどが2～3年次の薬学専門科目の単位不足を理由としており、4年次以降に留年する学生はほぼいないため、4年次への進級要件を設定することが適切であるとの結論に達した。進級

要件としては、「卒業研究実習」を履修できる（すなわち、研究室配属できる）要件をそのまま活用するため、学生に大きな混乱は生じないと考えている。この制度により、入学後6年間経過しても4年次に進級できない場合は除籍となる。

<基準3-2についての評価>

1. 進級要件の改定を行い、2023年度入学生が4年次に進級する2025年度末の進級判定から実施予定である。

(3-3) 学修成果の評価

【基準 3-3-1】

学修成果の評価が、教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいて適切に行われていること。

注釈：学修成果は、教育課程の修了時に学生が身につけるべき資質・能力を意味する。

【観点 3-3-1-1】 学生が身につけるべき資質・能力が、教育課程の進行に対応して評価されていること。

注釈：評価に際しては、教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいて適切に評価計画（例えば教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいて設定したカリキュラムに則った教育の実施により、いつ、どのような方法で測定するかの計画）が策定されていることが望ましい。

【観点 3-3-1-2】 実務実習を履修するために必要な資質・能力が、薬学共用試験（CBT及びOSCE）を通じて確認されていること。

注釈：実務実習を行うために必要な資質・能力を修得していることが、薬学共用試験センターの提示した基準点に基づいて確認されていること。薬学共用試験（CBT及びOSCE）の実施時期、実施方法、合格者数及び合格基準が公表されていること。

【観点 3-3-1-3】 学修成果の評価結果が、教育課程の編成及び実施の改善・向上に活用されていること。

【現状】

DPに明記されているように、薬学科では、医療や科学の高度化に対応できる基礎学力と問題解決能力、国際化する社会で活躍できる能力を有し、薬剤師として必要な知識・技能と医療人としてふさわしい自覚・態度・倫理観を身につけ、人類の健康と福祉の発展に貢献できる人材を育成するという教育上の目的に鑑み、教養教育科目及び薬学専門科目を、①薬学についての基礎能力、②社会人としての基礎能力、③国際人としての基礎能力、④医療人としての基礎能力と態度に分類し、シラバスに明記している（資料3 p22）。また、シラバスには、各科目における学修到達目標（GIO 番号を付記）や成績評価基準、成績評価方法が記載されている（資料5）。

入学から卒業までの継続的な学生成長評価のため、1年次の「医薬看連携地域参加型学習」でポートフォリオに作成を指導し、3学部の担当教員が評価、フィードバックを行う。「医薬看連携地域参加型学習」では、学生相互のピア評価、チーム活動の自己評価を年間3回ほどWEBを利用して行い、教員による学生の形成的評価に活用している。また、そのポートフォリオを引き継ぐ形で2年次では「薬学概論Ⅱ」の実践として、学生が1年間の行動や学習についてポートフォリオを作成し、ポートフォリオの点検と評価をチューター担当教員が行うことで学生

の成長を確認し、指導に活かしている（資料18）。ポートフォリオは、その後4年次の実務実習事前学習、4～5年次の実務実習へと引き継がれ、学生の成長を確認し、卒業時に必要な資質・能力の判定にも活かされている。4年次までの学修評価として、薬学生が実務実習を行うために必要な知識が一定の基準に達しているかを客観的に評価する客観試験 CBT、実技を通して技能及び態度が一定の基準に到達しているかを客観的に評価する客観的臨床能力試験 OSCE を受験する。これらの薬学共用試験の合格が、薬学生が実務実習を行うための「質的保証」となる。6年次までの全体の学修の総括として、卒業研究発表と卒業論文の提出を行わせ、指導教員1名と評価教員2名が総合的に学修成果を評価する（資料20、資料35）。このとき、「研究成果の医療や薬学における位置づけの考察」を必ず評価することになっており、DPにある「薬剤師として必要な知識・技能と医療人としてふさわしい自覚・態度・倫理観」を意識したものになっている。【観点3-3-1-1】

「臨床薬学実務実習Ⅱ（病院実習）」と「臨床薬学実務実習Ⅲ（保険薬局実習）」の履修には、薬学共用試験センターの提示したOSCE合格基準（細目評価70%以上、概略評価合計5以上）及びCBT合格基準（正答率60%以上）を満たすことを要件とすることで、資格・能力を保証している。本学部における薬学共用試験の実施方法、実施日程、合格者数、合格基準は、本学部ホームページで公表している（資料53）。【観点3-3-1-2】

薬学共用試験合格状況（新制度開始以降、不合格者は2名のみで、ともに日本語を母国語としない者）、及び卒業認定状況（必要単位をおおむね満たした6年次学生の卒業率はおよそ95%）から判断すると、学修成果の評価結果に特段の問題はないと考えている。学修成果の評価結果に問題が生じた場合には、教務FD委員会において検証し、必要に応じて対応を取る体制が整っている。【観点3-3-1-3】

[学修成果の評価に対する点検・評価]

学修成果の評価として、ポートフォリオを活用し、入学から卒業までの継続的な学生成長を評価している点が評価できる。ポートフォリオには、1～3年次の教養・専門科目または学外活動、4年次の実務実習事前学習、5年次の実務実習などの記録が綴じられているため、継続的な学生の成長を確認し、6年卒業時に必要な資質・能力の判定にも活かされている。4年次までの学修評価としては、薬学共用試験（CBTとOSCE）の合格によって、薬学生が実務実習を行うための「質的保証」となる。6年次まで学修の総括として、卒業研究発表と卒業論文の提出を実施し、指導教員1名と評価教員2名が、「薬剤師として必要な知識・技能と医療人としてふさわしい自覚・態度・倫理観」を含めて、総合的に学修成果を評価する。以上より、基準【基準3-3-1】に十分に適合している。

<優れた点>

1. 1年生から6年生まで一貫したポートフォリオを用い、学年の進行に伴い多くの教員の参画によりシームレスに学修指導体制が構築されている。その成果として、薬学共用試験の合

格率はほぼ 100%、必要単位をおおむね満たした 6 年次学生の卒業率はおよそ 95%と、学修成果の評価も良好である

<改善を要する点>

1. 本学部ホームページで薬学共用試験の結果を掲載しているが、直近の結果のみのため、これまでの試験結果状況が不明である。

[改善計画]

1. 本学部ホームページにおいて、過去の全ての薬学共用試験の結果を掲載する予定である。

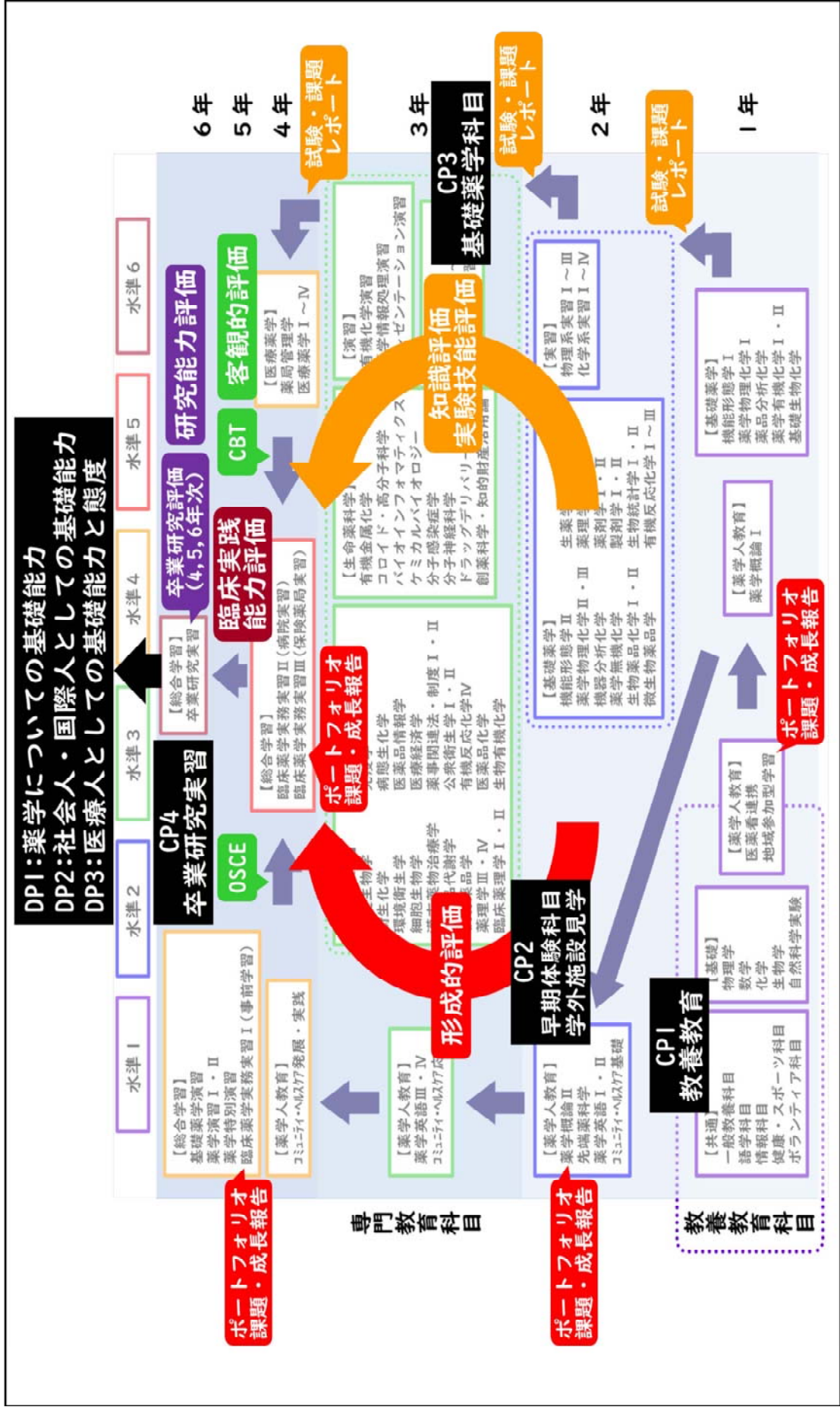
<基準 3-3 についての評価>

1. ホームページに、薬学共用試験の結果を掲載した。(2025 年確認済)

図 3-3-1-1 (次ページ)

各科目とカリキュラムポリシー (CP)、ディプロマポリシー (DP) との対応を示し、また、それらの科目の学修成果の評価法についての概略をまとめた。

(図 3-3-1-1) 学修成果の評価の概略



4 学生の受入れ

【基準 4-1】

入学者（編入学を含む）の資質・能力が、入学者の受入れに関する方針に基づいて適切に評価されていること。

【観点 4-1-1】入学者の評価と受入れの決定が、責任ある体制の下で適切に行われていること。

【観点 4-1-2】学力の3要素が、多面的・総合的に評価されていること。

注釈：「学力の3要素」とは、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を指す。

【観点 4-1-3】医療人を目指す者としての資質・能力を評価するための工夫がなされていること。

【観点 4-1-4】入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜の機会を提供していること。

注釈：「合理的な配慮」とは、障がいのある方が日常生活や社会生活で受けるさまざまな制限をもたらす原因となる社会的障壁を取り除くために、障がいのある方に対し、負担になり過ぎない範囲で、個別の状況に応じて行われる配慮を指す。

【観点 4-1-5】入学者の資質・能力について検証され、その結果に基づき必要に応じて入学者受入れの改善・向上等が図られていること。

注釈：学力の3要素に対応した試験方式の見直しのほか、入学後の進路変更指導等も含む。

【現状】

全学及び薬学部のアドミッション・ポリシー（AP）に基づいて、入学志願者の適性及び能力を適確かつ客観的に評価するため、入学者選抜は学長を委員長とする入学試験委員会の責任の下で実施されている（訪問時2 3-1 2022（令和4）年度名古屋市立大学入学試験委員会議事録）。その運営（分析や計画を含む）は、学長のもと、学長補佐（入試・高大接続担当）と学生課入試係が中心となって行われている（訪問時2 3-1 2022（令和4）年度名古屋市立大学入学試験委員会議事録）。薬学部の入学者選抜の分析と変更、あるいは法令や規定の改定への対応については、薬学部の人事制度検討委員会ですまず議論されて方向性が決められ、次いで、薬学部教授会で議論される。入学試験当日は、学長補佐（入試・高大接続担当）、学部長、入試委員、事務長、学生課長を試験実施本部員とする実施本部を設置し、学長から任命された教員が実際の業務を行う。実施にあたっては各種選抜の個別学力検査必携（訪問時2 3-2）と監督要領（訪問時2 4）を作成し、それらに基づいて実施している。【観点 4-1-1】。

薬学科の入学者選抜には、学校推薦型選抜 A（小論文と面接試験を本学で実施、調査書、高等学校長による推薦書、志願理由書との総合判断）、学校推薦型選抜 B（面接試験を本学で実施、大学入学共通テストの結果と調査書との総合判断）、私費外国人留学生選抜（日本留学試験、面接試験を本学で実施、TOEIC の成績との総合判断）、一般選抜（公立大学中期日程・大学入学共

通テストの結果との総合判断)の4種類があり、その募集定員は表4-1-1-1の通りである(資料8-1 p7、資料8-2 p12)。なお、この定員数は2021(令和3)年度入学生からのものである。2020(令和2)年度以前は、学校推薦型選抜A、一般選抜、私費外国人留学生選抜の定員は現在と同じだが、学校推薦型選抜Bの定員が10名(現在より5名少ない)、全募集定員が60名(現在より5名少ない)であった。

表4-1-1-1 薬学科の募集定員

選抜方法	学校推薦型選抜A	学校推薦型選抜B	私費外国人留学生選抜	一般選抜	合計
募集定員	6名	15名(名古屋市高大接続枠2名を含む)	若干名	44名	65名

入学試験問題作成にあたっては、年度最初薬学部教授会にて各試験種別及び各試験科目別に出题委員が決定され(訪問時1-1 1)、出题主任委員のもと問題作成・点検の打合せを行っている。薬学部の入試問題作成は、英語で人文社会学部教員のサポートを受けていることを除き、全てを薬学部教員が担当している。問題に不備がないこと、出题範囲や内容及び難易度等が適切なこと等について、他学部教員を含めた第三者の点検を受けている。問題作成・点検にあたっては問題作成・点検上の注意事項を項目化したチェックシート(訪問時2 5)により確認しながら作業を行っている。

各種入学者選抜の募集定員と選抜方法については事前に公表している(資料8-1～資料8-5)。学校推薦型選抜B、私費外国人留学生選抜、一般選抜については、選抜に用いる配点等を事前に公表している。学校推薦型選抜Aについては、各項目の配点は非公表である。入学者選抜における学力検査(小論文を含む)の採点は、氏名、受験番号が採点者に分からない状態で採点するシステムを採用している。採点された試験結果を一覧した匿名(受験番号、居住地、高校名、性別も消去)の可否判定資料を作成し、入学試験集計委員が点検した上で、入学者選考委員会において合格者案を作成し、薬学部教授会での審議・承認を経て、全学の入学試験委員会で決定している(訪問時1 2)。**【観点 4-1-1】**

入学者選抜に当たって、入学後の教育に求められる基礎学力を適確に評価するため、学校推薦型選抜Aにおいては、出願書類(調査書、高等学校長による推薦書、志願理由書)により学業成績及び薬学に対する意欲・適性等をみて第1段階選抜を実施している。その合格者に対して、小論文試験(訪問時1 0 令和5年度名古屋市立大学薬学部学校推薦型選抜A試験問題(薬学科)小論文)及び個別面接試験(訪問時1 0 令和5年度学校推薦型選抜試験A面接試験要領)を実施し、学力(知識、思考力、表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度等)や適性等を評価して入学者の選抜を行っている(資料8-3 p17)。小論文試験では、医療問題や薬剤師の役割や資質に関する問題が出題され、医療人を目指す者としての資質・能力を評価するための工夫となっている。**【観点 4-1-2】【観点 4-1-3】**

学校推薦型選抜 B においては、出願書類（調査書、高等学校長による推薦書）及び大学入学共通テストの成績による審査の結果を総合して第 1 段階選抜を実施している。その合格者に対して、令和 3 年度入試から個別面接試験（訪問時 10 令和 5 年度学校推薦型選抜試験 B 面接試験要領）を実施し、薬学部での学修に対する動機、表現力、医療や科学に貢献する意欲を評価したうえで、出願書類及び大学入学共通テストの成績を総合して入学者の選抜を行っている。これは、第 1 期薬学教育評価報告書の助言 12 にあった「推薦入試 A においては小論文と面接試験を行い、人物・意欲を重視して選抜しているが、他の入試制度においても、面接などにより医療人としての適性を評価する工夫が望ましい。」にも対応したものである。学校推薦型選抜 B の配点は、大学入学共通テストが 800 点（国語 100 点、数学 200 点、外国語 200 点、地理歴史/公民 100 点、理科 200 点）、出願書類及び個別面接試験の合計が 80 点である（資料 8-4 p30）。名古屋市高大接続枠とは、本学の設置団体である名古屋市の市立高校から推薦された志願者を優先的に 2 名まで合格とするものであり、選抜方法及び配点は学校推薦型選抜 B と同じである。名古屋市立高校在籍・卒業者は自動的に名古屋市高大接続枠に出願することとなり、もし名古屋市立高校在籍・卒業者が、通常の学校推薦型選抜 B の合格基準を満たしている場合は、通常の学校推薦型選抜 B の合格者となる（資料 8-4 p13, p30-p31）。すなわち、名古屋市立高校在籍・卒業者が不利になることはない。【観点 4-1-2】【観点 4-1-3】

いずれの学校推薦型選抜においても、出願資格に「調査書の全体の評定平均が 4.0 以上であり、将来、生命科学と医療科学を基礎として医療を支える重要な学問分野である薬学の研究・発展及び薬剤師職能の発展に対して貢献が期待できる能力及び適性等を有する人物として、学校長が責任をもって推薦する者」と示している（資料 8-3 p10、資料 8-4 p18）。志願者の日常を知る高校教員の個人評価をもとに、試験を通して将来の医療人としての適性及び学力を薬学部教員が評価している。面接試験では特に対話能力について重視している。なお、1 高校からの推薦人員に制限は設けていない（資料 8-3 p9、資料 8-4 p14）。【観点 4-1-2】【観点 4-1-3】

私費外国人留学生選抜においては、日本留学試験の成績によって第 1 段階選抜を実施している。その合格者に対して、本学で日本語での面接試験を行い、英語力をはかるために TOEIC の成績も加え、総合的に合否を判定している（資料 8-5 p18）。【観点 4-1-2】【観点 4-1-3】

一般選抜（公立大学中期日程）では、大学入学共通テストと個別学力検査によって、学力を重視して入学者を選抜している。その際の配点は、大学入学共通テストが国語 100 点、数学 100 点、外国語 100 点、地理歴史/公民 100 点、理科 100 点の計 500 点、個別学力検査が、数学 200 点、外国語 200 点、理科 200 点、計 600 点である（資料 8-2 p48）。個別学力検査では記述式問題により、知識だけでなく思考力や表現力も評価している（訪問時 10 令和 5 年度一般選抜入学試験問題）。【観点 4-1-2】【観点 4-1-3】

一般選抜においては、外国語試験及び理科の試験において、医療・医薬品・人体や環境に影響する化学物質などを題材とした設問がなされることが多い。この点は医療人をを目指す者を有利に評価する工夫の一つとも考えているが、医療人としての資質・能力を直接評価していると

は言えないかもしれない。しかし、受験者が 700 人前後になる本学薬学科の一般選抜（基礎資料 4）において、実効性ある面接試験を導入することは困難というのが、本学部教員の共通認識である。

本学では、薬学部を含むすべての学部の入学試験において、身体に障がいをもつ者が受験を希望する場合、適切な受験の機会を提供できるよう配慮する制度が整備されている。身体に障がいのある者が受験を希望する場合には事前に相談を行うよう学生募集要項に明記しており、受験を希望する者は、身体に障がいと合わせた受験の機会が得られるよう事前に相談することができる。これは、学校推薦型選抜試験、一般選抜試験、外国人を対象とした入学試験、いずれにおいても実施している。同時に、入学後を見据え、修学上の相談も行っている（資料 8-2 p14）。COVID-19 に罹患した志願者等については、追試験として、出願書類及び大学入学共通テストの成績による審査を行うことを、ホームページで公表している（資料 5 4）。【観点 4-1-4】

本学薬学科の過去 6 年間及び 2023（令和 5）年度の選抜試験結果は基礎資料 4 に示す通りである。志願者数、受験者数、合格者数、入学者数については本学ホームページで公表している（資料 5 5）。各年度の入試区分別と実質倍率（受験者数÷合格者数・私費外国人入試を除く）だけを抜粋して表 4-1-1-2 に示す。学校推薦型選抜 B においては、新たに面接試験を導入した 2021（令和 3）年度入試において 1.8 倍と低い倍率となったが、その他の年度及び選抜方法においては例外なく高い倍率を維持しており、AP に適合する学生を選抜できている可能性が高いと考えている。

表 4-1-1-2 薬学科の年度別及び選抜試験別の実質倍率

	学校推薦型選抜 A	学校推薦型選抜 B (高大接続枠を含む)	一般選抜
2017（平成 29）年度	6.4	5.2	8.7
2018（平成 30）年度	6.8	5.1	5.5
2019（平成 31）年度	6.9	4.5	5.1
2020（令和 2）年度	4.1	3.3	5.1
2021（令和 3）年度	7.0	1.8	6.1
2022（令和 4）年度	6.4	2.9	6.0
2023（令和 5）年度	9.1	3.8	6.3

入学者選抜が、学生の受け入れ方針に沿って公正かつ適切に実施されているかについては、薬学部入試委員会で検証を行い、全学の入試委員会へと報告している（資料 5 6）。【観点 4-1-5】

入学直後（通常、全学オリエンテーションと同日）に、全入学者に対して、英語力調査（TOEIC L&R IP テスト）を実施している。一部の英語科目においては、この成績結果を熟度別クラス編

成に利用している。これ以外に、2019（平成 31）年度入学生までは、入学直後にプレースメントテスト（数学、化学、物理、生物の基本的な問題）を実施し、入学者の学力及び知識を調査していたが、2020（令和 2）年以降、COVID-19 感染拡大のために入学者を長時間一堂で拘束することができなくなったので、実施していない。今後の各種規制の変更及び関係各署からの指導を考慮して、プレースメントテスト等の実施を検討する。【観点 4-1-5】

本学薬学科の退学率は近年 10%前後で推移している（基礎資料 3-2、基礎資料 3-3、表 4-1-5-1）。学校推薦型選抜での入学者の退学者は 2017（平成 29）年度以降は皆無であり、退学者は全て一般選抜での入学者である。本学または薬学部での積極的な学業の修得を希望しない合格者には入学を辞退してもらうことが、退学者数減につながり、かつ、本学への入学を希望する受験者の入学につながる。このため、入学手続き時に、履修規定抜粋を読み、同意したという誓約書（資料 5 7 p3）を提出させている。また、再受験目的など復学を前提としない休学を認めないこと、及び、登校できない明確な事情がない休学は認めないことも、周知している（資料 5 7 p1）。入学後には、学生が不十分な知識に基づいて進路変更することを避けるため、チューター教員（資料 4-1 p25、資料 1 9）や学生生活委員が進路相談にも応じている。これにより再受験を見送り、卒業後に大学院への進学を選択したケースも見られる。これらの取り組みにより退学者の割合はかつてより低下したが、入学時の定員超過率が 5%以内にするように文部科学省から指導されていることを考慮すると、退学率も現在より半減して 5%以内にするのが望ましいと考えている。

本学部では近年（実際には 2012（平成 24）年度以降）、学校推薦型選抜 A 及び学校推薦型選抜 B において募集定員を上回る数の合格者数を出す一方、一般選抜者の当初合格者数を少なめにし、必要であれば追加合格を出している（資料 5 5）。その理由として、学校推薦型選抜での入学者には退学者はほとんどいない（2006（平成 18）年の新制度以降、薬学科では学校推薦型選抜 A の退学者は 2 名のみ（128 名中）、学校推薦型選抜 B の退学者は 0 名（193 名中）こと、平均すると学校推薦型選抜での入学者のほうが学業成績も良いこと（表 4-1-5-2）、薬剤師国家試験合格率も高い傾向にあること（表 4-1-5-3）、である。なお「学業成績」をいつどのように判定するかについては多様な考え方があるが、表 4-1-5-2 では研究室配属（3 年次終了）時の GPA を用いた。また、薬学科の三つの方針に示すように、学業成績（GPA）の向上だけが本学の目指す人材育成ではないことも念のため申し添える。これらのデータに基づいて 2021（令和 3）年度から学校推薦型選抜 B の入学定員を 10 名から 15 名増員した。今後も、定期的に学生の成績、薬剤師国家試験結果、就職状況を分析し、必要であれば入試の方法や各入試区分の定員を見直していく。【観点 4-1-5】

表 4-1-5-1 入学年度別の退学率

(2018 (平成 30) 年度以降の入学生については未確定)

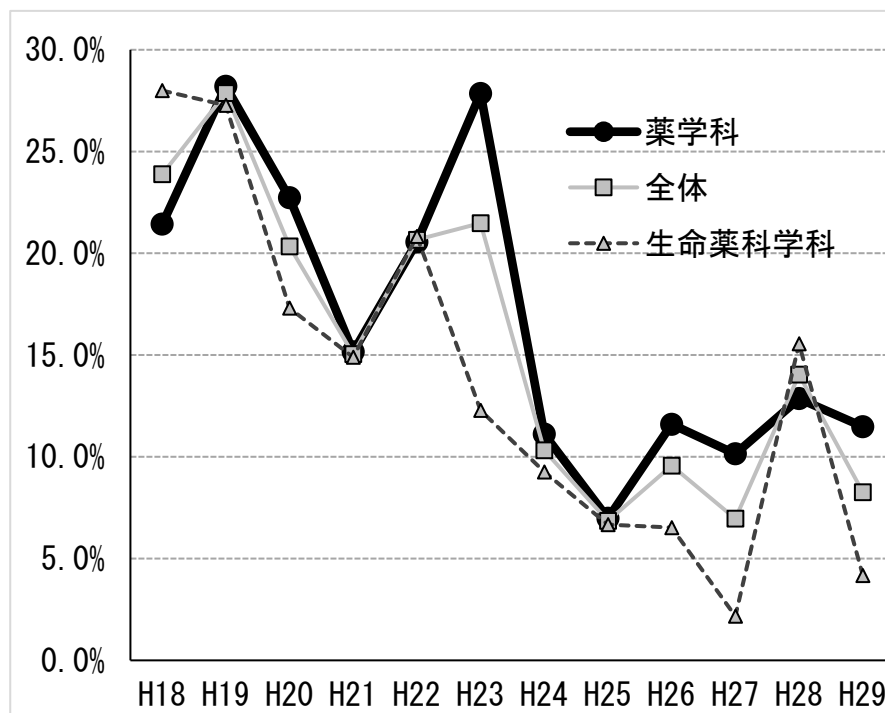


表 4-1-5-2 入学区分・入学年度別の、研究室配属 (3 年次終了) 時の GPA

	学校推薦型 選抜 A 入学者		学校推薦型 選抜 B 入学者		一般選抜 入学者	
	平均		平均		平均	
2019 (平成 31) 年配属	平均	2.73	平均	2.67	平均	2.54
	最高	3.52	最高	3.75	最高	3.80
	最低	1.88	最低	1.65	最低	1.24
2020 (令和 2) 年配属	平均	2.92	平均	2.97	平均	2.90
	最高	3.67	最高	3.77	最高	3.80
	最低	2.02	最低	2.11	最低	1.48
2021 (令和 3) 年配属	平均	3.15	平均	2.86	平均	2.64
	最高	3.57	最高	3.72	最高	3.55
	最低	2.28	最低	2.18	最低	1.33
2022 (令和 4) 年配属	平均	3.15	平均	3.10	平均	2.82
	最高	3.65	最高	3.68	最高	3.87
	最低	2.33	最低	2.05	最低	1.64
2023 (令和 5) 年配属	平均	3.01	平均	2.87	平均	2.86
	最高	3.68	最高	3.74	最高	3.61
	最低	2.44	最低	2.17	最低	1.33

表 4-1-5-3 入試区分別の薬剤師国家試験不合格者数と割合（新卒時のみ）

国家試験年度	新卒受験者 合計		学校推薦型 選抜 A 入学者		学校推薦型 選抜 B 入学者		一般選抜 入学者		私費外国人 選抜入学者	
	受験者 数	不合格 者数	受験者 数	不合格 者数	受験者 数	不合格 者数	受験 者数	不合 格者 数	受験 者数	不合 格者 数
2019 年	80	6	7	1	13	0	59	5	1	0
2020 年	62	7	9	1	14	1	38	4	1	1
2021 年	64	7	8	2	12	0	44	5	0	0
2022 年	60	14	8	0	13	3	37	9	2	2
2023 年	56	3	8	1	13	0	35	2	0	0
合計	322	37	40	5	65	4	213	25	4	3
不合格 者割合	11.5%		12.5%		6.2%		11.7%		75.0%	

【基準 4-2】

入学者数が入学定員数と乖離していないこと。

【観点 4-2-1】最近6年間の入学者数が入学定員数を大きく上回っていないこと。

【観点 4-2-2】入学者数の適切性について検証が行われ、必要に応じて改善が図られていること。

[現状]

最近6年間の薬学科の募集定員数及び入学者数は、基礎資料3-4に示す通りであり、過去6年間の充足率は最高でも1.10倍、平均では1.04倍であり、ほぼ募集定員に近い数である。

【観点 4-2-1】

入学者数の決定にあたっては、まず事前に、全学の入試委員会において「入学予定者数」が決定される。毎年、入学後に進路変更するため退学する学生が少数ながら存在するため、募集定員数より数名多い「入学予定者数」を設定している。「入学予定者数」は、過去の傾向などを鑑みて、薬学部教授会及び全学入試委員会で議論の上決定されるが、近年は+1名～+3名の間に設定されている（訪問時1-1 2 令和4年度第5回薬学部教授会）。学校推薦型選抜では、合格者の全員が入学手続きを行い、退学者もほぼ皆無であり、かつ、個別面接試験により医療人としての資質・能力を評価できていることから、許容される範囲内で募集定員数より多い合格者を決定している。一般選抜試験の合格者数決定にあたっては、上記の「入学予定者数」から、学校推薦型選抜の合格者及び私費外国人選抜の合格者のうち入学手続きを終えたものの数を差し引いた数の入学手続き者数になるように、データに基づいて薬学部入試委員会及び薬学部教授会にて議論を行っている。入学手続き者が予定より少ない場合には追加合格の手続きが行われる。【観点 4-2-1】

入学者数の適切性は、年度最初の薬学部教授会（訪問時1-1 1）にて確認され、全学の入試委員会でも検証されている。前項に記載したように、本学では主に一般選抜での入学者から、退学者が毎年数名程度いる。結果的に、今後数年は卒業生数が定員数を下回ることが見込まれている（基礎資料3-1）。これが望ましい状態とは言い難いが、募集定員を大きく上回る入学者数を設定することは文部科学省の通達に従ってできないので、退学者数を減らすことが重要となる。現状では、卒業生数が定員数の90%を越えていることから、入学者数の適切性という点では大きな問題はないと考えている。【観点 4-2-2】

[学生の受入れに対する点検・評価]

入学者選抜の運営については、本学部入試委員会及び全学入試委員会で十分に検討されている。試験問題の作成、実施要領の作成、採点については、あらかじめ決められた委員が、複数人によって複数機会、チェックリストを用いて確認している。合格者数の決定については、本学部教授会にてこれを審議し、原案を作成後、全学入試委員会による承認、学長の決裁を経て

決定されている。

入学者選抜の実施に当たっては、大学入学共通テストと小論文試験と一般選抜学力検査によって学力3要素のうち「知識・技能」に該当する基礎学力を判定し、志望理由書・面接・小論文によって医療人としての適性及及び学力の3要素のうち「思考力・判断力・表現力」及び「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価している。受験上または修学上特別な配慮を必要とする入学志願者については、全学的な相談体制に基づいて、必要な配慮を実施している。入学者の資質と能力については、薬学部入試委員会と教務FD委員会が連携し、チューターからの意見なども参考に追跡・分析を行っている。以上より、【基準4-1】に十分に適合している。

過去6年間の入学者数は定員比で104%であり、適正な数である。入学者数の適切性は、薬学部教授会及び入試委員会で確認・検証されている。以上より、【基準4-2】に適合している。

<優れた点>

1. 全ての入試区分において高い入試倍率を維持しており、高い学力をもった学生が入学している。学校推薦型選抜においては、APに適合する人物を実質的な選抜を経て入学者を決定しており、その入学後の成績も良い。
2. 一般選抜においては、過去のデータに基づいて合格者数を決定し、大きく定員超過することがないように運営している。

<改善を要する点>

特になし。

[改善計画]

特になし。

<基準4についての評価>

特に変更はない。2024年度の入試倍率は過去数年間と比較して同程度であった。

5 教員組織・職員組織

【基準 5-1】

教育研究上の目的に沿った教育研究活動の実施に必要な教員組織が整備されていること。

【観点 5-1-1】 教育研究活動の実施に必要な教員組織の編成方針を定めていること。

【観点 5-1-2】 専任教員数については法令に定められている数以上であること。また、教授、准教授、講師、助教の人数比率及び年齢構成が適切であること。

注釈：教授は大学設置基準に定める専任教員数の半数以上

【観点 5-1-3】 1名の専任教員に対して学生数が10名以内であることが望ましい。

【観点 5-1-4】 専門分野について、教育上及び研究上の優れた実績を有する者、又は優れた知識・経験及び高度の技術・技能を有する者のいずれかに該当し、かつ、その担当する専門分野に関する教育上の指導能力と高い見識があると認められる者が、専任教員として配置されていること。

【観点 5-1-5】 カリキュラムにおいて重要と位置付けた科目には、原則として専任の教授又は准教授が配置されていること。

【観点 5-1-6】 教員の採用及び昇任が、適切な規程に基づいて行われていること。

【観点 5-1-7】 教育研究上の目的に沿った教育研究活動を継続するために、次世代を担う教員の養成に努めていること。

[現状]

名古屋市立大学薬学部は、2002（平成14）年4月1日に大学院部局化を行った。また、教員の人事を柔軟かつ円滑に進めるため、2020（令和2）年から大講座制をとっている。大講座は4つあり、創薬科学（5分野：定員 教授4名、准教授4名、講師4名、助教1名）、生体分子薬学（6分野：定員 教授5名、准教授5名、講師5名、助教2名）、生命薬学（8分野：定員 教授8名、准教授7名、講師6名、助教2名）及び医療薬学（2分野：定員 教授3名、准教授1名、講師3名）である（資料5-8）。大講座内では、分野の枠にとらわれない柔軟な人事を行うことが可能であり、余裕がある分野から必要とする分野に補充できることから、教育研究活動の実施に必要な教員組織を編成することが可能となる。【観点 5-1-1】

大学設置基準の対象となる薬学科の専任教員は、教授15名（職位別比率は34.9%）、准教授8名（18.6%）、講師11名（25.6%）、助教9名（20.9%）の合計43名であり、設置基準の28名を満たしている。教授の比率がやや高く准教授の比率が低いが、極端な偏りではない。また、実務家教員の数は教授2名（職位別比率は40.0%）、准教授1名、講師2名の合計5名で、設置基準の4名を満たしている（基礎資料5）。なお、2023年5月にさらに実務家教員の教授1名（病院薬剤学分野）が着任予定である。

本学の専任教員の定年は65歳である。現在の年齢構成は、教授は60歳代が7名、50歳代が6名、

40歳代が2名である。准教授は、50歳代が4名、40歳代が4名である。専任講師は、40歳代が5名、30歳代が6名である。助教は、30歳代が7名、20歳代が2名である。以上を合計した全職種の年齢別では、60歳代が7名、50歳代が10名、40歳代が11名、30歳代が13名、20歳代が2名である。60歳代が多いが、定年後の新規採用で順次若い教員が採用されるため、著しい偏りとは思われない(基礎資料6)。**【観点 5-1-2】**。薬学科の在籍学生数は366名(基礎資料3-1)であるので、教員1名あたりの学生数は8.5名となり、10名以内である。**【観点 5-1-3】**

本学における教員(教授、准教授、講師及び助教)の選考は、「名古屋市立大学の教員の選考に関する規定」(訪問時26-1 名古屋市立大学の教員の選考に関する規定)に基づいて行われる。教員の採用は、まず欠員が生じた場合又は生じることが見込まれる場合に、本学部として欠員補充を行う旨、薬学部教授会の議を経て、その具体的方針(専門分野、定員の取扱い、選考方法等)を名古屋市立大学教員人事検討委員会に提出する(訪問時26-2 名古屋市立大学教員人事検討委員会運営要綱)。学長は教員人事検討委員会において欠員の補充を行うかどうかを決定し、補充を認める場合には、本学部の教授会にて教員の候補者選考を行うよう指示する。「名古屋市立大学教員の選考に関する規程」(訪問時26-1 名古屋市立大学の教員の選考に関する規定)には、各補職について選考基準が設けられており、全ての補職について、大学における教育を担当するにふさわしい能力が求められている。薬学部における教員の採用または昇任の選考は、「薬学研究科教授の採用選考審査内規」(訪問時27 薬学研究科教授の採用選考審査内規)、「薬学研究科准教授、講師、及び助教の採用選考審査内規」(訪問時28 薬学研究科准教授、講師、及び助教の採用選考審査内規)または、「薬学研究科臨床薬学分野の教員(臨床系教員)に係る採用及び昇任選考審査項目等に関する内規」(訪問時29 薬学研究科臨床薬学分野の教員(臨床系教員)に係る採用及び昇任選考審査項目等に関する内規)に基づいて行われる。これらの内規において、選考審査項目(研究業績、教育業績、大学の管理運営業績、社会貢献業績等)を定めている。これらの内規に従い採用あるいは昇任審査を行い、専門分野について、教育上及び研究上の優れた実績を有する者、又は優れた知識・経験及び高度の技術・技能を有する者のいずれかに該当し、かつ、その担当する専門分野に関する教育上の指導能力と高い見識があると認められる者を、専任教員として配置している。また、上記内規によって、選考委員会の成り立ち及び役割と選考審査手続を明確にしている。**【観点 5-1-6】**

教員が能力や実績を継続的に発揮しているかを検証する目的で、研究業績、教育業績、大学の管理運営業績、社会貢献業績等に関して毎年自己評価を行っている(項目2参照)。また、自己点検評価委員会にて教員評価表を作成し、研究科長による教員評価を実施し、理事長表彰候補者として推薦される。表彰者は、勤勉手当にその旨が反映される。さらに、教授においては任期制(7年)が設けられており、名古屋市立大学大学院薬学研究科任期制教員再任審査内規(訪問時30 名古屋市立大学大学院薬学研究科任期制教員再任審査内規)に明記されているように、任期満了の1年から10ヶ月前までに研究業績、教育業績、大学の管理運営業績、社会貢献業績等を対象とした再任審査を受ける。再任審査委員会は、研究科長(学部長)が任命する教授4名と准教授会が推薦する1名から構成される。なお、時限プロジェクト等によって特別に時

限雇用される者を除いて、本学部では常勤の准教授、講師、助教には任期は設定されていない（65歳定年）。

本学の教員は優れた教育実績と研究実績を有するものがほとんどであり、教員の90%以上が、毎年、原著論文の発表と学会発表を行っている（基礎資料9）。【観点 5-1-4】

本学薬学科では、薬学教育モデル・コアカリキュラムに準拠した専門教育科目をすべて必修科目としており、すべて専任の教授または准教授が配置されている（基礎資料7）【観点 5-1-5】。

教授選考においては、客観的な審査を行うために、選考委員会委員は教授のみによる委員会（人事制度検討委員会）の投票により選出された者6名に加え、外部委員として本学部以外の者（原則、教授またはそれ相当の職にあるもの）1名以上2名以内を加えて選考している。准教授、講師、助教の選考委員会委員は、研究科長、副研究科長、選考に係る分野の教授（独立准教授を含む）、及び、外部委員として本学部以外の者（原則、教授またはそれ相当の職にあるもの）1名により構成し、委員長は互選により選考している。教授及び助教の採用は必ず公募により行い、公募なしでの内部からの昇任は行われぬ。ただし、内部からの応募は可能であるため、選考の結果、内部から昇任することもある。また、准教授職及び講師職についても原則は公募によるが、内部からの昇任の場合も、公募に準じた基準で選考する。公募を実施する際には、選考委員会にて公募要項案を作成し、本学部の人事制度検討委員会で審議し、最終案を決定する。公募要項は、本学ホームページに掲載するとともに、必要に応じて全国の関係諸機関への配布、JREC-IN、UMIN、日本薬学会の雑誌「ファルマシア」等に公募記事掲載を実施している（資料5 9-1 公募要項例）。公募要項には、担当することになる講義や実習の科目名等と研究分野を明記しており、教育研究についての抱負や薬学教育全般についての展望について書類で提出することになっている。【観点 5-1-6】

教授の選考においては、選考委員会は応募者から提出された書類をまとめた応募者一覧表を作成する。人事制度検討委員会は応募者一覧表に基づき審議を行い、続いて、選考委員会が当該審議を踏まえてヒアリングの対象となる者（以下「ヒアリング対象者」）を決定する。人事制度検討委員会は、ヒアリング対象者に対するヒアリングの実施及びヒアリング内容に基づく審議を行い、選考委員会は、当該審議を踏まえてヒアリング対象者から2名以上を選考し、人事制度検討委員会に報告する。人事制度検討委員会は選考委員会の報告をもとに審議を行い、当該審議を踏まえて内規に規定する選考審査手続の結果を研究科教授会に報告する。研究科教授会は選考委員会の報告をもとに審議し、教員人事検討委員会に内申する者2名以上を決定する。【観点 5-1-6】

准教授の選考において選考委員会は、応募者の提出した書類により審査し、必要により面接を行い、候補者を2名以内選考する。選考委員会は、前項に規定する審査及び選考の結果を人事制度検討委員会に報告する。人事制度検討委員会は選考委員会の報告をもとに審議し、候補者1名を選考する。人事制度検討委員会は、審査及び選考の結果を研究科教授会に報告し、研究科教授会は、当該報告をもとに教員人事検討委員会に内申する者を審議及び決定する。【観

点 5-1-6】

講師、助教の選考において選考委員会は、応募者の提出した書類により審査を行い、候補者1名を選考し、その審査及び選考の結果を人事制度検討委員会に報告する。人事制度検討委員会は、選考委員会の報告をもとに審査を行い、選考する。人事制度検討委員会は、審査及び選考の結果を研究科教授会に報告し、研究科教授会は、当該報告をもとに教員人事検討委員会に内申する者を審議及び決定する。【観点 5-1-6】

薬学研究科で決定した内申候補者は、学長の下に開かれる委員会（教員人事検討委員会）の議を経て適任者が決定され、学長が承認することで新教員の採用となる。また、名古屋市立大学では男女共同参画を推進しており、業績と能力が同等なら女性を積極的に採用するとしている。【観点 5-1-6】

以上のように、本学部の人事制度検討委員会においては、どの補職の教員についても、規程に基づき、「大学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力」について審議し、研究業績に偏ることのない選考を行っている。また、専門分野の教員としての適性に十分注意を払って決定されるため、適切な教員配置がなされる。【観点 5-1-4】【観点 5-1-6】

本学部は、生命薬科学科の上に大学院として2年制の博士前期課程と3年制の博士後期課程を、薬学科の上に大学院として4年制の博士課程を設置し、次世代を担う教員の養成に努めている。さらに、大学院博士前期課程・博士後期課程及び博士課程の院生を研究補助業務従事者RA（Research Assistant）及び教育補助業務従事者TA（Teaching Assistant）として雇用する制度を有している（資料5 9-2、資料5 9-3）。これらは、学部や大学院教育におけるきめ細かい指導の実現のみならず、当該大学院生が将来教員や研究者になるためのトレーニングの機会を提供することを目的としている。特に、RA制度は研究支援体制の充実、強化を図り、若手研究者としての研究遂行能力を育成することを目的としている。また、この制度により一定の報酬を支給することで大学院生を経済的に支援し、学業及び研究により専念できる環境作りに寄与している。また、社会人大学院生の受け入れを積極的に行っている。実際、現在の本学部の教員のうち、2006（平成18）年の新薬学教育制度以降に本学の学部及び大学院を修了したものが6名おり、うち2名は病院薬剤師を本務として勤務しながら社会人大学院生として本学大学院博士課程を修了して学位を取得したものである。【観点 5-1-7】

【基準 5-2】

教育研究上の目的に沿った教育研究活動が、適切に行われていること。

【観点 5-2-1】 教員の活動が、最近5年間における教育研究上の業績等で示され、公表されていること。

【観点 5-2-2】 研究活動を行うための環境が整備されていること。

注釈：研究環境には、研究時間の確保、研究費の配分等が含まれる。

【観点 5-2-3】 教育研究活動の向上を図るための組織的な取組みが適切に行われていること。

注釈：組織的な取組みとは、組織・体制の整備、授業評価アンケート等に基づく授業改善、ファカルティ・ディベロップメント等が含まれる。

【観点 5-2-4】 薬剤師としての実務の経験を有する専任教員が、常に新しい医療に対応するために研鑽できる体制・制度の整備に努めていること。

【観点 5-2-5】 教育研究活動の実施に必要な職員組織（教員以外の組織）が整備されていること。

〔現状〕

教員の教育研究活動は、本学部自己点検・評価委員会により毎年度発行される薬学部自己点検・評価報告書（年報）としてまとめられている（資料15、資料16）。自己点検・評価報告書は一般に開示されており、2008（平成20）年度以降の報告書については、本学部ホームページで閲覧できる。【観点 5-2-1】

研究棟では、1研究室あたり原則約250 m²のスペース（教授室、実験室、セミナー室等を含む）が割り当てられている。さらに、競争的研究スペースとして、有料で研究スペースを拡張できる。また、共通機器室（3室）、遺伝子実験室、NMR室が研究棟に設けられている。これに加えて、研究棟とは別に、先端薬学研究・共同利用研究施設には、実験動物飼育施設、RI研究施設のほか、遺伝子実験室、培養室、大型共通機器（元素分析装置、質量分析装置、ESR、電子顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡、フローサイトメーター、セルソーターなど）を設置した実験室及びドライ研究を行うための医療情報解析室が設置されており、適切に整備されている。競争的外部資金等の獲得により機器の整備に努めているが、大学の予算削減のために、研究機器、特に大型（高額）の共通機器・研究設備の更新が十分行われず、陳腐化・老朽化が進んでいる機器類もある（資料60、資料61、基礎資料11-2）。【観点 5-2-2】

研究費は、運営費交付金から各研究室に、教員数、配属学生数に応じて、教員の研究費、大学院生の研究費、学生実習費として適切に配分されている。さらに、学長裁量経費による研究支援として、名古屋市立大学特別研究奨励費による学内公募制の研究支援制度もある（訪問時31 分野別予算配分額、資料62）。【観点 5-2-2】

各教員の授業担当時間数は、2022（令和4）年度は平均で74.8時間である。補職別では、教

授 99.56±51 (平均±標準偏差) 時間、准教授 73.69±40 時間、講師 69.45±58 時間、助教 31.29±23 時間であり、教員によって若干のばらつきはあるものの、適正な範囲と考えられる (基礎資料 7)。

外部資金の獲得は教育・研究体制の充実に不可欠である。2022 (令和 4) 年度はほぼ全教員が科学研究費や研究助成財団の助成金をはじめとする外部資金を獲得している (資料 6 3)。外部資金で最もウェイトを占めるのは、文部科学省及び日本学術振興会の科学研究費である。本学では、毎年「科研費セミナー」(資料 6 4) を行うとともに、原則として全教員が科研費に応募することとしている。さらに、科研費採択に向けて記載する際の要点などの説明会に加え、採択された申請書の記載例の提示や採択に向けた学内ピアレビュー (学内研究者による査読) を実施している (資料 6 5)。また、学内の特別研究奨励費として、基盤研究 A、B、S 等、1 ランク上に挑戦できやすくするため、これらの科目に不採択の場合に研究費を支援する制度や、研究領域を問わず、外部研究資金 (中央省庁、独立行政法人をはじめ、企業や地方自治体等からの研究費や財団からの助成金等) の獲得を目指す研究を支援する制度がある (資料 6 2)。

本学には、本格的な産学官金連携を推進していくため、産学官共創イノベーションセンターが創設されている。研究戦略企画の立案や大型研究費の獲得支援を行う「研究支援グループ」と知的財産の創出・管理・活用を行う「知財活用グループ」で組織されており、教員はそれらの支援を受けることができる。国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) や厚生労働科学研究費等の申請においては、申請書の作成など産学官共創イノベーションセンターの支援を受けることができる (資料 6 6)。これらの制度のバックアップにより、外部研究費獲得額は増加傾向にある (資料 6 7)。各種研究助成財団からの戦略的外部資金獲得のために、学部からの推薦件数が制限されている場合には、申請希望者の中から、採択可能性、申請内容、過去の申請状況等を勘案して、研究科長が推薦者を決定する。以上のように、外部資金獲得にむけて、全学及び学部で体制を整えている。【観点 5-2-2】

本学部では、全学組織である高等教育院の協力のもと、教務 FD 委員会が学部内のファカルティ・デベロップメント (FD) を行っている (表 5-2-3-1、資料 2 2)。教員業績評価は各教員が、教員業績書の点数を基に自らの評価を行うものである (資料 1 5)。これらの評価の取り組みは、教員の教育研究能力の向上に寄与するものである。【観点 5-2-3】

本学では、新任教員に対して新任教員研修会を行っている (資料 6 8)。本学部でも個別に新任教員研修会を実施し、これから学生の教育を行う上で知っておくべき情報を提供している (資料 6 9)。また、新任教員には、学習目標・学習方略・教育評価など、カリキュラムを作成する上で不可欠な内容を習得あるいは再確認してもらう目的で、薬学教育協議会東海地区調整機構が実施する「認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ in 東海」への参加も義務づけている (資料 7 0)。様々な環境・立場で働いている多くの薬剤師と研修時間を共有できることから、本ワークショップは、日頃接することの少ない臨床の現場の一端を、会話を通じて知るよい機会となっている。【観点 5-2-3】

授業アンケートは、授業形態によらず全ての授業科目で実施されている。アンケートでは自

己評価・成長実感アンケートとして 11 項目の個別評価を無記名で行うようになっており（資料 2 1）、結果は教育支援センターで集計され、各科目の主担当教員を通じて関係全教員に通知される。講義担当者には、集計結果及び自由記入欄に記された学生の意見をもとに、「授業改善計画」に該当する教員コメントを作成し、教育支援センター長宛に提出することが求められている。アンケート集計結果と教員コメントは学内限定で公開されている（訪問時 1 4 学生アンケートを踏まえた授業自己点検報告書）。【観点 5-2-3】

本学部には、薬剤師としての実務経験を有する 5 人の専任教員からなる臨床薬学教育研究センターが設置されている。また、病院薬剤学分野の教員（教授 1 名・2023年6月以降着任予定）は、名古屋市立大学病院薬剤部の薬剤師を兼任し、臨床現場と直結した研究により臨床薬剤師の育成を目指している。これらの専任教員を核として、2020（令和2）年度からは新たに病院助教を4名募集し、名古屋市立大学病院薬剤部で薬剤師としての実務と薬剤師教育にあたる人材育成にも力を入れ、新しい医療に対応するための研鑽の体制・制度の整備に努めている（資料 7 1）。【観点 5-2-4】

薬学部事務室組織としては、現在、事務長 1 名、係長 1 名、事務職員 7 名の 9 名体制となっており、うち 2 名が名古屋市からの派遣職員、3 名が法人固有職員、4 名が契約職員で構成されている。この他に研究支援を行う衛生技師が 2 名配置されており、計 11 名の事務支援組織がある。ただし、事務長は、キャンパスが異なる芸術工学部の事務長を兼任している（基礎資料 5）。係長は全体の業務を総括するとともに、中期目標・中期計画・年度計画や渉外等の業務を、係員は専門的観点から、庶務担当は会議、諸行事、自己点検・評価、公開講座、広報、労働安全衛生、RI 等の障害防止にかかる事務、情報公開等の業務を、会計担当は予算、決算、外部資金、給与等の支払、共済組合、資産・物品管理等の業務を、教務学生担当は人事事務、会議（学務関係）、教育課程、入試、履修手続、学籍、学位、学生支援、薬学共用試験、研究生等に関する支援業務を担当している。また、技術専門職員 2 名のうち 1 名は、共同研究施設にて質量分析を行い、1 名は NMR 室にて測定補助を行うなど、教員の研究、学生実習等の薬学部全体の教育・研究の支援を行っている。

教授会、研究科教授会、全国薬学部長会議、公立大学協会薬学部会等学内外の会議の日程調整及び準備の多くは事務室でなされ、事務職員は担当に応じて会議に出席して、それぞれの立場において事情の説明や意見の陳述を行い、薬学部の改善・資質向上に寄与している。また、議事要旨の作成及び会議内容の記録も行い、薬学部の全体の管理運営に参画している。

その一方で、事務としての資質の向上を図るために毎年、事務長が事務としての組織目標を設定し、また、それぞれの担当において各職員が個人目標を記入し、事務長に職務状況申告書として提出している。職務状況申告書については、個人目標の設定及び達成状況について各職員が、その内容を記入し、事務長に提出することとなっている。それに基づいて、事務長が個人と面談し、目標設定（4・5 月）、進捗確認（1 月）を行い、昇級、期末勤勉手当の加算等について査定し、また、助言を行っている（資料 7 2）。【観点 5-2-5】

[教員組織・職員組織に対する点検・評価]

教育研究活動の実施に必要な教員組織の編成方針により、柔軟な人事を行い、必要な教員組織を編成することが可能である。大学設置基準の対象となる薬学科の専任教員は43名であり、設置基準の28名を満たしている。教授、准教授、講師、助教の人数比率及び年齢構成も適切である。教員1名あたりの学生数は8.5名で、10名以内である。教員の採用及び昇任は、内規に従って実施し、指導能力と見識があると認められる者を配置している。教員が能力や実績を継続的に発揮しているかを検証する目的で、自己点検・評価を行っている。専門教育科目をすべて必修科目とし、全て専任の教授または准教授が配置されている。教員の採用は規程に則って行われており、適切な規程が整備されている。各補職について選考基準及び昇任の基準が設けられている。教務・FD委員会を設置し定期的な委員会活動を行っており、若手指導者の育成と経済的な支援を実施するなど若手の育成に努めている。以上より、【基準5-1】に十分に適合している。

教員の教育研究活動は、薬学部自己点検・評価報告書としてまとめられており、本学部ホームページで閲覧できる。研究施設と教育施設の充実が図られており、研究費の配分、各教員の授業担当時間数などは適切に行われている。外部資金も積極的に獲得しており、その支援体制も整っている。本学部に自己点検・評価委員会を設置し、年度ごとに教員業績評価を行うと共に、教務FD委員会を中心にFDを実施している。また、新任教員に対して新任教員研修会を行っている。さらに、教務FD委員会主催の研究授業を実施し、授業担当教員にフィードバックしている。ほぼ全科目について学生に授業アンケートを実施し、その集計結果と教員コメントは、学内限定で公開されている。病院薬剤学分野の教員が名古屋市立大学病院薬剤部の薬剤師を兼任し、臨床現場と直結した研究により臨床薬剤師の育成に寄与している。名古屋市立大学病院薬剤部で薬剤師としての実務と薬剤師教育にあたる人材育成にも力を入れ、新しい医療に対応するための研鑽の体制・制度の整備に努めている。学内外の会議の日程調整及び準備の多くは事務室でなされ、事務職員は担当に応じて会議に出席して、それぞれの立場において事情の説明や意見の陳述を行い、薬学部の改善・資質向上に寄与し、薬学部の全体の管理運営に参画している。以上より、【基準5-2】に十分に適合している。

<優れた点>

1. 教員の採用及び昇任を内規に従って公正・公平に実施しており、専門分野に関する指導能力・研究能力と高い見識があると認められる者を、専任教員として配置している。結果として、高い研究業績と多くの外部資金獲得につながっている。
2. 次世代を担う教員の養成に努め、教育研究活動の向上を図るための組織的な取り組みとしてFD活動を推進し、教員業績評価も行っている。

<改善を要する点>

1. 薬剤師としての実務経験を有する専任教員は基準を満たしているが、2024年度（令和6年

度)の入学生から導入される薬学教育モデル・コア・カリキュラムに対応するためには、薬剤師としての実務と薬剤師教育にあたる人材及び臨床現場と直結した研究による臨床薬剤師の更なる育成に努める必要がある。

2. 事務組織においては、事務長が芸術工学部の事務長と兼任となっているうえ、職員数も9名と少なく、職員及び教員の事務作業の負担増につながっている。

[改善計画]

1. 大学本部に対して教員増の要求を引き続き行うとともに、欠員活用や外部資金による特任教員の雇用による増員を図る。
2. 事務組織については、正規職員の増員を要求するとともに、臨時職員の雇用等で、職員や教員の事務負担の軽減を目指す。

<基準5についての評価>

1. 現時点では、教員増は実現していない。
2. 事務職員については、主事の増員があった。

(表5-2-3-1) 薬学部におけるファカルティ・ディベロップメント等の活動

活動の概要	開催日	参加者	根拠資料
<p>「研究授業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施期間中に5つの授業を対象として研究授業を行った。参加者からコメント(感想、改善提案)を提出してもらい、担当教員へフィードバックした。 ・参加者からは、授業手法について情報を得、考える機会として役立ったといった趣旨のコメントが多くあり、好評であった。担当教員へのフィードバックについても、具体的な改善提案等が多くあり、役立つものとみられた。参加者及び担当教員の双方にとって有益であったと思われる。 ・次年度以降も、同様に継続する方向で考えたい。なお、今回は講義科目のみを対象としたが、演習や実習も参加したいという要望があった。それらを含めて、対象とする授業種別の拡大を検討したい。 	2022年7月4日 ～7月15日	49名	資料22
<p>「薬学部FD公開授業(薬学生と災害医療を考える)」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1部 <ul style="list-style-type: none"> (1) 名古屋市の災害医療体制: 名古屋市の健康福祉局の専門家から名古屋市で地震などの災害が起こった場合の状況予想と避難についての基礎知識の講義を受講 (2) 災害医療と薬剤師の役割: 岡山大学の災害医療マネジメント学の渡邊先生から薬剤師の災害時の活動について専門的な講義を受講 ・第2部 <ul style="list-style-type: none"> 災害対応シミュレーション: VRを使った薬局内での地震体験、避難所でのシミュレーションゲーム、モバイルファーマシー見学 	2022年9月12日	12名	資料22
<p>「研究授業」</p> <p>後期のオンライン講義全てを対象科目とし、以下のように行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) Zoomで行われている講義を視聴する。 (2) 配付資料が必要そうな講義に関しては、担当の教員に前もって依頼する。 (3) 「参加票」に記入し、とりまとめ担当までメール添付で送付。複数講義に参加した場合は、その枚数を提出(1枚の用紙に複数講義の内容を書かない)。 (4) 参加票の意見の部分は、氏名を削除してまとめたものを講義担当教員に配布。 	2022年10月1日 ～1月18日	52名	—
<p>「研究授業」</p> <p>前期のオンライン講義全てを対象科目とし、以下のように行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) Zoomで行われている講義を視聴する。 (2) 配付資料が必要そうな講義に関しては、担当の教員に前もって依頼する。 (3) 「参加票」に記入し、とりまとめ担当までメール添付で送付。複数講義に参加した場合は、その枚数を提出(1枚の用紙に複数講義の内容を書かない)。 (4) 参加票の意見の部分は、氏名を削除してまとめたものを講義担当教員に配布。 	2022年6月1日 ～7月23日	41名	—

6 学生の支援

【基準 6-1】

修学支援体制が適切に整備されていること。

【観点 6-1-1】 学習・生活相談の体制が整備されていること。

【観点 6-1-2】 学生が主体的に進路を選択できるよう、必要な支援体制が整備されていること。

注釈：「支援体制」には、進路選択に関する支援組織や委員会の設置、就職相談会の開催等を含む。

【観点 6-1-3】 学生の意見を教育や学生生活に反映するための体制が整備されていること。

注釈：「反映するための体制」には、学生の意見を収集するための組織や委員会の設置、アンケート調査の実施等を含む。

【観点 6-1-4】 学生が安全かつ安心して学習に専念するための体制が整備されていること。

注釈：「学習に専念するための体制」には、実験・実習及び卒業研究等に必要な安全教育、各種保険（傷害保険、損害賠償保険等）に関する情報の収集・管理と学生に対する加入の指導、事故・災害の発生時や被害防止のためのマニュアルの整備と講習会の開催、学生及び教職員への周知、健康診断、予防接種等を含む。

【現状】

本学では、入学式に先立ち全新生に対して大学における学び及び教養教育についてのガイダンスが行われる（資料4-1 p1-p21）。続いて、薬学部生に対して、薬学教育全体についてのガイダンスが行われる（資料4-1 p22-p73、資料4-2 p1-p6）。在学生に対しては、年度の初めに各学年の履修ガイダンスが行われている（資料4-1 p74-p130、資料4-2 p7-p28）。研究室に所属していない1～3年生には、チューター教員が入学時から指定されている（資料4-1 p25、資料19）。チューターの名前と連絡先は、入学時に保護者にも周知されている（資料4-3 p6）。定期的（1年生に対しては4月、7月、12月頃、2、3年生に対しては5月及び11月頃）に、チューターと学生が会う「チューター会」が開催され、学生からの相談や質問に答えるとともに、適切な指導が行われる。「チューター会」で教員や他の学生と話すことで、大学や学部の施設や制度の問題点がクリアになることや、良い解決法が浮かび上がることもあり、非常に効果の高いものになっている。また、教員に相談しやすい雰囲気醸成にも役立っており、教員側が学生生活や教育内容の問題を把握することにも役立っている（訪問時32 チューター会報告集）。こころの不調を感じる・訴える学生については、全学の保健管理センターで臨床心理士によるカウンセリングを受けることや、精神科医に相談することができる（資料2 p67, p69）【観点 6-1-1】 【観点 6-1-3】

学生に対して各種の経済的支援制度を整えている。ここには、日本学生支援機構等の奨学金制度に関する相談・募集、授業料免除制度、給付型奨学金制度「名市大生スタート支援奨学金」

が含まれる（資料2 p25-p30）。日本学生支援機構奨学金は本学学生が最も多く利用する奨学金制度であり、入学時に学生に配布する学生生活の手引書である「学生のとびき」に詳しい説明と申込に関する情報を記載する（資料2 p25-p30）とともに、教育研究部学生課学生支援係が学生会館に設置した相談窓口で募集・応募に関する相談を受け付けており、情報提供窓口として機能している。また、新1年生には、名市大生みらい応援基金（寄附金）を財源とした給付型奨学金制度「名市大生スタート支援奨学金」（一時金）がある（資料7 3）。学生は、日本学生支援機構の奨学金以外にも、多くの民間等奨学金を利用することが可能であり、これらについても教育研究部学生課学生支援係の相談窓口で相談することができる。上述の「学生のとびき」には、具体的な民間等奨学金の例も明示されており、募集の都度、掲示板やホームページで告知することが記され、学生が参照できるようになっている（資料2 p25-p30）。また、学生の経済的支援の一環として、アルバイト等の紹介も行っており、学務情報システム（Live Campus）やアルバイト紹介システムを利用してアルバイトを希望する学生に情報を提供している（資料2 p30）。【観点 6-1-1】

本学では、「ハラスメント防止対策ガイドライン」（資料7 4）、「ハラスメントの防止対策に関する規程」（資料7 5）、「ハラスメント相談の流れ」（資料7 6）が設定され、ホームページで公開されている。本学部には、ハラスメント対策委員及びハラスメント相談員が設置されている。ハラスメント相談員は定期的に交代するが、必ず男女両方の教員が入るように配慮されている（資料7 7）。ホームページ、新入生ガイダンス、及び薬学部キャンパスでの生活が始まる2年生の最初のガイダンスにおいて、ハラスメント防止について説明され、周知されている（資料4-1 p23, p76）。ハラスメントあるいはその可能性に悩む学生は、ハラスメント相談員、チューター教員、あるいは学年担当指導教員のうち、相談しやすいと判断した教員に相談することが可能であり、更に教員に相談しにくいと感じたときは「保健室」も相談窓口として利用でき、ハラスメントで悩む学生に多様な相談体制を整えている。ガイダンスでもそのように指導されている。【観点 6-1-1】

学生のキャリア選択と就職に関する支援については、まず入学時に全学のガイダンスにおいて本学のキャリア支援システムについて説明し（資料2 p16, p31-36）、薬学部卒業生の進路と考え方について説明している（資料4-1 p56-61）。本学部にはキャリア支援委員会が設けられており、就職関連イベントを企画・運営するための会議が年2回程度開かれている。また、全学レベルでも学生のキャリア形成・就職活動を支援する組織としてキャリア支援センターが設置されている。活動状況報告のため、キャリア支援センター会議が年1回開催されている（資料7 8）。本学研究棟北棟2階に進路支援コーナーが設置されている。求人票や進路・就職活動関連の印刷物などが置かれ、自由に閲覧できるようになっている。【観点 6-1-2】

本学部では毎年、キャリア支援センターと連携して以下の就職関連イベントを実施している（資料7 9）。【観点 6-1-2】

- 1) 就職ガイダンス：人材情報サービス企業の担当者を招き、就職活動を行う上での心得などについて、指導を受けている。

- 2) キャリア支援講演会：医療・製薬・薬事行政等の各種医薬関連職種で活躍する卒業生（6名程度）による講演会を設けている。
- 3) 学内業界研究セミナー（キャリア支援センター主催）：薬局・病院・製薬企業など、各種医薬関連企業・団体の人事・現場担当者が一堂に会し、個別説明・相談を行っている。
- 4) OB・OG 就活セミナー：前年度に就職活動を行った学生や卒業生の有志が、自らの就職活動体験を現役の就職活動生に向けてアドバイスする。

キャリア支援センターは、ネット掲示システム『キャリア NAVI』を開設している（資料 80）。本システムに登録すると、本学に届いている求人情報、インターンシップ情報などに加え、就職活動に関するガイダンス、セミナーなどの行事日程に関する通知を受けることができる。本システムでは、卒業生の就活体験談も閲覧可能である。同センターには専門の産業カウンセラーが常駐しており、学生からの個別の相談を受け付けている。また、要望に応じて模擬面接なども実施している。近年、各企業からの依頼を受け、キャリア支援委員会ではインターンシップへの学生の推薦も行っている。【観点 6-1-2】

本学部は、薬学科と生命薬科学科という 2 学科制であり、受験時に一方を選択するという制度である。一般に、大学入学時点において、全ての学生が薬剤師やその他の職業について詳細な知識を持っていることは期待できず、生命薬科学科入学後に薬剤師免許取得を希望するようになった者、あるいはその逆に、薬学科入学後に薬剤師免許を必要としない進路を希望するようになった者が存在する。これらのような進路変更を希望するものに対しては、転学科の制度も設けている。転学科の規定や申請条件は履修要項に明示している（資料 3 p68-p69）。転学科は、一般選抜での入学者にのみ認めており、学校推薦型選抜における入学者には認めていない。このことは高校生向けパンフレットに明示している（資料 1 p30）。学校推薦型選抜での入学者に転学科を認めていない理由は、学校推薦型選抜においては、志望理由書、小論文試験、面接試験において、各学科特有の設問や採点基準を設定しており、その中には薬学科または生命薬科学科に特有の教育内容や進路に関わるものもあるからである。転学科の審査にあたっては、内規（訪問時 3 3 薬学部転学科内規）を整備し、転学科の可否を判断している。過去 6 年間の実績としては、薬学科から生命薬科学科へ 1 名（2020（令和 2）年度）、生命薬科学科から薬学科へ 2 名（2018（平成 30）年度と、2021（令和 3）年度に各 1 名）、転学科を認めた（訪問時 1-1 1 令和 4 年度第 1 回薬学部教授会、基礎資料 3-4、3-2）。【観点 6-1-2】

本学では、教養教育及び専門教育の授業科目において、学生が「自律的な学修者」となることを支援するため、また、授業科目レベルの学修成果に関して自己評価を行うため、「自己評価・成長実感アンケート」を実施している（一部を除く）（資料 2 1）。本アンケートが学生にとって、自らの学修活動を振り返るきっかけになるとともに、今後の学習やキャリア形成につながることを目指している。アンケートは、学務情報システムにて授業終了時の一定期間に実施し、集約した結果は担当教員にフィードバックするとともに、全学会議において統括を行っている（訪問時 1 4 学生アンケートを踏まえた授業自己点検報告書）。また、全学生を対象として年度当初のガイダンス時に大学満足度調査を実施している。設問は授業への各自の取組具

合から授業内容・学習施設に至るまで多岐にわたっており、4段階での評価を求めている。この結果は学内限定で公開され、学部はその分析と改善策の提示を行っている（資料8 1、訪問時3 4 大学満足度調査結果）【観点 6-1-3】

専門課程における基礎的な実習実験をおこなう科目である物理系・化学系・生物系及び医療系の実習を行う前に、実験・実習を行う際の安全について学習する機会を設けている。具体的には、実習科目の一部を充当して、実習実験における危険性と安全対策、安全に実験を行うための心構えと方策及び万が一事故等が起こってしまった場合の適切な対処などについて、講義を行っている。実習実験の実施体制としては、各科目において、約100人の学生に対して3～6名の教員と数名から10名程度の大学院生で対応している。【観点 6-1-4】

卒業研究等研究室における安全衛生については、各研究室で対応を行っているが、その整備状況を確認するとともに、実験・実習環境の啓蒙を行うことを目的として、全学的な組織として安全衛生委員会が設置されている。安全衛生委員会は定期的に大学全体の安全衛生について協議するとともに、それぞれの部局における安全衛生の整備状況について確認を行っている。本学部には事務職員・教員からなる担当委員がおり、毎年、各研究室及び関連施設において、安全が確保されているか、環境衛生が整えられているかを確認する目的で、本学部担当委員に加えて労働組合側教職員及び産業医とともに巡回視察を行っている。視察において、不適切な状況が発見された場合には、状況を指摘して改善を求め、改善状況を報告させ確認を行っている。これにより安全衛生について適切な環境を保つとともに啓蒙を行っている（資料8 2）。

【観点 6-1-4】

また、研究室内の空気中に含まれる有機溶剤や有害物質等の濃度を適宜専門業者に委託してチェックし、環境衛生状況を確認している。これにより、学生が安全に安心して卒業研究等に専念できる環境が保たれているかの確認が可能となっている。なお基本的な環境設備として、有機化学系の研究室を中心に室内の換気を十分に行える排風機（ドラフトチャンバー）を装備し、安全な空気環境を保っている。【観点 6-1-4】

基礎的な実習及び実務実習、さらに卒業研究等の研究室における実習・実験での事故等への補償対応として、全学生を、学生教育研究災害傷害保険に加入させ、さらにその内容等を学生に配布する「学生生活のてびき」で説明・周知し、学生に傷害保険等の必要性について認識させている（資料2 p71）。【観点 6-1-4】

実習中の事故に関しては、学生実習書中に事故等に対処するマニュアルを掲載している（資料8 3-1）。また、暴風雨警報発令時や南海トラフ地震にかかわる注意情報、予知情報発表時における授業等に関する対処法は、履修要項に記述されており、学生及び教職員が参照できるようにしている（資料3 p72-p73）。さらに、毎年、薬学部キャンパス内で防災訓練を行うことにより、教職員及び学生に災害発生時の対処方法を訓練させるとともに再確認する機会を与えている（資料8 3-2）。これらの災害等緊急時の対応マニュアルでは、教職員等の緊急連絡網と集合体制など緊急時における対応体制についても整備されている。また、集中講義「薬学部コミュニティヘルスケア基礎」の中で、薬学生と災害医療を考えるという特別講義を行った

(資料 8 3-3)。このほか、研究棟・実習棟においては、不慮の事故で有害物質を浴びたり、衣服に火が付いたりしたときのために、緊急用シャワーや洗眼器が整備され、これらについて基礎的実習開始時に説明しており、また、薬学部キャンパスにおいて、緊急地震速報を全館放送で利用できるように整備されている。加えて、AED(自動体外式除細動器)がキャンパス内各所に設置されており、教職員を対象とした BLS(一次救命処置)講習会も実施している(資料 8 3-4)。**【観点 6-1-4】**

本学では毎年 4 月上旬から 5 月頃に全学生を対象とした定期健康診断を実施しており、それぞれのキャンパスごとに健康診断を行うことで、学生が受診しやすい体制を整えている。定期健康診断の実施については、各年度最初の学部ガイダンス(資料 4-1 p17-p18, p62-63, p83-84, p97-98, p105, p126-127、資料 4-2 p6, p12, p18, p23, p28)、学年ごとに設けられた掲示板への掲示等により周知されている。また研究室に配属された後は、研究室への通知を通じて各学生に周知する体制が取られており、教員に対しても学生に健康診断を受診させるよう教授会等を通じて通知するほか、電子メール等の手段も用いて定期健康診断を受診するよう促しており、概ね良好な受診率となっているが、6 年生の受診率がやや低い(基礎資料 10)。本学部では、5 年生を対象として実務実習前に各種抗体検査を行っている。検査対象は、風疹、麻疹、水痘、ムンプス、B 型肝炎の抗体である。抗体価が不十分な学生に対してはワクチンによる予防接種を行わせている(基礎資料 10)。**【観点 6-1-4】**

[学生の支援に対する点検・評価]

学習指導においては、学年毎に学習内容にあわせたガイダンスと指導を行い、学修がスムーズに進められるよう体制を整備している。チューターとの懇談は、学生が教員を身近に感じられる環境作りに役立っている。またチューター制度は、大学生生活全般における学生の状況把握や疑問の解決、または大学や教育内容に生じた問題の早期把握に大きく役立っており、総合して、学生のニーズ把握が可能な体制を確保している。経済的支援については、奨学金・授業料減免などの制度を制定し、かつ学生の相談・応募窓口を一本化することにより学生の利便性を高めている。ハラスメント相談窓口も複数用意して相談者に配慮し、また制度を公開して透明性を高めている。障がい者支援についても、受験時に事前相談を行い、受験・学生生活に対応する体制を整え、入学試験要項に掲載・周知している。

学生の進路支援に関しては、全学組織としてのキャリア支援センターと学部独自のキャリア支援委員会が積極的に協力し、進路支援に関するイベント開催等を実施している。また薬学部では、卒業生による説明会や学生による就職活動体験談講演会など独自活動も行い、さらにインターンシップへの対応も積極的に行うことで、企業・病院・薬局・公的機関等との結びつきを強めている。また、転学科に伴う内規を整備し、入学後に薬剤師免許取得を希望するようになった者、あるいはその逆に、薬剤師免許を必要としない進路を希望するようになった者に対して、転学科の制度も設けている。

学生のニーズ把握と適切な対応については、チューターによる情報収集と個別対応に加え、

授業アンケートの実施と教員へのフィードバック、大学満足度調査の実施と対応などを実施している。

安全管理については、定期的な避難訓練の実施に加えて、実験等に関わる危険性の教育を行っている。毎年健康診断を実施し学生の健康管理を行っている。学生には入学時に教育研究災害傷害保険への加入を課すとともに、実務実習に際しては抗体検査・予防接種を義務としている。

以上より、本学の学生支援体制は【基準6-1】に十分に適合している。

<優れた点>

1. 入学時に指名され、卒業研究室配属の直前まで担当するチューター制度が良く機能しており、学生が教員を身近に感じられる環境を整備するとともに、学生からの相談や質問にタイムリーに答えられる。また、学生や教育内容が抱える問題にも早く気付くことができる。
2. 全学のキャリア支援センター及び薬学部のキャリア支援委員会が積極的に連携し、学生が進路選択するための情報を提示するとともに、企業・病院・薬局・公的機関等との結びつきを強めている。

<改善を要する点>

1. 健康診断について、良好な検診受診率であるが、6年生の受診率がやや低い。

[改善計画]

1. 6年生の健康診断受診率を改善するため、学年ガイダンスで健康管理の重要性を強調する。

<基準6についての評価>

1. 6年生の学年ガイダンスで確認を行った。
その結果、2024年度の6年生の受診率は、90.32%となった。

7 施設・設備

【基準 7-1】

教育研究上の目的に沿った教育研究活動の実施に必要な施設・設備が整備されていること。

注釈：施設・設備には、以下が含まれること。

教室（講義室、実験実習室、演習室等）、動物実験施設、薬用植物園、図書室・資料閲覧室・自習室（能動的学習が効果的に実施できる施設・設備であり、適切な利用時間の設定を含む）、臨床準備教育のための施設（模擬薬局等）・設備、薬学教育研究のための施設・設備、必要な図書・学習資料（電子ジャーナル等）等

【現状】

本学部は、1学年あたり定員65名の薬学科と定員50名の生命薬科学科から成り、両学科で共通する科目の授業は合同で行われている。授業科目は、大きく分けて「教養教育科目」と「薬学専門教育科目」がある。前者は本学の全ての学部生が1年次に受講し、滝子（山の畑）キャンパスにある教養教育棟で開講され、履修者数によって開講される教室が設定されるため、教室の規模と数は適正に調整されている（資料29 p27-28, p38-53）。

薬学専門教育科目では、1年次前期の授業は滝子（山の畑）キャンパスにある教養教育棟で開講され、「教養教育科目」と同様、履修者数によって開講される教室が設定され、教室の規模と数は適正に調整されている。1年次後期は、金曜日のみ宮田専治記念ホール（定員285名）、2年次は大講義室（同209名）、3年次前期は宮田専治記念ホール、後期は金曜日を除いて宮田専治記念ホール、金曜日は講義室1（同130名）で行われている。また、4年次は薬学科学生のみ講義科目があり、講義室5（同118名）で行われる（資料6）。以上のように、講義科目については、教室の規模と数は適正である。参加型学習として、少人数グループにおけるグループディスカッションを行うための定員16名の小部屋（OSCE室）が8室あり、3年次の基礎薬学演習（PBL）と4年次の実務実習事前学習で使用されている。このように、少人数教育用の教室も確保されている（基礎資料11-1）。

基礎実習のためには、物理・生物系実習室と化学系実習室（各定員120名）があり、物理系実習、生物系実習、医療機能系実習は前者で、化学系実習は後者で行われている。演習室としては、コンピューターを72台設置したCBT室があり、薬学情報処理演習とプレゼンテーション演習が行われている（基礎資料11-1）。また、上述のOSCE室では、基礎薬学演習が行われている。動物実験施設としては、共同研究棟の4階1フロア（970m²）が動物実験施設にあてられており、SPF環境、コンベンショナルな環境の両方で飼育・実験ができる設備を備えている。RI研究施設としては、共同研究棟の5階1フロア（970m²）がRI実験施設としてあてられており、放射性同位元素を使用する研究活動に利用されている。動物実験施設もRI実験施設も委託業者により管理・運営がなされている。薬用植物園（総面積3700m²、圃場面積800m²）は講

義棟に隣接して設置され、2年次に開講されている生薬学Ⅰの講義で利用している。以上のように、実習・演習、研究を行うための施設の規模と設備は適切である（基礎資料 11-1, 基礎資料 11-2）。

図書室・資料閲覧室・自習室として、講義棟 2 階に図書館施設（田辺通分館）が設置されている。なお、以下に述べることを含む図書館及び関連システムについては、新入生ガイダンスで説明されている。

田辺通分館は総面積 900m² で、閲覧室、全面開架式の積層書庫、114 席の閲覧席を備え、情報関連設備として利用者用端末を 16 台配置している。（資料 4-1 p64-69）これらは、蔵書検索、電子ジャーナルやデータベース利用、レポート作成等に活用されている。館内では無線 LAN が使用できる。また、席数 22 のグループ研究室も備えている（基礎資料 12、資料 8 4）。施設の規模の基準である面積値で参照される「国立学校建物基準積算面積表」（文部科学省）により算出すると、面積はやや不足しているものの電子ジャーナル整備を進めて書庫保存スペースの不足を補っており、適切な範囲といえる。閲覧席数については、大学設置基準では「十分な座席を備える」とし、数値を明示していないが、昭和 31 年当初は「最低の基準」として 5%が必要としている。また、「国立大学図書館改善要項」では、「収容定数の 10%ないし 20%を用意するようにつとめ」とある。現在の席数は収容定数の 16.2%に相当し、実際の利用状況も、試験期間以外は不足していないことから、ほぼ適切といえる（基礎資料 12）。

田辺通分館の図書所蔵数は、68,000 冊に達し、単一の学部・研究科の図書館としてはおおむね適切な所蔵数と考えられる（基礎資料 13）。田辺通分館では、薬学部の専門課程の学生及び教職員を対象とし、薬学、化学、医学、生物学、物理学関係の資料を収集している。図書の購入に当たっては、学生の希望を受け付けるほか、授業参考テキスト、教員の推薦、出版新刊情報により、多くの新刊図書を受け入れている。また、専門学術雑誌は電子ジャーナルをメインに印刷体も含め整備し、分館の枠を越えた全学的経費により電子ジャーナルやデータベースの整備により、分館規模を遙かに超えた研究情報を提供している（基礎資料 13、資料 8 5）。

自習室としては、グループ研究室（22 席）を自習室として利用できる（COVID-19 対策のためグループ研究室としての運用は休止、自習室へ転用）。また、閲覧席（114 席）も自習席と兼用としている。試験直前及び試験期間中は、不足するため、別途講義室を自習室として開放している。

田辺通分館の開館時間は、授業開講期の平日は 9 時から 21 時まで、土曜日は 9 時から 17 時までである。また、2013（平成 25）年度より期末試験期間直前の 2 週間は日曜日も開館している（COVID-19 対策で一時休止していたが、2023（令和 5）年 1 月より再開）。図書館で提供できない資料を入手するための相互利用サービスや、図書の購入希望は、従来からの来館申請に加え、インターネット上からのログイン認証による自宅からの申請も可能である（資料 8 5）。

本学の教養教育課程は滝子（山の畑）キャンパスで行われるため、基礎学習のための図書は山の畑分館が豊富に備えており、多くの学生がこれを利用している。山の畑分館における貸出回数（1 年生）の統計では、薬学部学生の利用が全体の 10%を占める（基礎資料 12）。

臨床準備教育のための施設としては、模擬薬局、模擬病室、無菌製剤室があり、模擬病室にはフィジカルアセスメントのシミュレータ（PHYSIKO、SCENARIO）も設置されている（基礎資料 11）。

薬学教育研究のための施設・設備としては、上述の施設・設備のほか、共同研究棟及び共通機器室には、NMR、LC/NMR/MS、LC/MS/MS、DNA シークエンサー、ハイコンテントイメージング装置、共焦点レーザー走査顕微鏡、電子顕微鏡、フローサイトメーター、マルチプレートリーダー、超遠心機、冷却遠心機、等の共用機器が設置され、機器の予約等は、Web 上でできるようになっているほか、全学の共用機器センターの一括管理のもと、薬学部以外の学部所有の共用機器も利用できるようになっている（資料 8 6）。

遺伝子組換え実験を行うための P2 実験室も設置されている。なお、P2 実験室は BSL2 実験室としても承認されており、病原微生物を扱うためのバイオセーフティレベルも満たしている（基礎資料 11-2）。また、卒業研究を行うために学生が配属される分野（研究室）においては、それぞれ研究を遂行するのに必要なスペース、機器や資料がそろっている（基礎資料 8、基礎資料 11-2）。

必要な図書・学習資料（電子ジャーナル等）は図書館（田辺通分館）及び各研究室にも設置されているほか、化学系の研究には必須の有料データベースである SciFinder も利用できるようになっている（基礎資料 1 3、資料 8 5）。

なお、COVID-19 の感染拡大に伴い、講義、講演、卒業研究発表などをリモートやハイブリッド形式で行うことが多くなった。Zoom 等を利用した遠隔講義、対面と遠隔のハイブリッド講義、録画講義の配信などができるよう、2021(令和 3)年 2 月にノート PC、Web カメラ、マイク付きヘッドフォン、デジタルビデオカメラ、三脚を新たに購入し、利便性を高めた。また、学生実習を行う実習室の換気を良くするため、2021(令和 3)年 4 月に、実習室の窓に網戸を新たに設置した。

【施設・設備に対する点検・評価】

教室は、教養教育については滝子キャンパスの講義室を、薬学キャンパスにおいては、宮田専治記念ホール、大講義室、講義室 1、講義室 5 を用いて行っており、教室の規模と数は適正である。また、実験実習室、演習室、参加型学習を行う教室が準備されている。動物実験施設、RI 実験施設、薬用植物園も適切に整備、管理されている。図書室には必要な図書や学習資料が揃えられており、図書室内に閲覧室、自習室（閲覧席、グループ研究室）、必要な図書・学習資料（電子ジャーナルやデータベースを含む）も設置されている。

臨床準備教育のための施設に関しては、模擬薬局、模擬病室、無菌製剤室があり、模擬病室にはフィジカルアセスメントのシミュレータも設置されている。

薬学教育研究のための施設としては、上述の共用施設に加え、共用の実験機器が豊富に利用でき、さらに各研究室においても教育や研究のためのスペースや実験設備、資料が設置されている。以上より、【基準 7-1】に十分に適合している。

<優れた点>

1. 卒業研究を行う研究室は、その学生数や保有機器数に応じて、居室や実験室として使える「競争的スペース」を追加保有することができ、配属学生の適切な教育・研究環境を提供している。
2. 共通の研究機器が充実しており、医学部や総合生命理学部にある共通機器を利用できる。本学の共通機器センターのホームページからそれら共通機器の情報や予約状況が Web 上で確認でき、機器の予約も容易に行うことができる。

<改善を要する点>

1. 共同研究棟の RI 実験施設と動物実験施設の老朽化が進んでいる。これまでも最低限必要な修理・改修は行ってきたが、近年の実験動物を用いた研究の発展や、今後予想される法令・規制の変化に対応した動物実験施設そのもののリニューアル及び拡張が望まれる。

[改善計画]

1. 動物実験施設の利用増大の一方で、放射性同位体を用いた研究の減少に伴い、RI 実験施設の利用が減少している。そこで、動物実験施設と RI 実験施設とを含めた共同研究棟全体の見直しを行い、リニューアルに必要な予算確保を行う。

<基準 7 についての評価>

1. アイソトープ施設は 2025 年度の廃止を決定して、代替として研究棟内に少量のアイソトープ使用実験を可能な部屋を整備することとし、その予算を確保した。

8 社会連携・社会貢献

【基準 8-1】

教育研究活動を通じて、社会と連携し、社会に貢献していること。

【観点 8-1-1】医療・薬学の発展及び薬剤師の資質・能力の向上に貢献していること。

注釈：地域の薬剤師会・病院薬剤師会・医師会等の関係団体、製薬企業等の産業界及び行政機関との連携、生涯学習プログラムの提供等を含む。

【観点 8-1-2】地域における保健衛生の保持・向上に貢献していること。

注釈：地域住民に対する公開講座の開催、健康イベントの支援活動等を含む。

【観点 8-1-3】医療及び薬学における国際交流の活性化に努めていること。

注釈：英文によるホームページの作成、大学間協定、留学生の受入、教職員・学生の海外研修等を含む。

〔現状〕

東海地区調整機構（資料 8 7、表3-2-1-1）を通して、東海地区の薬剤師会、病院薬剤師会、大学病院と円滑な関係を築き、研究や薬剤師研修、薬剤師活動などで連携している。東海地区の薬剤師会及び病院薬剤師会とは年 1 回の定期的な意見交換会を実施しており、特に愛知県薬剤師会には本学教員が常務理事として参加し貢献しているほか、多くの部会活動に貢献している。また、愛知県薬剤師会学術部会と連携し、現場薬剤師による臨床研究のサポートを行っている。さらに、愛知県薬剤師会による薬剤師の再就業支援の活動にも本学の教員や教材、施設を提供して貢献している（資料 8 8）。本学の臨床教員を中心に認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップや認定実務実習指導薬剤師アドバンスワークショップのタスクフォースや事務局も務めており、実務実習指導薬剤師の養成やスキル向上に貢献している（資料 8 9、資料 9 0）。【観点 8-1-1】

学内においては、医学部、看護学部と医療系学部連携チームを結成し、コミュニティヘルスケア卒前教育プログラムならびに大学院指導者養成プログラムを実施し地域医療に貢献できる人材育成に尽力している。産業界とは医薬品産業特論をはじめとする大学院講義などへの講師派遣等で協力を得ている。また学会活動・共同研究・受託研究などを通して教員は産業界との連携を保つ努力をしており、技術移転活動を経て産学の共同研究も行っている。受託研究契約件数は2021（令和3）年度に33件、2022（令和4）年度に26件、共同研究契約件数は2021（令和3）年度に39件、2022（令和4）年度に37件と、非常に活発に実施している（訪問時 3 5 2021（令和3）～2022（令和4）年度 受託研究契約及び共同研究契約一覧）。

医療界に関しては、地域の薬剤師の教育・再教育や、地域医療の問題を解決するためのハブとして機能している。例としては、薬剤師のためのスキルアップセミナーのアドバイザーをつとめたり（資料 9 1）、在宅支援に関する問題を話し合う会を主催したりしている（資料 9 2）。

さらに、名古屋市社会福祉協議会の依頼により、名古屋市緑区鳴子地区の高齢者サロン（土曜サロン）及び保健管理センター火曜サロンに本学部の学生を派遣し、高齢者への支援を行っている（資料93）。これは「コミュニティヘルスケア応用」の授業の一部も構成している。【観点 8-1-1】

本学部では「東海薬剤師生涯学習センター」を設置し、卒後教育の拠点として活動を実施している。「東海薬剤師生涯学習センター講座」は年9回の卒後研修を実施しており、うち4回は静岡県立大学薬学部との連携研修として実施している。薬学部同窓会「薬友会」による卒後教育講座は年間3日、計6回の講義を実施している（資料94）。【観点 8-1-1】

地方公共団体である名古屋市を設置母体とする本学は、地域からの要請に応じて、かつ、自ら積極的に、地域に対する貢献事業を以下の様に実施している。市民公開講座を毎年秋に開催し、例年およそ100名の市民に対して通常2名の教員が講師として講義を実施している（資料95）。各種疾患の予防と薬物治療についてわかりやすく解説し名古屋市民の健康維持に貢献している。これとは別に、本学薬用植物園の市民公開講座も年2回（春及び秋）実施しており、教員と学生による薬用植物の解説とガイドツアーで好評を博している（資料96）。毎年夏には、高校生を対象とした研究体験「大学丸ごと研究室体験」を実施しており、10名以上の教員が5～6講座の研究体験を高校生に提供し、薬学の知識・研究をわかりやすく解説している（資料97）。また、小中学生向けには名古屋市瑞穂区との連携で「夏休みの子供向け薬学教室」を実施し、薬の基礎知識や実験を毎年およそ50名の小中学生に対してわかりやすく解説し、早いうちから薬学に対する興味をもってもらおう努力をしている（資料98）。【観点 8-1-2】

COVID-19の世界的な大流行に際しては、名古屋市の大規模接種会場であるパロマ瑞穂スタジアムにおいてワクチンの集団接種が行われた。本学は、2021（令和3）年度には名古屋市の要請に基づき、本学部の教員も含めこの集団接種に全面的に協力した。薬剤師免許を有する者は注射剤の調製など、そうでないものは交通整理等に協力し、人的な貢献を行った（資料99）。また、2022（令和4）年度には、オミクロン株対応ワクチンの接種が本学看護学部棟内に設けられたことに伴い、本学部の教員も注射剤の調製などを行った（資料100）。【観点 8-1-2】

本学部では英文ホームページを開設し、世界に向けて情報発信している。英語版ホームページでは、特にアドミッション・ポリシーをはじめ、教育方針や教育目標、沿革、研究室一覧及び研究内容、国際交流に関する情報を紹介している（資料101）。また、英文パンフレットも作成し、ホームページ上で公開している（資料102）。

本学は、世界52大学と大学間交流協定を締結している（資料103）。薬学部と関係が深い提携先としては、名古屋市と姉妹都市であるロサンゼルス南カリフォルニア大学薬学部をはじめ、南京医科大学、瀋陽薬科大学、サント・トーマス大学（フィリピン）、黒竜江中医薬大学、ハジェテペ大学（トルコ）、天津中医薬大学、中国薬科大学、台北医学大学がある。また、学部間交流協定を締結している大学として、ミシガン大学薬学部、香港浸会大学中医薬学部、梨花女子大学薬学部、香港大学薬学部があり、それぞれ教員の相互訪問、学生の派遣と受け入れを実施し、研究と教育の両面において交流に力を入れている（資料104）。特に、COVID-19

流行下においては中断を余儀なくされているが、南カリフォルニア大学薬学部とは毎年学生の相互派遣を実施している。これは、南カリフォルニア大学において、薬学科5年次の学生10名程度が2週間程度の臨床研修に参加するものであり、教員ならびに学生間の交流に大きく寄与していた。また、瀋陽薬科大学からは、毎年、数名が本学での短期研修に、中国薬科大学からは、科学技術振興機構が主催するさくらサイエンスプログラムにより4名の学生が本学での短期研修に参加し、両大学の卒業生数名が本学の大学院に進学している。両大学とは、これまで合同薬学シンポジウムを開催してきており、2020(令和2)年に本学で開催予定であったが、COVID-19流行のために延期となっている。また、香港大学、サント・トマス大学からも、学生の短期研修を受け入れた。黒竜江中医薬大学からは2名の博士研究員を受け入れ、天津中医薬大学からは私費留学生1名、ハジェテペ大学からは国費留学生2名を大学院生として迎えている。台北医学大学へは、本学学部生が同大学薬剤部で短期研修を受けた。【観点 8-1-3】

【社会連携・社会貢献に対する点検・評価】

医学部、看護学部と医療系学部連携チームを結成し、地域医療に貢献できる人材育成に尽力するとともに、医療界とは特に大学病院、医学研究科との連携の中で情報の共有や活動の支援などを行っている。薬剤師会、病院薬剤師会、大学病院とも、東海臨床薬学教育連携センターや東海地区調整機構などの活動を通して円滑な関係を築き、研究や薬剤師研修、薬剤師活動などで連携するとともに、定期的な意見交換会を実施し、現場薬剤師による臨床研究のサポート、薬剤師の再就業支援活動に本学の教員や教材、施設を提供して貢献している。また、産業界とは大学院講義への講師派遣等で協力を得るとともに、教員の学会活動などを通して産業界との連携を保ち、技術移転活動を経て産学の共同研究も行っている。生涯学習プログラムに関しては、本学部「東海薬剤師生涯学習センター」による卒後研修、薬学部・薬学研究科同窓会「薬友会」による卒後教育講座を実施することで、薬剤師の資質の向上に貢献している。このように、薬剤師会、医師会、産業界等と連携し、医療・薬学の発展及び薬剤師の資質・能力の向上に貢献している【観点 8-1-1】。

地域住民の保健衛生への貢献については、市民公開講座、薬用植物園公開、高校生への研究体験の提供、小中学生向けの薬学教室などを実施している。さらに、COVID-19への対応として、名古屋市集団接種会場やオミクロン株対応ワクチン接種における人的貢献を行った。以上のように、地域住民の保健衛生の保持・向上に大きく貢献している【観点 8-1-2】。

国際交流の活性化に関しては、英文ホームページ及び英文パンフレットによる情報発信を行っている。また、世界52大学と交流協定を締結し、教員の相互訪問、学生の派遣と受け入れなど、研究と教育の両面において国際交流の活性化に努めている【観点 8-1-3】。

以上より本学部は教育研究活動を通じて社会と連携し、社会に大きく貢献していることから、【基準 8-1】に十分に適合している。

<優れた点>

1. 名古屋市を設置母体とする公立大学として、地域住民や学生・子供を対象にした事業を多く実施している。特に、地域の在宅医療及び薬剤師コミュニティにおける存在感は非常に大きい。
2. COVID-19 への対応として名古屋市集団接種会場やオミクロン株対応ワクチン接種における人的貢献を行うなど、地域住民の保健衛生の保持・向上に大きく貢献している。

<改善を要する点>

特になし。

[改善計画]

特になし。

<基準 8 についての評価>

引き続き、社会連携・国際化を推進していく。

第2部：目 次

- 1 博士学位取得者
- 2 修士学位取得者
- 3 講演会等(2024 年 1 月から 2024 年 12 月)
- 4 研究業績目録(2024 年 1 月から 2024 年 12 月)
 - 薬化学分野
 - 精密有機反応学分野
 - 薬品合成化学分野
 - 生体超分子システム解析学分野
 - コロイド・高分子物性学分野
 - 生命分子構造学分野
 - 分子生物薬学分野
 - 薬物送達学分野
 - 生薬学分野
 - 衛生化学分野
 - 遺伝情報学分野
 - 細胞分子薬効解析学分野
 - 病態生化学分野
 - 薬物動態制御学分野
 - 病態解析学分野
 - 細胞情報学分野
 - 神経薬理学分野
 - 医薬品安全性評価学分野
 - 病院薬剤学分野
 - 臨床薬学分野
- 5 科学研究費等補助金
- 6 新聞報道等(2024 年 1 月から 2024 年 12 月)
- 7 進路および就職状況
- 8 在籍者名簿

1 博士学位取得者

学位記 番号	博士の専攻 分野の名称	博士の学位を授与された者		博士課程の修了等の状況		博士論文名	授与 年月日	主査	副査 (指導教 員)	副査	副査	副査
		(ふりがな) 氏名	性 別	大学院名	研究科 (専攻)名							
甲第 421号	博士 (薬科学)	こう めいげつ 高 明月	女	名古屋市立 大学大学院	薬学研究科 創薬生命科学専攻	スプレードライ法を用いたアルブミン ナノコンポジット吸入粉末剤の開発	R6. 9. 25	山中 淳平	尾関 哲也	河野 弥生	保嶋 智也	
甲第 422号	博士 (薬学)	いなみ ちひろ 稲波 千尋	女	名古屋市立 大学大学院	薬学研究科 医療機能薬学専攻	広範囲脳活動解析に基づく痛みと精神 疾患の神経メカニズムの探索	R6. 9. 25	山村 壽男	糸 和彦	田中 正彦	中津海 洋一	
甲第 423号	博士 (薬科学)	らくだ もすたふあ RAGHDA MOUSTAFA ABDEL	女	名古屋市立 大学大学院	薬学研究科 創薬生命科学専攻	Optimization of attachment and culture of suspension- type human primary hepatocytes to be plateable- type for use as an in vitro pharmacokinetics model	R7. 3. 21	肥田 重明	岩尾 岳洋	尾関 哲也	保嶋 智也	
甲第 424号	博士 (薬学)	いずみ かずや 泉 和弥	男	名古屋市立 大学大学院	薬学研究科 医療機能薬学専攻	DNA メチル化を介した神経芽腫悪性 化のメカニズムとその治療に関する研 究	R7. 3. 21	岩尾 岳洋	青山 峰芳	井上 靖道	中津海 洋一	
甲第 425号	博士 (薬学)	さこだ りょうた 迫田 凌太	男	名古屋市立 大学大学院	薬学研究科 医療機能薬学専攻	ヒトにおける甘草誘発性偽アルドステ ロン症の個人差と glycyrrhizinic acid の薬物動態解析	R7. 3. 21	岩尾 岳洋	牧野 利明	井上 靖道	保嶋 智也	
甲第 426号	博士 (薬学)	ふじたみのり 藤田 みのり	女	名古屋市立 大学大学院	薬学研究科 医療機能薬学専攻	医薬領域での光材料応用を目指 した2次元コロイド結晶の構築	R7. 3. 21	平嶋 尚英	山中 淳平	梅澤 直樹	中川 秀彦	矢木 宏和
甲第 427号	博士 (薬学)	またけ いさむ 間竹 勇	男	名古屋市立 大学大学院	薬学研究科 医療機能薬学専攻	ヌクレオシドトランスポーターENT2 及 びENT3 に見い出された 尿酸トランスポーターとしての機能と 尿酸動態における役割	R7. 3. 21	牧野 利明	湯浅 博昭	山村 壽男	伊藤 佐生智	
甲第 428号	博士 (薬学)	ながみず まさや 長水 正也	男	名古屋市立 大学大学院	薬学研究科 医療機能薬学専攻	固定投与量の薬剤における体格あたり の投与量と有害事象および有効性の関 連	R7. 3. 21	青山 峰芳	館 知也	岩尾 岳洋	平嶋 尚英	

2 修士学位取得者

学位 番号	分野名	性 別	氏 名	論 文 題 目	日付	主査	副査	副査	副査
2383	神経薬理学	女	ASHRAFI AFRIDA	Role of Ca ²⁺ /calmodulin-dependent protein kinase II in the regulation of circadian rhythms in <i>Drosophila</i>	R6. 9. 25	条	牧野	山村	上島 (医)
2384	生薬学	女	XIN JINGXIAO	ヒトにおけるグリチルリチン酸代謝産物の薬理活性の比較	R6. 9. 25	牧野	河野 弥	保嶋	-
2385	神経薬理学	女	青野 萌子	"概日時計とドパミンによるショウジョウバエの	R7. 3. 25	条	川口	安部 (DS)	-
2386	病態解析学	男	天野 歩	転写因子 TFEB による MYCN 増幅神経芽腫悪性化抑制メカニズムの解明	R7. 3. 25	青山	岩尾	井上	-
2387	衛生化学	男	荒井 陽人	EBV に有効な遺伝子阻害の探索を目的としたスクリーニング研究	R7. 3. 25	肥田	青山	条	-
2388	薬化学	男	泉 遼	可視光駆動型光アフィニティラベル化剤の開発	R7. 3. 25	中川	梅澤	中津 海	-
2389	生薬学	男	伊藤 司	レンバチニブによるポドサイト障害に対する蓮肉の保護作用	R7. 3. 25	牧野	肥田	梅澤	-
2390	薬物送達学	男	上田 峻	多孔性 PLGA マイクロ粒子を用いた細胞外小胞の封入・徐放システムの開発	R7. 3. 25	尾関	湯浅	田中	-
2391	神経薬理学	男	江上 涼	マウスを用いた向精神薬の睡眠および活動リズムに及ぼす作用の検討	R7. 3. 25	条	伊藤	保嶋	-
2392	薬品合成化学	女	大瀧 真由	ヒカゲノカズラ科植物由来内生糸状菌 <i>Hypoxyylon</i> sp. LY94 より単離した新規ポリケチドの構造研究	R7. 3. 25	中村	中川	池田	-
2393	遺伝情報学	男	小川 慧真	RNA 結合タンパク質 LARP4-AKAP1 によるポリ A 鎖伸長を介した核コードミトコンドリア mRNA の翻訳制御	R7. 3. 25	星野	白根	服部	-
2394	薬化学	男	小澤 遼	UPS 活性検出を指向した人工蛍光性ユビキチン化基質の開発	R7. 3. 25	中川	梅澤	矢木 宏	-

2395	コロイド・高分子物性学	男	川瀬 健太	2次元コロイド結晶を用いたプラズモニックおよびフォトニック材料の研究	R7.3.25	山中	平嶋	尾関	-
2396	遺伝情報学	男	北野 智也	自然免疫システムを標的とした人工 mRNA の発現効率化	R7.3.25	星野	肥田	井上	-
2397	薬物動態制御学	男	北村 拓馬	HepG2 肝細胞モデルにおける担体介在性カプリン酸輸送の解析	R7.3.25	湯浅	岩尾	肥田	-
2398	臨床薬学	男	北村 瑞基	小腸-肝臓連結 Microphysiological system(MS-plate)の創薬研究への応用	R7.3.25	岩尾	湯浅	青山	-
2399	細胞分子薬効解析学	男	小井手 司	光遺伝学を用いた血管リモデリング形成メカニズムの解明	R7.3.25	山村	白根	富田	-
2400	神経薬理学	男	小塚 康平	概日リズム睡眠覚醒障害モデルマウスに対する Aripiprazole の効果の検討	R7.3.25	条	服部	田中	-
2401	病態解析学	女	近藤 リリ	次世代光感受性物質を用いた光線力学療法による抗腫瘍効果	R7.3.25	青山	中津海	伊藤	-
2402	衛生化学	女	榊原 悠	全身性自己免疫疾患における自己抗体の産生機構の解明	R7.3.25	肥田	岩尾	中津海	-
2403	遺伝情報学	男	志柿 暢彦	人工 mRNA 非翻訳領域間の塩基対形成による翻訳効率化技術の開発	R7.3.25	星野	山村	伊藤	-
2404	薬物動態制御学	女	澁谷 玲衣	MCT10 の尿酸輸送機能の解析	R7.3.25	湯浅	牧野	伊藤	-
2405	細胞分子薬効解析学	男	関根 大雅	パキシリンによるカルシウム活性化クロライド TMEM16A チャネルの抑制作用	R7.3.25	山村	条	大矢(医)	-
2406	薬物送達学	女	竹沢 香穂	経口投与による細胞外小胞の小腸デリバリーを目指した腸溶性ポリマー被覆剤の開発	R7.3.25	尾関	岩尾	保嶋	-
2407	コロイド・高分子物性学	女	竹本 満里菜	荷電コロイド粒子の交互積層による2次元ダイヤモンド結晶の構築	R7.3.25	山中	中川	田中	-

2408	コロイド・高分子物性学	女	田代 耀	金属酸化物基板を用いた2次元コロイド結晶の構築	R7.3.25	山中	尾関	矢木宏	-
2409	薬品合成化学	女	田畑 愛美	パーヒドロキシアサー[6]アレーンおよびパーヒドロキシアサー[6]キノンの合成と特性	R7.3.25	中村	梅澤	池田	-
2410	レギュラトリーサイエンス	男	出来 佑都	症例対照研究による新型コロナウイルス感染症罹患後症状の実態調査とリスク因子の探索	R7.3.25	中川	青山	糸	-
2411	衛生化学	女	戸川 果歩	アレルギー疾患に関与するシグナル伝達機構の解明と治療応用	R7.3.25	肥田	平嶋	井上	-
2412	病態生化学	女	徳永 柊	リン脂質フリッパーゼ欠損による小脳神経変性機構とその治療法開発に関する研究	R7.3.25	服部	白根	星野	-
2413	薬物送達学	男	十時 拓大	難水溶性薬物の鼻腔内溶解性と脳への薬物送達効率を高めるためのシクロデキストリン製剤の開発	R7.3.25	尾関	山中	坡下	-
2414	精密有機反応学	男	鳥山 剛	水中での自己集合プロセスの制御が可能な両親媒性分子を用いた発光性超分子集合体の構築	R7.3.25	梅澤	中川	尾関	-
2415	生薬学	女	能瀬 逸紀	半夏によるイガイガ発生とその修治による減弱のメカニズム	R7.3.25	牧野	山村	矢木宏	-
2416	細胞情報学	女	橋口 咲良	メチルトランスフェラーゼ SET8 による TGF- β シグナル伝達制御に関する研究	R7.3.25	井上	中津海	青山	-
2417	薬化学	男	平尾 景尚	Hydropersulfide の蛍光検出とラベル化の両立を志向したプローブの合成と機能評価	R7.3.25	中川	池田	肥田	-
2418	精密有機反応学	男	廣瀬 拓	可逆的共有結合を用いた p53/MDM2 タンパク質相互作用阻害ペプチドの創製	R7.3.25	梅澤	山中	池田	-
2419	細胞情報学	女	藤田 真衣	がん抑制遺伝子 p53 を活性化する新規化合物の作用解析	R7.3.25	井上	矢木宏	舘	-
2420	病態生化学	男	松村 悠己	神経細胞内におけるスフィンゴミエリンの局在の解明	R7.3.25	服部	井上	田中	-

2421	分子生物薬学	女	向江 風	小胞体・エンドリソソーム間膜接触部位における PDZD8-TMEM55B 複合体の機能解明	R7.3.25	白根	山村	星野	-
2422	薬物動態制御学	女	森本 遥香	ATP13A3 及び ATP13A4 の細胞膜ポリアミントランスポーターとしての機能特性	R7.3.25	湯浅	山村	坡下	-
2423	薬物送達学	女	山下 晶朱	2液混合型スプレーノズルを用いた脂質ナノ粒子含有マイクロ粒子のワンステップ調製	R7.3.25	尾関	平嶋	河野 弥	-
2424	細胞情報学	男	山中 翔悟	プロテアソーム阻害剤耐性に寄与するストレス応答性キナーゼ EIF2AKs の役割	R7.3.25	井上	星野	河野 孝	-

3 講演会等

(2024年1月から2024年12月)

開催日：2024年4月26日

講演会：第31回NCUライフサイエンスセミナー

講師：相馬 洋平 教授

所属：和歌山県立医科大学薬学部

演題：「人工触媒反応による神経変性疾患の治療を目指して」

担当：薬化学分野

開催日：2024年4月17日

講演会：特別講演会（大学院講義・創薬生命科学特別講義 I）

講師：教授 後藤佑樹

所属：京都大学・大学院理学研究科化学専攻・生物化学研究室

演題：人工翻訳+翻訳後骨格変換でペプチド薬剤候補をつくる

担当：精密有機反応学分野

開催日：2024年6月6日

講演会：特別講演会（訪日学者講演会）

講師：Prof. Gavin Chit Tsui

所属：The Chinese University of Hong Kong

演題：New Tools for Accessing Fluorinated Molecules

担当：精密有機反応学分野

開催日：2024年10月17日

講演会：特別講演会（大学院講義・センサーデバイス開発学特論）

講師：教授 神谷由紀子

所属：神戸薬科大学・生命分析化学研究室

演題：アミノ酸型人工核酸の核酸医薬品開発への応用

担当：精密有機反応学分野

開催日：2024年11月7日

講演会：特別講演会（大学院講義・センサーデバイス開発学特論）

講師：准教授（現・教授） 森 健

所属：九州大学・大学院工学研究院応用化学部門

演題：ヒト直交性酵素の探索と高感度診断

担当：精密有機反応学分野

開催日：2024年11月21日

講演会：特別講演会（大学院講義・センサーデバイス開発学特論）

講師：教授 村上 裕

所属：名古屋大学・大学院工学研究科生命分子工学専攻

演題：進化工学による人工抗体の創製と応用

担当：精密有機反応学分野

開催日：2024年5月29日

講演会：日本薬学会東海支部特別講演会

講師：中島 誠 教授

所属：熊本大学大学院生命科学研究部薬学系

演題：有機オキシド触媒を用いた不斉アルドール関連反応

担当：薬品合成化学分野

開催日：2024年12月19日

講演会：有機系合同セミナー

講師：太田 悠平 助教

所属：名古屋市立大学大学院薬学研究科

演題：CARM1 活性検出系の開発と HDAC によって活性化されるプロドラッグ基の検討

講師：大橋 栄作 助教

所属：名古屋市立大学大学院薬学研究科

演題：有機合成の限界に挑む：超複雑天然物パラウアミンの効率的合成法

担当：薬品合成化学分野

開催日：2024年12月9日

講演会：イノベーション創出に資する次世代研究者エンパワメントプログラム キャリアセミナー

講師：谷内 清人 博士

所属：第一三共バイオテック株式会社非常勤顧問（前代表取締役社長）

演題：私が製薬企業の業務経験から学んだこと - My Storytelling

場所：名古屋市立大学 薬学研究科 講義室 1

世話人：平嶋尚英

開催日：2024年1月22日～1月23日

研究会：第6回 ExCELLS シンポジウム

場所：岡崎コンファレンスセンター

世話人：村田和義、中江 健、海津一成、椎名伸之、渡部匡己、曾我部隆彰、加藤晃一

開催日：2024年1月31日～2月2日
研究会：2024 Korea-Japan Joint Meeting for Molecular Sciences
場 所：九州大学 病院キャンパス
世話人：Koichi Kato, Ji-JoonSong, Takayuki Uchihashi, Weontae Lee

開催日：2024年3月4日
講演会：第40回 ExCELLS セミナー
講 師：Prof. Mitsuhiro Ikura
所 属：Princess Margaret Cancer Centre,
University Health Network and Department of Medical Biophysics, University of
Toronto
演 題：Targeting the untargetable: RAS in cancer
がん標的タンパク質 RAS のメカニズムに迫る
場 所：生命創成探究センター 山手3号館 2F 西 大会議室
Zoom 配信によるハイブリッド開催
世話人：加藤晃一

開催日：2024年3月25日
講演会：第41回 ExCELLS セミナー
講 師：加納ふみ 准教授
所 属：東京工業大学 科学技術創成研究院 細胞制御工学研究センター
演 題：細胞デザイン・細胞編集に資するプラットフォーム解析技術：リシール細胞技術
と PLOM-CON 解析技術
場 所：生命創成探究センター 山手3号館 2F 西 大会議室
Zoom 配信によるハイブリッド開催
世話人：矢木宏和、加藤晃一

開催日：2024年12月3日
講演会：第44回 ExCELLS セミナー
講 師：Dr. Janet Kumita
所 属：MRC Career Development Award Fellow,
Dept. of Pharmacology, University of Cambridge
演 題：Designing tuneable synthetic biomolecular condensates to facilitate protein
degradation
場 所：生命創成探究センター 山手3号館 2F 西 大会議室
世話人：矢木真穂、加藤晃一

開催日：2024年11月29日
講演会：第47回 日本分子生物学会 シンポジウム
「やっぱり大事な TOR シグナリング ～複層的 TOR の包括的理解へ向けて～」
場 所：福岡国際会議場
世話人：谷川美頼、中津海洋一

開催日：2024年3月25日
講演会：第41回 ExCELLS セミナー

講 師：加納ふみ 准教授
所 属：東京工業大学 科学技術創成研究院 細胞制御工学研究センター
演 題：細胞デザイン・細胞編集に資するプラットフォーム解析技術：リシール細胞技術
と PLOM-CON 解析技術
場 所：生命創成探究センター 山手 3 号館 2F 西 大会議室
Zoom 配信によるハイブリッド開催
世話人：矢木宏和、加藤晃一

開催日：2024 年 6 月 22 日
研究会：第 27 回 比較グライコーム研究会
場 所：名古屋市立大学 名駅サテライト
世話人：矢木宏和

開催日：2024 年 7 月 23 日
研究会：多階層生命機能解析学セミナー 企業研究セミナー
テーマ：～すべての革新は患者さんのために～
中外製薬工業株式会社 生産技術研究部
場 所：名古屋市立大学薬学部 講義室 4
世話人：矢木宏和

開催日：2024 年 10 月 30 日
講演会：第 34 回 NCU Life Science Seminar
講 師：田村 康 教授
所 属：山形大学理学部理学科
演 題：異なるオルガネラ間が近接した領域，メンブレンコンタクトサイトの研究
場 所：名古屋市立大学 桜山キャンパス 医学研究棟 11 階 講義室 B
世話人：矢木宏和

開催日：2024 年 9 月 15-16 日
講演会：The 9th Nagoya, Gifu, Nanjing, Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences
担 当：国際交流委員会

開催日：2024 年 7 月 7 日
講演会：2024 年度薬友会関西支部講演会
講 師：山村 寿男
所 属：細胞分子薬効解析学
演 題：肺高血圧症という難病の新しい創薬を目指して

開催日：2024 年 9 月 19・20 日
講演会：第 2 回東海地区薬学系電気生理学研究会
講 師：富永 真琴 特任教授
所 属：名古屋市立大学・なごや先端研究開発センター

演 題：温度感受性 TRP チャンネルの構造と機能

担 当：細胞分子薬効解析学分野

開催日：2024 年 5 月 17 日

講演会：病態生化学キャリアセミナー

講 師：足立知也

所 属：大塚メディカルデバイス

演 題：製薬業界・製薬企業の現状と、若者の進路選択について

担 当：病態生化学分野

開催日：2024 年 8 月 9 日

講演会：病態生化学キャリアセミナー

講 師：田頭大志

所 属：CSL Vifor Pharma (スイス)

演 題：医薬品産業の最近の動向と、製薬会社でのキャリアパスについて

担 当：病態生化学分野

開催日：2024 年 2 月 3 日

講演会：令和 5 年度 レギュラトリーサイエンス分野教科担当教員会議

場 所：名古屋市立大学田辺通キャンパス 宮田ホール

世話人：頭金正博、安部賀央里

開催日：2024 年 2 月 4 日

講演会：2023 年度 薬剤師のためのスキルアップセミナー

「地域医療に貢献する新しい薬局活動を進めるために＜春日井市民病院と薬局とのオリジナルな連携体制を構築する＞患者に対して最善な生活提案・療養計画とは？」

場 所：春日井市総合保健医療センター

世話人：鈴木 匡、堀 英生

開催日：2024 年 2 月 12 日

講演会：臨床薬剤師のためのオンライン研修セミナーおよびワークショップ 症例解析から学ぶ薬物治療の実践 ～高血圧～（日本医療薬学会 2022 年度医療薬学学術第 2 小委員会主催）

場 所：Web 開催

世話人：館 知也

開催日：2024 年 9 月 29 日

講演会：薬剤師のためのスキルアップセミナー「薬局薬剤師が心不全患者の在宅医療を管理する」(名古屋市立大学 大学院薬学研究科 臨床薬学分野 主催)

場 所：名古屋市立大学田辺通キャンパス

世話人：舘 知也，堀 英生，齊藤 将之，鈴木 匡

開催日：2024年11月2日

講演会：第34回日本医療薬学会年会 シンポジウム「薬剤師を対象としたオンライン研修教育を効果的に実施する」

場 所：幕張メッセ

世話人：舘 知也，鈴木 匡

4 研究業績目録

(2024年1月から2024年12月)

【薬化学分野】

(原報)

Naoya Ieda, Mitsuyasu Kawaguchi, and Hidehiko Nakagawa.
Substituent Effects at the N-Nitrosoaminophenol Moiety of a Photoinduced-Electron-Transfer-Driven Nitric Oxide Releaser
Chem. Pharm. Bull., 71, 447-450 (2023).

< 中略 >

【臨床薬学分野】

(原報)

(学会発表)

横井杏菜, 吉永千裕, 水野正子, 水野紀子, 浅井治行, 山田葉子, 三宅宏季, 石川友康, 供田将志, 菊池千草, 堀 英生, 鈴木 匡.
薬局から他職種への在宅支援情報データ解析による薬剤師情報提供の有用性に関する考察.
日本薬学会第 143 年会, 2023 年 3 月 25-28 日 (札幌) .

5 科学研究費等補助金

科学研究費

研究種目	研究課題／ 領域番号	研究代表 者	職名 (採択 時)	期間開始 日	期間終了 日	6年度配分 額	研究課題名
学術変革 A	21H05259	中川秀彦	教授	20210401	20260331	10,500,000	超硫黄分子 in-cell ケミストリーの確立とその生命科学 研究への応用
学術変革 B	23H03838	矢木宏和	准教授	20230401	20260331	14,900,000	老化時計のリバイバル機構の解明に向けたマルチオミ クス解析法の開発と応用
基盤 B	23K21288(21H02406)	星野真一	教授	20210401	20250331	3,300,000	外来性ウイルス RNA を分解する生体防御機構の全容 解明
基盤 B	23K21358(21H02625)	矢木宏和	准教授	20210401	20250331	1,900,000	糖転移酵素の局在と基質タンパク質の選別輸送による 糖鎖修飾プログラムの解明
基盤 B	23K24049(21H02625)	山村壽男	教授	20210401	20250331	3,900,000	新規肺高血圧症治療薬を指向したイオンチャネル創薬
基盤 B	23K24050(22H02788)	松永民秀	特任教 授	20220401	20250331	4,600,000	腸と肝臓の臓器間相互作用(腸肝軸) in vitro モデルの 構築とその評価
基盤 B	22H02773	鈴木良明	講師	20220401	20260331	3,200,000	興奮転写連関による先駆細胞誘導を起点とした血管リ モデリング発症機構の解明
基盤 B	23K27303(23H02612)	中川秀彦	教授	20230401	20260331	5,100,000	PeT 機構に基づくケージド化合物の生命機能解析・疾 患治療研究への応用
基盤 B	23K27324(23H02633)	服部光治	教授	20230401	20260331	5,800,000	リーリン経路と細胞膜非対称性の破綻による疾患発症 の分子機構解明と、創薬標的の同定
基盤 B	24K02167	平嶋尚英	教授	20240401	20270331	4,300,000	半人工分泌細胞を用いた新規 DDS の開発と応用

基盤 B	"24K02197	井上靖道	教授	20240401	20270331	5,000,000	プロテアソーム阻害薬不応答性を誘導するストレス適応の分子機序解明と新規治療法開発
基盤 B	"24K02065	桑和彦	教授	20240401	20260331	6,100,000	ショウジョウバエのタンパク質リン酸化による睡眠制御機構
基盤 B	24K02198	保嶋智也	准教授	20240401	20270331	6,900,000	新規小胞膜局在型モノアミントランスポーターの機能解析と創薬標的としての有望性評価
基盤 B	24K02122	白根道子	教授	20240401	20270331	5,000,000	コレステロールエステルによる炎症と神経変性疾患の関連メカニズム
基盤 C	22K06532	梅澤直樹	教授	20220401	20250331	1,200,000	側鎖構造をもつ新規ポリアミン型オリゴマーの固相合成と標的核酸との選択的結合
基盤 C	22K07026	田中正彦	准教授	20220401	20250331	800,000	腸管グリア細胞は腸炎の新規治療標的となりうるか？
基盤 C	22K06505	川口充康	准教授	20220401	20250331	800,000	SIRT 脱ミリスチル化活性選択的阻害剤の開発と細胞機能の光操作
基盤 C	22K06680	寺坂和祥	講師	20220401	20250331	700,000	代謝改変を指向したアリストロキア酸生合成の鍵酵素の同定
基盤 C	22K07425	太田美里	研究員	20220401	20250331	1,100,000	大黄の修治による血流改善メカニズムの解明および漢方諸方への応用
基盤 C	23K04694	豊玉彰子	准教授	20230401	20260331	600,000	トレーサー粒子を用いた荷電コロイド構造体の相互作用ポテンシャルの可視化
基盤 C	23K04737	池内和忠	講師	20230401	20250331	652,268	独自のシクロペンタジエン誘導体を拠点とする斬新ノルボルナン化合物群の合成
基盤 C	23K05855	富田淳	准教授	20230401	20260331	1,400,000	ショウジョウバエにおける個体間相互作用による睡眠制御機構の解明

基盤 C	23K06119	河野孝夫	准教授	20230401	20260331	1,200,000	時空間特異的な樹状突起発達メカニズムとその病態における意義
基盤 C	23K06133	安部賀央里	准教授	20230401	20260331	1,300,000	皮膚感作性評価のための in silico 予測モデルの開発と実用化研究
基盤 C	23K06194	石内勘一郎	准教授	20230401	20260331	1,100,000	糸状菌が保有する植物由来天然物の特異な生合成機構解明に基づいた新規構造多様性創出
基盤 C	23K06239	尾関哲也	教授	20230401	20260331	1,200,000	粘膜ワクチン応用に向けた粉末製剤化 mRNA 封入脂質ナノ粒子の開発
基盤 C	23K06258	湯浅博昭	教授	20230401	20260331	1,100,000	新規コリントランスポーター類の分子機能と生理的及び薬物動態的役割
基盤 C	23K06283	山城貴弘	講師	20230401	20260331	1,100,000	SLC19A3 の基質認識機構の解明と医療応用への分子基盤の構築
基盤 C	24K09876	笛木司	研究員	20240401	20270331	1,200,000	生薬ハンゲによる咽喉刺激通の発生および薬効の発現におけるレクチンの役割
基盤 C	24K09734	樋口恒彦	名誉教授	20240401	20280331	900,000	ポルフィリン関連分子の創薬化学への応用研究
基盤 C	24K10156	高岸麻紀	講師	20240401	20270331	1,600,000	脳室内繊毛上皮細胞からの小胞分泌と神経幹細胞メンテナンス機構の解明
基盤 C	24K09864	伊藤佐生智	准教授	20240401	20270331	1,200,000	黄色ブドウ球菌免疫活性化毒素はアレルギー性炎症の新たな治療標的となるか？
基盤 C	24K09798	林秀敏	名誉教授	20240401	20270331	1,400,000	Tribbles ファミリー分子による細胞老化の誘導制御を介した新たながん治療薬の開発基盤
基盤 C	24K09733	久松洋介	講師	20240401	20270331	1,400,000	水中でヘム高選択的な認識能を発揮する蛍光性人工レ

							セプターの創製と応用
基盤 C	24K09713	中村精一	教授	20240401	20270331	1,500,000	酸化イソベンゾフラン生成法を基盤とする新反応の開発とその応用
基盤 C	23K06829	尾崎智也	講師	20230401	20260331	1,200,000	糖鎖を狙った損傷軸索治療薬と糖鎖への軸索応答に関する研究基盤の独創
国際共同研究j強化	23KK0308	鈴木良明	講師	20230401	20280331	12,000,000	興奮転写連関による痛覚伝導路の可塑的変化と慢性疼痛への関与の解明
スタート	23K19222	小川勇	助教	20230401	20250331	1,100,000	ヒト ips 細胞由来濾胞被蓋上皮の作製と創薬に向けた腸管免疫評価系の構築
スタート	24K22765	齊藤将之	講師	20240401	20260331	1,000,000	薬剤師のための過量内服に対応するオンライン教育プログラムの開発
スタート	24K23273	大橋栄作	助教	20240401	20260331	1,100,000	次世代免疫抑制剤の開発を指向したブラシリカルジンAのリード化合物創製
特別研究員・DC1	24KJ1890	天野泰樹	大学院生	20240401	20270331	800,000	肺高血圧症におけるカルシウム透過性イオンチャネルを標的とした新規治療薬の開発
特別研究員・DC1	24KJ1889	竹腰祐斗	大学院生	20240401	20270331	500,000	神経細胞膜の脂質組成を制御する新規分子機構の解明と、その精神疾患治療への応用
特別研究員・DC2	24KJ1887	川田成紀	大学院生	20240401	20260331	800,000	肝星細胞のイオンチャネル発現変化に着目した肝線維化機構の解明と創薬への応用
特別研究員・PD	23KJ0002	向井康敬	助教	20230401	20250331	2,100,000	「あくび」発生の脳内分子基盤解明
萌芽	23K18099	矢木宏和	准教授	20230401	20250331	2,500,000	巨大ウイルスが有する非膜性カゲ 形様構造体による新規糖鎖修飾システムの理解

若手	24K21093	小川勇	助教	20240401	20290331	700,000	ヒト腸管免疫評価のための細菌・腸管・免疫細胞の三種共培養系の確立
若手	23K14348	稲垣佑都	助教	20230401	20250331	1,800,000	Ataxin-2 の機能破綻が 2 型脊髄小脳変性症を引き起こす分子メカニズムの解明
若手	22K15322	小川昂輝	助教	20220401	20250331	1,100,000	徐放性 DDS を応用した持効型 mRNA 医薬の開発と中枢神経系疾患への治療展開
若手	23K14389	宮嶋ちはる	講師	20230401	20250331	1,400,000	がん遺伝子 TEAD と p53 のクロストークを介した新規がん悪性化機構の解明とその治療応用
若手	23K14414	近藤るびい	助教	20230401	20260331	1,100,000	肝線維症における肝星細胞のカルシウムシグナル制御機構の解明
若手	23K14984	鳥内阜暉	助教	20230401	20250331	900,000	グリア瘢痕における細胞老化を標的とした新生児低酸素性虚血性脳症の予後改善治療
若手	23K15455	青木啓将	講師	20230401	20260331	800,000	神経芽腫の NK 細胞からの免疫逃避メカニズム解明とがん免疫療法への応用
若手	22K15160	鈴木力憲	講師	20220401	20250331	1,300,000	昆虫の運動学習に関わる神経の機能解析とそのネットワーク構造の同定
若手	23K14388	堀英生	講師	20230401	20250331	1,800,000	生体模倣システムを利用したメタボリックシンドローム由来血管障害モデルの開発

その他の研究補助金

【助成金等】

補助金等名称	有限会社しょうなんクリエイト
研究課題名	病院薬剤学分野(堀田祐志講師)における学術研究奨励のため
氏名	堀田 祐志
金額	1,500,000
補助金等名称	公益財団法人中富健康科学振興財団
研究課題名	口腔粘膜炎の疼痛緩和に向けた薬物イオン液体含有 3D プリントオーダーメイドフィルムの研究
氏名	田上 辰秋
金額	1,500,000
補助金等名称	公益財団法人薬学研究奨励財団
研究課題名	mTORC1 による液-液相分離制御の解析
氏名	中津海 洋一
金額	800,000
補助金等名称	公益財団法人日本応用酵素協会
研究課題名	分泌型メタロプロテアーゼ ADAMTS による神経機能制御
氏名	服部 光治
金額	500,000
補助金等名称	公益財団法人東洋医学研究財団
研究課題名	XBPI スプライシングを抑制する天然由来化合物の作用機序の解明と医療への作用
氏名	井上 靖道
金額	700,000
補助金等名称	公益財団法人東洋医学研究財団
研究課題名	生薬ハンゲの咽喉刺激通(イガイガ)発生および伝統的加工法による減毒機序の解明
氏名	笛木 司
金額	700,000

補助金等名称	公益財団法人東洋医学研究財団
研究課題名	辛夷清肺湯のムチン分泌抑制作用とその活性成分の探索
氏名	鈴木 俊章
金額	700,000
補助金等名称	大塚製薬株式会社
研究課題名	下部尿路機能障害モデルを用いた光応答性 NO ドナーの有効性の検討
氏名	堀田 祐志
金額	200,000
補助金等名称	公益財団法人政策医療振興財団
研究課題名	AUCに基づいたバンコマイシンの投与設計に対応した新規TDM支援ソフトの開発
氏名	堀田 康弘
金額	594,000
補助金等名称	公益財団法人政策医療振興財団
研究課題名	薬剤師による小児製剤の院内調製に有用な3Dプリンティング技術の研究
氏名	田上 辰秋
金額	662,000
補助金等名称	公益財団法人武田科学振興財団
研究課題名	低エネルギー光で制御可能なケージド化合物群の開発
氏名	家田 直弥
金額	3,000,000
補助金等名称	公益財団法人日本応用酵素協会
研究課題名	興奮転写連関を介した血管リモデリング形成機構の解明
氏名	鈴木 良明
金額	500,000
補助金等名称	バイエル薬品株式会社
研究課題名	大腸がん患者の腫瘍崩壊症候群の発症リスク因子解析と発症予測モデルの構築
氏名	堀田 祐志
金額	320,000

補助金等名称	公益財団法人持田記念医学薬学振興財団
研究課題名	医薬品の消化管吸収評価系としての二次元化腸管オルガノイドの開発
氏名	岩尾 岳洋
金額	3,000,000
補助金等名称	公益財団法人持田記念医学薬学振興財団
研究課題名	SLC19A3 の遺伝子変異に起因する疾患へのピリドキシンの関与の解明
氏名	山城 貴弘
金額	3,000,000
補助金等名称	公益財団法人市原国際奨学財団
研究課題名	mTORC1 による液-液相分離の摂動を介したシグナル伝達の研究
氏名	中津海 洋一
金額	500,000
補助金等名称	一般財団法人横山臨床薬理研究助成基金
研究課題名	痛風発症のトリガー機構解明に向けたトレンスレーショナル型リサーチの展開と治療薬の探索
氏名	保嶋 智也
金額	1,000,000
補助金等名称	公益財団法人中部科学技術センター
研究課題名	がん分子標的薬ベムラフェニブに関連した尿細管細胞死メカニズムの解明
氏名	真川 明将
金額	300,000
補助金等名称	株式会社パブリックリレーションズ
研究課題名	生薬学分野が行う「機能性食品メタボローム分析データベースの作成」に関する学術研究奨励のため
氏名	牧野 利明
金額	100,000
補助金等名称	鳥居薬品株式会社
研究課題名	病院薬剤学分野における学術研究奨励のため
氏名	堀田 祐志
金額	100,000

補助金等名称	公益財団法人豊秋奨学会
研究課題名	mTORC1 による P-body 形成制御メカニズムの解明
氏名	中津海 洋一
金額	2,000,000
補助金等名称	日本化薬株式会社
研究課題名	病院薬剤学分野における学術研究奨励のため
氏名	堀田 祐志
金額	300,000
補助金等名称	公益財団法人小野医学研究財団
研究課題名	神経精神疾患における脳内脂質蓄積と炎症の関連機構
氏名	白根 道子
金額	2,000,000
補助金等名称	公益財団法人小林財団
研究課題名	小脳神経変性を悪化させる新規メカニズムの解明と、これを標的とする 治療法開発
氏名	服部 光治
金額	3,500,000
補助金等名称	大川原化工機株式会社
研究課題名	薬物送達学分野尾関哲也教授の学術研究奨励のため
氏名	尾関 哲也
金額	600,000
補助金等名称	公益財団法人日中医学協会
研究課題名	病態生化学分野(教授)における学術研究奨励のため
氏名	服部 光治
金額	600,000

【受託研究等】

補助金等名称 国立研究開発法人科学技術振興機構

研究課題名 体外から血流を光で操る分子技術の構築

氏名 家田直弥

金額 3,120,000

補助金等名称 国立研究開発法人日本医療研究開発機構

研究課題名 ペプチド型中分子および核酸型中分子を病変細胞内に送達し、活性化する方法

氏名 梅澤直樹

金額 16,430,700

補助金等名称 株式会社 MTG

研究課題名 睡眠に関わる商品における研究

氏名 桑和彦

金額 3,000,000

補助金等名称 株式会社 明治

研究課題名 ショウジョウバエを用いた機能性(睡眠)素材のスクリーニング評価および機序解明

氏名 桑和彦

金額 1,100,000

補助金等名称 国立研究開発法人日本医療研究開発機構

研究課題名 肺動脈性肺高血圧症に対する抗体医薬の探索

氏名 山村寿男

金額 10,010,000

補助金等名称 国立研究開発法人日本医療研究開発機構

研究課題名 ジストログリカンの糖鎖伸長終結因子グリセロールリン酸による生理的調節機能とがん悪性化機構に関する研究開発

氏名 矢木宏和

金額 40,560,000

補助金等名称 国立研究開発法人日本医療研究開発機構

研究課題名 ペプチド型中分子および核酸型中分子を病変細胞内に送達し、活性化する方法

氏名 梅澤直樹

金額 16,900,000

補助金等名称 国立大学法人大阪大学

研究課題名 高度先導的薬剤師の養成とそのグローバルな活躍を推進するアドバンスト教育研究プログラムの共同開発

氏名 鈴木匡

金額 3,662,000

補助金等名称 大学共同利用機構法人自然科学研究機構

研究課題名 分子中に秘められた新規相互作用部位の探査と変化を通じた次世代抗体創成の基盤構築

氏名 加藤晃一

金額 1,560,000

補助金等名称 国立大学法人北海道大学

研究課題名 間質性膀胱炎を標的とした新規治療薬の開発

氏名 堀田祐志

金額 2,450,000

補助金等名称 国立国際医療研究センター

研究課題名 B型肝炎ウイルスの排除を可能とするゲノム編集治療の実用化に向けた包括的な研究

氏名 星野真一

金額 26,000,000

補助金等名称 国立大学法人筑波大学

研究課題名 切除術不能再発がんを標的とした自然免疫系賦活剤の開発

氏名 川口充康

金額 2,150,000

補助金等名称 国立大学法人筑波大学

研究課題名 がん抑制遺伝子 p53 活性の増強による抗がん活性を狙った治療薬の創製

氏名 井上靖道

金額 2,150,000

補助金等名称 国立研究開発法人理化学研究所

研究課題名 細胞質糖鎖プロセッシング酵素および糖鎖認識タンパク質の構造解析

氏名 佐藤匡史

金額 6,851,000

補助金等名称 国立研究開発法人理化学研究所

研究課題名 翻訳異常の改善効果の検証のための神経変性疾患病態マウスの作出と飼育

氏名 築地仁美

金額 1,300,000

補助金等名称 国立大学法人熊本大学

研究課題名 イベルメクチンとその誘導体の抗 HBV 機序の解明および最適化されたイベルメクチン誘導体の開発

氏名 松永民秀

金額 2,600,000

補助金等名称 国立大学法人千葉大学

研究課題名 日本固有の本草書と漢方医薬学用語の英訳とデータベース化

氏名 牧野利明

金額 1,040,000

補助金等名称 国立研究開発法人産業技術総合研究所

研究課題名 ヒト iPS 細胞由来脳血管内皮細胞の開発と保存・輸送・品質管理方法の開発

氏名 坂下真大

金額 11,700,000

補助金等名称 (独) 日本学術振興会(JSPS)

研究課題名 二国間交流事業 (ソフトコロイド系の一方向結晶化と結晶-結晶相転移の研究)

氏名 山中淳平

金額 950,000

補助金等名称 国立大学法人筑波大学

研究課題名 製品化戦略に基づいた、国産MPSによる創薬プラットフォームの実証研究

氏名 松永民秀

金額 29,999,999

補助金等名称 国立食品衛生研究所

研究課題名 テンプレートシステムに基づくヒトのシトクロム P450 代謝予測モデルの汎用性向上

氏名 頭金正博

金額 990,000

補助金等名称 国立研究開発法人科学技術振興機構

研究課題名 アッセンブリー補助によるタンパク質の配置制御

氏名 矢木真穂

金額 5,200,000

補助金等名称 花王株式会社

研究課題名 腸管吸収及び体内動態に関する研究（コンサルティング）

氏名 松永民秀

金額 1,100,000

補助金等名称 任天堂株式会社

研究課題名 「目覚まし時計に関する研究」

氏名 桑和彦

金額 1,944,800

【名古屋市立大学 特別研究奨励費】

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 医療情報データベースと機械学習を融合した薬剤性腎障害の予測法の開発

氏名 安部賀央里

金額 900,000

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 ポドサイト特異的な細胞保護・毒性作用に関連する薬剤標的因子の同定

氏名 真川明将

金額 500,000

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 理・薬・医学を貫く先端光化学研究～基礎研究から臨床応用まで

氏名 中川秀彦

金額 2,340,000

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 神経終末における新規モノアミントランスポーターの同定と機能解析

氏名 保嶋智也

金額 640,000

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 難治性多発性骨髄腫患者に対する新規治療薬開発の非臨床研究

氏名 井上靖道

金額 4,200,000

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 ミトコンドリアダイナミクスによるグリア活性化メカニズムの解明と脳保護治療への応用

氏名 鳥内阜暉

金額 1,260,000

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 アミロイド形成の分子機構の解明

氏名 矢木真穂

金額 1,500,000

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 DNA メチル化状態に着目した神経芽腫に対する新規治療法の創出

氏名 青木啓将

金額 1,260,000

種別 外部研究資金獲得活性化事業

研究課題名 間質性膀胱炎治療薬の開発

氏名 堀田祐志

金額 1,260,000

種別 科学研究費獲得活性化事業

研究課題名 ヒトにおけるグリチルリチン酸の有用性および副作用

氏名 牧野利明

金額 750,000

種別 科学研究費獲得活性化事業

研究課題名 3D プリンター技術と異分野融合で加速する画期的医薬品のものづくり研究

氏名 田上辰秋

金額 1,050,000

種別 科学研究費獲得活性化事業

研究課題名 家庭性変異と環境摂動を利用したアミロイド繊維形成の自由エネルギー地形の俯瞰的調査

氏名 矢木真穂

金額 1,019,000

種別 科学研究費獲得活性化事業

研究課題名 黄色ブドウ球菌毒素の免疫細胞を標的とする新規生理活性の探索と予防と治療への応用

氏名 伊藤佐生智

金額 600,000

種別 科学研究費獲得活性化事業

研究課題名 Model-Informed Precision Dosing の概念に基づいた新しい投与設計に対応
できる TDM 支援ソフトの開発と臨床応用

氏名 堀田康弘

金額 310,000

種別 科学研究費獲得活性化事業

研究課題名 生体模倣システムを用いたメタボリックシンドローム病態血管モデルの開発

氏名 堀英生

金額 540,000

種別 科学研究費獲得活性化事業

研究課題名 Ataxin-2 の翻訳制御に基づく新たな神経変性疾患の治療戦略開発

氏名 稲垣佑都

金額 600,000

種別 科学研究費獲得活性化事業

研究課題名 プロテオミクス的手法でアロプリノール誘発特異体質性毒性の真のリスク因子を
同定

氏名 柴田侑裕

金額 310,000

種別 国際交流の推進事業

研究課題名 カルガリー大学との国際共同研究の推進と脳神経科学研究所国際シンポジウムの
開催

氏名 山村寿男

金額 500,000

種別 論文活性化事業

研究課題名 -

氏名 田上辰秋

金額 25,000

種別 論文活性化事業

研究課題名 -

氏名 尾関 哲也

金額 25,000

種別 論文活性化事業

研究課題名 -

氏名 桑和彦

金額 50,000

6 新聞報道等

(2024年1月から 2024年12月)

【薬化学分野】

(原報)

Mitsuyasu Kawaguchi, Shohei Minami, Naoya Ieda, Hidehiko Nakagawa.

[1,2,4]Triazolo[1,5-a]pyrimidine derivatives: Structure-activity relationship study leading to highly selective ENPP1 inhibitors.

Bioorg. Med. Chem. Lett., **110**, 129820 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

川口充康、吉野克利、森山響、家田直弥、中川秀彦

可視光応答サルフェン硫黄ドナーの開発と細胞応用

日本酸化ストレス学会東海支部 第12回学術集会 2024年2月10日、岐阜

平尾景尚、山口遥己、若森久幸、川口充康、家田直弥、中川秀彦

蛍光検出とラベル化による hydropersulfide の新規検出手法の開発

2023年度 NCU ライフサイエンス・IBS 合同リトリート、2024年3月14-15日、静岡

平尾景尚、山口遥己、若森久幸、川口充康、家田直弥、中川秀彦 **【学生優秀発表賞】**

Hydropersulfide の蛍光検出とラベル化の両立を志向したプローブの開発

日本薬学会第144年会、2024年3月28-31日、横浜

森山響、吉野克利、川口充康、家田直弥、中川秀彦 **【優秀賞】**

可視光応答性 sulfane sulfur ドナーの開発

第77回日本酸化ストレス学会学術集会、2024年5月17-19日、横須賀

Hidehiko Nakagawa **【招待講演】**

Spatiotemporal control of NO release with caged NOs and their biological application

Symposium on Caged Compounds, 2024年6月17日, Prague, Czech

平尾景尚、山口遥己、若森久幸、川口充康、家田直弥、中川秀彦
ラベル化と蛍光検出による **hydropersulfide** の新規検出プローブの開発
第 70 回日本薬学会 東海支部総会・大会、2024 年 7 月 6 日、名古屋

吉川旺佑、家田直弥、川口充康、中川秀彦
PeT 駆動型 NO ドナーにおける NO 放出効率に影響を与える置換基効果の検証
第 70 回日本薬学会 東海支部総会・大会、2024 年 7 月 6 日、名古屋

Mitsuyasu Kawaguchi, Yuri Furuse, Naoya Ieda, Hidehiko Nakagawa
Development of FHIT-Imaging Fluorescence Probes with Well-tuned Hydrophobicity for
Intracellular Delivery
第 40 回日本 DDS 学会学術集会、2024 年 7 月 9~11 日、つくば

齋藤大介、北村紗枝、家田直弥、大山享也、堀田祐志、川口充康、木村和哲、中川秀彦
Ge, Te, Se を含むローダミンに基づくケージド NO の構造活性相関研究
第 39 回創薬セミナー、2024 年 7 月 10~12 日、長野

川口 充康、古瀬 友梨、家田 直弥、中川 秀彦
ClogP 値の戦略的調整による細胞内 FHIT 活性検出蛍光プローブの開発
第 39 回創薬セミナー、2024 年 7 月 10~12 日、長野

中川秀彦 **【招待講演】**
光誘起電子移動反応を鍵とする NO 放出剤の開発と応用
有機合成化学協会九州・山口支部第 36 回若手研究者のためのセミナー、2024 年 8 月 31 日、
福岡

Mitsuyasu Kawaguchi, Yuri Furuse, Naoya Ieda, Yuhei, Ohta, Hidehiko Nakagawa
Development of FHIT Imaging Fluorescence Probes with Well-tuned Hydrophobicity for
Intracellular Uptake
The 9th Nagoya / Gifu / Shenyang / Nanjing Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024
年 9 月 15~16 日, Nagoya

Tomofumi Saka, Riri Hayashi, Rina Korera, Taichi Mitsui, Mitsuyasu Kawaguchi, Hidehiko
Nakagawa, Yuta Yoshino, Akira Ikari, Satoshi Endo
Development of a Novel Strategy to Suppress Hepatic Stellate Cell Senescence by NMN

Supplementation

The 9th Nagoya / Gifu / Shenyang / Nanjing Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024
年 9 月 15~16 日, Nagoya

泉遼、家田直弥、中村旭良、太田悠平、川口充康、中川秀彦

可視光駆動型光アフィニティラベル化剤の開発

第 55 回中部化学関係学協会支部連合秋季大会、2024 年 11 月 2-3 日、名古屋

吉川旺佑、家田直弥、川口充康、中川秀彦

可視光制御 NO ドナーにおける NO 放出効率に影響を与える置換基効果

第 41 回メディシナルケミストリーシンポジウム、2024 年 11 月 20-22 日、京都

Hidehiko Nakagawa 【招待講演】

Photocontrol of NO release from caged NOs and biological applications

17th International Symposium on Nanomedicine (ISNM2024), 2024 年 12 月 3 日, Nagoya

石飛向基、川口充康、太田悠平、吉沢道人、中川秀彦

S8 包接可能な水溶性分子カプセルの分解評価

新興硫黄生物学が拓く生命原理変革 (硫黄生物学) 第 4 回領域会議、2024 年 12 月 2-4 日、長
浜

川口充康

可視光応答性超硫黄ドナーの開発と細胞内超硫黄量の操作

新興硫黄生物学が拓く生命原理変革 (硫黄生物学) 第 4 回領域会議、2024 年 12 月 2-4 日、長
浜

【精密有機反応学分野】

(原報)

Kousuke Takahashi, Taiki Nishiyama, Naoki Umezawa, Yasumichi Inoue, Isamu Akiba, Takehisa Dewa, Atsushi Ikeda, Toshihisa Mizuno

Delivery of external proteins into the cytoplasm using protein capsules modified with IgG on the surface, created from the amphiphilic two helix-bundle protein OLE-ZIP
Chem. Commun., **60**, 968–971. (2024).

Yosuke Hisamatsu, Go Toriyama, Katsuhiko Yamamoto, Hiroshi Takase, Tsunehiko Higuchi, Naoki Umezawa

Temperature control of the self-assembly process of 4-aminoquinoline amphiphile: Selective construction of perforated vesicles and nanofibers, and structural restoration capability
Chem. Eur. J., **30(36)**, e202400134 (2024). Front cover に選定

Kousuke Takahashi, Yasumichi Inoue, Shigeaki Hida, Ryuki Hosoda, Naoki Umezawa, Isamu Akiba, Mitsuo Umetsu, Toshihisa Mizuno

Target-selective cytosolic delivery of cargo proteins using the VHH-presented OLE-ZIP capsules
RSC Pharm., **1**, 786–796. (2024).

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

梅澤 直樹

可逆的共有結合を用いたペプチド立体構造制御と機能創出

日本化学会第 104 春季年会(2024)併催シンポジウム (JST) さきがけ「自在配列」領域 公開シンポジウム, 2024 年 3 月 18 日 (船橋) .

荒川 主真、加藤 舞子、井上 靖道、林 秀敏、久松 洋介、梅澤 直樹

細胞内 p53/MDM2 タンパク質間相互作用を阻害する還元環境応答型ペプチドの開発
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 29 日 (横浜) .

久松 洋介、鳥山 剛、山本 勝宏、梅澤 直樹

両親媒性 4-アミノキノリン誘導体の温度応答性自己集合挙動の評価：多孔性ベシクルとナノファイバーの選択的構築

日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 29 日 (横浜) .

鳥山 剛、久松 洋介、梅澤 直樹

4-アミノキノリン部位を有する双頭型両親媒性分子の自己集合により構築されるナノ構造体の構造制御

日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 30 日 (横浜) .

荒川 主真、加藤 舞子、井上 靖道、林 秀敏、久松 洋介、梅澤 直樹

オリゴアルギニン付与により生じる細胞毒性を軽減する方法

第 18 回 バイオ関連化学シンポジウム, 2024 年 9 月 12 日 (つくば) .

鳥山 剛、久松 洋介、山本 勝宏、梅澤 直樹

水中での自己集合経路制御に基づく、双頭型両親媒性 4-アミノキノリン誘導体の超分子集合体構築

第 73 回高分子討論会, 2024 年 9 月 25-27 日 (新潟) .

廣瀬 拓、林 優樹、村林 華、久松 洋介、梅澤 直樹

可逆的共有結合を用いたペプチド立体構造制御とタンパク質間相互作用阻害

第 55 回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 (中化連), 2024 年 11 月 2 日 (名古屋) .

Naoki Umezawa 【特別講演】

Temporary Cyclization to Control Peptide Functions

17th International Symposium on Nanomedicine (ISNM2024), 2024 年 12 月 4 日 (Nagoya) .

【薬品合成化学分野】

(原報)

Mirai Kage, Hiroyuki Yamakoshi, Manami Tabata, Eisaku Ohashi, Kimihiro Noguchi, Takeshi Watanabe, Manato Uchida, Minetatsu Takada, Kazutada Ikeuchi, Seiichi Nakamura

Oxidative Generation of Isobenzofurans from Phthalans: Application to the Formal Synthesis of (±)-Morphine.

Chem. Sci., **15**, 19070-19076 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

中村美菜, 池内和忠, 鬼頭宏彰, 大矢進, 中村精一
血管収縮阻害物質マルビインの炭素置換誘導体の合成と構造活性相関研究.
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 30 日 (横浜) .

小林誠, 捧智成, 谷野圭持, 中村精一, 池内和忠【優秀発表賞】
1,3-シクロペンタジエン構造の新規有機変換: 5/5/4 三環性骨格の構築と機構解析.
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 31 日 (横浜) .

大野美空, 中村精一, 池内和忠
1,4-ビスシロキシ-1,3-シクロペンタジエン構造の特性を利用する分子内アリル位求核置換反応
の開発.
第 70 回日本薬学会東海支部総会・大会, 2024 年 7 月 6 日 (名古屋) .

小林誠, 捧智成, 谷野圭持, 中村精一, 池内和忠
特異な分子内ダブル Michael 付加反応によるシクロブタ[*cd*]ペンタレン骨格の構築とその応用.
第 125 回有機合成シンポジウム, 2024 年 11 月 7 日 (東京) .

【機能分子構造学分野】

(原報)

Mika Sakazaki, Shin-ichi Ikeda

Ni-Catalyzed ZnCl₂-Assisted Domino Coupling of Enones and
Vinylcyclopropanes via C–C Bond Cleavage of Cyclopropane.

Alkyne-Tethered

Organometallics., **43**, 2321-2333 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

なし

【生体超分子システム解析学分野】

(原報)

Marin Sakamoto, Yuka Nagata, Atsushi Furukawa, Tomoyuki Kusada, Shohei Inamoto,
Tomomi Senda, Naohide Hirashima, Ryo Suzuki
VAMP7 knockdown in secretory granules impairs CCL2 secretion in mast cells.
Biochem. Biophys. Res. Commun., **691**, 149258 (2024)

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

八木孝樹, 龍野 華, 鷺崎加奈, 平嶋尚英, 田中正彦

小腸炎を起こすグリア細胞特異的 calcineurin ノックアウトマウスにおける遺伝的背景による表現型の差異.

日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 30 日 (横浜); 30P-am463.

田中正彦, 中野敦思, 大崎康太, 平嶋尚英

小脳プルキンエ細胞の樹状突起形成における Orai カルシウムチャネルの関与.

第 47 回日本神経科学大会・第 67 回日本神経化学会大会・第 46 回日本生物学的精神医学会年会・第 8 回アジアオセアニア神経科学連合コンgres合同大会 (NEURO2024), 2024 年 7 月 24 日 (福岡); 1P-064.

平嶋尚英【招待講演】

好塩基球の分泌機構とドラッグデリバリーシステムへの展開.

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部 合同学術大会 2024, 2024 年 10 月 27 日 (岐阜); 教育講演 2

飯田颯人, 鈴木瑠理子, 田中正彦, 平嶋尚英

半人工分泌細胞を目指した電場融合法によるマイクロ粒子の細胞内導入.

第 47 回日本分子生物学会年会, 2024 年 11 月 27 日 (福岡); 1P-520.

後藤慎平, 棚橋佑吏, 平嶋尚英, 田中正彦

小腸炎を起こす GFAP-Cre calcineurin $Ba^{fl/fl}$ mice における抗菌薬及びラクトフェリンの効果.

第 47 回日本分子生物学会年会, 2024 年 11 月 29 日 (福岡); 3P-739.

【コロイド・高分子物性学分野】

(原報)

M. Fujita, A. Toyotama, T. Okuzono, H. Niinomi, J. Yamanaka
[Formation of two-dimensional diamond-like colloidal crystals using layer-by-layer electrostatic self-assembly.](#) *Soft Matter*. 20, 985-992 (2024).

H. Miki, S. Akai, A. Toyotama, T. Okuzono, J. Mata, J. Yamanaka
Direct Observation of Light Reflection by Titania Particles.
Chem. Lett. 53, upad056 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

J. Yamanaka, A. Toyotama, T. Okuzono,
Annual Highlights of Results from the International Space Station, NASA (2024), p.38.

A.G. Majumdar, B.Pany, S. S. Parua, S. Si, J. Yamanaka, P.S. Mohanty,
“Environmental Engineering and Waste Management”, Springer-Nature (2024), p.579-618.

山中淳平・奥菌 透・豊玉彰子
「微粒子分散・凝集講座」、日本化学会編、第3巻9章 近代科学社(2024).

豊玉彰子・奥菌 透・山中淳平
コロイド系の結晶成長と不純物の影響
「異物の分析技術と試料の前処理、結果の解釈」第3章9節 (P527) 技術情報協会(2024).

三木裕之, 山中淳平, 奥菌 透, 豊玉彰子
コロイド粒子の自己集合と宇宙実験
日本物理学会誌, 2024年79巻11号 p. 602-607

(学会発表)

川村真白, 田代耀, 上西優実花, 伊藤颯馬, 豊玉彰子, 奥菌透, 山中淳平
枯渴引力による金コロイド結晶の構築と SERS 基板への応用.
第70回日本薬学会東海支部総会・大会, 2024年7月6日(名古屋市).

竹内麻有 ,根来友楽良 ,豊玉彰子 ,奥菌透 ,山中淳平

枯渴引力によるマイクロゲルの結晶化.

第 70 回日本薬学会東海支部総会・大会, 2024 年 7 月 6 日 (名古屋市) .

豊玉彰子【依頼講演】

金微粒子のコロイド結晶化と SERS 基板への応用

第 42 回関西界面科学セミナー, 2024 年 7 月 27 日 (京都市) .

山中淳平【依頼講演】

ディスページョンセンター基礎講座セミナー、2024 年 8 月 21 日、オンライン

Junpei Yamanaka, Akiko Toyotama 【招待講演】

Symposium on Colloids and the Depletion Interaction, 2024 年 9 月 17 日、オランダ

奥菌透【依頼講演】

不均一濃度場中における表面化学反応を伴う荷電コロイドダイナミクス

第 75 回コロイドおよび界面化学討論会, 2024 年 9 月 18 日 (仙台市) .

Junpei Yamanaka, Miyu Ioka, Akiko Toyotama, and Tohru Okuzono

Fabrication of Gold Colloidal Crystals Mediated by Depletion Attraction and Its Application for SERS

12th Liquid matter conference, 2024 年 9 月 24 日 (ドイツ・マインツ) .

Marina Takemoto, Minori Fujita, Akiko Toyotama, Tohru Okuzono, and Junpei Yamanaka

Fabrication of 2D diamond lattice by layer-by-layer self-assembly of colloidal particles using adsorption-diffusion of ions

12th Liquid matter conference, 2024 年 9 月 24 日 (ドイツ・マインツ) .

Kenta Kawase, Akiko Toyotama, Tohru Okuzono, and Junpei Yamanaka

Numerical Simulation of the Formation of Two-dimensional Colloidal Diamond Structures by Layer-by-Layer Stacking

12th Liquid matter conference, 2024 年 9 月 24 日 (ドイツ・マインツ) .

Minori Fujita, Marina Takemoto, Akiko Toyotama, Tohru Okuzono, and Junpei Yamanaka

Two-Dimensional Diamond-like Colloidal Crystals Formed by Layer-by-Layer Electrostatic Self-Assembly

12th Liquid matter conference, 2024 年 9 月 24 日 (ドイツ・マインツ) .

Akiko Toyotama, Yui Sato, Ayane Hirai, Mau Takeuchi, Tohru Okuzono, and Junpei Yamanaka

Crystallization of Microgel Colloids Due to Depletion Attraction
12th Liquid matter conference, 2024年9月24日(ドイツ・マインツ) .

Junpei Yamanaka 【招待講演】

Physics Seminar in University of Fribourg, 2024年9月30日、スイス

山中淳平 【依頼講演】

自己集合によるコロイド系の構造形成、無重力下のコロイド集合

日本化学会秋季事業第14回CSJ化学フェスタ2024, 2024年10月22日(東京都) .

竹本満里菜、藤田みのり、豊玉彰子、奥菌透、山中淳平 【講演奨励賞】

コロイド粒子の交互積層による二次元ダイヤモンド結晶の構築

第53回結晶成長国内会議, 2024年11月18日(東京都) .

藤田みのり、川瀬健太、豊玉彰子、奥菌透、山中淳平

2次元コロイド結晶基板の表面プラズモン特性

第53回結晶成長国内会議, 2024年11月18日(東京都) .

山中淳平 【依頼講演】

3 Questions 東海地区編, 2024年11月10-14日(名古屋)

Junpei Yamanaka 【招待講演】

Crystallization of Microgel Colloids Due to Depletion Attraction

Gel Symposium 2024, 2024年11月19日(那覇市) .

Kenta Kawase, Yuri Nakamura, Naohide Hirashima, Akiko Toyotama, Tohru Okuzono,

Junpei Yamanaka, Tatsuya Ishikawa, Hironobu Kubota,

41st Medicinal Chemistry Symposium, 2024年11月20-22日(京都市) .

【生命分子構造学分野】

(原報)

Saeko Yanaka, Hiroki watanabe, Rina Yogo, Mesayamas Kongsema, Sachiko Kondo, Hirokazu Yagi, Takayuki Uchihashi, and Koichi Kato

Quantitative Analysis of Therapeutic Antibody Interactions with Fcγ Receptors Using High-Speed Atomic Force Microscopy

Biol. Pharm. Bull. **47**, 1, 334-338 (2024).

Marietta Fabiano, Naoto Oikawa, Anja Kerksiek, Jun-ichi Furukawa, Hirokazu Yagi, Koichi Kato, Ulrich Schweizer, Wim Annaert, Jongkyun Kang, Jie Shen, Dieter Lütjohann, and Jochen Walter

Presenilin deficiency results in cellular cholesterol accumulation by impairment of protein glycosylation and NPC1 function

Int. J. Mol. Sci. **25**, 10, 5417 (2024).

Saeko Yanaka, Atsuji Kodama, Shigetaka Nishiguchi, Rina Fujita, Jiana Shen, Pornthip Boonsri, Duckyong Sung, Yukiko Isono, Hirokazu Yagi, Yohei Miyanoiri, Takayuki Uchihashi, and Koichi Kato

Identification of potential C1-binding sites in the immunoglobulin CL domains

Int. Immunol. **36**, 8, 405-412 (2024).

Satoshi Nakagawa, Hiroyuki Imachi, Shigeru Shimamura, Saeko Yanaka, Hirokazu Yagi, Maho Yagi-Utsumi, Hiroyuki Sakai, Shingo Kato, Moriya Ohkuma, Koichi Kato, and Ken Takai

Characterization of protein glycosylation in an Asgard archaeon

BBA Advances. **6**, 100118 (2024).

Hirokazu Yagi, Seigo Tateo, Taiki Saito, Yusaku Ohta, Emiko Nishi, Saemi Obitsu, Tatsuya Suzuki, Supaphorn Seetaha, Charles Hellec, Akihiko Nakano, Takuro Tojima, and Koichi Kato

Deciphering the sub-Golgi localization of glycosyltransferases via 3D super-resolution imaging

Cell Struct. Funct. **49**, 47-55 (2024).

Tadashi Satoh, Maho Yagi-Utsumi, Nozomi Ishii, Tsunehiro Mizushima, Hirokazu Yagi, Ryuichi Kato, Yuriko Tachida, Hiroaki Tateno, Ichiro Matsuo, Koichi Kato, Tadashi Suzuki, and Yukiko Yoshida

Structural basis of sugar recognition by SCFFBS2 ubiquitin ligase involved in NGLY1 deficiency

FEBS Lett. **598**, 2259-2268 (2024).

Satoshi Nakagawa, Hiroyuki D. Sakai, Shigeru Shimamura, Yoshiki Takamatsu, Shingo Kato, Hirokazu Yagi, Saeko Yanaka, Maho Yagi-Utsumi, Norio Kurosawa, Moriya Ohkuma, Koichi Kato, and Ken Takai

N-linked protein glycosylation in Nanobdellati (formerly DPANN) archaea and their hosts

J. Bacteriol. **206**, e00205-24 (2024).

Maho Yagi-Utsumi, Yui Kanaoka, Shogo Miyajima, Satoru G Itoh, Katsuhiko Yanagisawa, Hisashi Okumura, Takayuki Uchihashi, and Koichi Kato
Single-Molecule Kinetic Observation of Antibody Interactions with Growing Amyloid β Fibrils
J. Am. Chem. Soc. **146**, 31518-31528 (2024).

Hirokazu Yagi, Rino Yamada¹, Taiki Saito, Rena Honda, Rio Nakano, Kengo Inutsuka, Seigo Tateo, Hideo Kusano, Kumiko Nishimura, Saeko Yanaka, Takuro Tojima, Akihiko Nakano, Jun-ichi Furukawa, Maho Yagi-Utsumi, Shungo Adachi, and Koichi Kato
Molecular tag for promoting N-glycan maturation in the cargo receptor-mediated secretion pathway
iScience **27**, 111457 (2024).

Satoshi Ninagawa, Masaki Matsuo, Deng Ying, Shuichiro Oshita, Shinya Aso, Kazutoshi Matsushita, Mai Taniguchi, Akane Fueki, Moe Yamashiro, Kaoru Sugasawa, Shunsuke Saito, Koshi Imami, Yasuhiko Kizuka, Tetsushi Sakuma, Takashi Yamamoto, Hirokazu Yagi, Koichi Kato, and Kazutoshi Mori
UGGT1-mediated reglucosylation of N-glycan competes with ER-associated degradation of unstable and misfolded glycoproteins
eLife. **12**, RP93117 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

矢木宏和, 加藤晃一
技術講座：糖鎖構造のオミクス解析
細胞 **56**, No.4, 30-32 (2024).

齋藤泰輝
26th International Symposium on Glycoconjugates (Glyco26) 活動報告
JSCR Newsletter 28, No.1, P6 (2024).

Daisuke Koga, Satoshi Kusumi, Hirokazu Yagi, and Koichi Kato
Three-dimensional analysis of the intracellular architecture by scanning electron microscopy
Microscopy, **73**, 215-225 (2024).

Hirokazu Yagi, Katsuki Takagi, and Koichi Kato
Exploring domain architectures of human glycosyltransferases: Highlighting the functional diversity of non-catalytic add-on domains
Biochim. Biophys. Acta –General Subjects, **1868**, 130687 (2024).

Niloufar Yazdanpanah, Constantine Sedikides, Hans D. Ochs, Carlos A. Camargo Jr., Gary L. Darmstadt, Artemi Cerda, Valentina Cauda, Godefridus J. Peters, Frank Sellke, Nathan D. Wong, Elisabetta Comini, Alberto Ruiz Jimeno, Vivette Glover, Nikos Hatziargyriou, Christian E. Vincenot, Stéphane P. A. Bordas, Idupulapati M. Rao, Hassan Abolhassani, Gevork B. Gharehpetian, Ralf Weiskirchen, Manoj Gupta, Shyam Singh Chandel, Bolajoko O. Olusanya, Bruce Cheson, Alessio Pomponio, Michael Tanzer, Paul S. Myles, Wen-Xiu Ma, Federico Bella, Saeid Ghavami, S. Moein Moghimi, Domenico Pratico, Alfredo M.

Hernandez, Maria Martinez-Urbistondo, Diego Martinez Urbistondo, Seyed-Mohammad Fereshtehnejad, Imran Ali, Shinya Kimura, A. Wallace Hayes, Wenju Cai, Chua K. J. Ernest, Sabu Thomas, Kazem Rahimi, Armin Sorooshian, Michael Schreiber, Koichi Kato, John H. T. Luong, Stefano Pluchino, Andres M. Lozano, John F. Seymour, Kenneth S. Kosik, Stefan G. Hofmann, Roger S. McIntyre, Matjaz Perc, Alexander Leemans, Robyn S. Klein, Shuji Ogino, Christopher Wlezien, George Perry, Juan J. Nieto, Lisa Levin, Daniel J. Klionsky, Bahram Mobasher, Tommaso Dorigo, Nima Rezaei, and USERN Advisory Board
The COVID-19 Aftermath. *Advances in Experimental Medicine and Biology* (N.Rezaei ed.) vol.1457, Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-031-61939-7_1 (2024).
Global Challenges After a Global Challenge: Lessons Learned from the COVID-19 Pandemic

(学会発表)

Chanya Archapraditkul, Taiki Saito, Seigo Tateo, Tomoya Kanda, Saeko Yanaka, and Koichi Kato

The investigation of structural and dynamic properties of fragments of human serum proteins: albumin and immunoglobulin G
SOKENDAI Asian Winter School 2024年1月10日(岡崎); P-1.

Takehito Seki, Takumi Yamaguchi, Hirokazu Yagi, and Koichi Kato
Computational Approaches for Evaluating Enzyme Reactivity in Glycan Biosynthesis
SOKENDAI Asian Winter School 2024年1月10日(岡崎)

加藤晃一【招待講演】

生きているとは何か？

学際領域展開ハブ形成プログラム「スピン生命フロンティア」キックオフ会議 2024年1月18日(岡崎)

Atsuji Kodama, Yuki Yamaguchi, Koichi Kato, Susumu Uchiyama
Stoichiometric approach for characterizing biopolymer complexes using native mass spectrometry
第6回 ExCELLS シンポジウム 2024年1月22日(岡崎); ポスター#4.

Maho Yagi-Utsumi, Saeko Yanaka, Koichi Kato
Dynamical ordering of amyloid fibril formation
第6回 ExCELLS シンポジウム 2024年1月22日(岡崎); ポスター#5.

Saeko Yanaka, Maho Yagi-Utsumi, Hirokazu Yagi, Atsuji Kodama, Ray Burton-Smith, Kazuyoshi Murata, Masaharu Takemura, Koichi Kato
Exploration of molecular networks involved in the formation of giant viruses
第6回 ExCELLS シンポジウム 2024年1月22日(岡崎); ポスター#50.

Maho Yagi-Utsumi, Saeko Yanaka, Koichi Kato
Exploration of molecular networks involved in tardigrade anhydrobiosis
第6回 ExCELLS シンポジウム 2024年1月22日(岡崎); ポスター#55.

Hirokazu Yagi, Seigo Tateo, Taiki Saito, and Koichi Kato
Technical basis for compilation of spatiotemporal atlas of Golgi apparatus
第6回 ExCELLS シンポジウム 2024年1月22日(岡崎); ポスター#61.

加藤晃一【招待講演】

ヒューマングライコームプロジェクト始動！ ExCELLS における糖鎖科学研究
第 6 回 ExCELLS シンポジウム 2024 年 1 月 23 日（岡崎）

兒玉篤治

高分解能ネイティブ質量分析による生体高分子複合体の解
Characterizing Biopolymer Complexes using High-resolution Native Mass Spectrometry
第 6 回 ExCELLS シンポジウム 2024 年 1 月 23 日（岡崎）

Seigo Tateo, Taiki Saito, Shiori Yamamoto, Hirokazu Yagi and Koichi Kato
The multimodal omics approach for constructing a comprehensive Golgi atlas
2024 Korea-Japan Joint Meeting for Molecular Sciences 2024 年 2 月 1 日（博多）

Taiki Saito, Seigo Tateo, Shungo Adachi, Hirokazu Yagi, and Koichi Kato
Distinct views of secretion pathway emerge from protein network analysis
2024 Korea-Japan Joint Meeting for Molecular Sciences 2024 年 2 月 1 日（博多）

Koichi Kato【招待講演】

NMR Characterization of Antibodies as Biopharmaceutical Glycoproteins
The 7th bilateral Taiwan-Japan Symposium (TJNMR2024) 2024 年 3 月 1 日（東広島）

加藤晃一【招待講演】

糖鎖の生命分子科学とバイオ創薬科学
神戸薬科大学特別研究セミナー 2024 年 3 月 7 日（神戸）

関 健仁，山口拓実，矢木宏和，加藤晃一

糖鎖の動的立体構造アンサンブルと糖転移酵素の相互作用評価法の開発
日本化学会 第 104 春季年会 2024 年 3 月 19 日（船橋）；H934-2am-03.

小野寺悠太，竹内絵里奈，中間貴寛，矢木真穂，藤田大士，加藤晃一，藤田 誠

巨大球状錯体への包接によるアミロイドβ疎水性断片の二量化の NMR 解析
日本化学会 第 104 春季年会 2024 年 3 月 20 日（船橋）；H934-3am-03.

田所美璃，中間貴寛，劉 鴻琨，矢木真穂，加藤晃一，藤田 誠

球状錯体の孤立空間への閉じ込めによるタンパク質-脂質相互作用の NMR 構造解析
日本化学会 第 104 春季年会 2024 年 3 月 20 日（船橋）；H934-3am-04.

西崎竜平，兒玉篤治，Christian Ganser，内山 進，内橋貴之，矢木真穂，加藤晃一

プロテアソームのヘテロ α リングの配置制御に向けて
2023 年度生物物理学会中部支部討論会 2024 年 3 月 20 日（金沢）；O15.

Koichi Kato【招待講演】

NMR approach to structural glycobiology highlighting antibody functions
Future of NMR spectroscopy and more 2024 年 4 月 5 日（Göttingen）

Hirokazu Yagi, Taiki Saito, Seigo Tateo, Miho Nishio, Satoshi Kusumi, Akihiko Nakano,
Takuro Tojima, Daisuke Koga, and Koichi Kato

Sub-Golgi distribution analysis of glycosyltransferases in mammalian cells

Trafficking and Glycosylation at the Golgi apparatus 2024年4月18日(Sorrento); Poster no. C-18.

加藤晃一【招待講演】

糖鎖科学を基軸とする物質-生命協会探査

物質-生命の境界探査 PF 報告会 2024年5月1日(岡崎)

矢木真穂

アッセムブリー補助によるタンパク質の配置制御

さががけ「自在配列」領域 2024年第8回領域会議 2024年5月8日(那須)

中間貴寛, 田所美璃, Hongkun Liu, 矢木真穂, 加藤晃一, 藤田 誠

かご型金属錯体の孤立空間への閉じ込めによるタンパク質-脂質間の弱い相互作用のNMR解析

第24回日本蛋白質科学会年会 2024年6月11日(札幌); 1P-050.

塩見敏生, 妹尾暁暢, 山下智大, 谷中冴子, 植田 正, 津田 誠, カアベイロ ホセ

ヒト P2X4 受容体と阻害剤の新たな相互作用様式評価系の構築

第24回日本蛋白質科学会年会 2024年6月11日(札幌); 1P-094.

西牟田 拓, 妹尾暁暢, 谷中冴子, 長門石 暁, 宗 孝紀, 植田 正, 津本浩平, カアベイロ ホセ
計算科学および物理化学的手法に基づく OX40-OX40L 相互作用におけるホットスポットの精密解析

第24回日本蛋白質科学会年会 2024年6月11日(札幌); 1P-096.

山本航大, 谷中冴子, 妹尾暁暢, カアベイロ ホセ

IgG 分子の Fab-Arm-Exchange の分子メカニズムの探査

第24回日本蛋白質科学会年会 2024年6月11日(札幌); 1P-125.

小関悠希, 山口祐希, 青山道彦, 多田 稔, 妹尾暁暢, 石井明子, 内山 進, 内橋貴之, 加藤晃一, 谷中冴子, カアベイロ ホセ

IgG1 の構造形成と機能においてヒンジ領域が担う役割の探究

第24回日本蛋白質科学会年会 2024年6月11日(札幌); 1P-135.

田川純平, 谷中冴子, 加藤百合, 増田亮津, 李 在萬, 妹尾暁暢, 小山浩輔, 植田 正, 西田基宏, 日下部宜宏, カアベイロ ホセ

ノロウイルス変異株に対する抗体の作出と特性評価

第24回日本蛋白質科学会年会 2024年6月12日(札幌); 2P-127.

安田智徳, 谷中冴子, 妹尾暁暢, カアベイロ ホセ

イソギンチャク由来毒素の毒性発現の分子メカニズムの解明とその活性の制御

第24回日本蛋白質科学会年会 2024年6月12日(札幌); 2P-140.

加藤晃一, 谷中冴子【招待講演】

抗体医薬品の高次構造評価に向けた非標識 NMR 法の開発と応用

第24回日本蛋白質科学会年会 2024年6月13日(札幌); WS9-4.

木吉真人, チホン ソン, 谷中冴子, 加藤晃一, 村田和義, 石井明子

クライオ電子顕微鏡を用いた抗体医薬品の立体構造解析

第 24 回 日本蛋白質科学会年会 2024 年 6 月 13 日 (札幌) ; WS9-5.

矢木真穂【招待講演】

クマムシ由来 CAHS1 タンパク質の脱水に伴う繊維状コンデンセートの形成

第 24 回 日本蛋白質科学会年会 2024 年 6 月 13 日 (札幌) ; WS12-7.

高木克樹, 矢木宏和, 矢木真穂, 加藤晃一

Alphafold データベースによるヒト糖転移酵素のドメイン構造の解析

第 27 回 比較グライコーム研究会 2024 年 6 月 22 日 (名古屋)

Maho Yagi-Utsumi, Satoru G. Itoh, Yui Kanaoka, Shogo Miyajima, Katsuhiko Yanagisawa, Katsuyuki Nishimura, Hisashi Okumura, Takayuki Uchihashi, and Koichi Kato
Deciphering the Role of GM1 Ganglioside-Bound A β Species in Alzheimer's Disease: Insights from Monoclonal Antibody 4396C and Advanced Biophysical Techniques
21st IUPAB Congress 2024 2024 年 6 月 28 日 (京都) ; 28P-058.

矢木真穂

アミロイド形成の分子機構の解明

特別研究奨励費 令和 6 年度 成果報告会 2024 年 7 月 3 日 (名古屋)

加藤晃一【招待講演】

糖タンパク質の超階層的設計原理の探究

創価大学糖鎖生命システム融合研究所 (GaLSIC) 第 24 回コロキウム 2024 年 7 月 5 日 (八王子)

富田晃平, 矢木真穂, 矢木宏和, 谷中冴子, 加藤晃一

NMR を用いた抗体医薬のメチオニン残基の酸化評価

第 70 回 日本薬学会東海支部大会 2024 年 7 月 6 日 (名古屋) ; C-2-8-S.

Koichi Fukawa, Yuhsuke Ohmi, Keiko Furukawa, Oriette Ajima, Kei Kaneko, Hiromune Ando, Hirokazu Yagi, Akira

Togayachi, and Ken Kitajima

Mechanisms for structures and functions of glycosyltransferases based on the gene mutation in glycolipid deficiency cases

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024 年 7 月 16 日 (名古屋) ; P-1.

Jinbo Shim, Masaharu Takemura, Ikuko Yokota, Hirokazu Yagi, Jun-ichi Furukawa, and Koichi Kato

Characterization of unique glycans in giant virus

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024 年 7 月 16 日 (名古屋) ; P-2.

Nozomi Ishii, Takumi Yamaguchi, Ichiro Matsuo, and Koichi Kato

Evaluation of glycan dynamics using synthetic N-glycans

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024 年 7 月 16 日 (名古屋) ; P-5.

Satoshi Ninagawa, Hirokazu Yagi, Koichi Kato, and Kazutoshi Mori

How is the fate of glycoproteins determined in the endoplasmic reticulum

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024 年 7 月 16 日 (名古屋) ; P-19.

Takumi Yamaguchi, Hiroaki Tatsuoka, Koichi Kato, and Sairam S. Mallajosyula

Capturing the hydration dynamics of oligosaccharides using molecular simulations and NMR measurements

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-23.

Kenji Uchimura, Yoshiko Takeda-Uchimura, Shiori Go, Hirokazu Yagi, Kazuchika Nishitsuji, Hiroyuki Kaji, Yann Guérardel, and Kenji Kadomatsu

Analysis of 5D4-reactive sialylated and sulfated glycans found in microglia in neurodegenerative diseases

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-30.

Hirokazu Yagi, Taiki Saito, Seigo Tateo, Miho Nishio, Satoshi Kusumi, Akihiko Nakano, Takuro Tojima, Daisuke Koga, and Koichi Kato

Mapping glycosyltransferase distribution in the sub-Golgi regions of mammalian cells

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-60.

Seigo Tateo, Miho Nishio, Taiki Saito, Kazuki Ikeda, Hirokazu Yagi, and Koichi Kato

Investigating the Sub-Golgi Localization Mechanisms of Glycosyltransferases

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-68.

Yue Zhang, Koichi Kato, and Takumi Yamaguchi

Conformational differences in high mannose-type oligosaccharides related to glycoprotein quality control system

GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-119.

加藤晃一, 谷中冴子【招待講演】

非標識 NMR

令和6年度AMED創薬基盤推進研究事業「先端的バイオ医薬品の最適な実用化促進のためのCMC分野における創薬基盤技術の高度化に関する研究」第1回全体班会議 2024年8月1日(川崎)

Saeko Yanaka and Koichi Kato

Investigating the Effect of Glycan Modification on the Structure and Dynamics of IgG-Fc

ICMRBS 2024 2024年8月19日, 22日(Seoul); 16-01, 16-0990.

Maho Yagi-Utsumi, Satoru G. Itoh, Hisashi Okumura, Katsuhiko Yanagisawa, Koichi Kato, and Katsuyuki Nishimura

The Double-Layered Structure of Amyloid- β Assemblage on GM1-Containing Membranes Catalytically Promotes Fibrillization

ICMRBS 2024 2024年8月20日(Seoul); 7-0426.

Koichi Kato and Saeko Yanaka【招待講演】

Exploring Structural Glycobiology: Integrating NMR and Computational Approaches to Illuminate Antibody Functions

ICMRBS 2024 2024年8月21日(Seoul); 8-0590.

Saeko Yanaka, Koichi Kato【招待講演】

Biophysical characterization of dynamic structures and interactions of immunoglobulin G glycoproteins as therapeutic antibodies

第8回国際シンポジウム「NMR創薬」2024年8月26日(横浜)

加藤晃一【招待講演】

生きているとは何か？ ExCELLS

スピン生命フロンティア Spin-L「若手の会」第1回 リトリート 2024年9月11日（岡崎）

Maho Yagi-Utsumi, Saeko Yanaka, and Koichi Kato

Dynamical ordering of amyloid fibril formation

スピン生命フロンティア Spin-L「若手の会」第1回 リトリート 2024年9月11日（岡崎）

Maho Yagi-Utsumi, Saeko Yanaka, and Koichi Kato

Exploration of molecular networks involved in tardigrade anhydrobiosis

スピン生命フロンティア Spin-L「若手の会」第1回 リトリート 2024年9月11日（岡崎）

立尾清悟，西尾美穂，齋藤泰輝，池田和貴，矢木宏和，加藤晃一

ゴルジ体における糖転移酵素の局在制御機構の探査

第43回 日本糖質学会年会 2024年9月13日（横浜）；2C-01B.

Methanee Hiranyakorn, Saeko Yanaka, Atsuji Kodama, Shogo Iwamoto, Asako Hoshino, Koichi Kato, and Shino Manabe

Chemo-enzymatic N-glycan Engineering of IgG for enhanced Fcγ RIIIa binding and therapeutic development

第43回 日本糖質学会年会 2024年9月13日（横浜）；2B-04A.

Jinbo Shim, 矢木宏和，黒河内政樹，矢木真穂，古川潤一，武村政春，加藤晃一

巨大ウイルスの糖鎖修飾プロファイル

第43回 日本糖質学会年会 2024年9月14日（横浜）；P-119.

高木 励，立尾清悟，加藤晃一，矢木宏和

ファージディスプレイを用いた抗グリセロールリン酸抗体の高機能化に向けての検討

第20回「若手のカフォーラム」2024年9月21日（豊明）；P-11.

梶田大起，梶 裕之，藤田盛久，加藤晃一，矢木宏和

シアル酸転移酵素およびグルクロン酸転移酵素のクライアントタンパク質の同定

第20回「若手のカフォーラム」2024年9月21日（豊明）；P-12.

Jinbo Shim, 矢木宏和，黒河内政樹，矢木真穂，古川潤一，武村政春，加藤晃一

巨大ウイルスのユニークな糖鎖修飾プロファイルの比較解析

第20回「若手のカフォーラム」2024年9月21日（豊明）；P-13.

Koichi Kato【招待講演】

Dynamic glycan-protein interplays controlling the fates and functions of glycoproteins

2024 Frontier Bioorganization Forum 2024年9月21日（Taipei）

Maho Yagi-Utsumi【招待講演】

Biophysical characterization of protein assemblies with physiological and pathological interests

2024 Frontier Bioorganization Forum 2024年9月22日（Taipei）

Saeko Yanaka, Koichi Kato【招待講演】

Unveiling Dynamic Interactions in IgG Glycoproteins: A Biophysical Approach for

Therapeutic Antibody Design

Japan-UK Strategic Partnership Workshop, Quantum Sensing in Biology - Spins for Sensing, Sensing of Spins

2024年9月24日（東京）

矢木真穂【招待講演】

アルツハイマー病の解明に向けて：宇宙実験で見た新たなアミロイド構造

第27回 SMJYC マンスリーウェビナー 2024年9月24日（WEB）

矢木宏和, 立尾清悟, 齋藤泰輝, 西尾美穂, 戸島拓郎, 甲賀大輔, 加藤晃一
哺乳類細胞における糖転移酵素のサブゴルジ局在の解明

第33回 日本バイオイメージング学会学術集会 2024年9月29日（東京）；P-26.

Methanee Hiranyakorn, Saeko Yanaka, Atsuji Kodama, Shogo Iwamoto, Asako Hoshinoo, Koichi Kato, and Shino Manabe

Elucidating the impact of *N*-glycan on IgG and FcγRIIIa binding affinity via chemoenzymatic strategy for producing homogeneous asymmetric glycosylated IgG

Asia's leading Antibody Engineering & Therapeutics conference 2024年10月21-23日（京都）

加藤晃一【招待講演】

糖鎖科学を基軸とする物質-生命協会探査の進展

物質-生命の境界探査 PF 報告会 2024年10月3日【オンライン開催】

真鍋法義, 大崎暁斗, 兒玉篤治, 内山 進, 内橋貴之, 加藤晃一, 山口芳樹

Dectin-1 のリガンド結合指向性とオリゴマー形成過程の解析

第18回 東北糖鎖研究会 2024年10月5-6日（仙台）

矢木真穂

複雑環境下におけるタンパク質分子集合の解明

名市大版 100人論文 2024年10月29日-11月1日（名古屋）；No.38.

加藤晃一【招待講演】

緊急シンポジウム「日本の NMR コミュニティにおける喫緊の課題について」

話題提供 1「総論」

第63回 NMR 討論会 2024年10月30日（札幌）

林成一郎, 谷中冴子, 兒玉篤治, 宮ノ入洋平, 加藤晃一

抗体医薬の高機能化に向けた CL ドメインの NMR 解析

第63回 NMR 討論会 2024年10月1日（札幌）；P19.

Taiki Saito, Tateo Seigo, Shungo Adachi, Tojima Takuro, Hirokazu Yagi, and Koichi Kato

【招待講演】

Distinct Views of the Secretion Pathway: Insights from Protein Network Analysis via Proximity Labeling

第97回 日本生化学会大会 2024年11月6日（横浜）；1S05M-04.

加藤晃一

ゴルジ体の動態解明に基づく糖鎖修飾の制御

CREST「細胞内現象の時空間ダイナミクス」研究領域 第5回 領域会議
2024年11月16日(東京); 2-3.

立尾清悟, 矢木宏和, 齋藤泰輝, 西尾美穂, 足達俊吾, 戸島拓郎, 中野明彦, 加藤晃一
ゴルジ体における糖タンパク質の糖鎖修飾プログラムの解説
CREST「細胞内現象の時空間ダイナミクス」研究領域 第5回 領域会議
2024年11月16日(東京); 2-26B.

加藤晃一【招待講演】
糖鎖の4次元構造とゴルジ体のダイナミクス
第21回 糖鎖科学コンソーシアムシンポジウム 2024年11月19日(福島)

Methanee Hiranyakorn, Saeko Yanaka, Atsuji Kodama, Shogo Iwamoto, Asako Hoshinoo,
Koichi Kato and Shino Manabe
N-glycan engineering of rituximab modulates FcγRIIIa binding affinity through
homogeneous N-glycan modifications
第3回日本抗体学会学術大会 2024年12月9日(仙台); Po-089.

小関悠希, 山口祐希, 青山道彦, 多田 稔, 妹尾暁暢, 石井明子, 内山 進, 内橋貴之, 加藤晃
一, 谷中冴子, カアベイロホセ
ヒンジ領域のPro230がIgG1の高次構造と機能に与える影響
Effect of Pro230 in the hinge region on architecture and function of IgG1
第3回日本抗体学会学術大会 2024年12月9日(仙台); Po-100.

高橋 史, 妹尾暁暢, 青山道彦, 多田 稔, 石井明子, 加藤晃一, 谷中冴子, カアベイロホセ
Fcγ受容体とIgGのFab領域における相互作用の解析
Analysis of the interaction between the Fcγ receptor and the Fab region of IgG
第3回日本抗体学会学術大会 2024年12月9日(仙台); Po-140.

加藤晃一【招待講演】
NMRプラットフォーム事業紹介: 生命創成探究センター (ExCELLS)
NMRプラットフォームシンポジウム 2024 2024年12月16日(秋葉原)

(特許)

なし

【分子生物薬学分野】

(原報)

Ozaki T, Sugie T, Suzuki Y, Uchimura K, Suzui M, Sakamoto K, *Shirane, M, and
Kadomatsu K.

Systemic administrations of protamine heal subacute spinal cord injury in mice.

Neurosci Res. S0168-0102(24)00151 (2024) [IF: 2.4]

<https://doi.org/10.1016/j.neures.2024.12.001>

*Shirane M.

Pathogenic contribution of cholesteryl ester accumulation in the brain to neurodegenerative disorders.

Neural Regen Res. 19(10):2099 (2024) [IF: 5.9]

<https://orcid.org/0000-0002-8297-9245>

(総説・著書・総合論文など)

該当無し

(学会発表)

白根 道子【招待講演】

脳内コレステロールエステル蓄積と脳機能不全の関連機構

2023 年度先端モデル動物支援プラットフォーム AdAMS 成果発表会

2024 年 2 月 9 日 (滋賀)

白根 道子【招待講演】

神経精神疾患における脳内脂質蓄積と炎症の関連機構

小野医学研究助成第 35 回成果発表会

2024 年 6 月 8 日 (大阪)

白根 道子【招待講演】

リポタンパク質形成における APOE と PDZD8 の関連

第 3 回 APOE 研究会

2024 年 9 月 28 日 (東京)

Michiko Shirane【招待講演】(英語)

Mechanisms underlying lipid metabolism in the regulation of brain function.

第 97 回日本生化学会大会、シンポジウム「メンブレンコンタクトサイトが制御するオルガネラ動態」

2024 年 11 月 8 日 (横浜)

Michiko Shirane【招待講演】(英語)

Regulatory mechanism underlying lipid metabolism in brain function.

第 47 回日本分子生物学会年会、シンポジウム「生体分子の凝集・伝播機構と治療ツール開発

への展開」

2024年11月29日（福岡）

Michiko Shirane【招待講演】（英語）

Regulatory mechanism underlying lipid metabolism in brain function

2024 NCU contact points meeting

2024年12月12日（名古屋）

向江 風（M2）、山本敬太郎、白根 道子

TMEM55Bによる小胞体リソソーム間のカルシウム調節

第87回 日本生化学会 中部支部例会、一般演題、ポスター発表

2024年5月25日（岐阜）

眞木 穂香（M1）、和田 万理子、北野 ひかり、森杉 優美、白根 道子

PDZD8欠損マウスの脳内炎症とアルツハイマー病との関連

第87回 日本生化学会 中部支部例会、一般演題、ポスター発表

2024年5月25日（岐阜）

富田宥人（B4）、白根 道子

脳内アミロイド蓄積の定量解析法の開発

第87回 日本生化学会 中部支部例会、一般演題、ポスター発表

2024年5月25日（岐阜）

村端思実（B4）、白根 道子

APOEによるリポタンパク質制御の解析法の開発

第87回 日本生化学会 中部支部例会、一般演題、ポスター発表

2024年5月25日（岐阜）

眞木 穂香（M1）、和田 万理子、北野 ひかり、森杉 優美、白根 道子

認知機能障害と脳内炎症の関連メカニズム

第70回日本薬学会東海支部大会、一般講演、口頭発表

2024年7月6日（名古屋）

神野 愛生（B5）、白根 道子

APOE-PDZD8系とアルツハイマー病の関連メカニズム

第70回日本薬学会東海支部大会、一般講演、口頭発表

2024年7月6日（名古屋）

宮川 和樹 (B5)、白根 道子

PDZD8 欠損マウスの脳におけるリポタンパク質異常

第70回日本薬学会東海支部大会、一般講演、口頭発表

2024年7月6日（名古屋）

Nagi MUKAE (M2), Keitaro YAMAMOTO, Wakana OKUDA, and Michiko SHIRANE

TMEM55B promotes calcium induced calcium release between the endoplasmic reticulum and lysosomes

Symposium of Pharmaceutical Sciences 2024 Nagoya、ポスター発表（英語）

2024年9月15日（名古屋）

Honoka MAKI (M1), Mariko WADA, Hikari KITANO, Yumi MORISUGI, and Michiko SHIRANE

The mechanism of inflammation related to Alzheimer's disease in the brain of PDZD8-deficient mice

Symposium of Pharmaceutical Sciences 2024 Nagoya、ポスター発表（英語）

2024年9月15日（名古屋）

石渡友紀乃 (B6)、白根 道子

PDZD8 とリポタンパク質リモデリングの関連解析

薬学会東海支部合同学術大会 2024、一般演題、口頭発表

2024年10月27日（岐阜）

森杉優美 (B6)、白根 道子

脳機能における PDZD8 の関連メカニズムの解析

薬学会東海支部合同学術大会 2024、一般演題、口頭発表

2024年10月27日（岐阜）

【薬物送達学分野】

(原報)

Jin Liu, Tatsuaki Tagami, Koki Ogawa, Tetsuya Ozeki
Biological and Pharmaceutical Bulletin
47(1) 272-278. (2024).

Mingyue Gao, Tatsuaki Tagami, Koki Ogawa, Tetsuya Ozeki
Journal of Drug Delivery Science and Technology
93 105364 (2024)

Koki Ogawa, Otowa Aikawa, Tatsuaki Tagami, Takaaki Ito, Kohei Tahara, Shigeru
Kawakami, Tetsuya Ozeki
International Journal of Pharmaceutics
124632 (2024)

Toma Shinkai, Koki Ogawa, Tatsuaki Tagami, Tetsuya Ozeki
Journal of Nanoparticle Research
26(265) (2024)

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

小川昂輝、佐藤一輝、加藤瑤子、鷺尾拓洋、阿部憲太郎、田上辰秋、池崎秀和、尾関哲也
名古屋市立大学薬学部の製剤学実習における味覚センサー導入の試み～第12報～
日本薬学会第144年会 2024年3月29日(横浜)

新海斗馬、小川昂輝、田上辰秋、尾関哲也

mRNA 封入脂質ナノ粒子の胆汁酸修飾による小腸での細胞内取り込みの改善
日本薬学会第 144 年会 2024 年 3 月 29 日 (横浜)

Fadilah ASRIL, Koki OGAWA, Tatsuaki TAGAMI, Tetsuya OZEKI
Development of Gold Nanostars Coated with Mesoporous Silica for Laser-Triggered Chemo-
Photothermal Therapy
14th Biennial Globalization of Pharmaceuticals Education Network (GPEN) July 14th-
17th 2024, University of Copenhagen, Denmark

小川昂輝、三宅慧、田上辰秋、尾関哲也
Selection of organic solvent impacts the function of mRNA-LNP prepared by the solvent
dilution method;
Pyridine produces highly functional mRNA-LNPs
第 40 回日本 DDS 学会 2024 年 7 月 11 日 (つくば)

多孔質カチオン性 PLGA マイクロ粒子によるタンパク質医薬品の徐放製剤化
省エネルギーに貢献する粒子設計・粉体プロセスの薬工連携研究会 2024 年度若手研究者討論
会
2024 年 9 月 5 日 (静岡)
高 明月、小川 昂輝、田上 辰秋、尾関 哲也
コンドロイチン硫酸ナトリウムを担体としたレスベラトロール含有アルブミンナノコンポジ
ットの調製と吸入粉末剤としての評価
省エネルギーに貢献する粒子設計・粉体プロセスの薬工連携研究会 2024 年度若手研究者討論
会
2024 年 9 月 5 日 (静岡)

Toma Shinkai, Koki Ogawa, Maiko Tsuda, Tetsuya Ozeki
Effect of external environment pH on the characteristics of mRNA-encapsulated lipid
nanoparticles
日中国際シンポジウム、2024 年 9 月 15 日 (名古屋)

Jayita DAS, KOKI Ogawa and TETSUYA Ozeki
Toward hydrogel-based photothermal therapy against skin cancer: fabrication of Ag-
nanoparticles and 3D-printed hydrogel scaffold
日中国際シンポジウム、2024 年 9 月 15 日 (名古屋)

Hemat MOSTAFA, Hamid ALGHURABI, TATSUAKI Tagami, KOKI Ogawa, TETSUYA Ozeki

Preparation and characterization of liposome containing tosufloxacin-cyclodextrin inclusion complex

日中国際シンポジウム、2024年9月15日（名古屋）

Fadilah ASRIL, Koki OGAWA, Tatsuaki TAGAMI, Tetsuya OZEKI

Development of Gold Nanostars Coated with Mesoporous Silica for Laser-Triggered Chemophotothermal Therapy

日中国際シンポジウム、2024年9月15日（名古屋）

Kazuki SATO, Koki OGAWA, Tatsuaki TAGAMI, Tetsuya OZEKI

Preparation of gold nanostars/extracellular vesicles nanocomplex and their photothermal therapeutic effect on cancer cell

日中国際シンポジウム、2024年9月15日（名古屋）

小川昂輝、相川音和、田上辰秋、尾関哲也

凍結保護剤を用いない mRNA-LNP 吸入粉末製剤化法の開発

日本薬剤学会第 39 年会 2024 年 5 月 25 日（東京）

三宅慧、小川昂輝、田上辰秋、尾関哲也

調製時の有機溶媒組成に着目した mRNA 封入脂質ナノ粒子の高機能化に関する研究

日本薬剤学会第 39 年会 2024 年 5 月 25 日（東京）

山下凜、小川昂輝、田上辰秋、尾関哲也

がん光温熱療法への応用を目指した鉄白金ナノ粒子の設計：高温反応を必要としない調製法の開発

日本薬剤学会第 39 年会 2024 年 5 月 25 日（東京）

【多階層生命機能解析学分野】

(原報)

Saeko Yanaka, Hiroki watanabe, Rina Yogo, Mesayamas Kongsema, Sachiko Kondo, Hirokazu Yagi, Takayuki Uchihashi, and Koichi Kato

Quantitative Analysis of Therapeutic Antibody Interactions with Fcγ Receptors Using High-Speed Atomic Force Microscopy

Biol Pharm Bull. **47**, 1, 334-338 (2024).

Marietta Fabiano, Naoto Oikawa, Anja Kerksiek, Jun-ichi Furukawa, Hirokazu Yagi, Koichi Kato, Ulrich Schweizer, Wim Annaert, Jongkyun Kang, Jie Shen, Dieter Lütjohann, and Jochen Walter

Presenilin deficiency results in cellular cholesterol accumulation by impairment of protein glycosylation and NPC1 function

Int J Mol Sci. **25**, 10, 5417 (2024).

Saeko Yanaka, Atsuji Kodama, Shigetaka Nishiguchi, Rina Fujita, Jiana Shen, Pornthip Boonsri, Duckyong Sung, Yukiko Isono, Hirokazu Yagi, Yohei Miyanoiri, Takayuki Uchihashi, and Koichi Kato

Identification of potential C1-binding sites in the immunoglobulin CL domains

Int Immunol. **36**, 8, 405-412 (2024).

Satoshi Nakagawa, Hiroyuki Imachi, Shigeru Shimamura, Saeko Yanaka, Hirokazu Yagi, Maho Yagi-Utsumi, Hiroyuki Sakai, Shingo Kato, Moriya Ohkuma, Koichi Kato, and Ken Takai

Characterization of protein glycosylation in an Asgard archaeon

BBA Advances. **6**, 100118 (2024).

Hirokazu Yagi, Seigo Tateo, Taiki Saito, Yusaku Ohta, Emiko Nishi, Saemi Obitsu, Tatsuya Suzuki, Supaphorn Seetaha, Charles Hellec, Akihiko Nakano, Takuro Tojima, and Koichi Kato

Deciphering the sub-Golgi localization of glycosyltransferases via 3D super-resolution imaging

Cell Struct Funct. **49**, 47-55 (2024).

Tadashi Satoh, Maho Yagi-Utsumi, Nozomi Ishii, Tsunehiro Mizushima, Hirokazu Yagi, Ryuichi Kato, Yuriko Tachida, Hiroaki Tateno, Ichiro Matsuo, Koichi Kato, Tadashi Suzuki, and Yukiko Yoshida

Structural basis of sugar recognition by SCFFBS2 ubiquitin ligase involved in NGLY1 deficiency

FEBS Lett. **598**, 2259-2268 (2024).

Satoshi Nakagawa, Hiroyuki D. Sakai, Shigeru Shimamura, Yoshiki Takamatsu, Shingo Kato, Hirokazu Yagi, Saeko Yanaka, Maho Yagi-Utsumi, Norio Kurosawa, Moriya Ohkuma, Koichi Kato, and Ken Takai

N-linked protein glycosylation in Nanobdellati (formerly DPANN) archaea and their hosts

J. Bacteriol. **206**, e00205-24 (2024).

Hirokazu Yagi, Rino Yamada¹, Taiki Saito, Rena Honda, Rio Nakano, Kengo Inutsuka,

Seigo Tateo, Hideo Kusano, Kumiko Nishimura, Saeko Yanaka, Takuro Tojima, Akihiko Nakano, Jun-ichi Furukawa, Maho Yagi-Utsumi, Shungo Adachi, and Koichi Kato
Molecular tag for promoting N-glycan maturation in the cargo receptor-mediated secretion pathway
iScience **27**, 111457 (2024).

Satoshi Ninagawa, Masaki Matsuo, Deng Ying, Shuichiro Oshita, Shinya Aso, Kazutoshi Matsushita, Mai Taniguchi, Akane Fueki, Moe Yamashiro, Kaoru Sugasawa, Shunsuke Saito, Koshi Imami, Yasuhiko Kizuka, Tetsushi Sakuma, Takashi Yamamoto, Hirokazu Yagi, Koichi Kato, and Kazutoshi Mori
UGGT1-mediated reglucosylation of N-glycan competes with ER-associated degradation of unstable and misfolded glycoproteins
eLife. **12**, RP93117 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

矢木宏和
糖タンパク質における N 型糖鎖修飾の構造解析
【実験医学別冊】疾患研究につながる オルガネラ実験必携プロトコール(2024).

矢木宏和, 加藤晃一
技術講座：糖鎖構造のオミクス解析
細胞 **56**, No.4, 30-32 (2024).

Daisuke Koga, Satoshi Kusumi, Hirokazu Yagi, and Koichi Kato
Three-dimensional analysis of the intracellular architecture by scanning electron microscopy
Microscopy, **73**, 215-225 (2024).

Hirokazu Yagi, Katsuki Takagi, and Koichi Kato
Exploring domain architectures of human glycosyltransferases: Highlighting the functional diversity of non-catalytic add-on domains
Biochim. Biophys. Acta –General Subjects, **1868**, 130687 (2024).

Kiyoko F Aoki-Kinoshita, Hiromune Ando, Kiyohiko Angata, Morihisa Fujita, Jun-ichi Furukawa, Hiroyuki Kaji, Koichi Kato, Ken Kitajima, Yasuhiko Kizuka, Yusuke Matsui, Kazuki Nakajima, Shoko Nishihara, Tetsuya Okajima, Kazuma Sakamoto, Chihiro Sato, Morten Thaysen-Andersen, Akira Togayachi, Hirokazu Yagi, and Kenji Kadomatsu
The Human Glycome Atlas Project for cataloging all glycan-related omics data in human
Glycobiology, cwae052 (2024).

(学会発表)

Saeko Yanaka, Maho Yagi-Utsumi, Hirokazu Yagi, Atsuji Kodama, Ray Burton-Smith, Kazuyoshi Murata, Masaharu Takemura, Koichi Kato
Exploration of molecular networks involved in the formation of giant viruses
第 6 回 ExCELLS シンポジウム 2024 年 1 月 22 日 (岡崎) ; ポスター#50.

Hirokazu Yagi, Seigo Tateo, Taiki Saito, and Koichi Kato

Technical basis for compilation of spatiotemporal atlas of Golgi apparatus
第 6 回 ExCELLS シンポジウム 2024 年 1 月 22 日 (岡崎) ; ポスター#61.

矢木宏和

ジストログリカン糖鎖の伸長制御機構とその機能

第 2 回タンパク質シンポジウム～次世代生命科学推進のためのタンパク質科学のニュー・フロンティア～ 2024 年 1 月 25 日 (東京)

矢木宏和【招待講演】

がん、免疫細胞におけるジストログリカン糖鎖の伸長制御とその役割

名城大学 治性疾患発症メカニズム研究センター・第 7 回セミナー 2024 年 1 月 27 日 (名古屋)

Seigo Tateo, Taiki Saito, Shiori Yamamoto, Hirokazu Yagi and Koichi Kato

The multimodal omics approach for constructing a comprehensive Golgi atlas

2024 Korea-Japan Joint Meeting for Molecular Sciences 2024 年 2 月 1 日 (博多)

Taiki Saito, Seigo Tateo, Shungo Adachi, Hirokazu Yagi, and Koichi Kato

Distinct views of secretion pathway emerge from protein network analysis

2024 Korea-Japan Joint Meeting for Molecular Sciences 2024 年 2 月 1 日 (博多)

矢木宏和

ジストログリカンの糖鎖伸長終結因子グリセロールリン酸による生理的調節機能とがん悪性化機構に関する研究開発

令和 5 年度プロテオスタシス領域会議 2024 年 2 月 7 日 (東京)

矢木宏和

糖タンパク質糖鎖の生合成機構およびその機能研究

2023 年度 NCU ライフサイエンス・IBS 合同リトリート 2024 年 3 月 14 日 (掛川)

関 健仁, 山口拓実, 矢木宏和, 加藤晃一

糖鎖の動的立体構造アンサンブルと糖転移酵素の相互作用評価法の開発

日本化学会 第 104 春季年会 2024 年 3 月 19 日 (船橋) ; H934-2am-03.

Hirokazu Yagi, Taiki Saito, Seigo Tateo, Miho Nishio, Satoshi Kusumi, Akihiko Nakano, Takuro Tojima, Daisuke Koga, and Koichi Kato

Sub-Golgi distribution analysis of glycosyltransferases in mammalian cells

Trafficking and Glycosylation at the Golgi apparatus 2024 年 4 月 18 日 (Sorrento) ; Poster no. C-18.

矢木宏和

構造解析を基軸とした糖タンパク質糖鎖の生合成課程および機能解析

和歌山県立医科大学特別セミナー 2024 年 6 月 20 日 (和歌山)

高木克樹, 矢木宏和, 矢木真穂, 加藤晃一

AlphaFold データベースによるヒト糖転移酵素のドメイン構造の解析

第 27 回 比較グライコーム研究会 2024 年 6 月 22 日 (名古屋)

矢木宏和

タンパク質に組み込まれた糖鎖修飾コードの解明と糖鎖修飾制御
JST 創発的研究支援事業 第3回「融合の場」一般公開プログラム 2024年7月3日(京都)

富田晃平, 矢木真穂, 矢木宏和, 谷中冴子, 加藤晃一
NMR を用いた抗体医薬のメチオニン残基の酸化評価
第70回 日本薬学会東海支部大会 2024年7月6日(名古屋); C-2-8-S.

Koichi Fukawa, Yuhsuke Ohmi, Keiko Furukawa, Ori T ajima, Kei Kaneko, Hiromune Ando, Hirokazu Yagi, Akira Togayachi, and Ken Kitajima
Mechanisms for structures and functions of glycosyltransferases based on the gene mutation in glycolipid deficiency cases
GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-1.

Jinbo Shim, Masaharu Takemura, Ikuko Yokota, Hirokazu Yagi, Jun-ichi Furukawa, and Koichi Kato
Characterization of unique glycans in giant virus
GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-2.

Satoshi Ninagawa, Hirokazu Yagi, Koichi Kato, and Kazutoshi Mori
How is the fate of glycoproteins determined in the endoplasmic reticulum
GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-19.

Kenji Uchimura, Yoshiko Takeda-Uchimura, Shiori Go, Hirokazu Yagi, Kazuchika Nishitsuji, Hiroyuki Kaji, Yann Guérardel, and Kenji Kadomatsu
Analysis of 5D4-reactive sialylated and sulfated glycans found in microglia in neurodegenerative diseases
GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-30.

Hirokazu Yagi, Taiki Saito, Seigo Tateo, Miho Nishio, Satoshi Kusumi, Akihiko Nakano, Takuro Tojima, Daisuke Koga, and Koichi Kato
Mapping glycosyltransferase distribution in the sub-Golgi regions of mammalian cells
GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-60.

Seigo Tateo, Miho Nishio, Taiki Saito, Kazuki Ikeda, Hirokazu Yagi, and Koichi Kato
Investigating the Sub-Golgi Localization Mechanisms of Glycosyltransferases
GLYCO-CORE SYMPOSIUM 2024 2024年7月16日(名古屋); P-68.

矢木宏和【招待講演】
ゴルジ体の時空間アトラスの編纂
第76回 日本細胞生物学会大会 2024年7月18日(つくば); 2D18.

立尾清悟, 西尾美穂, 齋藤泰輝, 池田和貴, 矢木宏和, 加藤晃一
ゴルジ体における糖転移酵素の局在制御機構の探査
第43回 日本糖質学会年会 2024年9月13日(横浜); 2C-01B.

森後碧玲, Anne Harduin-Lepers, 長江雅倫, 矢木宏和, 木塚康彦
糖転移酵素 GnT-IV family の遺伝子進化と酵素活性に関する研究
第43回 日本糖質学会年会 2024年9月13日(横浜); P-030.

Jinbo Shim, 矢木宏和, 黒河内政樹, 矢木真穂, 古川潤一, 武村政春, 加藤晃一
巨大ウイルスの糖鎖修飾プロファイル
第 43 回 日本糖質学会年会 2024 年 9 月 14 日 (横浜) ; P-119.

高木 励, 立尾清悟, 加藤晃一, 矢木宏和
ファージディスプレイを用いた抗グリセロールリン酸抗体の高機能化に向けての検討
第 20 回「若手のカフォーラム」2024 年 9 月 21 日 (豊明) ; P-11.

梶田大起, 梶 裕之, 藤田盛久, 加藤晃一, 矢木宏和
シアル酸転移酵素およびグルクロン酸転移酵素のクライアントタンパク質の同定
第 20 回「若手のカフォーラム」2024 年 9 月 21 日 (豊明) ; P-12.

Jinbo Shim, 矢木宏和, 黒河内政樹, 矢木真穂, 古川潤一, 武村政春, 加藤晃一
巨大ウイルスのユニークな糖鎖修飾プロファイルの比較解析
第 20 回「若手のカフォーラム」2024 年 9 月 21 日 (豊明) ; P-13.

矢木宏和, 立尾清悟, 齋藤泰輝, 西尾美穂, 戸島拓郎, 甲賀大輔, 加藤晃一
哺乳類細胞における糖転移酵素のサブゴルジ局在の解明
第 33 回 日本バイオイメージング学会学術集会 2024 年 9 月 29 日 (東京) ; P-26.

井ノ口仁一, 稲森啓一郎, 山口芳樹, 田口 周, 木下賢吾, 山本雅之, 西原祥子, 木下聖子, 梅谷内晶,
安形清彦, 佐藤ちひろ, 羽根正弥, 古川潤一, 石田秀治, 矢木宏和
日本人における SIGLEC ファミリー遺伝子多型と発症リスク
第 18 回 東北糖鎖研究会 2024 年 10 月 5-6 日 (仙台)

矢木宏和
糖鎖の生合成過程および生命機能を読み解く！
名市大版 100 人論文 2024 年 10 月 29 日-11 月 1 日 (名古屋) ; No.35.

齋藤泰輝, 立尾清吾, 足達俊吾, 戸島拓郎, 矢木宏和, 加藤晃一
近接依存性標識法を用いた分泌経路における分子ネットワークの解析
第 97 回 日本生化学会大会 2024 年 11 月 6 日 (横浜) ; 1S05M-04.

森後碧玲, Anne H. Harduin-Lepers, 長江雅倫, 矢木宏和, 木塚康彦
糖転移酵素 GnT-IV family の遺伝子進化と酵素活性に関する研究
第 97 回 日本生化学会大会 2024 年 11 月 6 日 (横浜) ; 1T09-09, 1P-028.

矢木宏和
分泌経路における糖鎖修飾の制御機構
第 97 回 日本生化学会大会 2024 年 11 月 7 日 (横浜) ; 2S04M-06.

立尾清悟, 矢木宏和, 齋藤泰輝, 西尾美穂, 足達俊吾, 戸島拓郎, 中野明彦, 加藤晃一
ゴルジ体における糖タンパク質の糖鎖修飾プログラムの解読
CREST「細胞内現象の時空間ダイナミクス」研究領域 第 5 回 領域会議
2024 年 11 月 16 日 (東京) ; 2-26B.

矢木宏和

PCYT2-Mediated Glycerol Phosphate Modification of α -Dystroglycan Impairs Matriglycan Elongation and Promotes Colorectal Cancer Metastasis

2024 NCU 拠点校シンポジウム 未来につながる研究～よりよい社会を目指して～

2024年12月13日（名古屋）

矢木宏和【招待講演】

糖鎖の構造解析を基軸とした糖タンパク質の機能研究

金沢大学新学術創成研究機構 異分野融合セミナー 2024年12月20日（金沢）

（特許）

なし

【生薬学分野】

(原報)

Muneshige Tokugawa, Yasumichi Inoue, Hiromasa Aoki, Chiharu Miyajima, Kan'ichiro Ishiuchi, Kento Tsurumi, Chisane Kujirai, Daisuke Morishita, Michiyo Matsuno, Hajime Mizukami, Masaki Ri, Shinsuke Iida, Toshiaki Makino, Mineyoshi Aoyama, Hidetoshi Hayashi

Involvement of cardiac glycosides targeting Na/K-ATPase in their inhibitory effects on c-Myc expression via its transcription, translation, and proteasomal degradation.

J. Biochem., **175**, 253-263 (2024).

Madoka Niiya, Yota Shimato, Takamasa Ohno, Toshiaki Makino

Effects of *Hovenia dulcis* fruit and peduncle extract on alcohol metabolism.

J. Ethnopharmacol., **321**, 117541 (2024).

Xiaohang Zhou, Hui Sun, Junling Ren, Guangli Yan, Le Yang, Honglian Zhang, Haitao Lu, Xinghua Li, Toshiaki Makino, Fengting Yin, Jing Li, Xijun Wang

Mangxiao (purified mirabilite, a mineral crude drug) significantly inhibits the occurrence of colorectal cancer by regulating the *Lactobacillus*-bile acid-intestinal farnesoid X receptor axis based on multi-omics integration analysis.

MedComm. **5**, e556 (2024).

Ryota Sakoda, Kan'ichiro Ishiuchi, Tetsuhiro Yoshino, Yuna Tsunoo, Takao Namiki, Keiko Ogawa-Ochiai, Kiyoshi Minamizawa, Koichi Fukunaga, Kenji Watanabe, Toshiaki Makino
3-*epi*-18 β -glycyrrhetic acid or its glucuronide, the metabolites of glycyrrhizinic acid with individual differences, correlated with diagnostic marker for licorice-induced pseudoaldosteronism in humans

Drug Metab. Dispos., **52**, 1407-1416 (2024).

牧野利明, 関根麻理子, 嶋田沙織, 田中耕一郎, 地野充時, 田原英一, 鍋島茂樹
漢方診療における漢方製剤の多剤併用 (ポリファーマシー) 問題～医療安全委員会報告～
日本東洋医学雑誌, **75**, 144-151 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

牧野利明, 南正明
辛夷清肺湯の基礎・臨床研究に関する最近の動向
漢方と最新治療, **33**, 39-48 (2024).

牧野利明
半夏のイガイガの原因は, 針状結晶中のレクチンである可能性が高い
漢方の臨床, **71**, 64-65 (2024).

(学会発表)

牧野利明
偽アルドステロン症発症の個体差に関する研究
小林製薬社内研修, 2024年 2月20日 (大阪) .

高嶋柚衣, 牧野利明, 寺坂和祥
カラスビシャク培養細胞系の確立と針状結晶形成能力の変化
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 29-31 日 (横浜) .

大山真優, 牧野利明, 寺坂和祥
センナの植物二次代謝糖転移酵素の探索とアントラキノン配糖化活性の解析
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 29-31 日 (横浜) .

小川摩子, 三浦謙治, 牧野利明, 寺坂和祥
ベンサミアナタバコ発現系を用いたモミジバダイオウ由来アントラキノン生合成関連遺伝子の機能解析
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 29-31 日 (横浜) .

石井脩斗, 小川美怜, 姜文平, 廣瀬大, 石内勘一郎
ヒカゲノカズラ科植物由来内生糸状菌 *Penicillium citreosulfuratum* LY111 より単離した新規ジケトピペラジン天然物の構造

日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 29–31 日 (横浜) .

Linfeng Liu, Mayu Onishi, Yuka Yoshii, Kaori Ambe, Toshiaki Makino, Masahiro Tohkin
Efficacy and safety of new class disease-modifying anti-rheumatic drugs: Bayesian and frequentist network meta-analysis

日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 29–31 日 (横浜) .

牧野利明

ISO/TC249 全体と WG5/JWG1 (伝統医学における用語と情報) に関する現状と報告
第 74 回日本東洋医学会学術総会, 2024 年 5 月 31 日–6 月 2 日 (大阪) .

牧野利明

初学者にもわかる一歩進んだ生薬総論
第 74 回日本東洋医学会学術総会, 2024 年 5 月 31 日–6 月 2 日 (大阪) .

寺坂和祥

植物特化代謝産物トランスポーターの探索と機能解析
第 18 回トランスポーター研究会年会, 2024 年 5 月 31 日 (静岡) .

牧野利明

漢方医学と中医学の違い
第 51 期東海漢方協議会入門講座, 2024 年 6 月 9 日 (名古屋) .

牧野利明

漢方薬の副作用に対処する
薬剤師のための漢方研修セミナー, 2024 年 6 月 13 日 (オンライン) .

牧野利明

利水薬 (祛湿薬)
名古屋市立大学病院漢方医学センターWeb 勉強会, 2024 年 6 月 20 日 (オンライン) .

牧野利明

五苓散の製造方法
第 24 回日本漢方交流会漢方薬剤師育成研修会, 2024 年 6 月 23 日 (名古屋) .

牧野利明

第 36 回東洋医学に関する学術研究報告会, 2024 年 6 月 29 日 (名古屋) .

山中翔悟, 平丸航太郎, 水野佑哉, 宮嶋ちはる, 石内勘一郎, 牧野利明, 松野倫代, 水上元, 井上靖道, 林秀敏

ミャンマー植物由来化合物による HRI 活性化を介したストレス応答性転写因子 ATF4 誘導機構の解析

第 70 回日本薬学会東海支部大会, 2024 年 7 月 6 日 (名古屋) .

Toshiaki Makino

3-*epi*-18 β -glycyrrhetic acid and its 30-*O*-glucuronide involves the development of licorice-induced pseudoaldosteronism in humans with individual differences

International Congress on Natural Products Research 2024, 2024 年 7 月 15 日 (Krakow, Poland) .

牧野利明

臨床生薬学

2024 年度医学生のための漢方医学セミナー, 2024 年 8 月 4 日 (大津) .

牧野利明

漢方薬と中薬の違いに関する研究

日本漢方協会漢方総合講座第 3 4 回, 2024 年 8 月 18 日 (東京) .

能瀬逸紀, 迫田凌太

附子剤の「散寒止痛」を科学する～牛車腎気丸の冷痛覚過敏改善を中心に～

第 5 回和漢医薬学会若手研究者フォーラム, 2024 年 8 月 23 日 (千葉) .

迫田凌太, 石内勘一郎, 吉野鉄大, 小川恵子, 南澤潔, 福永興壺, 渡辺賢治, 並木隆雄, 牧野利明【優秀発表賞】

甘草による偽アルドステロン症発症の個人差の原因と発症予測に向けた尿中マーカーの探索

第 41 回和漢医薬学会学術大会, 2024 年 8 月 24–25 日 (千葉) .

牧野利明

和漢薬研究の醍醐味

第 41 回和漢医薬学会学術大会, 2024 年 8 月 24 日 (千葉) .

大山真優, 牧野利明, 寺坂和祥

センナからの UGT72 サブファミリー配糖化酵素の単離と配糖化活性の解析

第 41 回 日本植物バイオテクノロジー学会 (仙台) 大会, 2024 年 8 月 30–9 月 1 日 (仙台) .

牧野利明

半夏のイガイガに関する研究

第 31 回北海道東洋医学シンポジウム, 2024 年 8 月 31 日 (千歳) .

Mayu Otaki, Yusuke Yamada, Wen-Ping Jiang, Dai Hirose, Kan'ichiro Ishiuchi

Structures of new polyketides isolated from *Hypoxylon* sp. LY94, a Lycopodiaceae-derived endophytic fungus

The 9th Nagoya, Gifu, Nanjing, Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024年 9月15–16日 (名古屋) .

Misato Ogawa, Kan'ichiro Ishiuchi, Shohei Miyata, Susumu Kitanaka

Structures of ingenan-type diterpenes isolated from the roots of *Euphorbia kansui*

The 9th Nagoya, Gifu, Nanjing, Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024年 9月15–16日 (名古屋) .

Shogo Yamanaka, Kotaro Hiramaru, Yuya Mizuno, Chiharu Miyajima, Kan'Ichiro Ishiuchi, Toshiaki Makino, Michiyo Matsuno, Hajime Mizukami, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi

Mechanism of induction of stress-responsive transcription factor ATF4 through HRI activation by compounds from Myanmar plant

The 9th Nagoya, Gifu, Nanjing, Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024年 9月15–16日 (名古屋) .

Toranosuke Narita, Aoi Yoshino, Toshiaki Makino, Kazuyoshi Terasaka

Substrate specificity of anthraquinone glucosyltransferase from *Rheum palmatum*

The 9th Nagoya, Gifu, Nanjing, Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024年 9月15–16日 (名古屋) .

Itsuki Nose, Taiki Amano, Tsukasa Fueki, Hisao Yamamura, Toshiaki Makino

The activity of *Pinellia tuber* raphides onto TRPA1 and the effect of ginger, organic acids

The 9th Nagoya, Gifu, Nanjing, Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024年 9月15–16日 (名古屋) .

XIN Jingxiao, Ryota Sakoda, Kan'ichiro Ishiuchi, Toshiaki Makino

Comparison of the pharmacological activities of glycyrrhizin and its human metabolites

The 9th Nagoya, Gifu, Nanjing, Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024年
9月15-16日（名古屋）。

Linfeng Liu, Kaori Ambe, Mayu Onishi, Yuka Yoshii, Toshiaki Makino, Masahiro Tohkin

Comparison of multiple disease-modifying antirheumatic drugs combination therapies with
methotrexate in rheumatoid arthritis

The 9th Nagoya, Gifu, Nanjing, Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences, 2024年
9月15-16日（名古屋）。

石内勘一郎, 大瀧真由, 山田佑典, 姜文平, 廣瀬大

ヒカゲノカズラ科植物由来内生糸状菌 *Hypoxylon* sp. LY94より単離した新規化合物の構造
日本生薬学会第70回年会, 2024年9月15-16日（大阪）。

小川美怜, 石内勘一郎, 宮田昇平, 北中進

甘遂由来ingenan型ジテルペンの構造研究

日本生薬学会第70回年会, 2024年9月15-16日（大阪）。

山田泰之, 清水優香, 小國哲, 村上佳久, 野村史夏, 松井俊樹, 土反伸和, 寺坂和祥, 佐藤文彦

ウマノスズクサが産生するアルカロイド生合成に関わる2つのO-メチル基転移酵素の機能解析
日本生薬学会第70回年会, 2024年9月15-16日（大阪）。

牧野利明

生薬・漢方薬の医療薬学的諸問題

鹿児島市薬剤師会研修会, 2024年 10月5日（鹿児島）。

牧野利明

半夏のイガイガに対する生姜による消失メカニズム

第14回日本中医薬学会学術総会, 2024年 10月6日（熊本）。

牧野利明

生薬の効能についての標準化案の提示

第57回日本漢方交流会全国学術総会名古屋大会, 2024年 10月13日（名古屋）。

牧野利明

温裏薬

名古屋市立大学病院漢方医学センターWeb勉強会, 2024年 10月17日 (オンライン) .

牧野利明

科学阐明传统医学的药能的尝试～附子, 石膏, 甘草, 朮, 等
成都大学特別セミナー, 2024年 10月 21日 (成都) .

牧野利明

科学阐明传统医学的药能的尝试～附子, 石膏, 甘草, 朮, 等
成都中医药大学特別セミナー, 2024年 10月 22日 (成都) .

牧野利明

甘草致假性醛固酮增多症的机制及其个体差异
四川大学特別セミナー, 2024年 10月 23日 (成都) .

牧野利明

Effect of traditional Chinese medicine on body temperature homeostasis
稳态医学学术会议: 在生物医学中的应用, 2024年 10月 26日 (深圳) .

牧野利明

甘草による副作用, 偽アルドステロン症の真の原因物質の探索
ミノファージェン (株) 社内研修, 2024年 10月 29日 (オンライン) .

牧野利明

日本和中国的传统医学和传统药物的区别
第十一届亚太民族植物学和民族药理学国际会议, 2024年 11月 2日 (杭州) .

牧野利明

秋の薬用植物園を歩く
名古屋市地域女性団体連絡協議会 (課題別リーダー研修) , 2024年 11月 14日 (名古屋) .

牧野利明

Heating or ginger extract reduces the content of *Pinellia ternata* lectin in the raphides of *Pinellia tuber*
2024 国际产学研用合作会议中药学分会, 2024年 11月 22日 (天津) .

豊福伸, 菱田吉明, 和田誠, 加納麻弓子, 中村祐太, 中川朋子, 浅井志高, 横田健一, 柳澤慶香,
迫田凌太, 牧野利明, 曾根正勝

グリチルレチン酸含有湿布を乱用した低 K 血症の診断に難渋した 1 例

第 34 回臨床内分泌代謝 update, 2024 年 11 月 29-30 日 (名古屋) .

牧野利明

Marker compound for the quality control of Chinese medicines can be chosen by its own
active compound 2024 世界传统医药大会, 2024 年 12 月 4 日 (北京) .

牧野利明

甘草致假性醛固酮增多症的机制及其个体差异

黒竜江中医药大学特別セミナー, 2024 年 12 月 5 日 (哈尔滨) .

牧野利明

漢方薬の副作用に対処する

第33回在宅漢方研究会, 2024年 12月7日 (オンライン) .

【衛生化学分野】

(原報)

Arisa Morikawa, Kaho Togawa, Reina Mukainaka, Saotomo Itoh, Shinsuke Taki, Shigeaki Hida. Establishment of a reporter system to monitor FcR γ -dependent activation of NFAT. BPB reports 7(4), 110-115, 2024

Kousuke Takahashi, Yasumichi Inoue, Shigeaki Hida, Ryuki Hosoda, Naoki Umezawa, Isamu Akiba, Mitsuo Umetsu, Toshihisa Mizuno.

Target-selective cytosolic delivery of cargo proteins using the VHH-presented OLE-ZIP capsules

RSC Pharmaceutics 1(4), 786–796, 2024

Sae Kawano, Chisaki Noda, Saotomo Itoh, Ayaka Urabe, Chifumi Fujii, Isamu Ogawa, Ryo Suzuki, Shigeaki Hida.

Staphylococcal superantigen-like protein 3 triggers murine mast cell adhesion by binding to CD43 and augments mast cell activation.

Genes to Cells 29(5), 397-416, 2024

Takuya Kanno, Takahito Katano, Takaya Shimura, Mamoru Tanaka, Hirotada Nishie, Shigeaki Fukusada, Keiji Ozeki, Isamu Ogawa, Takahiro Iwao, Tamihide Matsunaga, Hiromi Kataoka.

KLF4-mediated macrophage polarization and phenotypic transitions drive intestinal fibrosis in THP-1 monocyte models in vitro.

Medicina, 60, 713, 2024.

Yuuki Sawai, Yoshiaki Suzuki, Masataka Asagiri, Shigeaki Hida, Rubii Kondo, Gerald W. Zamponi, Wayne R. Giles, Yuji Imaizumi, Hisao Yamamura.

Caveolin-1 forms a complex with P2X7 receptor and tunes P2X7-mediated ATP signaling in mouse bone marrow-derived macrophages.

American Journal of Physiology Cell Physiology 326(1), C125–C142, 2024

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

瀧井猛将, 前田伸司, 和田崇之, 大原直也, 伊藤佐生智, 肥田重明
多剤耐性結核菌に抗菌活性を示す糖誘導体OCT313の薬剤標的の探索.
日本薬学会第144年会, 2024年3月(横浜).

緒方郁奈, 林知仁, 北野拓真, 小川 勇, 肥田重明, 伊藤佐生智
黄色ブドウ球菌の産生する膜孔形成毒素による好塩基球活性化作用.
日本薬学会第144年会, 2024年3月(横浜).

石川怜, 村瀬香乃, 小川勇, 伊藤佐生智, 肥田重明
HMG-CoA還元酵素阻害薬によるヘルパーT細胞分化制御機構の検討.
日本薬学会第144年会, 2024年3月(横浜).

清水佑華, 今井優里, 小林杏輔, 小川 勇, 岩尾岳洋, 指原紀宏, 松永民秀
腸管バリア機能に対する乳酸菌共培養効果の *in vitro* 評価系の構築.
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月(横浜).

石川怜, 村瀬香乃, 小川勇, 伊藤佐生智, 肥田重明

HMG-CoA 還元酵素阻害薬によるヘルパーT 細胞分化制御の検討.
第 88 回日本生化学会中部支部例会, 2024 年 5 月 25 日 (岐阜) .

桐山陽菜、岩田陸人、野田千咲、小川勇、肥田重明、伊藤佐生智
黄色ブドウ球菌のバイオフィーム構成タンパク質 Eap による免疫細胞活性化作用.
第 36 回微生物シンポジウム, 2024 年 8 月 30 日 (東京) .

笹野和希, 石川怜, 水野遥香, 村瀬香乃, 小川勇, 伊藤佐生智, 瀧伸介, 肥田重明
フォーラム 2024 環境トキシコロジー, 2024 年 9 月 4 日-5 日 (仙台) .
免疫介在性障害が報告される医薬品が樹状細胞免疫応答に与える影響.

Reina MUKAINAKA, Yuma ITOH, Isamu OGAWA, Saotomo ITOH, Shigeaki HIDA
Mechanisms of allergic disease suppression by molecules derived from indigenous skin
bacteria.
第 9 回名・岐・藩・南シンポジウム, 2024 年 9 月 15 日 (名古屋) .

Ishikawa Satoshi, Murase Kanon, Sasano Kazuki, Muzuno Haruka, Hatanaka Honoka,
Ogawa Isamu, Itoh Saotomo, Hida Shigeaki
HMG-CoA reductase inhibitors regulate helper T cell differentiation.
第 9 回名・岐・藩・南シンポジウム, 2024 年 9 月 15 日 (名古屋) .

Sae Kawano, Chisaki Noda, Saotomo Itoh, Ayaka Urabe, Chifumi Fujii, Isamu Ogawa,
Ryo Suzuki, Shigeaki Hida
Staphylococcal superantigen-like protein 3 triggers murine mast cell adhesion and
enhancement of mast cell activation by binding to CD43.
第 9 回名・岐・藩・南シンポジウム, 2024 年 9 月 15 日 (名古屋) .

古小路隼也、伊藤佑真、槇内菜々、小川勇、伊藤佐生智、谷口俊一郎、肥田重明
ビフィズス菌を用いた固形がんへのドラッグデリバリーシステムの安全性検討.
日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024, 2024 年 10 月 27 日
(岐阜) .

岩田陸人、桐山陽菜、小川勇、肥田重明、伊藤佐生智
黄色ブドウ球菌分泌タンパク質による好塩基球活性制御.
日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024, 2024 年 10 月 27 日
(岐阜) .

岩田陸人、桐山陽菜、上村優介、小川勇、肥田重明、伊藤佐生智
黄色ブドウ球菌の Ecb は好塩基球の IL-4 産生を誘導する。
第 61 回日本細菌学会中部支部総会, 2024 年 11 月 22 日 (金沢) .

向井中玲菜、伊藤佑真、伊藤佐生智、肥田重明
ヒト肺由来細胞株における結核菌生菌特的な細胞傷害活性の解析。
日本薬学会第 145 年会, 2025 年 3 月 26–29 日 (福岡) .

瀧井猛将、山田博之、本園千尋、山崎晶、Jordi Torrelles、Joanne Turner、大原直也、君嶋葵、
浅見行弘、肥田重明、林秀敏、小野寄菊夫。
ヒト肺由来細胞株における結核菌生菌特的な細胞傷害活性の解析。
日本薬学会第 145 年会, 2025 年 3 月 26–29 日 (福岡) .

小川 勇、松浦 友大、秋元 美槻、小林 千紘、中井 孝明、岩尾 岳洋、松永 民秀、伊藤 佐生
智、肥田 重明
in vitro 腸管免疫評価モデル構築に向けたヒト iPS 細胞由来濾胞被蓋上皮の作製。
第 61 回日本消化器免疫学会総会, 2024 年 12 月 5–6 日 (長崎) .

中井孝明、小川 勇、松永民秀、岩尾岳洋
ヒト生体腸管に近い凹凸構造・機能を持つ Caco-2 細胞の新規培養方法の確立。
日本動物実験代替法学会第 37 回大会, 2024 年 11 月 29 日–12 月 1 日 (宇都宮) .

【遺伝情報学分野】

(原報)

Yamagishi, R., Inagaki, H., Suzuki, J., Hosoda, N., Sugiyama, H., Tomita, K., Hotta, T. and Hoshino, S. (2024) Concerted action of ataxin-2 and PABPC1-bound mRNA poly(A) tail in the formation of stress granules. **Nucleic Acids Research** 52, 9193-9209. doi: 10.1093/nar/gkae497.

Kitano, T., Inagaki, H., Hoshino, S. (2024) The impact of single-stranded RNAs on the dimerization of double-stranded RNA-dependent protein kinase PKR. **Biochem Biophys Res Commun** 719, 150103. doi: 10.1016/j.bbrc.2024.150103.

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

小川慧真、チョスンヒ、宇田川剛、稲垣佑都、星野真一：ミトコンドリア繫留タンパク質 AKAP1 はポリ A 鎖長増大を介して局所的な翻訳を活性化する、第 97 回日本生化学会大会、2024 年 11 月 6 日-8 日 (横浜)

稲垣 佑都, 山岸 良多, 鈴木 純, 細田 直, 杉山 遥, 富田 一範, 堀田 昂志, 星野 真一: 脊髄小脳変性症原因因子 *Ataxin-2* によるストレス顆粒形成のメカニズム、第 97 回日本生化学会大会、2024 年 11 月 6 日-8 日 (横浜)

向山 凌雅、石川 裕之、細田 直、稲垣 佑都、星野 真一：オリゴアデニル酸合成酵素 OAS1 による新規 RNA3'末端修飾とその生理的意義、第 97 回日本生化学会大会、2024 年 11 月 6 日-8 日 (横浜)

鈴木純、稲垣佑都、星野真一：脊髄小脳変性症 2 型関連因子 *Ataxin-2-like* による翻訳活性化のメカニズム、第 97 回日本生化学会大会、2024 年 11 月 6 日-8 日 (横浜)

星野 真一：「人工 mRNA の安定化・翻訳効率化技術の開発」AMED 委託研究開発 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 B 型肝炎創薬実用化等研究事業「B 型肝炎ウイルスの排除を可能とするゲノム編集治療の実用化に向けた包括的な研究」研究班 (溝上班) 令和 6 度班会議 対面開催、2024 年 10 月 3 日 (東京)

片岡 奈緒, 横川 真梨子, 石井 裕一郎, 城 えりか, 高嶋 大翔, 沢崎 綾一, 寒河江 彪流, 尾上 耕一, 星野 真一, 大澤 匡範: BTG2 による Caf1 依存的ポリ A 分解の促進機構の解明、第 21 回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラム、2024 年 8 月 23 日 (神奈)

川)

高岸 優太、稲垣 佑都、北野 智也、宇田川 剛、星野 真一：5'UTR の系統的改変による mRNA 翻訳効率化の検討と、*in vivo* での検証、令和 6 年度 イノベーション創出に資する次世代研究者エンパワメントプログラム博士人材交流会、2024 年 8 月 23 日（名古屋）

鈴木 純、稲垣 佑都、星野 真一：脊髄小脳変性症原因因子 Ataxin-2 類縁体による mRNA ポリ A 鎖伸長を介した翻訳活性化、日本薬学会東海支部大 70 回総会・大会、2024 年 7 月 6 日（名古屋）

池田 遥菜、宇田川 剛、稲垣 佑都、星野真一：ALS 原因因子 FUS P525L 変異体は標的 mRNA のポリ A 鎖分解を促進する、日本薬学会東海支部大 70 回総会・大会、2024 年 7 月 6 日（名古屋）

小川 慧真、チョ スンヒ、宇田川 剛、稲垣 佑都、星野 真一：ミトコンドリア繫留タンパク質 AKAP1 によるポリ A 鎖長増大を介した局所的な翻訳活性化、日本薬学会東海支部大 70 回総会・大会、2024 年 7 月 6 日（名古屋）

志柿 暢彦、稲垣 佑都、細田 直、星野 真一：人工 mRNA 分子内相補鎖形成が翻訳に及ぼす影響の検討、日本薬学会東海支部大 70 回総会・大会、2024 年 7 月 6 日（名古屋）

向山凌雅、石川裕之、細田直、稲垣佑都、星野真一：オリゴアデニル酸合成酵素 OAS1 による新規 RNA 3' 末端修飾とその機能解明、日本薬学会東海支部大 70 回総会・大会、2024 年 7 月 6 日（名古屋）学生優秀発表賞受賞

北野智也、稲垣佑都、星野真一：*In vitro* PKR 二量体化アッセイを用いた一本鎖 RNA による PKR 二量体化メカニズムの解析、日本生化学会中部支部大 88 回例会・シンポジウム、2024 年 5 月 25 日（岐阜）

【細胞分子薬効解析学分野】

(原報)

Hiroki Mishima, Shunsuke Ando, Hibiki Kuzuhara, Aya Yamamura, Rubii Kondo, Yoshiaki Suzuki, Yuji Imaizumi, Hisao Yamamura.

Melatonin inhibits voltage-gated potassium KV4.2 channels and negatively regulates melatonin secretion in rat pineal glands.

Am J Physiol Cell Physiol., **327**(4):C1023-C1034 (2024).

Aya Yamamura, Moe Fujiwara, Akiko Kawade, Taiki Amano, Alamgir Hossain, Md Junayed

Nayeem, Rubii Kondo, Yoshiaki Suzuki, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Susumu Suzuki, Motohiko Sato, Hisao Yamamura.

Corosolic acid attenuates platelet-derived growth factor signaling in macrophages and smooth muscle cells of pulmonary arterial hypertension.

Eur J Pharmacol., **973**:176564 (2024).

Natsumi Shima, Aya Yamamura, Moe Fujiwara, Taiki Amano, Kazuyuki Matsumoto, Taiga Sekine, Haruka Okano, Rubii Kondo, Yoshiaki Suzuki, Hisao Yamamura.

Up-regulated expression of two-pore domain K⁺ channels, KCNK1 and KCNK2, is involved in the proliferation and migration of pulmonary arterial smooth muscle cells in pulmonary arterial hypertension.

Front Cardiovasc Med., **11**:1343804 (2024).

Naoya Fukuda, Kohki Toriuchi, Rina Mimoto, Hiromasa Aoki, Hiroki Kakita, Yoshiaki Suzuki, Satoru Takeshita, Tetsuya Tamura, Hisao Yamamura, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Yasumasa Yamada, Mineyoshi Aoyama.

Hypothermia Attenuates Neurotoxic Microglial Activation via TRPV4.

Neurochem Res., **49**(3):800-813 (2024).

Yuuki Sawai, Yoshiaki Suzuki, Masataka Asagiri, Shigeaki Hida, Rubii Kondo, Gerald W Zamponi, Wayne R Giles, Yuji Imaizumi, Hisao Yamamura.

Caveolin-1 forms a complex with P2X7 receptor and tunes P2X7-mediated ATP signaling in mouse bone marrow-derived macrophages.

Am J Physiol Cell Physiol., **326**(1):C125-C142 (2024)

(総説・著書・総合論文など)

Yoshiaki Suzuki, Wayne R Giles, Gerald W Zamponi, Rubii Kondo, Yuji Imaizumi, Hisao Yamamura.

Ca²⁺ signaling in vascular smooth muscle and endothelial cells in blood vessel remodeling: a review.

Inflamm Regen. **44**(1):50 (2024).

Hisao Yamamura

Physiological and Pathological Significance of Chloride Channels.

Biol Pharm Bull. **47**(1):1-13 (2024).

鈴木良明

最近の話題「神経細胞体の ER-PM 接合部は Ca^{2+} 依存性 PKA シグナロソームを形成する」
日薬理誌 (*Folia Pharmacol. Jpn.*) **159**, 183 (2024)

鈴木良明

最近の話題「Nav1.7 阻害薬は変形性関節症の初めての疾患修飾薬になるかもしれない」
日薬理誌 (*Folia Pharmacol. Jpn.*) **159**, 283 (2024)

(学会発表)

鈴木 良明【受賞講演】

カルシウムマイクロドメインによる血管機能制御機構の解明

第 144 回 日本薬理学会近畿部会、2024 年 3 月 20 日 (大阪) ; A-1-1.

松本 和幸、近藤 るびい、鈴木 良明、山村 彩、山村 寿男

左心性疾患に伴う肺高血圧症モデルマウスにおけるカルシウムシグナルの亢進

第 144 回 日本薬理学会近畿部会、2024 年 3 月 20 日 (大阪) ; C-1-1.

森 鈴菜、近藤 るびい、川田 成紀、鈴木 良明、山村 寿男【学生優秀発表賞】

ヒト肝星 LX-2 細胞における CLC-3 クロライドチャネルの機能解析

2024 年 3 月 29 日 (横浜) ; 29P-am266S

中浜光哉、山村彩、近藤るびい、鈴木良明、山村寿男

肺高血圧症細胞におけるニコチン性アセチルコリン受容体の発現変化

日本薬学会第 144 年会 2024 年 3 月 30 日 (横浜) ; 30-416-pm16S

鈴木 良明

平滑筋細胞の興奮転写連関を介した血管リモデリング形成

第 18 回トランスポーター研究会年会、2024 年 6 月 1 日 (静岡) ; シンポジウム 1-3

葛原響、三島寛貴、安藤駿佑、近藤るびい、鈴木良明、山村寿男

ラット松果体分泌における電位依存性カリウム $\text{Kv}4.2$ チャネルの関与

第 70 回 日本薬学会 東海支部総会・大会、2024 年 7 月 6 日 (名古屋) ; D-1-6-S

田邊晴也、鈴木良明、岡田一希、道上七帆、近藤るびい、村山尚、山村寿男【学生優秀発表賞】
新規スクリーニング系を用いた CaMKK2 阻害薬の探索
第 70 回 日本薬学会 東海支部総会・大会、2024 年 7 月 6 日（名古屋）；D-1-7-S

鈴木良明、澤井優輝、朝霧成挙、肥田重明、Zamponi Gerald、Giles Wayne、今泉祐治、山村寿男
マウス骨髄由来マクロファージにおけるカベオリン 1 の P2X7 受容体機能制御
第 45 回日本炎症・再生医学会、2024 年 7 月 17 日（福岡）；P1-3

倉田朋、鈴木良明、楯野真也、味八木茂、Eiva Bernotiene、Wayne Giles、山村寿男
軟骨細胞における Kv1.6 チャネル発現減少による Ca²⁺シグナル亢進と変形性膝関節症の関連
第 45 回日本炎症・再生医学会、2024 年 7 月 17 日（福岡）；P11-1

小井手司、鈴木良明、近藤るびい、山村寿男【優秀発表賞】
オプトジェネティクスによる血管平滑筋特異的な興奮転写連関は血管リモデリング形成に
与する
第 45 回日本炎症・再生医学会、2024 年 7 月 17 日（福岡）；P16-3

関根大雅、近藤るびい、鈴川茜、鈴木良明、山村 彩、山村 寿男
Paxilline による Ca²⁺ 活性化 Cl⁻ チャネル TMEM16A の抑制作用
生体機能と創薬シンポジウム 2024、2024 年 8 月 29 日（京都）；P3-4

小井手司、鈴木良明、近藤るびい、Gerald Zamponi、山村寿男
光遺伝学を用いた血管平滑筋の興奮-転写連関と血管炎症の関連の解明
生体機能と創薬シンポジウム 2024、2024 年 8 月 29 日（京都）；P3-7

田邊晴也、鈴木良明、岡田 一希、道上七帆、村山 尚、近藤るびい、山村 寿男
細胞ベースの新規アッセイ系を用いた CaMKK2 阻害薬の探索
生体機能と創薬シンポジウム 2024、2024 年 8 月 29 日（京都）；P3-5

近藤るびい、川田成紀、森鈴菜、鈴木良明、山村 寿男
肝星細胞活性化におけるミトコンドリア機能変化と Ca²⁺ シグナル連関
生体機能と創薬シンポジウム 2024、2024 年 8 月 29 日（京都）；P7-9

小井手司、鈴木良明、近藤るびい、Gerald Zamponi、山村寿男【優秀ポスター発表賞】

光遺伝学を用いた血管平滑筋の興奮-転写連関と血管炎症の関連の解明

次世代を担う若手のための創薬・医療薬理シンポジウム 2024、2024年8月31日（大阪）；P8

田邊晴也、鈴木良明、岡田 一希、道上七帆、村山 尚、近藤るびい、山村 寿男

細胞ベースの新規アッセイ系を用いた CaMKK2 阻害薬の探索

次世代を担う若手のための創薬・医療薬理シンポジウム 2024、2024年8月31日（大阪）；

P19

関根大雅、近藤るびい、鈴川茜、鈴木良明、山村 彩、山村 寿男【優秀ポスター発表賞】

Paxilline による Ca²⁺ 活性化 Cl⁻ チャネル TMEM16A の抑制作用

次世代を担う若手のための創薬・医療薬理シンポジウム 2024、2024年8月31日（大阪）；

P43

Naoki KAWATA, Rubii KONDO, Akari DEGUCHI, Yoshiaki SUZUKI, Hisao YAMAMURA
TREK1 channels are involved in fibrogenic matrix expression and cell proliferation in human hepatic stellate LX-2 cells

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム、2024年9月16日（名古屋）；P40

Taiki AMANO, Natsumi Shima, Aya Yamamura, Moe Fujiwara, Kazuyuki Matsumoto, Taiga Sekine, Haruka Okano, Rubii Kondo, Yoshiaki Suzuki, Hisao Yamamura

Upregulated expression of two-pore domain potassium channels, KCNK1 and KCNK2, in pulmonary arterial hypertension

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム、2024年9月16日（名古屋）；P41

Tsukasa Koide, Yoshiaki Suzuki, Kondou Rubii, Gerald Zamponi, Hisao Yamamura

Optogenetic investigation of the role of excitation-transcription coupling in vascular smooth muscle cells

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム、2024年9月16日（名古屋）；P42

Tomo KURATA, Yoshiaki SUZUKI, Shinya TATENO, Shigeru MIYAKI, Eiva BERNOTIENE, Wayne GILES, Hisao YAMAMURA

Downregulation of Kv1.6 channel expression in chondrocytes leads to osteoarthritis via enhanced Ca²⁺ signaling

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム、2024年9月16日（名古屋）；P43

Hibiki Kuzuhara, Hiroki Mishima, Shunsuke Ando, Rubii Kondo, Yoshiaki Suzuki, Hisao

Yamamura

Inhibitory effects of melatonin on voltage-gated K⁺ (Kv4.2) channels in rat pinealocytes

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム、2024年9月16日（名古屋）；P44

Koya NAKAHAMA, Aya YAMAMURA, Rubii KONDO, Yoshiaki SUZUKI, Hisao YAMAMURA

Physiological roles of nicotinic acetylcholine receptors in human pulmonary arterial smooth muscle cells.

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム、2024年9月16日（名古屋）；P56

Haruya TANABE, Yoshiaki SUZUKI, Itsuki OKADA, Nanaho MICHIGAMI, Takashi MURAYAMA, Rubii KONDO, Hisao YAMAMURA

Exploration of Novel CaMKK2 Inhibitors Using a FRET-based Assay System

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム、2024年9月16日（名古屋）；P57

Taiga Sekine, Rubii Kondo, Akane Suzukawa, Yoshiaki Suzuki, Aya Yamamura, Hisao Yamamura

Paxilline blocks calcium-activated chloride TMEM16A channels

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム、2024年9月16日（名古屋）；P58

葛原響、三島寛貴、安藤駿佑、近藤るびい、鈴木良明、山村 寿男
ラット松果体細胞におけるメラトニンの Kv4.2 チャネル阻害作用

第2回 東海地区 薬学系電気生理学研究会、2024年9月19日（名古屋）；P1

関根大雅、近藤るびい、鈴川茜、鈴木良明、山村 寿男

Paxilline による Ca²⁺ 活性化 Cl⁻ チャネル TMEM16A の抑制作用

第2回 東海地区 薬学系電気生理学研究会、2024年9月19日（名古屋）；P3

鈴木良明

カルシウムマイクロドメインによる血管機能制御機構の解明【招待講演】

次世代薬理学セミナー 2024 in 岩手、2024年9月21日（岩手）

鈴木良明、小井手司、倉田朋、浅井美后、近藤るびい、青木啓将、青山峰芳、尾上耕一、鈴木洋、

今泉祐治、山村寿男

血管リモデリング形成に対する *junctionophilin-2* の役割の解明

生理研研究会 2024「炎症・免疫系と心血管系の相互作用から切り拓く循環生理機能の解析」

2024年10月10日（福岡）；O-2

逸見峻輔、山村彩、近藤るびい、鈴木良明、山村寿男

肺高血圧症の病態形成における *MMP-3* の役割

生理研研究会 2024「炎症・免疫系と心血管系の相互作用から切り拓く循環生理機能の解析」

2024年10月10日（福岡）；YP-2

門崎莉奈、山村彩、近藤るびい、鈴木良明、山村寿男（優秀発表賞 受賞）

プレグネノロンによるヒト肺動脈平滑筋細胞の Ca^{2+} 濃度上昇

生理研研究会 2024「炎症・免疫系と心血管系の相互作用から切り拓く循環生理機能の解析」

2024年10月10日（福岡）；YP-4

天野泰樹、山村彩、近藤るびい、鈴木良明、山村寿男（優秀発表賞 受賞）

肺高血圧症における 2 ポアドメイン型 K^+ チャネル *KCNK1* と *KCNK2* の発現上昇

生理研研究会 2024「炎症・免疫系と心血管系の相互作用から切り拓く循環生理機能の解析」

2024年10月10日（福岡）；YP-7

鈴木良明、小井出司、倉田朋、浅井美后、近藤るびい、青木啓将、青山峰芳、尾上耕一、鈴木洋、今泉祐治、山村寿男

血管平滑筋細胞の増殖における *junctionophilin-2* の役割の解明

第34回 日本循環薬理学会、2024年12月20日（静岡）；O-17

中浜光哉、山村彩、近藤るびい、鈴木良明、山村寿男

ヒト肺動脈平滑筋細胞におけるニコチンの影響

第34回 日本循環薬理学会、2024年12月20日（静岡）；PG-06

【病態生化学分野】

(原報)

Hagihara, H. et al., (著者 131 人、Hattori, M. は 66 番目),
Large-scale animal model study uncovers altered brain pH and lactate levels as a
transdiagnostic endophenotype of neuropsychiatric disorders involving cognitive
impairment.
eLife **12**, RP89376 (2024)

Kaneko, N., Hirai, K., Oshima, M., Yura, K., Hattori, M., Maeda, N., and Ohtaka-Maruyama,
C.
ADAMTS2 regulates radial migration by activating TGF- β signaling in the developing
neocortex.
EMBO Rep. **25**, 3090 (2024)

Hara, M., Ishii, K., Hattori, M., and Kohno, T.
EphA4 induces the phosphorylation of an intracellular adaptor protein Dab1 via Src family
kinases.
Biol. Pharm. Bull. **47**, 1314 (2024).

Kohno, T., Nakagawa, I., Taniguchi, A., Heng, F., and Hattori, M.
Biochemical characterizations of the central fragment of human Reelin and identification
of amino acid residues involved in its secretion.
J. Biochem. **176**, 385-393 (2024)

(総説・著書・総合論文など)

Katsuyama, Y. and Hattori, M.
Reelin ameliorates Alzheimer's disease, but how?
Neurosci. Res. **208**, 8-14 (2024)

(学会発表)

加藤真生、徳永柊、梅村悠太、川瀬宗之、大石久史、服部光治【中部支部奨励賞受賞】
リン脂質フリッパーゼ ATP8A1/ATP8A2 二重欠損が神経回路に与える影響の解析.
第 88 回日本生化学会中部支部例会, 2024 年 5 月 25 日, 岐阜市 (岐阜県) .

武田百佳、竹腰祐斗、内野春希、河野孝夫、有田誠、服部光治
胎生期マウスの視床に局在するホスファチジルイノシトール分子種に関する研究.
第 88 回日本生化学会中部支部例会, 2024 年 5 月 25 日, 岐阜市 (岐阜県) .

竹腰祐斗、内野春希、武田百佳、河野孝夫、有田誠、服部光治
胎生期マウス脳の大構造形成と脂質分布に関する研究.
第 66 回日本脂質生化学会, 2024 年 6 月 6 日-7 日, 清水区 (静岡県) .

Yuto Takekoshi, Hugo Ando, Takao Kohno, Makoto Arita, Mitsuharu Hattori
Reelin affects the lipid composition of the neuronal plasma membrane.
FENS Forum2024, 2024 年 6 月 25-29 日, ウィーン (オーストリア) .

Shu Tokunaga, Yuta Umemura, Muneyuki Kawase, Tsuzumi Nakajima, Mana Kato,
Chiharu Miyajima, Hisashi Oishi, Mitsuharu Hattori
Cerebellar neurodegeneration in phospholipid flippases ATP8A1/ATP8A2 double knock-out
mice can be ameliorated by inactivating a microglial PS receptor.
FENS Forum2024, 2024 年 6 月 25 日-29 日, ウィーン (オーストリア) .

川瀬宗之、松田拓与、梅村悠太、大石久史、櫻井隆、服部 光治【国内 travel Award 受賞】
リン脂質フリッパーゼ ATP8A1 と ATP8A2 によるシナプス関連タンパク質の局在の制御.
Neuro2024 (第 47 回日本神経科学大会) , 2024 年 7 月 24 日-7 月 27 日, 福岡市 (福岡県) .

河野孝夫、佐藤萌音、李旻倩、服部光治
ミオシン Va は大脳新皮質表層ニューロンの移動を制御する.
Neuro2024 (第 47 回日本神経科学大会) , 2024 年 7 月 24 日-27 日, 福岡市 (福岡県) .

武田百佳、竹腰祐斗、内野春希、河野孝夫、有田誠、服部光治
胎生期視床が特徴的なホスファチジルイノシトール組成を有する意義に関する研究.
第 23 回次世代を担う若手ファーマ・バイオフォーラム 2024, 2024 年 9 月 6 日-7 日, 金沢市
(石川県) .

川瀬宗之、松田拓与、梅村悠太、大石久史、櫻井隆、服部光治

リン脂質フリッパーゼは神経細胞 GABAA 受容体の膜上発現を制御する.

第 23 回次世代を担う若手ファーマ・バイオフィォーラム 2024, 2024 年 9 月 6 日-7 日, 金沢市 (石川県) .

Takao Kohno, Mone Sato, Li Minqian, Mitsuharu Hattori

Myosin Va regulates the terminal translocation of migrating neurons in the neocortex.

第 9 回名古屋・岐阜・瀋陽・南京薬学学術シンポジウム, 2024 年 9 月 15 日-16 日, 名古屋市 (愛知県) .

Muneyuki Kawase, Takuto Matsuda, Yuta Umemura, Hisashi Oishi, Takashi Sakurai, Mitsuharu Hattori Phospholipid flippases ATP8A1 and ATP8A2 modulate inhibitory neurotransmission in hippocampal neurons.

第 9 回名古屋・岐阜・瀋陽・南京薬学学術シンポジウム, 2024 年 9 月 15 日-16 日, 名古屋市 (愛知県) .

Noritaka Sassa, Yuta Umemura, Muneyuki Kawase, Hisashi Oishi, Mitsuharu Hattori

Elucidation of the pathogenesis of neurological diseases caused by phospholipid flippase deficiency.

第 9 回名古屋・岐阜・瀋陽・南京薬学学術シンポジウム, 2024 年 9 月 15 日-16 日, 名古屋市 (愛知県) .

竹腰祐斗、武田百佳、内野春希、河野孝夫、有田誠、服部光治

胎生期マウス視床の特殊な PI 組成の形成機構と、その生理的意義の解明.

第 14 回リピッド合同コンファレンス, 2024 年 9 月 17 日-19 日, 千葉市 (千葉県) .

中村一智、仁子陽輔、服部光治

環境応答性蛍光色素を用いた神経細胞膜流動性の解析.

第 14 回リピッド合同コンファレンス, 2024 年 9 月 17 日-19 日, 千葉市 (千葉県) .

武田百佳、竹腰祐斗、内野春希、河野孝夫、有田誠、服部光治

CDP-diacylglycerol synthase 1 の胎生期視床への局在が発達に与える影響の解明.

第 14 回リピッド合同コンファレンス, 2024 年 9 月 17 日-19 日, 千葉市 (千葉県) .

徳永柊、梅村悠太、川瀬宗之、宮嶋ちはる、大石久史、服部光治

リン脂質フリッパーゼ ATP8A1/ATP8A2 二重欠損による小脳神経変性機構とその治療法開発に関する研究.

第 14 回リピッド合同コンファレンス, 2024 年 9 月 17 日-19 日, 千葉市 (千葉県) .

武田百佳、竹腰祐斗、内野春希、河野孝夫、有田誠、服部光治
胎生期視床が特殊なホスファチジルイノシトール組成を有する機構とその生理的意義の解明.
第 97 回日本生化学会大会, 2024 年 11 月 6 日-8 日, 横浜市 (神奈川県) .

広瀬颯真、河野孝夫、服部光治
脳形成に必須なタンパク質 Dab1 の液-液相分離による機能制御機構の解明.
第 97 回日本生化学会大会, 2024 年 11 月 6 日-8 日, 横浜市 (神奈川県) .

星合彩那、川瀬宗之、伊藤菜々子、大石久史、櫻井隆、服部光治
神経細胞におけるリン脂質フリッパーゼ補助サブユニット TMEM30A の局在に関する研究.
第 97 回日本生化学会大会, 2024 年 11 月 6 日-8 日, 横浜市 (神奈川県) .

Yuto Takekoshi, Momoka Takeda, Haruki Uchino, Takao Kohno, Makoto Arita, Mitsuharu Hattori

The specific phosphatidylinositol distribution in the embryonic mouse thalamus.
2024 年度 IBS, 2025 年 2 月 17 日-18 日, 浜松市 (静岡県) .

Soma Hirose, Takao Kohno, Mitsuharu Hattori

Functional regulation of Dab1 focusing on liquid-liquid phase separation.
2024 年度 IBS, 2025 年 2 月 17 日-18 日, 浜松市 (静岡県) .

Shu Tokunaga, Yuta Umemura, Muneyuki Kawase, Chiharu Miyajima, Hisashi Oishi, Mitsuharu Hattori

Cerebellar neurodegeneration in phospholipid flippases ATP8A1/ATP8A2 double knock-out mice can be ameliorated by inactivating a microglial PS receptor.
2024 年度 IBS, 2025 年 2 月 17 日-18 日, 浜松市 (静岡県) .

Muneyuki Kawase, Takuto Matsuda, Yuta Umemura, Hisashi Oishi, Takashi Sakurai, Mitsuharu Hattori

Phospholipid flippases ATP8A1 and ATP8A2 regulate the localization of synaptic proteins in hippocampal neurons.
2024 年度 IBS, 2025 年 2 月 17 日-18 日, 浜松市 (静岡県) .

武田百佳、竹腰祐斗、内野春希、河野孝夫、有田誠、服部光治

特定のホスファチジルイノシトールが胎生マウス視床に局在する意義の解明.
NCU ライフサイエンスポスター発表会, 2025/3/6, 名古屋市 (愛知県).

伊藤菜々子、星合彩那、川瀬宗之、鈴木海斗、大石久史、服部光治
神経細胞におけるリン脂質フリッパーゼの局在は補助サブユニット TMEM30A の糖鎖修飾によって制御される.
日本薬学会 第 145 回年会, 2025 年 3 月 26 日-29 日, 福岡市 (福岡県).

加藤真生、徳永柊、梅村悠太、川瀬宗之、大石久史、服部光治
リン脂質フリッパーゼ ATP8A1/ATP8A2 二重欠損による神経変性領域と、神経回路形成への影響に関する研究.
日本薬学会 第 145 回年会, 2025 年 3 月 26 日-29 日, 福岡市 (福岡県).

平出真菜、徳永柊、竹腰祐斗、河野孝夫、服部光治
生後小脳プルキンエ細胞におけるリーリンの受容部位および機能の解明.
日本薬学会 第 145 回年会, 2025 年 3 月 26 日-29 日, 福岡市 (福岡県).

【薬物動態制御学分野】

(原報)

Shogo Akino, Tomoya Yasujima, Rei Shibutani, Takahiro Yamashiro, Hiroaki Yuasa
Involvement of proton-coupled SLC49A4-mediated transport in the export of lysosomally
trapped pyrilamine.
Drug Metab. Dispos., **52**, 19-25 (2024).

Akira Hosooka, Tomoya Yasujima, Ayano Murata, Takahiro Yamashiro, Hiroaki Yuasa
Identification of human-specific amino acid residues governing atenolol transport via organic cation transporter 2.

Biochem. Pharmacol., **229**, 116514 (2024).

Yoshihisa Mimura, Tomoya Yasujima, Katsuhisa Inoue, Shogo Akino, Chitaka Namba, Hiroyuki Kusuvara, Yutaro Sekiguchi, Kinya Ohta, Takahiro Yamashiro, Hiroaki Yuasa
SLC35G1 is a highly chloride-sensitive transporter responsible for the basolateral membrane transport in intestinal citrate absorption.

eLife, **13**, RP98853 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

湯浅博昭

吸収－総論（第2章）。

「生物薬剤学（第4版）」，谷川原祐介，井上勝央編，南江堂，東京，pp. 35-38 (2024).

湯浅博昭

薬物の消化管吸収（第2章，第1節）。

「生物薬剤学（第4版）」，谷川原祐介，井上勝央編，南江堂，東京，pp. 38-50 (2024).

(学会発表)

小川優夏，保嶋智也，山城貴弘，湯浅博昭

OAT2の葉酸輸送機能の解析

日本薬学会第144年会，2024年3月28日 - 31日（横浜）。

保嶋智也，川本彩果，山城貴弘，湯浅博昭

各種細胞株でのコリン取込におけるFLVCR1/2の寄与の評価。

日本薬学会第144年会，2024年3月28日 - 31日（横浜）。

山崎美音，廣瀬 舞，保嶋智也，山城貴弘，湯浅博昭

FLVCR1/2のコリン輸送機能解析：CHT1との比較。

日本薬学会第144年会, 2024年3月28日 - 31日 (横浜) .

間竹 勇, 保嶋智也, 山城貴弘, 湯浅博昭 【最優秀発表者賞】

リソソーム膜に局在する新規尿酸トランスポーターの機能解析.

日本薬剤学会第39年会, 2024年5月23日 - 25日 (神戸) .

保嶋智也, 秋野翔伍, 山城貴弘, 湯浅博昭

カチオン性両親媒性薬物のリソソームトラッピングにおけるDIRC2の役割.

日本薬剤学会第39年会, 2024年5月23日 - 25日 (神戸) .

松井快人, 河原崎南帆, 保嶋智也, 山城貴弘, 湯浅博昭

新規小胞膜局在型モノアミントランスポーターの輸送機能解析: VMAT1/2との機能比較.

日本薬剤学会第39年会, 2024年5月23日 - 25日 (神戸) .

松原綾佑, 秋野翔伍, 保嶋智也, 山城貴弘, 湯浅博昭

リソソーム膜局在型pyridoxineトランスポーターとしてのDIRC2/SLC49A4の機能解析.

日本薬剤学会第39年会, 2024年5月23日 - 25日 (神戸) .

保嶋智也, 三村佳久, 井上勝央, 山城貴弘, 湯浅博昭 【招待講演】

クエン酸の小腸吸収過程での基底膜透過を担う高クロライド感受性トランスポーターの同定.

第18回トランスポーター研究会年会, 2024年6月1日 - 2日 (静岡) .

山内利玖, 山本道弘, 山城貴弘, 保嶋智也, 湯浅博昭

SLC19A3 のamiloride 輸送機能における動物種差.

第18回トランスポーター研究会年会, 2024年6月1日 - 2日 (静岡) .

山崎美音, 保嶋智也, 川本彩果, 難波知堯, 東 洋輔, 山城貴弘, 湯浅博昭

小腸でのコリン吸収におけるFLVCR1 及びFLVCR2 の役割.

第18回トランスポーター研究会年会, 2024年6月1日 - 2日 (静岡) .

間竹 勇, 保嶋智也, 山城貴弘, 湯浅博昭 【最優秀発表者賞】

リソソーム膜での尿酸排出輸送を担う新規トランスポーターの機能解析.

第18回トランスポーター研究会年会, 2024年6月1日 - 2日 (静岡) .

保嶋智也, 松井快人, 山城貴弘, 湯浅博昭

新規小胞膜局在型モノアミントランスポーターの各種モノアミン輸送特性の解析.

第26回活性アミンに関するワークショップ, 2024年8月24日 (名古屋) .

Mione Yamasaki, Chitaka Namba, Takahiro Yamashiro, Tomoya Yasujima, Hiroaki Yuasa
Kinetic characterization of FLVCR2 as an intestinal choline transporter in the rat model.
The 9th Nagoya/Gifu/Shenyang/Nanjing Symposium of Pharmaceutical Sciences, Sept. 15
- 16, 2024 (Nagoya, Japan).

Riku Yamauchi, Takahiro Yamashiro, Michihiro Yamamoto, Kaito Matsui, Tomoya
Yasujima, Hiroaki Yuasa
Functional characteristics of SLC19A3 for the transport of amiloride as a newly found
fluorescent substrate.
The 9th Nagoya/Gifu/Shenyang/Nanjing Symposium of Pharmaceutical Sciences, Sept. 15
- 16, 2024 (Nagoya, Japan).

Takuma Kitamura, Tomoya Yasujima, Takahiro Yamashiro, Hiroaki Yuasa
Carrier-mediated uptake of capric acid in HepG2 cells.
26th North American ISSX/39th JSSX Meeting, Sept. 15 - 18, 2024 (Honolulu, Hawaii,
U.S.A.).

Isamu Matake, Tomoya Yasujima, Takahiro Yamashiro, Hiroaki Yuasa
Functional characterization of ENT3/SLC29A3 as a lysosomal urate transporter.
26th North American ISSX/39th JSSX Meeting, Sept. 15 - 18, 2024 (Honolulu, Hawaii,
U.S.A.).

Kaito Matsui, Mayu Obata, Isamu Matake, Tomoya Yasujima, Takahiro Yamashiro, Hiroaki
Yuasa
Functional characteristics of a newly identified vesicular membrane-localized monoamine
transporter for serotonin transport.
26th North American ISSX/39th JSSX Meeting, Sept. 15 - 18, 2024 (Honolulu, Hawaii,
U.S.A.).

Haruka Morimoto, Takuma Ishihara, Tomoya Yasujima, Takahiro Yamashiro, Hiroaki
Yuasa
Functional characterization of ATP13A3 as a plasma membrane polyamine transporter.
26th North American ISSX/39th JSSX Meeting, Sept. 15 - 18, 2024 (Honolulu, Hawaii,
U.S.A.).

Rei Shibutani, Isamu Matake, Tomoya Yasujima, Takahiro Yamashiro, Hiroaki Yuasa
Functional characteristics of a newly identified plasma membrane urate transporter.
26th North American ISSX/39th JSSX Meeting, Sept. 15 - 18, 2024 (Honolulu, Hawaii,
U.S.A.).

Takahiro Yamashiro, Michihiro Yamamoto, Tomoya Yasujima, Hiroaki Yuasa
Animal species differences in the amiloride transport function of SLC19A3.
26th North American ISSX/39th JSSX Meeting, Sept. 15 - 18, 2024 (Honolulu, Hawaii,
U.S.A.).

Tomoya Yasujima, Shogo Akino, Takahiro Yamashiro, Hiroaki Yuasa
Functional identification of disrupted in renal carcinoma 2 (DIRC2/SLC49A4) as a
lysosomal exporter for cationic amphiphilic drugs.
26th North American ISSX/39th JSSX Meeting, Sept. 15 - 18, 2024 (Honolulu, Hawaii,
U.S.A.).

保嶋智也

OCT2/SLC22A2を介した薬物の腎排泄に関する動物種差を決定する分子メカニズム。
令和6年度内外環境応答・代謝酵素研究会, 2024年9月28日 - 29日 (和歌山)。

石原拓馬, 保嶋智也, 山城貴弘, 湯浅博昭

アストロサイトに高発現する新規モノアミントランスポーターのセロトニン輸送機能の解析。
第45回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム, 2024年10月10日 - 11日 (徳島)。

金丸緋奈多, 保嶋智也, 山城貴弘, 湯浅博昭

アストロサイトに高発現する新規モノアミントランスポーターのヒスタミン輸送機能の解析。
第45回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム, 2024年10月10日 - 11日 (徳島)。

小川優夏, 保嶋智也, 山城貴弘, 湯浅博昭【優秀発表者賞】

organic anion transporter 2 (OAT2/SLC22A7)の葉酸輸送機能の速度論・分子機構論的解析。
第45回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム, 2024年10月10日 - 11日 (徳島)。

松原綾佑, 秋野翔伍, 保嶋智也, 山城貴弘, 湯浅博昭

disrupted in renal carcinoma 2 (DIRC2/SLC49A4) のacriflavine輸送機能の解析。
第45回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム, 2024年10月10日 - 11日 (徳島)。

Hiroaki Yuasa, Chitaka Namba, Takahiro Yamashiro, Tomoya Yasujima

Role of FLVCR2 in the intestinal choline uptake in the rat model.

American Association of Pharmaceutical Scientists, 2024 Annual Meeting (AAPS 2024 PharmSci 360), Oct. 20 - 23, 2024 (Salt Lake City, Utah, U.S.A.).

【病態解析学分野】

(原報)

Promyelinating drugs ameliorate oligodendrocyte pathologies in a mouse model of Krabbe disease .

Naoko Inamura, Taeko Kawai, Takashi Watanabe, Hiromasa Aoki, Mineyoshi Aoyama, Atsuo Nakayama, Junko Matsuda, Yasushi Enokido.

Molecular Genetics and Metabolism. 2024; 142(3):108497

Thrombopoietin exerts a neuroprotective effect by inhibiting the suppression of neuronal proliferation and axonal outgrowth in intrauterine growth restriction rats.

Satoru Takeshita, Hiroki Kakita, Nami Nakamura, Mari Mori, Kohki Toriuchi, Hiromasa Aoki, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Yasumasa Yamada, Mineyoshi Aoyama.

Experimental Neurology. 2024;377:114781.

ID3 is a novel target gene of p53 and modulates lung cancer cell.

Mai Nagasaka , Chiharu Miyajima, Sakura Hashiguchi, Yuya Suzuki, Daisuke Morishita , Hiromasa Aoki, Kohki Toriuchi, Ryohei Katayama, Mineyoshi Aoyama, Hidetoshi Hayashi.

Biochemical and Biophysical Research Communications. 2024;708:149789.

SET8 is a novel negative regulator of TGF- β signaling in a methylation-independent manner.

Mai Nagasaka, Yasumichi Inoue, Yuji Nagao, Chiharu Miyajima, Daisuke Morishita, Hiromasa Aoki, Mineyoshi Aoyama, Takeshi Imamura, Hidetoshi Hayashi.

Scientific Reports. 2024;13(1):22877.

Hypothermia attenuates neurotoxic microglial activation via TRPV4.

Naoya Fukuda, Kohki Toriuchi, Rina Mimoto, Hiromasa Aoki, Hiroki Kakita, Yoshiaki Suzuki, Satoru Takeshita, Tetsuya Tamura, Hisao Yamamura, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Yasumasa Yamada, Mineyoshi Aoyama.

Neurochemical Research. 2024;49(3):800-813.

Involvement of cardiac glycosides targeting Na/K-ATPase in their inhibitory effects on c-Myc expression via its transcription, translation, and proteasomal degradation.

Muneshige Tokugawa, Yasumichi Inoue, Hiromasa Aoki, Chiharu Miyajima, Kan'ichiro Ishiuchi, Kento Tsurumi, Chisane Kujirai, Daisuke Morishita, Michiyo Matsuno, Hajime Mizukami, Masaki Ri, Shinsuke Iida, Toshiaki Makino, Mineyoshi Aoyama, Hidetoshi Hayashi.

The Journal of Biochemistry. 2024;175(3):253-263.

(総説・著書・総合論文など)

該当なし

(学会発表)

三本里奈 (ベストプレゼンテーション賞), 鳥内皐暉, 福田直哉, 垣田博樹, 青木啓将, 田村哲也, 竹下覚, 山田恭聖, 青山峰芳

低温刺激は TRPV4 を介してミクログリアの神経傷害的な活性化を抑制し神経保護的にはたらく,

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024

2024年10月27日、口頭発表

水野早季子, 曾山樹, 櫻木章, 大石大祐, 青木啓将, 西江裕忠, 野元昭宏, 矢野重信, 片岡洋望, 青山峰芳

次世代光感受性物質による光線力学療法の抗腫瘍効果

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024

2024年10月27日、口頭発表

天野歩, 加藤里菜, 青木啓将, 鳥内皐暉, 泉和弥, 長坂真衣, 井上靖道, 林秀敏, 青山峰芳
神経芽腫に対する細胞周期チェックポイント阻害剤の併用による抗腫瘍効果の検証

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024

2024年10月27日、口頭発表

鈴木悠花, 竹下覚, 垣田博樹, 中村奈見, 森麻里, 鳥内皐暉, 青木啓将, 山田恭聖, 青山峰芳
トロンボポエチンはSGAモデルラットの神経細胞増殖と軸索伸長を促進する

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024

2024年10月27日、口頭発表

平山真大, 山田恵理, 青木啓将, 泉和弥, 天野歩, 鳥内皐暉, 長坂真衣, 井上靖道, 林秀敏, 青山峰芳

BMI1阻害剤による神経芽腫抗腫瘍効果および分子メカニズムの解明

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024

2024年10月27日、口頭発表

三本里奈, 鳥内皐暉, 福田直哉, 垣田博樹, 青木啓将, 鈴木良明, 田村哲也, 竹下覚, 山村寿男, 井上靖道, 林秀敏, 山田恭聖, 青山峰芳

Hypothermic culture attenuates neurotoxic activation of microglia via TRPV4 channel

The 9th Nagoya / Gifu / Nanjing / Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences

2024年9月15-16日、ポスター発表

Yuka Suzuki, Satoru Takeshita, Hiroki Kakita, Mari Mori, Nami Nakamura, Kohki Toriuchi, Hiromasa Aoki, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Yasumasa Yamada, Mineyoshi Aoyama
Thrombopoietin Enhances Neuronal Cell Proliferation and Neurite Elongation in Intrauterine Growth Restricted Rats

The 9th Nagoya / Gifu / Nanjing / Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences

2024年9月15-16日、ポスター発表

Masahiro Hirayama, Eri Yamada, Hiromasa Aoki, Kazuya Izumi, Ayumi Amano, Kohki Toriuchi, Koichi Ogami, Mai Nagasaka, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Satoru Takeshita, Hiroki Kakita, Yasumasa Yamada, Mineyoshi Aoyama

Pharmacologic inhibition of BMI1 activates the p53 pathway to suppress MYCN-amplified neuroblastoma.

The 9th Nagoya / Gifu / Nanjing / Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences

2024年9月15-16日、ポスター発表

【細胞情報学分野】

(原報)

Chiharu Miyajima, Mai Nagasaka, Hiromasa Aoki, Kohki Toriuchi, Shogo Yamanaka, Sakura Hashiguchi, Daisuke Morishita, Mineyoshi Aoyama, Hidetoshi Hayashi, Yasumichi Inoue.

The Hippo Signaling Pathway Manipulates Cellular Senescence.
Cells, **14**, 13 (2024).

Yusuke Okujima, Takao Watanabe, Takeshi Ito, Yasumichi Inoue, Yutaka Kasai, Yusuke Imai, Yoshiko Nakamura, Mitsuhito Koizumi, Osamu Yoshida, Yoshio Tokumoto, Masashi Hirooka, Masanori Abe, Ryosuke Kawakami, Takashi Saitou, Takeshi Imamura, Yoshinori Murakami, Yoichi Hiasa.

PKR associates with 4.1R to promote anchorage-independent growth of hepatocellular carcinoma and lead to poor prognosis.
Sci. Rep., **14**, 27768 (2024).

Shunsuke Ebara, Misaki Yoshida, Hiroko Yamakawa, Kenichiro Shimokawa, Yasumichi Inoue, Hiroshi Tauchi, Daisuke Morishita.

Interaction of CDK12 with NXF1 is a new node for the linking mechanism between transcription and transportation of mRNA.
Biochem. Biophys. Res. Commun., **735**, 150608 (2024).

Satoru Takeshita, Hiroki Kakita, Nami Nakamura, Mari Mori, Kohki Toriuchi, Hiromasa Aoki, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Yasumasa Yamada, Mineyoshi Aoyama.

Thrombopoietin exerts a neuroprotective effect by inhibiting the suppression of neuronal proliferation and axonal outgrowth in intrauterine growth restriction rats.
Exp. Neurol., **377**, 114781 (2024).

Aya Yamamura, Moe Fujiwara, Akiko Kawade, Taiki Amano, Alamgir Hossain, Md Junayed Nayeem, Rubii Kondo, Yoshiaki Suzuki, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Susumu Suzuki, Motohiko Sato, Hisao Yamamura.

Corosolic acid attenuates platelet-derived growth factor signaling in macrophages and smooth muscle cells of pulmonary arterial hypertension.

Eur. J. Pharmacol., **973**, 176564 (2024).

Mai Nagasaka, Chiharu Miyajima, Yasumichi Inoue, Sakura Hashiguchi, Yuya Suzuki, Daisuke Morishita, Hiromasa Aoki, Kohki Toriuchi, Ryohei Katayama, Mineyoshi Aoyama, Hidetoshi Hayashi.

ID3 is a novel target gene of p53 and modulates lung cancer cell metastasis.

Biochem. Biophys. Res. Commun., **708**, 149789 (2024).

Kousuke Takahashi, Taiki Nishiyama, Naoki Umezawa, Yasumichi Inoue, Isamu Akiba, Takehisa Dewa, Atsushi Ikeda, Toshihisa Mizuno.

Delivery of external proteins into the cytoplasm using protein capsules modified with IgG on the surface, created from the amphiphilic two helix-bundle protein OLE-ZIP.

Chem. Commun., **60**, 968-971 (2024).

Naoya Fukuda, Kohki Toriuchi, Rina Mimoto, Hiromasa Aoki, Hiroki Kakita, Yoshiaki Suzuki, Satoru Takeshita, Tetsuya Tamura, Hisao Yamamura, Yasumichi Inoue, Hidetoshi Hayashi, Yasumasa Yamada, Mineyoshi Aoyama.

Hypothermia Attenuates Neurotoxic Microglial Activation via TRPV4.

Neurochem. Res., **49**, 800-813 (2024).

Muneshige Tokugawa, Yasumichi Inoue, Hiromasa Aoki, Chiharu Miyajima, Kan'ichiro Ishiuchi, Kento Tsurumi, Chisane Kujirai, Daisuke Morishita, Michiyo Matsuno, Hajime Mizukami, Masaki Ri, Shinsuke Iida, Toshiaki Makino, Mineyoshi Aoyama, Hidetoshi Hayashi.

Involvement of cardiac glycosides targeting Na/K-ATPase in their inhibitory effects on c-Myc expression via its transcription, translation and proteasomal degradation.

J. Biochem., **175**, 253-263 (2024).

Kousuke Takahashi, Yasumichi Inoue, Shigeaki Hida, Ryuki Hosoda, Naoki Umezawa, Isamu Aiba, Mitsuo Umetsu, Toshihisa Mizuno.

Target-selective cytosolic delivery of cargo proteins using the VHH-presented OLE-ZIP capsules.

RSC Pharm., **1**, 786-796 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

長坂真衣, 片山量平, 井上靖道

新規 p53 標的遺伝子 ID3 は肺がん転移を抑制する.

第 28 回日本がん分子標的治療学会学術集会, 2024 年 6 月 21 日 (東京).

山中翔悟, 平丸航太郎, 水野佑哉, 宮嶋ちはる, 石内勘一郎, 牧野利明, 松野倫代, 水上元, 井上靖道, 林秀敏

ミャンマー植物由来化合物による HRI 活性化を介したストレス応答性転写因子 ATF4 誘導機構の解析.

第 70 回日本薬学会東海支部総会・大会, 2024 年 7 月 6 日 (名古屋).

橋口咲良, 長坂真衣, 宮嶋ちはる, 青木啓将, 鳥内皐暉, 青山峰芳, 林秀敏, 井上靖道

p53 標的遺伝子 ID3 は肺がん転移を抑制する.

第 70 回日本薬学会東海支部総会・大会, 2024 年 7 月 6 日 (名古屋).

中川愛理, 山中翔悟, 宮嶋ちはる, 林秀敏, 井上靖道

多発性骨髄腫におけるプロテアソーム阻害剤抵抗性に関わる分子メカニズムの解明と治療法開発.

第 70 回日本薬学会東海支部総会・大会, 2024 年 7 月 6 日 (名古屋).

藤原巧斗, 宮嶋ちはる, 林秀敏, 井上靖道

脱ユビキチン化酵素 USP2 による TAZ の安定化を介したがん悪性化制御.

第 70 回日本薬学会東海支部総会・大会, 2024 年 7 月 6 日 (名古屋).

Mai Nagasaka, Yasumichi Inoue, Daisuke Morishita, Ryohei Katayama, Mineyoshi Aoyama,

Hidetoshi Hayashi.

ID3, a direct transcriptional target of p53, regulates the metastatic ability of lung cancer cell.

第 83 回日本癌学会学術総会, 2024 年 9 月 20 日 (福岡) .

荒川主真, 加藤舞子, 井上靖道, 林秀敏, 久松洋介, 梅澤 直樹

オリゴアルギニン付与により生じる細胞毒性を軽減する方法.

第 18 回バイオ関連化学シンポジウム, 2024 年 9 月 12 日 (つくば) .

Shogo YAMANAKA, Kotaro HIRAMARU, Yuya MIZUNO, Chiharu MIYAJIMA, Kan'ichiro ISHIUCHI, Toshiaki MAKINO, Michiyo MATSUNO, Hajime MIZUKAMI, Yasumichi INOUE, Hidetoshi HAYASHI.

Mechanism of induction of stress-responsive transcription factor ATF4 through HRI activation by compounds from Myanmar plant.

第 9 回名古屋・岐阜・瀋陽・南京、薬学学術シンポジウム (国際学会) , 2024 年 9 月 16 日 (名古屋) .

Sakura HASHIGUCHI, Mai NAGASAKA, Chiharu MIYAJIMA, Hiromasa AOKI, Kohki TORIUCHI, Mineyoshi AOYAMA, Hidetoshi HAYASHI, Yasumichi INOUE.

ID3 is a target gene of p53 and modulates lung cancer cell metastasis.

第 9 回名古屋・岐阜・瀋陽・南京、薬学学術シンポジウム (国際学会) , 2024 年 9 月 16 日 (名古屋) .

Takuto FUJIWARA, Chiharu MIYAJIMA, Yasumichi INOUE, Hidetoshi HAYASHI.

The deubiquitinating enzyme USP2 stabilizes TAZ to mediate cancer cell proliferation.

第 9 回名古屋・岐阜・瀋陽・南京、薬学学術シンポジウム (国際学会) , 2024 年 9 月 16 日 (名古屋) .

Airi NAKAGAWA, Shogo YAMANAKA, Chiharu MIYAJIMA, Hodetoshi HAYASHI, Yasumichi INOUE.

Elucidation of molecular mechanisms involved in proteasome inhibitor resistance in multiple myeloma.

第 9 回名古屋・岐阜・瀋陽・南京、薬学学術シンポジウム (国際学会) , 2024 年 9 月 16 日 (名古屋) .

Masahiro HIRAYAMA, Eri YAMADA, Hiromasa AOKI, Kazuya IZUMI, Ayumi AMANO,

Kohki TORIUCHI, Koichi OGAMI, Mai NAGASAKA, Yasumichi INOUE, Hidetoshi HAYASHI, Satoru TAKESHITA, Hiroki KAKITA, Yasumasa YAMADA, Mineyoshi AOYAMA.

Pharmacologic inhibition of BMI1 activates the p53 pathway to suppress MYCN-amplified neuroblastoma.

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京、薬学学術シンポジウム（国際学会）, 2024年9月16日（名古屋）.

Yuka SUZUKI, Satoru TAKESHITA, Hiroki KAKITA, Nami NAKAMURA, Mari MORI, Kohki TORIUCHI, Hiromasa AOKI, Yasumichi INOUE, Hidetoshi HAYASHI, Yasumasa YAMADA, Mineyoshi AOYAMA.

Thrombopoietin Enhances Neuronal Cell Proliferation and Axonal Elongation in Intrauterine Growth Restricted Rats.

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京、薬学学術シンポジウム（国際学会）, 2024年9月16日（名古屋）.

Kazuya IZUMI, Hiromasa AOKI, Kohki Toriuchi, Hiroki KAKITA, Satoru TAKESHITA, Hiroko UEDA, Yasumichi INOUE, Hidetoshi HAYASHI, Yasumasa YAMADA, Mineyoshi AOYAMA.

Nanaomycin A exerts antitumor effect on neuroblastoma cells with DNA demethylation.

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京、薬学学術シンポジウム（国際学会）, 2024年9月16日（名古屋）.

Rina MIMOTO, Naoya FUKUDA, Kohki TORIUCHI, Hiromasa AOKI, Hiroki KAKITA, Yoshiaki SUZUKI, Satoru TAKESHITA, Tetsuya TAMURA, Hisao YAMAMURA, Yasumichi INOUE, Hidetoshi HAYASHI, Yasumasa YAMADA, Mineyoshi AOYAMA.

Hypothermic culture attenuates neurotoxic activation of microglia via TRPV4 channel.

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京、薬学学術シンポジウム（国際学会）, 2024年9月16日（名古屋）.

平山真大, 山田恵理, 青木啓将, 泉和弥, 天野歩, 鳥内皐暉, 長坂真衣, 井上靖道, 林秀敏, 青山峰芳

BMI1 阻害剤による神経芽腫抗腫瘍効果および分子メカニズムの解明.

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024, 2024年10月27日（岐阜）.

天野歩, 加藤里菜, 青木啓将, 鳥内皐暉, 泉和弥, 長坂真衣, 井上靖道, 林秀敏, 青山峰芳
神経芽腫に対する細胞周期チェックポイント阻害剤併用による抗腫瘍効果の検討.

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024, 2024 年 10 月 27 日
(岐阜).

【神経薬理学分野】

(原報)

Haruki Kato, Hiroyuki Nakagawa, Chiaki Ishizaki, Jun Tomita, Kazuhiko Kume .
Preference of position in the proximity of various sugars revealed by location analysis of
Drosophila melanogaster .
Scientific Reports, 2024

Chihiro Inami, Makito Haruta, Yasumi Ohta, Motoshi Tanaka, MinHye So, Kazuya
Sobue, Yasemin Akay, Kazuhiko Kume, Jun Ohta, Metin Akay, Masahiro Ohsawa..
Real-time monitoring of cortical brain activity in response to acute pain using wide-area
Ca²⁺ imaging .
Biochem Biophys Res Commun Volume 708, 2024

Daisuke Mori, Ryosuke Ikeda, Masahito Sawahata, Sho Yamaguchi, Akiko Kodama,
Takashi Hirao, Yuko Arioka, Hiroki Okumura, Chihiro Inami, Toshiaki Suzuki, Yu Hayashi,
Hidekazu Kato, Yoshihiro Nawa, Seiko Miyata, Hiroki Kimura, Itaru Kushima, Branko
Aleksic, Hiroyuki Mizoguchi, Taku Nagai, Takanobu Nakazawa, Ryota Hashimoto, Kozo
Kaibuchi, Kazuhiko Kume, Kiyofumi Yamada & Norio Ozaki..
Phenotypes for general behavior, activity, and body temperature in 3q29 deletion model
mice .
Translational Psychiatry volume 14, Article number: 138, 2024

Daisuke Mori, Chihiro Inami, Ryosuke Ikeda, Masahito Sawahata, Shinji Urata, Sho T.
Yamaguchi, Yohei Kobayashi, Kosuke Fujita, Yuko Arioka, Hiroki Okumura, Itaru Kushima,
Akiko Kodama, Toshiaki Suzuki, Takashi Hirao, Akira Yoshimi, Akira Sobue, Takahiro Ito,
Yukikiro Noda, Hiroyuki Mizoguchi, Taku Nagai, Kozo Kaibuchi ,Shigeo Okabe, Koji
Nishiguchi, Kazuhiko Kume, Kiyofumi Yamada⁴ and Norio Ozaki.
Mice with deficiency in *Pcdh15*, a gene associated with bipolar disorders, exhibit
significantly elevated diurnal amplitudes of locomotion and body temperature .

Translational Psychiatry 14, Article number: 216, 2024

Takefumi KIKUSUI, Mizuho YAGISAWA, Kahori KOYAMA, Yuma SHISHIKURA, Kana MIYAMOTO, Koichi FUJIWARA, Kazuhiko KUME, Kensaku NOMOTO, Miho NAGASAWA.

Beacon-based sleep-wake monitoring in dogs .

J Vet Med Sci 86(6): 631–635, 2024

Ryoya Tanaka, Yuki Mitaka, Daigo Takemoto, Mitsuhiko P. Sato, Azusa Kamikouchi, Yoshinori Suzuki. Switching escape strategies in the parasitic ant cricket *Myrmecophilus tetramorii* ,

Communications Biology 7, Article number: 1714, 2024

Yamaguchi, S.T., Hatori, S., Kotake, K.T., Zhou, Z., Kume, K., Reiter, S., Norimoto, H..

Circadian control of sleep-related neuronal activity in lizards .

PNAS Nexus, Volume 3, Issue 1, January 2024, pgad481, 2024

(総説・著書・総合論文など)

青野 萌子、富田 淳、糸 和彦.

ショウジョウバエを用いた睡眠研究 .

オベリスク Vol.29,1, 2024

天藤七海、糸和彦.

睡眠と生体リズムの構造・発達・メカニズム .

小児内科 Vol.56 No.8, 2024-8

(学会発表)

Kazuhiko Kume.

Murine Therapeutic Model of Circadian Rhythm Sleep-Wake Disorders .

SRBR 2024, 2024 年 5 月 24 日 (Puerto Rico)

糸 和彦.

概日リズムと睡眠覚醒リズムの関係の再考.

生化学若い研究者の会東海支部・時間生物学セミナー, 2024年6月4日(名古屋)

糸 和彦.

概日リズムと睡眠障害の基礎と臨床.

第24回PHシンポジウム, 2024年6月30日(東京)

糸 和彦.

マウスの概日リズム睡眠・覚醒障害(CRSWD)モデルに対するアリピプラゾールの効果.

日本睡眠学会 第48回定期学術集会 S18, 2024年7月18日(横浜)

小塚康平、江上涼、高天翔、大澤匡弘、糸和彦.

マウスを用いた概日リズム睡眠覚醒障害(CRSWD)の新規モデルの樹立と治療法の探索 .

日本睡眠学会 第48回定期学術集会 S18, 2024年7月18日(横浜)

加藤遥輝 島波輝 鈴木力憲 富田淳 糸和彦.

Enhanced Sleep in *Drosophila melanogaster* under the Presence of Predators .

Neuro 2024, 2024年7月24日(Fukuoka)

磯部一朗、富田淳、糸和彦.

Sleep regulation during interactions between individuals in *Drosophila melanogaster* .

Neuro 2024, 2024年7月24日(Fukuoka)

Rabia Garibagaoglu, Jun Tomita, Kazuhiko Kume. The Impact of Amino Acids in Sleep Regulation in *Drosophila melanogaster* .

Neuro 2024, 2024年7月24日(Fukuoka)

Rabia Garibagaoglu, Jun Tomita, Kazuhiko Kume.

Amino Acid Influence on Regulating Sleep in *Drosophila melanogaster* .

CBS2024 - International Chronobiology Summer School , 2024年8月5日(Nagoya)

Ashrafi Afrida, Jun Tomita, Kazuhiko Kume.

Role of Ca²⁺/calmodulin-dependent protein kinase II in the regulation of circadian rhythms in *Drosophila* .

CBS2024 - International Chronobiology Summer School , 2024年8月5日(Nagoya)

Kazuhiko Kume .

生物リズムに関する札幌シンポジウム 2024, 2024 年 8 月 9 日 (Sapporo)

Haruki Kato, Namiki Shima, Yoshinori Suzuki, Jun Tomita, Kazuhiko Kume.

Enhanced isleep in *Drosophila melanogaster* under the presence of predators.

生物リズムに関する札幌シンポジウム 2024, 2024 年 8 月 9 日 (Sapporo)

Kazuhiko Kume.

Daily behavior profile in *Drosophila*, diurnal / nocturnal / crepuscular.

第 14 回分子高次機能研究会, 2024 年 8 月 22 日 (岐阜)

Jun Tomita.

Male-male interaction-induced sleep in *Drosophila melanogaster* .

第 14 回分子高次機能研究会, 2024 年 8 月 22 日 (岐阜)

鈴木力憲.

The long journey to find out the neuromolecular basis for flexible motor control in *Drosophila*, 第 14 回分子高次機能研究会, 2024 年 8 月 22 日 (岐阜)

加藤遥輝 島波輝 鈴木力憲 富田淳 糸和彦.

Enhanced Sleep in *Drosophila melanogaster* under the Presence of Predators.

第 14 回分子高次機能研究会, 2024 年 8 月 22 日 (岐阜)

Ichiro Isobe, Jun Tomita, Kazuhiko Kume.

Sleep Regulation by Male-Specific Odors and Individual Interactions in *Drosophila* .

NeuroFly 2024, 2024 年 9 月 2 日 (Birmingham)

Rabia Garibagaoglu, Jun Tomita, Kazuhiko Kume.

The Influence of Amino Acids on Sleep Regulation in *Drosophila melanogaster*.

NeuroFly 2024, 2024 年 9 月 2 日 (Birmingham)

Haruki Kato, Namiki Shima, Yoshinori Suzuki, Jun Tomita, Kazuhiko Kume.

Enhanced isleep in *Drosophila melanogaster* under the presence of predators,

第 9 回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム, 2024 年 9 月 15 日 (Nagoya)

Ri kaoku .

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム, 2024年9月15日 (Nagoya)

Ryo Furukawa .

第9回名古屋・岐阜・瀋陽・南京 薬学学術シンポジウム, 2024年9月15日 (Nagoya)

加藤遥輝 島波輝 鈴木力憲 富田淳 糸和彦.

Enhanced Sleep in *Drosophila melanogaster* under the Presence of Predators .

第16回日本ショウジョウバエ研究会, 2024年9月17日 (仙台)

Yoshinori Suzuki, Ryoya Tanaka.

Surviving in the Swarm: Switching Escape Strategies of the Parasitic Ant Cricket .

The 8th International Symposium on Swarm Behavior and Bio-Inspired Robotics, Kyoto University, 2024年9月19日 (Kyoto)

Yoshinori Suzuki, Kazuhiko Kume, Minoru Saitoe.

Neuromolecular Mechanisms Responsible for Flexibility in *Drosophila* Motor Control .

第46回日本比較生理生化学会, 2024年9月30日 (名古屋)

加藤遥輝 島波輝 鈴木力憲 富田淳 糸和彦.

Enhanced Sleep in *Drosophila melanogaster* under the Presence of Predators.

第46回日本比較生理生化学会, 2024年9月30日 (名古屋)

Kohei Kozuka, Ryo Egami, Gao TianXiang, Masahiro Ohsawa, Jun Tomita, Kazuhiko Kume.

Establishment of the new mice model of circadian rhythm sleep-wake disorder (CRSWD) and search for its treatment .

Neuroscience 2024, 2024年10月5日 (Chicago)

竜田晃佑, 糸和彦, 大澤匡弘.

神経障害性疼痛における視床背内側核-前帯状回皮質経路の関与.

第151回日本薬理学会関東部会, 2024年10月12日 (東京)

加藤遥輝 島波輝 鈴木力憲 富田淳 糸和彦.

Enhanced Sleep in *Drosophila melanogaster* under the Presence of Predators.

第31回日本時間生物学会学術大会, 2024年11月16日 (富山)

磯部一朗、富田淳、糸和彦.

ショウジョウバエのオス同士の相互作用による睡眠制御.

第 31 回日本時間生物学会学術大会, 2024 年 11 月 16 日 (富山)

青野萌子、加藤遥輝、鈴木力憲、富田淳、糸和彦.

Activity regulation by dopamine and circadian rhythm in *Drosophila* .

第 31 回日本時間生物学会学術大会, 2024 年 11 月 16 日 (富山)

小塚康平、江上涼、高天翔、大澤匡弘、糸和彦.

Aripiprazole による概日リズム睡眠覚醒障害(CRSWD)モデルマウスへの効果の検討.

第 31 回日本時間生物学会学術大会, 2024 年 11 月 16 日 (富山)

【レギュラトリーサイエンス分野】

(原報)

Watanabe T, Ambe K, Tohkin M

Predicting the addition of information regarding clinically significant adverse drug reactions to Japanese drug package inserts using a machine-learning model.

Ther Innov Regul Sci. **58**(2):357-367 (2024).

家田 維哉、黒田 侑花、松本 貴大、山下 彩花、渡邊 崇、堀 雄史、木村 通男、川上 純一、頭金 正博 医療情報データベースを活用した抗菌薬による薬剤性急性腎障害の発症及び慢性腎臓病へ移行するリスク因子の探索

YAKUGAKU ZASSHI **144**(4): 447-462 (2024).

Watanabe T, Ambe, K, Tohkin M

Streamlining Considerations for Safety Measures: A Predictive Model for Addition of Clinically Significant Adverse Reactions to Japanese Drug Package Inserts.

Biol. Pharm. Bull. **47**(3): 611–619 (2024).

Katayama S, Aoki Y, Akita A, Satake R, Tohkin M

Direct Comparison of the Effectiveness and Safety Among Direct Oral Anticoagulants and Warfarin in Japanese Patients: Nationwide Cohort Study in Japan.

Clin Pharmacol Ther. **116**(4):1023-1033 (2024).

Ambe K, Nakamori M, Tohno R, Suzuki K, Sasaki T, Tohkin M, Yoshinari K

Machine Learning-Based In Silico Prediction of the Inhibitory Activity of Chemical Substances Against Rat and Human Cytochrome P450s.

Chem Res Toxicol. **37**(11):1843-1850 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

なし

(学会発表)

安部 賀央里、木下 啓、山田 隆志、足利 太可雄、頭金 正博

皮膚感作性評価における in silico 予測モデルの開発

第10回 CBI学会 個別化医療研究会, 2024年2月27日 (岐阜) .

Linfeng Liu, Mayu Ohnishi, Yuka Yoshii, Kaori Ambe, Toshiaki Makino, Masahiro Tohkin
Efficacy and safety of disease-modifying anti-rheumatic drugs combined with methotrexate
for rheumatoid arthritis: Bayesian and frequentist network meta-analysis

日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 28~31 日 (横浜) .

安部賀央里【招待講演】

データベースと機械学習を活用した副作用予測研究シンポジウム 5 医療 DX 時代を先導する
「薬学×データサイエンス」の取り組み

第 26 回医薬品情報学会総会・学術大会, 2024 年 6 月 1 日 (千葉) .

安部賀央里【招待講演】

機械学習を活用した薬剤性腎障害の予測モデルの開発 ワークショップ 7 ICT は急性期の
腎臓診療に変革をもたらすか?

第 67 回日本腎臓学会学術総会, 2024 年 6 月 30 日 (横浜) .

安部賀央里【招待講演】

AI/機械学習 in 毒性学 ~化学物質の毒性予測モデル開発~ ワークショップ 2 ミライの
毒性学 明日から役立つ最先端技術

第 51 回日本毒性学会学術年会, 2024 年 7 月 3 日 (博多) .

Kotaro Suzuki, Kaori Ambe, Jumpei Ariyoshi, Yukiko Kamiya, Masahiro Tohkin

Development of an in silico model to predict the increase of blood alanine aminotransferase
in mice by gapmer antisense oligonucleotide

第 51 回日本毒性学会学術年会, 2024 年 7 月 3 日~5 日 (博多) .

光山 菜々美、柴田 侑裕、頭金 正博

Exploring peptides from human herpes virus which related with the HLA-B*58:01-
mediated oxyprinol-induced idiosyncratic adverse effect.

第 51 回日本毒性学会学術年会, 2024 年 7 月 3 日~5 日 (博多) .

徳永 朱莉、木下 啓、安部 賀央里、山田 隆志、足利 太可雄、頭金 正博

Development of the regression model in machine learning to predict skin sensitization
intensity and considerations for improving interpretability

第 51 回日本毒性学会学術年会, 2024 年 7 月 3 日~5 日 (博多) .

安部 賀央里【招待講演】

New Approach Methodologies (NAMs) を活用した皮膚感作性強度予測に向けた機械学習モ

デルの開発 フォーラム II New Approach Methodologies (NAMs) による毒性の評価
フォーラム 2024 衛生薬学・環境トキシコロジー, 2024 年 9 月 4 日 (仙台) .

安部 賀央里【招待講演】

機械学習を用いた副作用予測に関する研究

シンポジウム 100 歳を超える健康設計への挑戦

第 25 回応用薬理シンポジウム, 2024 年 9 月 16 日 (東京) .

安部 賀央里【招待講演】

機械学習を活用したレギュラトリーサイエンス研究 講演 データ解析を取り入れたレギュラトリーサイエンス研究の紹介

第 10 回次世代を担う若手のためのレギュラトリーサイエンスフォーラム, 2024 年 9 月 21 日 (滋賀) .

安部 賀央里【招待講演】

皮膚感作性評価における機械学習モデルの活用 スポンサーシンポジウム 革新的創薬支援ツールとしての New Approach Methodologies (NAMs) 最前線

CBI 学会 2024 年大会, 2024 年 10 月 30 日 (船堀) .

Kouki Maebara, Kyoko Ondo, Tomoaki Tochtani, Toru Usui, Izuru Miyawaki, Kaori Ambe
A deep learning model for predicting chemical-induced rat hepatocellular necrosis using transcriptome data CBI 学会 2024 年大会, 2024 年 10 月 28 日～31 日 (船堀) .

出来 佑都、和知野 千春、安部 賀央里、小林 紀香、宮崎 ゆか、坪内 希親、堀田 祐志、近藤 勝弘、日比 陽子、頭金 正博、服部 友紀

新型コロナウイルス感染症による後遺症の実態調査とリスク因子の探索 ～名古屋市立大学病院における電話アンケート調査：症例対照研究～

第 34 回医療薬学会年会, 2024 年 11 月 2 日～ 4 日 (幕張) .

徳永 朱莉、木下 啓、岩佐 帆乃夏、波多野 浩太、中村 伸昭、足利 太可雄、 安部 賀央里

アミノ酸誘導体結合性試験 ADRA 等を使用した強感作性物質の皮膚感作性強度を予測する機械学習モデルの開発

日本動物実験代替法学会 第 37 回大会, 2024 年 11 月 29 日～12 月 1 日 (宇都宮) .

長谷川 桃子、三ツ口 陽子、曾原 喜一郎、安部 賀央里

眼刺激性評価における in vitro 短時間曝露法 (STE 試験法) の効率化を目指した in silico モ

デルの開発

日本動物実験代替法学会 第 37 回大会, 2024 年 11 月 29 日～12 月 1 日 (宇都宮) .

早川 知里、安部 賀央里、山田 隆志、吉成 浩一、頭金 正博

機械学習による ヒトアセチルコリンエステラーゼ活性阻害の *in silico* 予測モデルの開発

日本動物実験代替法学会 第 37 回大会, 2024 年 11 月 29 日～12 月 1 日 (宇都宮) .

安部 賀央里【依頼講演】

Prediction of skin sensitization using machine learning.

JSAAE & ASCCT-ESTIV Joint Webinar, 2024 年 12 月 4 日 (オンライン) .

【臨床薬学分野】

(原報)

Chihiro Wasa, Kazuhiro Iguchi, Tomoya Tachi, Yoshihiro Noguchi, Aki Hisamatsu, Shingo Katsuno, Hitomi Teramachi

Effectiveness of Distributing Pocket Cards in Improving the Behavior, Attitude, and Knowledge Regarding Proper Medication Use

Front. Public Health, 11:1296073, doi: 10.3389/fpubh.2023.1296073 (2024)

Keisuke Aoyama, Tomoya Tachi, Satoaki Kubo, Aisa Koyama, Mayuko Watanabe, Satoshi Aoyama, Yoshihiro Noguchi, Kazuhide Tanaka, Masahiro Yasuda, Akihiko Shibata, Takashi Mizui, Hitomi Teramachi

Probable Effects of Polypharmacy and Equivalent Doses of Psychotropic Drugs on Prevalence of Adverse Drug Events among Psychiatric Inpatients in a General Hospital in Japan

Hum. Psychopharmacol. Clin. Exp., e2890, doi: 10.1002/hup.2890 (2024)

Tomoya Tachi, Yoshihiro Noguchi, Hitomi Teramachi

Development of a remote health support program by pharmacists and elucidation of its effectiveness: A randomized controlled study

Biol. Pharm. Bull., **47**, 771-784 (2024)

Shunsuke Yoshizawa, Tomoya Tachi, Yuta Takahashia, Satoshi Aoyama, Yoshihiro Noguchi, Kazuhide Tanaka, Masahiro Yasuda, Takashi Mizui, Hisao Komeda, Tomoaki Yoshimura, Hitomi Teramachi

Impact of Polypharmacy and Risk Factors for Exacerbation of Lower Urinary Tract Symptoms in Patients with Urological Conditions: A Retrospective Study in a Japanese Municipal Hospital

Biol. Pharm. Bull., **47**, 818-826 (2024)

藤井 祥矢, 大澤 友裕, 平手 友章, 神田 香織, 舘 知也, 水井 貴詞, 篠田 邦大, 笠原 千嗣, 安田 昌宏

CADD-Legacy®ポンプを用いた blinatumomab 在宅投与移行プログラムの検討
癌と化学療法, **51**, 535-539 (2024)

Kazuhide Tanaka, Masahiro Yasuda, Tomoya Tachi, Yuta Teshigawara, Seiji Inoue, Yoko Ino, Junichi Kitagawa, Yoshihiro Noguchi, Tomoaki Yoshimura, Hitomi Teramachi, Senji Kasahara

Quality of life assessment and cost-utility analysis of initial chemotherapy for patients with non-Hodgkin's lymphoma: A prospective analysis

Oncol. Lett., **28**, 430, doi: 10.3892/ol.2024.14564 (2024)

Yago T, Yuda N, Tanaka M, Iwao T, Matsunaga T.

Evaluating intestinal absorption of peptide Met-Lys-Pro in casein hydrolysate using Caco-2 and human iPS cell-derived small intestinal epithelial cells.

Food Res. Int., **193**, 114831 (2024).

Kanno T, Katano T, Shimura T, Tanaka M, Nishie H, Fukusada S, Ozeki K, Ogawa I, Iwao T, Matsunaga T, Kataoka H.

KLF4-mediated macrophage polarization and phenotypic transitions drive intestinal fibrosis in THP-1 monocyte models in vitro.

Medicina., **60**, 713 (2024).

Yamada S, Hashita T, Yanagida S, Sato H, Yasuhiko Y, Okabe K, Noda T, Nishida M, Matsunaga T, Kanda Y.

SARS-CoV-2 causes dysfunction in human iPSC-derived brain microvascular endothelial cells potentially by modulating the Wnt signaling pathway.

Fluids Barriers CNS., **21**, 32 (2024).

Okada T, Okada A, Aoki H, Onozato D, Kato T, Takase H, Ohshima S, Sugino T, Unno R, Taguchi K, Hamamoto S, Ando R, Shimada S. I, Hashita T, Iwao T, Matsunaga T, Yasui T.

Phagocytosis model of calcium oxalate monohydrate crystals generated using human induced pluripotent stem cell-derived macrophages.

Urolithiasis., **52**, 51 (2024).

Imakura Y, Mima S, Yamazaki N, Inomata A, Mochizuki S, Iwao T, Matsunaga T.

Utility of human induced pluripotent stem cell-derived small intestinal epithelial cells for pharmacokinetic, toxicological, and immunological studies.

Biochem. Biophys. Res. Commun., **692**, 149356 (2024).

Mizuno S, Jinnoh Y, Arita A, Qiu S, Hashita T, Hori E, Iwao T, Matsunaga T.
New maintenance culture method for intestinal stem cells derived from human induced pluripotent stem cells.

Biol. Pharm. Bull., **47**, 120-129 (2024).

Noda M, Kikuchi C, Hori E, Iwao T, Nagami C, Takeuchi M, Matsunaga T.
Effect of anagliptin on vascular injury in the femoral artery of type 2 diabetic rats.

Biol. Pharm. Bull., **47**, 204-212 (2024).

Shirai K, Qiu S, Minowa H, Hashita T, Iwao T, Matsunaga T.
Air-liquid interface culture and modified culture medium promote the differentiation of human induced pluripotent stem cells into intestinal epithelial cells.

Drug Metab. Pharmacokinet., **55**, 100994 (2024).

Teshima R, Osawa S, Yoshikawa M, Kawano Y, Otsuka H, Hanawa T. Low-adhesion and low-swell hydrogel based on alginate and carbonated water to prevent temporary dilation of wound sites. *Int J Bio Macromol*, **254**, 127928, 2024.

Ozawa C, Iwami C, Kawano Y, Hanawa T. Feasibility study on the application of pectin as pollen adsorbent to prevent pollinosis. *Carbohydr Polym Technol Appl*, **8**, 100538, 2024. ¥

Teshima R, Osawa S, Hirose K, Kawano Y, Kikuchi A, Hanawa T, Otsuka H. Effect of CO₂ release behavior on the crosslinking degree of alginate hydrogels prepared with CaCO₃ and carbonated water. *Mater Adv*, **5**, 6368-6372, 2024.

Saito M, Nakashima Y, Hori E, Suzuki T, Ichihara T.
Differences in time till phlebitis onset in patients injected with Ancaron injection or amiodarone hydrochloride injection 150mg “TE”.

JSEM, **27**, 80-85 (2024).

(総説・著書・総合論文など)

館 知也

6・2 良質な医療を確保するための枠組み

新スタンダード薬学シリーズ第 2 巻 社会と薬学, 新スタ薬シリーズ編集委員会編集, 東京化学同人, 147-158 (2024)

舘 知也

(2) 処方箋に基づく調剤 ③処方箋に基づく医薬品の調製 SBOs929、④患者・来局者対応、服薬指導、患者教育 SBOs947, 949

モデル・コアカリキュラムに沿ったわかりやすい新実務実習テキスト 2025-2026, 病院・薬局実務実習東海地区調整機構監修・実務実習テキスト作成研究会編集, じほう, 121-124, 173-176 (2024)

舘 知也

I・II・VII

薬剤師のための効果的なオンライン研修（ライブ形式）のあり方ガイドブック, 一般社団法人日本医療薬学会 2022 年度医療薬学学術第 2 小委員会, 一般社団法人日本医療薬学会, 2-3, 13 (2024)

T. Hashita, T. Matsunaga, J. DeRose, N. Tsurumaki.

Rapid check of live stem cells in cell-culture inserts set in multi-well plates.

Leica, March 20 (2024).

(学会発表)

勅使河原 裕大, 舘 知也, 田中 和秀, 宍戸 正昂, 野口 義紘, 水井 貴詞, 寺町 ひとみ, 安田 昌宏, 吉村 知哲, 笠原 千嗣

悪性リンパ腫におけるがん化学療法の副作用が QOL に及ぼす影響—前向き調査研究—

日本医療薬学会第 7 回フレッシュャーズ・カンファランス, 2024 年 6 月 15-16 日 (東京)

大澤 友裕, 飯原 大稔, 浅野 裕紀, 長谷川 貴昭, 梅田 道, 舘 知也, 澤 祥幸, 吉村 知哲, 笠原 千嗣, 安田 昌宏

多施設共通のアファニチブ・ワークシート作成の取り組みとその副作用評価

医療薬学フォーラム 2024・第 32 回クリニカルファーマシーシンポジウム, 2024 年 7 月 6-7 日 (熊本)

井出 名月, 堀 英生, 齊藤 将之, 舘 知也, 今井 大輔, 今井 敬司, 塚本 知男, 服部 芳明, 林 きよみ, 鈴木 匡

地域中核病院と薬局による患者サポート連携強化を目指す研修モデルの開発と効果検証

第 9 回日本薬学教育学会大会, 2024 年 8 月 17-18 日 (東京)

舘 知也【招待講演】

患者視点の医薬品適正使用を目指した医療薬学研究～製剤と患者・生活者の行動を考える～
第 49 回製剤・創剤セミナー，2024 年 9 月 10-11 日（三浦郡葉山町）

竹村 風太，伊野 陽子，田中 和秀，舘 知也，勅使河原 裕大，野口 義紘，吉村 知哲，寺町 ひ
とみ，安田 昌宏，笠原 千嗣

ベイジアンネットワークを用いた悪性リンパ腫患者の不安・副作用と QOL の因果関係究明
日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024，2024 年 10 月 27 日
（岐阜）

高井 彩乃，田中 和秀，舘 知也，青山 智，笠原 千嗣，米田 尚生，安田 昌宏

アミノレブリン酸塩酸塩投与患者における病棟薬剤師の薬学的介入効果
第 34 回日本医療薬学会年会，2024 年 11 月 2-4 日（千葉）

舘 知也【招待講演】

薬剤師のための効果的なオンライン研修教育ー活動報告ー
第 34 回日本医療薬学会年会 シンポジウム，2024 年 11 月 2-4 日（千葉）

小川 勇，中井孝明，岩尾岳洋，松永民秀，肥田重明.

In vitro 腸管免疫評価モデル構築に向けたヒト iPS 細胞由来濾胞被蓋上皮の作製.
第 61 回消化器免疫学会総会，2024 年 12 月 5 日-6 日（長崎）.

北口 隆，前田和哉，松田高博，大野克利，小林和浩，堀内新一郎，石田誠一，岩尾岳洋，松永
民秀，田中 充.

ヒト iPS 細胞由来小腸上皮細胞の改良培養法およびヒト凍結肝細胞の改良サンドイッチ培養
法による食品関連化合物のヒト体内動態予測性の改善検証.

日本動物実験代替法学会第 37 回大会，2024 年 11 月 29 日-12 月 1 日（宇都宮）.

中井孝明，小川 勇，松永民秀，岩尾岳洋.

ヒト生体腸管に近い凹凸構造・機能を持つ Caco-2 細胞の新規培養方法の確立.

日本動物実験代替法学会第 37 回大会，2024 年 11 月 29 日-12 月 1 日（宇都宮）.

杉浦慎治，富田辰之介，栗原一馬，坡下真大，佐藤寛之，森本雄矢，趙炳郁，三浦重徳，三宅力，
大久保智樹，藤山陽一，佐倉武司.

圧力駆動型生体模倣システムを用いた iPS 細胞由来脳血管内皮細胞のせん断応力負荷培養シ

ステムの開発.

日本動物実験代替法学会第 37 回大会, 2024 年 11 月 29 日–12 月 1 日 (宇都宮) .

Sato H, Nakai K, Hashita T, Iwao T, Matsunaga T.

Prediction of drug permeability using human iPS cell-derived brain microvascular endothelial cells.

39th JSSX and 26th North American JSSX Meeting, Sep. 15–18, 2024 (Honolulu, Hawaii, USA).

Shahin R, Sakai Y, Shirai K, Hashita T, Iwao T, Matsunaga T.

Freez converted suspension-type human primary hepatocyte as a novel in vitro model for pharmacokinetic and toxicity assay as an affordable price.

39th JSSX and 26th North American JSSX Meeting, Sep. 15–18, 2024 (Honolulu, Hawaii, USA).

Nakai T, Sakai R, Fukaya M, Kitamura M, Shahin R, Matsunaga T, Iwao T.

Assessing the first-pass effects of felodipine with the small intestine-liver coupled microphysiological system.

39th JSSX and 26th North American JSSX Meeting, Sep. 15–18, 2024 (Honolulu, Hawaii, USA).

Kajita T, Hashita T, Hori E, Iwao T.

Development of a platelet generation evaluation system using human iPS cell-derived megakaryocytes.

The 9th Nagoya / Gifu / Nanjing / Shenyang Symposium of Pharmaceutical Sciences, Sep. 15–16, 2024 (Nagoya, Japan).

Shahin R, Sakai Y, Shirai K, Hashita T, Iwao T, Matsunaga T.

Convert suspension-type human primary hepatocytes to pleatable-type human primary hepatocytes as a novel in vitro pharmacokinetic model to be used in MPS for induction and efflux transporter assay at an affordable price.

MPS World Summit 2024, Jun. 10–14, 2024 (Seattle, Washington, USA).

Kitamura M, Iwao T, Matsunaga T.

Cytochrome P450 induction study on a gut and liver-on-plate.

MPS World Summit 2024, Jun. 10–14, 2024 (Seattle, Washington, USA).

Matsunaga T, Kitamura M, Shirai K, Fukaya M, Sakai Y, Saito I, Yamada H, Iwao T.
Improvement of culture method of human induced pluripotent stem cell-derived intestinal epithelial cells and their application to a gut and liver-on-plate.
MPS World Summit 2024, Jun. 10–14, 2024 (Seattle, Washington, USA).

Toyoda H, Yakabe Y, Aiki Y, Satoh T, Saito I, Yamada H, Nakatani N, Maeda K, Kusuhara H, Ando O, Iwao T, Matsunaga T, Ito Y.
Gut and liver-on-plate: evaluation of a cell culture system emulating the first-pass effect.
MPS World Summit 2024, Jun. 10–14, 2024 (Seattle, Washington, USA).

佐藤 寛之, 中井 佳穂, 坂下 真大, 岩尾 岳洋, 松永 民秀.
ヒト iPS 細胞脳毛細血管内皮細胞を用いた薬物透過性の予測.
第 51 回日本毒性学会学術年会, 2024 年 7 月 3-5 日 (福岡) .

望月清一, 今倉悠貴, 諸橋康史, 山崎奈穂, 岩尾岳洋, 松永民秀, 中村健太郎.
ヒト iPS 細胞由来腸管上皮細胞 (F-hiSIEC™) の新規培養法による、薬物代謝能の改善と毒性評価への展開可能性.
第 51 回日本毒性学会学術年会, 2024 年 7 月 3 日–5 日 (福岡) .

諸橋康史, 今倉悠貴, 望月清一, 岩尾岳洋, 松永民秀, 中村健太郎.
新規培養法によるヒト iPS 細胞由来腸管上皮細胞を用いた薬物のヒト小腸代謝回避率の評価.
第 31 回 HAB 研究機構学術年会, 2024 年 6 月 13 日–14 日 (藤沢) .

岡田淳志, 高瀬弘嗣, 海野 怜, 田口和己, 新美和寛, 濱本周造, 安藤亮介, 広瀬真仁, 坂下真大, 岩尾岳洋, 松永民秀, 郡健二郎, 安井孝周.
マクロファージ結晶貪食を用いた FDA 承認化合物ライブラリー解析による創薬研究.
第 111 回日本泌尿器科学会総会, 2024 年 4 月 25 日–27 日 (横浜) .

清水佑華, 今井優里, 小林杏輔, 小川 勇, 岩尾岳洋, 指原紀宏, 松永民秀.
腸管バリア機能に対する乳酸菌共培養効果の in vitro 評価系の構築
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 30 日 (横浜) .

三井すずか, 堀英生, 田口りか, 供田将志, 神保美紗子, 浅井治行, 鈴木匡
PTP シートリサイクル活用による薬局での服薬状況確認トライアル研究
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 29 日 (横浜) .

森本雄矢, Jo Byeongwook, 佐藤寛之, 坂下真大, 三浦重徳.

マイクロ流体デバイスを用いた iPS 細胞由来脳血管内皮細胞の培養.

日本機械学会 関東支部 第 30 期総会・講演会, 2024 年 3 月 13 日-14 日 (東京).

岩尾岳洋【招待講演】.

ヒト iPS 細胞由来腸管モデル細胞の創薬研究での活用.

第 31 回 HAB 研究機構学術年会, 2024 年 6 月 13 日 (藤沢).

岩尾岳洋【招待講演】

創薬研究における *in vitro* 評価モデルとしての iPS 細胞由来腸管上皮細胞と腸管オルガノイド.

薬物動態談話会 4 月例会, 2024 年 4 月 12 日 (大阪).

西原優里, 廣瀬香織, 河野弥生, 鈴木夢生, 田淵彰, 大和谷和彦, 花輪剛久.

患者に優しい製剤の開発-患者の服用性向上を目的とした半固形製剤の調製と評価-

第 7 回フレッシュャーズ・カンファランス, 2024 年 6 月 15 日 (東京)

横田渉太郎, 日塔理恵子, 廣瀬香織, 河野弥生, 大和谷和彦, 田淵彰, 鈴木夢生, 花輪剛久.

口腔粘膜炎治療を目的としたポリフェノール含有タマリンド製剤の調製と物性評価

第 7 回フレッシュャーズ・カンファランス, 2024 年 6 月 15 日 (東京)

百 賢二, 河野 弥生, 内田 淳, 米持 悦生, 花輪 剛久.

医療ビッグデータを用いた医薬品開発ニーズとシーズの発掘 粉末化処方解析

日本薬剤学会第 39 年会, 2024 年 5 月 23 日-25 日 (神戸)

Takehisa Hanawa, Chihiro Ozawa, Chika Iwami, Kaoru Hirose, Yayoi Kawano.

Feasibility Study on the Application of Pectin to Pharmaceutical Additives

3rd International Conference on POLYMER SCIENCE and ENGINEERING, Oct. 21-24,
2024 (Boston, MA, USA)

Takehisa Hanawa, Kaoru Hirose, Yayoi Kawano, Moe Hoshizaki, Daiki Murata, Yuka Iwano, Shuji Shimada.

Application of a thermo-responsive gelation spray using Poloxamer for wound healing

iPoPS2024, Mar. 3-6, 2024 (Chiba, Japan)

坂下真大【招待講演】

iPS 細胞由来脳毛細血管内皮細胞を用いた創薬応用を目指して.
情報計算化学生物 (CBI) 学会, 2024 年 10 月 31 日 (東京) .

松永民秀【招待講演】, 堀英生, 名取美咲, 武田涼馬
TAGE と小腸上皮細胞障害.
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 30 日 (横浜) .

武田 涼馬, 森下 匠, 堀 英生, 坂下 真大, 岩尾 岳洋, 松永 民秀
ヒト iPS 細胞由来動脈血管内皮細胞の炎症ストレス応答性の評価.
日本薬学会第 144 年会, 2024 年 3 月 30 日 (横浜) .

齊藤将之【招待講演】
救急医療の未来と薬剤師の役割.
第 27 回日本救急医学会中部地方会学術集会, 2024 年 12 月 7 日 (福井) .

齊藤将之【招待講演】
未来を見据えた救急医療における薬剤師の貢献と課題.
日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2024, 2024 年 10 月 27 日
(岐阜) .

齊藤将之, 中島義仁, 堀英生, 鈴木匡, 市原利彦
アミオダロン注射薬の先発品と後発品使用患者における静脈炎発症までの時間の違い.
医療薬学フォーラム 2024, 2024 年 7 月 7 日 (熊本) .

7 進路および就職状況

学部

令和5年4月1日現在(単位:人)

卒業生	就職希望者 (有職者・自営業 含む)	就職決定者 (有職者・自営業 含む)	就職地域別											就職 未決定者	進学・その他								
			就職先業種別	市内	県内	岐阜	三重	東京	大阪	その他	計												
			A 農業・林業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	アルバイト・パート	0	(0)			
			B 漁業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	大学院進学	45	(17)			
			C 鉱業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	大学(他学部)進学	0	(0)			
			D 建設業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	大学(別科)進学	0	(0)			
96	49	49	E 製造業	1 食料品・飲料・たばこ・飼料	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	海外の大学・大学院進学	0	(0)		
(51)	(34)	(34)		2 繊維工業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	専門学校進学	0	(0)		
				3 印刷・同関連産業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	国家資格等試験準備	0	(0)		
				4 化学工業・石油・石炭製品	0	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	11	(9)	1	(1)	3	(1)	16	(11)	公務員試験準備	0	(0)
				5 鉄鋼業・非鉄金属・金属製品	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	その他(進路未定を含む)	2	(0)
				6 汎用・生産用業務器具	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	計	47	(17)
				7 電子部品・デバイス	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)			
				8 電気・情報通信機械器具	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)			
				9 輸送用機械器具	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)			
				10 その他の製造業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	※別途、人数を集計してください		
			F 電気・ガス・熱供給・水道業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	既に有職者(現職継続)	0	(0)	
			G 情報通信業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	自営	0	(0)	
			H 運輸業・郵便業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			I-1卸売業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			I-2小売業	4	(4)	6	(5)	3	(3)	0	(0)	6	(4)	1	(1)	3	(2)	23	(19)				
			J-1金融業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			J-2保険業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			K-1不動産取引・賃貸・管理業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			K-2物品賃貸業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			L-1学術・開発研究機関	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			L-2法務	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			L-3その他専門・技術サービス	0	(0)	1	(1)	0	(0)	0	(0)	2	(1)	0	(0)	0	(0)	3	(2)				
			M 宿泊業・飲食サービス業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			N 生活関連サービス業・娯楽業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			O-1学校教育	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			O-2その他の教育・学習支援業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			P-1医療業・保健衛生	1	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(1)	0	(0)	0	(0)	2	(1)	4	(2)				
			P-2社会保険・社会福祉・介護事業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			Q 複合サービス事業	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			R-1宗教	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			R-2サービス業(その他)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			S-1国家公務	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)				
			S-2地方公務	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)				
			上記以外	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)				
			計	5	(4)	8	(6)	3	(3)	1	(1)	22	(14)	2	(2)	8	(4)	49	(34)				
			全体の地域別割合	10.2%		16.3%		6.1%		2.0%		44.9%		4.1%		16.3%		100.0%					
			女子の地域別割合	(11.8%)		(17.6%)		(8.8%)		(2.9%)		(41.2%)		(5.9%)		(11.8%)		(100.0%)					

大学院博士前期課程

卒業生	就職希望者 (有職者・自営業 含む)	就職決定者 (有職者・自営業 含む)	就職地域別									就職 未決定者	進学・その他					
			就職先業種別	市内	県内	岐阜	三重	東京	大阪	その他	計							
45 (21)	39 (18)	39 (18)	A 農業・林業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	アルバイト・パート	0 (0)		
			B 漁業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	大学院進学	6 (3)	
			C 鉱業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	海外の大学・大学院進学	0 (0)	
			D 建設業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	専門学校進学	0 (0)	
			E 製 造 業	1 食料品・飲料・たばこ・飼料	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	国家資格等試験準備	0 (0)
				2 繊維工業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	公務員試験準備	0 (0)
				3 印刷・同関連産業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	その他(進路未定を含む)	0 (0)
				4 化学工業・石油・石炭製品	3 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	11 (6)	8 (3)	6 (1)	28 (12)				計	6 (3)
				5 鉄鋼業・非鉄金属・金属製品	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
				6 汎用・生産用業務器具	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
				7 電子部品・デバイス	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
				8 電気・情報通信機械器具	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
				9 輸送用機械器具	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
				10 その他の製造業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			F 電気・ガス・熱供給・水道業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			G 情報通信業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			H 運輸業・郵便業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			I-1卸売業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (1)						
			I-2小売業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			J-1金融業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			J-2保険業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			K-1不動産取引・賃貸・管理業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			K-2物品賃貸業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			L-1学術・開発研究機関	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			L-2法務	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			L-3その他専門・技術サービス	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (2)	1 (0)	0 (0)	4 (2)						
			M 宿泊業・飲食サービス業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			N 生活関連サービス業・娯楽業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			O-1学校教育	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			O-2その他の教育・学習支援業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
			P-1医療業・保健衛生	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	1 (0)					
P-2社会保険・社会福祉・介護事業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)							
Q 複合サービス事業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)							
R-1宗教	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)							
R-2サービス業（その他）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)									
S-1国家公務	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)							
S-2地方公務	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (1)									
上記以外	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (1)								
計	3 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	19 (11)	9 (3)	8 (2)	39 (18)									
全体の地域別割合	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	48.7%	23.1%	20.5%	100.0%										
女子の地域別割合	(11.1%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(61.1%)	(16.7%)	(11.1%)	(100.0%)										

※別途、人数を集計してください
既に有職者（現職継続）
自営

大学院博士後期課程・博士課程

卒業生	就職希望者 (有職者・自営業 含む)	就職決定者 (有職者・自営業 含む)	就職地域別 就職先業種別	市内	県内	岐阜	三重	東京	大阪	その他	計	就職 未決定者	進学・その他	
			A 農業・林業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		アルバイト・パート	0 (0)
			B 漁業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		大学院進学	0 (0)
			C 鉱業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		海外の大学・大学院進学	0 (0)
			D 建設業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		専門学校進学	0 (0)
16 (5)	15 (5)	15 (5)	E 1 食料品・飲料・たばこ・飼料	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0	国家資格等試験準備	0 (0)
			E 2 繊維工業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	(0)	公務員試験準備	0 (0)
			E 3 印刷・同関連産業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		その他(進路未定を含む)	1 (0)
			E 4 化学工業・石油・石炭製品	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	1 (0)	3 (0)	6 (2)		計	1 (0)
			E 5 鉄鋼業・非鉄金属・金属製品	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			E 6 汎用・生産用業務器具	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			E 7 電子部品・デバイス	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			E 8 電気・情報通信機械器具	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		※別途、人数を集計してください	
			E 9 輸送用機械器具	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		既に有職者(現職継続)	0 (0)
			E 10 その他の製造業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		自営	0 (0)
			F 電気・ガス・熱供給・水道業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			G 情報通信業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			H 運輸業・郵便業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			I-1卸売業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			I-2小売業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			J-1金融業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			J-2保険業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			K-1不動産取引・賃貸・管理業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			K-2物品賃貸業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			L-1学術・開発研究機関	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (1)			
			L-2法務	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			L-3その他専門・技術サービス	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			M 宿泊業・飲食サービス業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			N 生活関連サービス業・娯楽業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			O-1学校教育	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	2 (0)			
			O-2その他の教育・学習支援業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			P-1医療業・保健衛生	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	3 (0)	6 (2)			
			P-2社会保険・社会福祉・介護事業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			Q 複合サービス事業	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			R-1宗教	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			R-2サービス業(その他)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			S-1国家公務	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			S-2地方公務	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			上記以外	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
			計	3 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)	1 (0)	8 (1)	15 (5)			
			全体の地域別割合	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	6.7%	53.3%	100.0%			
			女子の地域別割合	(20.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(60.0%)	(0.0%)	(20.0%)	(100.0%)			

8 在籍者名簿

名古屋市立大学院薬学研究科(薬学部)所属教員一覧

(2024年4月現在)

講座	分野	教授	准教授	講師	助教
医薬化学	薬化学	中川 秀彦	川口 充康		太田 悠平
	精密有機反応学	梅澤 直樹		久松 洋介	
	薬品合成化学	中村 精一		池内 和忠	大橋 栄作
	機能分子構造学		池田 慎一		
生命分子薬学	生体超分子システム解析学	平嶋 尚英	田中 正彦		
	コロイド・高分子物性学	山中 淳平	奥菌 透 豊玉 彰子		
	生命分子構造学	加藤 晃一 (兼任)		矢木 真穂	
	分子生物薬学	白根 道子	中津海 洋一		尾崎 智也
	薬物送達学	尾関 哲也			小川 昂輝
	多階層生命機能解析学		矢木 宏和		
医療分子機能薬学	生薬学	牧野 利明	石内 勘一郎	寺坂 和祥	
	衛生化学	肥田 重明	伊藤 佐生智		小川 勇
	遺伝情報学	星野 真一	宇田川 剛		稲垣 佑都
	細胞分子薬効解析学	山村 壽男		鈴木 良明	近藤 るびい
	病態生化学	服部 光治	河野 孝夫		高岸 麻紀
医療薬学	薬物動態制御学	湯浅 博昭	保嶋 智也		山城 貴弘
	病態解析学	青山 峰芳			青木 啓将 鳥内 皐暉
	細胞情報学		井上 靖道	宮嶋 ちはる	
	神経薬理学	糸 和彦	富田 淳	鈴木 力憲	
	レギュラトリーサイエンス	頭金 正博		安部 賀央里	
	臨床薬学	舘 知也 岩尾 岳洋 河野 弥生	堀田祐志(兼務)	堀 英生 坡下 真大 齊藤 将之	
	附属研究所 創薬基盤科学研究所				
連携大	腫瘍制御学 (県がんセンター研究所)	青木 正博客員教授 小根山千歳客員教授	藤下 晃章客員准教授		
	加齢病態制御学 (国立長寿医療センター研究所)	飯島 浩一客員教授	関谷 倫子客員准教授		

	医薬品質保証学 (国立医薬品食品衛生研究所)	佐藤陽治客員教授 安田 智客員教授	安田 智客員准教授		
	生命動態制御学 (自然科学研究機構)	村田 和義客員教授	奥村 久士客員准教授		
	医薬品医療機器審査科学 (医薬品医療機器総合機構)	矢花 直幸客員教授			
	がん治療学 (公益財団法人がん研究会)	片山 量平客員教授 丸山 玲緒客員教授			

2024 年度大学院生名簿（博士前期・博士後期課程）

(2024 年 4 月現在)

専攻	講座	学年 分野	博士前期課程		博士後期課程		
			1 年	2 年	1 年	2 年	3 年
創薬生命科学	医薬化学	薬学	皆見 祥平 森山 響 吉川 旺佑	泉 遼 小澤 遼 平尾 景尚			
		精密機応 有反学	荒川 主真	鳥山 剛 廣瀬 拓			
		薬品成 合化学	大野 美空	大瀧 真由 田畑 愛美		野口 公寛	安藤 龍志 小林 誠
		機能子 分構造学					
	生命分子薬学	生体分 超分子シ スムテ解 析学	西野 瑞基 小笠原 有那				
		コロイ ド・高分 子物性学	竹内 麻有	川瀬 健太 竹本 満里菜 田代 耀			
		生命分 子構造学	西崎 竜平 高木 克樹				梅澤 芙美子
		分子物 生薬学	眞木 穂香	向江 凧			
		薬物達 送学	山下 凜 新海 斗馬 三宅 慧 安井 颯	上田 峻 竹沢 香穂 十時 拓大 山下 晶朱 SUI HAIXUAN	GAO YUAN FADILAH ASRIL HEMAT MOSTAFA KAMAL ATTIA ELSAYED 佐藤 一輝	寺島 花野 DAS JAYITA	高 明月 高橋 朋弘

専攻	講座	学年 分野	博士前期課程		博士後期課程			
			1 年	2 年	1 年	2 年	3 年	
医療機能薬学	医療分子機能薬学	生薬学	成田虎之介	XIN JINGXIAO 伊藤 司 能瀬 逸紀	LIU LINFENG ZUO QINGFEI			
		衛生化学	茶納 沙希 桐山 陽菜	荒井 陽人 榊原 悠				
			松浦 友大	戸川 果歩				
		遺伝情報学	鈴木 純 池田 遥菜 向山 凌雅	小川 慧真 北野 智也 志柿 暢彦				
			細胞分子薬 効解析学	葛原 響 岡野 晴佳 田邊 晴也	小井手 司 関根 大雅	倉田 朋 天野 泰樹	川田 成紀	鈴木 茜
		病態生化学		佐々 徳啓	徳永 柊 松村 悠己	川瀬 宗之		
	医療薬学	薬物動態制 御学	松井 快人	北村 拓馬 澁谷 玲衣 森本 遥香				
		病態解析学	平山 真大 鈴木 悠花	天野 歩 近藤 リリ				
			細胞情報学	藤原 巧斗 中川 愛理	橋口 咲良 藤田 真衣 山中 翔悟			
		神経薬理学		天藤 七海	青野 萌子 江上 涼 小塚 康平 ASHRAFI AFRIDA	磯部 一郎	GARIBAGA OGLU RABIA 丸岡 純也 西 風花	李 佳憶

	レギュラトリーサイエンス 医薬品安全性評価学	鈴木 孝太 郎	出来 佑都			
	臨床薬学	西川 斗偉 中井 孝明	北村 瑞基	佐藤 寛之 杉山 龍治	森口 博行	RAGHDA MOUSTAFA ABDELFATTAH IBRAHIM SHAHIN 寺島 純一
連携大学院	腫瘍制御学				安達 晴喜	
	加齢病態制御学			山本 洵		近松 幸枝
	医薬品質保証学					
	生命動態制御学					
	がん治療学			鈴木 裕陽		

2024 年度大学院生名簿（博士課程）

(2024 年 4 月現在)

専攻	講座	学年 分野	博士課程				非正規生	
			1 年	2 年	3 年	4 年		
創薬生命科学	医薬化学	薬化学						
		精密有機反応学						
		薬品合成化学						
		機能分子構造学				坂崎 美香		
	生命分子薬学	生体超分子システム解析学			山本 彩加			
		コロイド・高分子物性学				藤田 みのり		
		生命分子構造学			SHIM JINBO			
		分子生物薬学						
		薬物送達学			溝垣 伊織			
					相川 音和			
医療機能薬学	医療分子機能薬学	生薬学	高嶋 柚衣			迫田 凌太		
		衛生化学	向井中 玲菜		石川 怜			
					伊藤 佑真			
		遺伝情報学	高岸 優太					
		細胞分子薬効解析学	中浜 光哉			藤原 萌園		
	病態生化学		竹腰 祐斗					
	医療薬学	薬物動態制御学				間竹 勇		
		病態解析学	三本 里奈			泉 和弥		
		細胞情報学						
		神経薬理学		加藤 遥輝	古川 稜	稲波 千尋		
		レギュラトリーサイエンス 医薬品安全性評価学						
		病院薬剤学				長水 正也		

		臨床薬学	武田 涼馬	岩崎 萌実			
			高森 雄貴				
			首代みどり				
			諸角 一成				
連携 大学院		腫瘍制御学					
		加齢病態制御学					
		医薬品質保証学					
		生命動態制御学					
		がん治療学					

令和6年度 卒業研究実習研究室配属

分野	薬学科			生命薬科学科	
	4年	5年	6年	3年	4年
薬化学	212066 脇川 玲菜 222101 平野 早菜	202060 柳本 泰斗	182043 平松 理希 192012 大森 神瑠	222506 岩崎 わかば 222530 鈴木 遥乃 222543 檜垣 夢奈	212504 石飛 向基 212508 大倉 優佳 212529 塚原 成美
精密有機反応学	212053 増田 奏人	202001 青木 雄安		222515 小津 英暉 222549 水谷 洋貴	212518 小森 冨
薬品合成化学	212049 東山 慧月 192002 浅見 諒真	192063 宮地 桐斗		222503 石川 真生 222504 伊藤 航 222509 内田 真南斗 222519 川口 竜輝	212502 安藤 茉里 212552 渡邊 壮
機能分子構造学					
生体超分子システム解析学		202027 小島 凜	182039 丹羽 太陽 182050 南野 恵里 192007 乾 航志 192024 後藤 慎平 192050 橋本 昇輝		202532 前川 敦哉
コロイド・高分子物性学	212016 加藤 優弥 212026 佐治 千聖 212031 須田 遥斗 212046 根来 友楽良	202003 伊藤 颯馬 202020 川村 真白 202029 後藤 尚士 202049 細野 樹	192009 上西 優実花 192031 佐藤 美月 192043 中村 有里 192057 増田 夏海	222542 原田 莉子 212514 金谷 恵之介	212531 角田 涉 212550 吉見 里帆
生命分子構造学	212032 瀬川 瑚太郎 212035 滝藤 琴美	202012 荻野 夏巳	192039 富田 晃平	222531 砂川 和哉 212549 山本 崇太	212551 米山 樹
分子生物薬学	212013 岡本 将季 212018 倉田 菜名 212022 木場 悠哉 212033 高橋 日月	202018 神野 愛生 202028 後藤 亜緒衣 202054 宮川 和樹 202061 山口 美空	192006 石渡 友紀乃 192015 奥田 和奏 192065 森杉 優美 192066 渡邊 莉絵	222507 岩田 未希 222546 増井 温輝 222548 松尾 みのり	212506 伊藤 雅人 212532 鶴田 統也 212533 富田 有人 212545 村端 思実
薬物送達学	212005 和泉 佐弥 212037 竹田 愛理 212040 津田 麻唯子 212060 門前 幸佑	202016 加藤 直也 202021 KIM KYOUNGSU 202025 熊澤 有紗 202031 佐藤 里梨子	192017 加藤 瑤子 192019 川崎 叶也 192032 澤矢 真希 192047 西山 侑	222523 小森 満柚菜 222525 清水 陸斗 222533 舘 沙也加	212501 阿部 愛翔 212516 仮屋 優吾 212523 下田 陸斗 212524 上田 怜昂
多階層生命機能解析学	212051 福本 彩			222522 栗田 蒼空	212511 梶田 大起 212527 高木 励
生薬学	212009 魚住 和生 212055 松久 瑞希 212059 望月 優衣	202010 大木 萌子 202014 加藤 潤一 202026 黒野 佑衣 202062 山田 佑典	192010 上原 風花 192056 本田 智也 192062 宮崎 透	192508 大原 宏介	212509 小川 美伶 212519 近藤 花織里 212520 西藤 大慶
衛生化学	212003 秋元 美槻 212023 小林 千紘 212038 田篠 佑奈 212048 畑中 萌佳	202006 田舎片 梨沙 202022 木村 夏実 202052 水野 遥香 202055 村上 りお	192008 岩田 陸人 192023 古小路 隼也 192029 笹野 和希 192035 多田 陵太郎	222518 鎌田 汐音 222536 土田 将誓 212512 月東 晴空	212510 小田 凜 212515 上村 優介 212530 月山 彰子
遺伝情報学	212021 小島 伶菜	182015 黒田 真以 202008 宇佐美 彬史 202009 大門 駿介 202036 CHO SEUNGHEE 202040 中村 水優			202535 眞鍋 佑心 212522 篠田 陽介 212544 宮田 悠斗

細胞分子薬効解析学	212011 大西 里奈 212041 坪井 香乃 212052 藤田 遊 212062 山田 亜門	202053 水野 裕貴 202056 村林 華 202057 本村 達也	192001 浅井 美后 192011 大友 貴子 192052 檜皮 ゆかり 192064 森 鈴菜	222521 久志野 桃華 222538 橋爪 瑞生 222544 福本 恭吾	212513 門崎 莉奈 212534 長井 一真 212540 深見 壮佑 212542 逸見 峻輔
病態生化学	192034 高山 貫生 212015 小栗 楓果 212025 佐々木 一輝 212061 山崎 優実	202004 伊藤 菜々子 202017 加藤 真生 202047 平出 真菜	192003 安東 洋佑 192051 林原 健将 192055 星合 彩那	222512 岡田 栞凜 222514 沖野 理美 222551 山梨 航 222552 吉本 裕貴	212526 鈴木 海斗 212528 武田 百佳 212535 中村 一智 212539 広瀬 颯真
薬物動態解析学	212001 愛洲 唯 212006 市川 亜弥 212008 伊藤 駿	202011 大矢 初花 202023 日下 千穂 202024 國吉 優河	192004 石原 拓馬 192014 小川 優夏 192018 金丸 緋奈多 192058 松原 綾佑	222505 稲葉 美咲 222534 田中 明花	212547 山内 利玖 212548 山崎 美音
病態解析学	212017 窪田 ヒカル 212020 栗田 倫 212036 竹入 誉人 212056 水上 聡子	202013 尾前 友梨碧 202042 西科 有彩 202045 林 歩佳	192005 石山 真実 192028 坂根 雅 192060 水野 早季子	222501 井狩 里仁 222502 生駒 拓也 222520 菊池 安祐 222528 洲崎 佑実	212517 小嶋 梨瑚 212536 成田 祐香 212546 矢野 愛奈
細胞情報学	212014 沖中 克樹 212044 西田 朱希	202005 伊藤 諒 202039 中澤 蓮 202048 平野 航希	192042 中村 和 192046 成瀬 健 192053 藤井 くるみ	222513 岡本 和奏 222517 桂川 祥 222527 杉村 俊太 222529 鈴鹿 真翔	
神経薬理学	212004 石岡 由羽	202046 原 あかり	192025 近藤 里菜 192036 竜田 晃佑 192041 中曾根 美奈 192049 橋本 昇一	222510 内海 康晴	212525 杉本 優希
医薬品安全性解析学	212019 倉知 昂平 212029 嵩寄 勇人 212042 中尾 舞花	202043 長谷川 桃子 202044 早川 知里 202050 前原 恒希	192038 徳永 朱莉 192061 光山 菜々美		212521 佐竹 里野 212543 松野 純也
病院薬剤学			192013 岡田 紋佳 192048 萩田 圭紀		
臨床薬学教育研究センター	212007 井出 名月 212012 大矢 蒼 212024 近藤 麗奈 212027 佐藤 穂奈美 212045 西脇 菜々花 212050 弘 涼花 212063 山田 友葵 212064 山本 滉樹	202030 坂本 愛 202035 高木 美侑 202037 長江 和映 202051 三井 すずか 202058 森下 匠 202059 森島 志保	192016 梶田 知江 192022 黒岩 淳志 192026 酒井 涼介 192033 清水 佑華 192040 中井 佳穂 192045 名取 美咲	222524 佐藤 洋希 222547 間瀬 晋一朗	212503 池田 ゆうり 212507 伊藤 輝
【医】臨床薬剤学 (日比先生/肥田先生)	212002 青山 聖 212058 宮本 武門				
【医】薬理学 (大矢先生 / 山村先生)	212057 三井 陽南子				
【医】ウイルス学 (奥野先生/松永先生)		202002 阿久津 優太			
【医】神経発達・再生医学 (澤本先生/服部先生)				222540 服部 真奈	
【医】病態モデル医学 (大石先生/肥田先生)			192054 藤田 翼		

2023 年度研究員名簿

許可 NO.	配属分野	氏名
1	細胞分子薬効解析学	小川 璃子
2	薬物送達学	Esraa Ibrahim Abdelmaksod Shaaban
3	生薬学	柳川 俊之
4	生体超分子システム解析学	足立 浩章
5	生体超分子システム解析学	宮地 克真
6	生命分子構造学	平松 佳永
7	生命分子構造学	千田 紀代美
8	生命分子構造学	服部 久美子
9	生命分子構造学	谷中 冴子
10	生命分子構造学	佐藤 匡史
11	生命分子構造学	鈴木 詔子
12	生命分子構造学	神田 智哉
13	薬物送達学	野田 剛弘
14	薬物送達学	福重 香
15	生薬学	太田 美里
16	生薬学	趙 伯陽
17	生薬学	大渡 勝史
18	生薬学	笛木 司
19	生薬学	小西 徹
20	生薬学	牧 靖人
21	生薬学	鈴木 俊章
22	生薬学	東郷 俊宏
23	遺伝情報学	山本 肇
24	細胞分子薬効解析学	郭 皎
25	薬物動態制御学	石黒 雅江
26	薬物動態制御学	山本 俊輔
27	病態解析学	小泉 恵子
28	病態解析学	後藤 洋
29	病態解析学	垣田 博樹
30	病態解析学	竹下 覚
31	細胞情報学	吉田 康子
32	神経薬理学	歌 大介
33	神経薬理学	Austin M Ganaway
34	臨床薬学	齊藤 将之
35	臨床薬学	供田 将志
36	臨床薬学	成富 稔彦
37	臨床薬学	栗原 弘幸
38	臨床薬学	北口 隆
39	臨床薬学	壁谷 知樹

40	病態生化学	築地 仁美
41	生薬学	新谷 円華
42	衛生化学	西山 彩史
43	コロイド・高分子物性学	石川 達也
44	生命分子構造学	近藤 幸子
45	精密有機反応学	林 優樹
46	臨床薬学	樋口 恒彦
47	生命分子構造学	齋藤 泰輝
48	生命分子構造学	立尾 清悟
49	生命分子構造学	関 健仁
50	細胞分子薬効解析学	北原 文乃
51	神経薬理学	小林 里帆
52	薬化学	Malavika U
53	薬物送達学	諏訪部 晋
54	臨床薬学	稲葉 明彦
55	生薬学	左 清菲
56	薬物送達学	後藤 瑛一
57	生命分子構造学	高木 克樹
58	臨床薬学	池田 彩
59	精密有機反応学	梅澤 裕子
60	生薬学	森田 智

2024 年度研究員名簿

許可 NO.	配属分野	氏名
1	生体超分子システム解析学	足立 浩章
2	生体超分子システム解析学	宮地 克真
3	生薬学	森田 智
4	細胞分子薬効解析学	北原 文乃
5	薬物動態制御学	石黒 雅江
6	生薬学	鈴木 俊章
7	生薬学	高 嘉良
8	生薬学	太田 美里
9	遺伝情報学	山本 肇
10	薬物動態制御学	山本 俊輔
11	生薬学	大渡 勝史
12	生薬学	飛奈 良治
13	生薬学	笛木 司
14	薬物送達学	後藤 瑛一
15	病態解析学	竹下 覚

16	臨床薬学教育研究センター	松永 民秀
17	生薬学	牧 靖人
18	病態解析学	垣田 博樹
19	病態解析学	後藤 洋
20	神経薬理学	小林 里帆
21	臨床薬学教育研究センター	鈴木 匡
22	臨床薬学教育研究センター	北口 隆
23	臨床薬学教育研究センター	稲葉 明彦
24	コロイド・高分子物性学	石川 達也
25	臨床薬学教育研究センター	壁谷 知樹
26	病態解析学	渡邊 友佳
27	生薬学	東郷 俊宏
28	生命分子構造学	鈴木 詔子
29	生命分子構造学	谷中 冴子
30	生命分子構造学	佐藤 匡史
31	生命分子構造学	近藤 幸子
32	生命分子構造学	千田 紀代美
33	生命分子構造学	服部 久美子
34	生命分子構造学	平松 佳永
35	生命分子構造学	齋藤 泰輝
36	生命分子構造学	立尾 清梧
37	病態生化学	築地 仁美
38	薬化学	樋口 恒彦
39	生体超分子システム解析学	鈴木 瑠璃子
40	生化学・細胞生物学・腫瘍学	林 秀敏
41	衛生化学	西山 彩史
42	生薬学	楊 嘉
43	精密有機反応学	梅澤 裕子
44	生命分子構造学	藤田 里菜
45	臨床薬学	渡邊 ちひろ
46	神経薬理学	白 瑜
47	薬品合成化学	池内 和忠
48	薬物送達学	Aya Khaled Abdelmoneim Elsherief
49	臨床薬学	矢野 修一

教員採用・昇任・退職

区分	分野	補職名	氏名	辞令年月日	前職・移動先等
採用	神経薬理学	特任助教 (日本学術振興会特別研究員-PD)	向井 康敬	R6.4.1	日本学術振興会特別研究員 (PD) 助教 (北海道大学)
採用	臨床薬学	教授	河野 弥生	R6.4.1	クスリのアオキ 薬剤師 (保険調剤)
採用	薬化学	助教	太田 悠平	R6.4.1	崇城大学薬学部助教
採用	薬品合成化学	助教	大橋 栄作	R6.4.1	塩野義製薬 研究員
採用	精密有機反応学	助教	石田 良典	R6.11.1	東京医科歯科大学学生体材料工学研究所 助教
昇任	臨床薬学	教授	岩尾 岳洋	R6.4.1	准教授→教授
昇任	細胞情報学	教授	井上 靖道	R6.5.1	准教授→教授
昇任	臨床薬学	准教授	坡下 真大	R6.10.1	講師→准教授
昇任	病態解析学	講師	青木 啓将	R6.10.1	助教→講師
昇任	薬物送達学	講師	小川 昂輝	R6.10.1	助教→講師
昇任	薬物動態制御学	講師	山城 貴弘	R6.10.1	助教→講師
昇任	病態生化学	講師	高岸 麻紀	R6.12.1	助教→講師
昇任	分子生物薬学	講師	尾崎 智也	R6.12.1	助教→講師
異動	レギュラトリーサイエンス学	講師	安部 賀央里	R6.10.1	本学データサイエンス学部准教授に採用のため異動
退職	レギュラトリーサイエンス学	教授	頭金 正博	R6.6.30	内閣府食品安全委員会 委員に就任のため
退職	神経薬理学	特任助教 (日本学術振興会)	向井 康敬	R6.8.31	名古屋大学大学院 理学研究科助教採用

退職	薬品合成化学	特別研究員-PD) 講師	池内 和忠	R6.9.30	星薬科大学薬学部 講師採用
退職	衛生化学	准教授	伊藤 佐生 智	R7.3.31	愛知学院大学薬学部 教授採用
採用	神経薬理学	特任助教 (日本学術振興会 特別研究員-PD)	向井 康敬	R6.4.1	日本学術振興会特別研究員 (PD) 助教 (北海道大学)
採用	臨床薬学	教授	河野 弥生	R6.4.1	クスリのアオキ 薬剤師 (保険調剤)

職員[2024年4月1日現在]

総合機器分析施設

衛生技師 :小澤 史子、横井 祐斗

薬学部事務室

事務長 : 水野 勝巳

学務係長 : 花井 孝茂

主事 : 大久保 幸、水野 栄子、中村 萌、梁川 純菜

事務系職員: 安場 摩利耶

総合情報センター田辺通分館-薬学部

分館長:星野 真一(遺伝情報学分野教授兼務)

司書:吉根 佐和子

事務系職員:遠藤 龍子、中西 玲那

職員の異動

異動: 鵜飼 和昌(2023年4月1日転出→名市大病院医療の質管理部へ)

水野 勝巳(2023年4月1日転入←名古屋市より派遣)

加藤 節子(2024年3月31日 退職)